

兵藤一誠は『異常な普通』です

4E/あかいひと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兵藤一誠は何処にでもいる普通の男子高校生です。

ええ、本当。嘘じゃないですよ、ええ。まあ、ほんの少し、お人好しが過ぎることと、どこ切り取っても平均値な所を除けば。

だからねえ、誰かこの摩訶不思議ワールドから助けてよ、ねえ!?

目次

CHAPTER1：エントランス・オブ・
ジ・アンダーワールド

その1	1
その2	9
その3	18
その4	29
その5	38
その6	52
その7	59
その8	75
その9	85
その10	94

その11 | 104
Sub CHAPTER1：ウエルカム・
トウ・アウト・レイジー

その1 | 115
その2 | 130
その3 | 140
CHAPTER2：バーニング・アップ・
ユア《マイ》ハート

その1	157
その2	169
その3	178
その4	187
その5	202

その 18	その 17	その 16	その 15	その 14	その 13	その 12	その 11	その 10	その 9	その 8	その 7	その 6

339 323 313 304 293 282 272 262 253 242 232 220 209

その 10	その 9	その 8	その 7	その 6	その 5	その 4	その 3	その 2	その 1	ナイト (メア) ・ウォーカーズ	Sub CHAPTER2: ファンキー!	その 19

476 463 448 436 424 412 400 390 377 366 352

その7	その6	その5	その4	その3	その2	その1	エバー	CHAPTER 3: トラストユー・フォー	その14	その13	その12	その11
624	610	599	586	568	556	545			532	519	501	487

	その14	その13	その12	その11	その10	その9	幕間	その8
	720	708	697	685	670	660	652	636

CHAPTER 1: エントランス・オブ・ジ・アンダーワー ルド

その1

正直な所、僕の人生は平々凡々のつまらないもので終わると思っていたのだ。生まれだけに關しては、かなり劇的だったらしいのだが……それは僕じゃなくて、父さんと母さんが劇的だっただけの話だと思うんだ。

とは言え、『だからこそ』僕は平々凡々に過ごしたかった。中々生まれなかった、二人に望まれて生まれた子供は、極々普通の幸せを得て、その上でその極々普通の幸せを両親にも感じてもらいたかった。まあ別に殊更普通のこと拘つてたわけでもないけどね。何事も程々が1番というだけです、うん。

……ここまで聞いてくれた、恐らく壁の向こう側にいる諸君。君たちは『ああ、コイツは所謂「自称凡人」というヤツか』と思ってくれたことだろう。半分正解だ。

例えば君は、やることなすこと全てが平均値になつてしまう子供を普通と思えるか？
少なくとも僕は思えないね。

テストの点数は小数点まで含めて平均値。

体力テストは全国の平均ドンピシャ。

友人の多さはそれなりのウエイ系とオタク系のど真ん中。

性格や嗜好だつて、そりゃあ男の子だもんで猥談もするし、それを表に出さない昨今のデフォルトですよ。

どこをどう切り取つても、僕はまるでよく出来たサンプルの様に平均だつた。気持ち悪がられることはないけど、印象には残りづらい。そんな人間。

まあ、こんな風に言うとは恨み言みたいだが、実のところ前述の通り、好都合であるし……ぶつちやけ普通過ぎる普通な自分が、結構好きだつたりする。あ、ナルシストではないよ。この環境がつて話。『異常な普通』だなんて名前だけが学校に広まつてるのも、気分だけは悪くないしね。それなりに仲のいい人の中ではネタになるし、校内で初対面の生徒と話す時に、その取っかかりになつてくれるし。

てなわけで、駒王学園高等部2年『異常な普通』などと呼ばれているこの僕、兵藤一誠は。なんでも言うけれど、自分の一生が平々凡々で終わると思つていたし……そう在つてくれと思つていた。

……正直、おかしいとは思つてたんだよ。

僕の俗称だけは有名だ。しかし僕自身はマジで印象に残つてはくれないみたいで、初

対面以外の人ですらかなりの頻度で忘れられるんだ。いや本当に。中肉中背の凡顔モブだからね、しょうがないね。

でもそんな僕を名指しで、それも僕のことを間違えずに告白してきた時点でなんかおかしいよね。でも僕だって男の子なわけです。告白されたら舞い上がるってのもんでしょ？ 『やつと地道な活動が実を結んだか！』とも思えば一気に恋愛脳にジョブチェンジってね。猥談仲間の松田と元浜には一発キツイの貰ったけど、いろいろアドバイス貰って世話になったなあ……。

そんでもって、その告白してきた女の子は『天野夕麻』ちゃんって言ったんだけど、まあレベルの高え女の子だったの。艶やかな黒髪、スレンダー美少女っていうの？ 若干この世のものとは思えない類の雰囲気纏ってたのが印象的。……脳味噌お花畑だったその時は『一生分の運を使い果たしちゃったかな！ あっはっは！』と笑ってたけど、こんな美人さんが僕に告白するとか、美人局疑って然るべきだったなあと思う。現状、美人局よりもやべーことなってるけどさ……。

……不誠実ではなかったはずだ。そりゃ、誰かを恋愛の意味で好いたことはなかったから、告白されたって直ぐに天野サンを好きになったわけじゃない。

それでも、自分のことを好きになった人を好きになりたいとは思うじゃん？ 本音を言うとか好みから外れていたけど、ぶっちゃけ恋愛の行き着く果てなんて、外見よりも中

身が合うかどうかだと思うのです。まあきつかけは外面だらうけどな、イケメンくたばれ。

まあなので、いろんなことをメールで、電話で話しました。確か同い年のはずなんだけど骨抜きにされた感じで、その時残っていた僅かな警戒心もふにやふにやにされてしまった。まあこつちが良いように受け止めようとしてたらそうなるわな。……尤も、実際は恥ずかしいことこの上ない真実だったわけですが。

そんなことはともかく、初めてのデートだった今日、色々真剣に考えたわけですよ。猿談仲間の手も借りて、本気で向き合おうとしたわけですよ。普段あんまり頓着しない服にも気をつかって！ 年がら年中私服はパーカー男が成長したもんですよ。……いや、天野さんが『趣味悪い』と言われないようになんだけどね。ほら、どう見ても釣り合わないじゃん？

……デート自体は楽しかったよ。水族館デートを推してくれた元浜を神と崇めたかった。シヨツピングモールは悪い選択肢じゃなかったと松田に頭を下げたかった。お小遣いの関係で、洒落たところでご飯、という訳にはいかなかったけれど。

でも、嫌な予感はしてたんだ。朝っぱらから微かに残った理性が、今まで踏んできた場数が、警鐘を鳴らしていた。『逃げろ』って。『まだ引き返せる』って。それに確信を持てたのは……デートの終着地点であった公園に着いた時。まだ日が沈み切っていない

夕方だったのに……人払いがなされたように、僕ら以外誰もいなかったんだ。

『今日は楽しかったね』

と彼女は言う。ああ、デートは楽しかったと僕は返した。

『ねえイツセーくん』

『……なんででしょう、天野サン』

『私たちの記念すべき初デートってことで、一つお願いを聞いてくれる？』

目が覚める、警鐘はとうの昔に鳴り終わり『人生の終わ^{ゲームオーバー}り』を報せる心臓の動悸に代わっていた。

『ええ、なんですか？』

表面上は慌てることなく、聞いた。内心の怯えを隠し、膝の震えを気合いで止める。

『今日は本当に楽しかったわ、あなたと過ごした僅かな日々は。初々しい子供のままとのようで、とても微笑ましかった』

だからね、と続けて、

『死んでくれないかな』

それはまるで、夜に奔る雷のように……



……と、ここまできさつきまでの話。只今絶賛、まっしろい非実体系の槍をぶん回して、時折投げてくる少女から逃げてる最中である。あつるえ、なんか知らんウチに真っ黒い羽まで生えてませんか天野サン？ この状況から察するに、僕つてば夢も希望もないフアンタジー世界に入り込んでませんか？ あの元カノどう考えても墮天使とかそういう生物でしょおお!?

「ちよこまかと……！ 大人しく死んでちようだい！」

「死ねと言われて素直に死ぬ人間がいるとでも……!？」

なお、元カノちゃんかなりオコな模様。死んでくれないかな？ と言われた瞬間に砂を目潰して投げたからかと思われ。最初の一撃を辛うじて致命傷を免れ、今もこうして逃げきれてるのは視界妨害があつてのことだろう。ああ、左腕が焼ける様に熱い。あまりにも痛過ぎて痛みを感じないっていうアレかもしれない。二の腕辺りから漏れる緋い液が、白だった服を赤く染めていく様を見ても大したこと思えない位に思考が上手く回つてない。……血が足りてないのかもね、と変なところで冷静だけど。

……致命傷じゃないけれど、致命傷じゃないけれども、多分ここで僕は死ぬ。その悲しい事実を、なんとか受け止めようとして……『覚悟』をキメた。

せめて、マトモな一生を送れなくなつた分の恨みだけは、晴らしてから逝こうと。

松田、元浜。彼女持ちになったこと自慢して悪かったな、お陰でバチが当たったみたいだ。お前らはこうはなるなよ。

……父さん母さん、本当にごめん。親不孝者な息子で本当にごめん。だけど、最後に意地だけは魅せて逝くから。天国で二人の幸せを祈ってます。

勇気を振り絞って、振り返る。その隙を見逃さず、元カノちゃんが僕の腹に光の槍をぶつ刺した。例えばような痛みで神経を焼かれながら、これ幸いと最期の力を振り絞って、元カノちゃんを抱き締めた。

「ちよ、止めてちょうだいよ！ この服が汚れるじゃない！」

「へへっ、悪かったね……ごフツ……ごフツ……！ で、もさ……折角アン、タの要望通りに、死んでやるんだから……ごフツ……。コツチの願いだって、通させろ、つての……！」

左腕で抱き寄せ、右腕は後頭部に添えて。そして僕は彼女の唇を奪った……嘸みちぎることで文字通り。

視界も、意識も朦朧としてきた中で、口の中で彼女の柔らかな唇の感触が、嫌に残る。

へへへっ……、何言ってるのかさっぱりわかんねえ。でもまあ、そのお高くとまったその面、台無しにしてやれたぜざまあみる。

「……嗚呼、糞。……まで、か」

……意識が、闇の中に堕ちていく。



「……堕天使の気配がしたと思って来てみれば」

「……恐ろしいわね、ここまでぐちゃぐちゃにされて、まだ微かに息の根が残ってる」

「……これも何かの縁、なのかしら？」

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげる。あなたの命、私の為に生きなさい」



その2

『ピピピピッ… ピピピピッ… ピピピピッ…』

「……………」

……という、夢だったのサ！ ハッハッハ……というオチだったら、どれだけ良かったのか。いや、本当に夢オチだったという可能性は捨てきれないけれど。

この所毎日あの時の夢を、妄想彼女に殺される夢を見る。トラウマがそうさせてるのか……いや、ないな。いろんな意味でアレは過去のコトだし。好きになろうと努力はしたけど、それは向こうが好意を持つてくれていたのが前提だ。どうもそうではなさそうな以上、大して傷はついてない。『まあ、そうだよな』つてなもんだ。まあすつたもんだの末死んじまったような気もしてるけど、結果的に生きてる以上、さつさと忘れて日常に戻りたいところである。夢オチであることを切に願うよ、ホント。誰も『天野夕麻』の名前を覚えてなかった以上、マジで妄想の類かも。アレだけ突っかかってきたエロコソビがいつもの様に話し掛けてきてるので確信した。だってこいつら、『裏切り者！』つて喚いてたからねえ。

問題はそれよりも、例の死んじやった事件（もしくは、幻覚妄想事件）以降、明らかに自分の身体が変調をきたしていることだった。

基本、僕は朝6時に起きることにしている。目覚まし時計もその時間にセットして。しかし割と優秀な体内時計のおかげで、僕はこれまで目覚ましにお世話になったことがなかった。朝に強いのは、僕のちよつとした自慢だったのだ。

……が、今僕は時計のアラームが鳴っている自室の中で、二度寝の欲求と戦っていた。酷く目覚めが悪い。

これが1日2日のことなら、『病気が……？』で済ませるけど、1週間も続いたら怪しく思う。不思議に思つて診療所にもお世話になつたけど『至つて健康体』と言われて口を噤んだ。

変調は寝起きだけの話じゃない。というかこの所、日中が異様にダルい。したこともない授業中の居眠りのせいで、先生から本気で心配されるというレアな体験をした。一応普段は態度だけ優等生くんなもので。

家にも連絡が行つたらしくて、父さんが『最近なにかあつたのか？』と聞いてくるわ、母さんが『いじめられてない？』と聞いてくるわ……。まるで学校に行きたがらない子供だな、これが自分のことだと思つてマジで泣けてくる。品行方正の兵藤一誠くんは何処にいったのやら。

……でも、あながち間違いじゃないんだよなあ。学校に行きたくない、と言うよりは、『外に出たくない』。もつと言うと、『陽の光を浴びたくない』。最近自分が吸血鬼にでもなった気分だ……太陽光を浴びてるとマジでダメージを受けてる感じがする。日焼けだって黒くならず赤く腫れる辺り、ダメージを受けてるのは間違いない。基本的にアウトドア人間だった筈なんだけど、そのせいで外に出るのが億劫になってしまった。

逆に、日が沈んでからは日中の怠さが嘘のように復調する。いや、復調どころか前よりも力が漲ってるかもしれない。だって握力とか軽くやって以前の3倍とか出てたし。異常な普通も返上かな、とか思ってしまったね。いろんな意味で夜型人間になったのかもしれない。

ともあれなんとか誘惑に勝ち切り、制服に腕を通して部屋を出て階段を降りる。リビングテーブルには、心配そうな父が僕におはようの挨拶をし、口には出さずとも『無理はするな』と言っているようだった。キッチンで朝ごはんを作っている母も同様。……参ったなあ、こんなに心配させることになるとは。ちよつと本気で大病院とか行った方がいいかしらん、と思いつながら、『大丈夫だ！』と伝えるようにはようと返した。

……さあ、今日も辛い1日が始まる。



私立駒王学園、僕の通う学校だ。

元々は公立の……僕の成績では苦しいところを目指していて、駒王学園はその滑り止めのつもりだった……んだけど、見事に落ちて結果滑り止めで受けてたこの学校に通うことになった。とはいえ駒王学園はかなりの進学校（目指してた難関公立の数倍は進学校）で、ぶつちやけ難関だ。でも僕の場合中学の時の内申点が頗る良かったので（推薦書いてもらえる程度には）、それを加味すると通りやすい学校だった。

……でも、正直この学校に通いたくはなかったんだよねえ。理由は大きく2つ。

1つは、単純に学費の問題。私学なもので、やつぱりかなりの学費ですよ。駒王学園に通い始めてからの食卓からおかずが1品減り、父さんの晩酌のお供であったビールが発泡酒にランクダウンしてるので少なからず家計を圧迫してる、非常に申し訳ない。

もう1つは……この学校の成り立ちだ。元は女子校……それもつい数年前まで。なので男女比が異様に偏ってるのだ。僕のいる高等部第2学年が、男女で3:7。一個上の第3学年が2:8の時点で察してもらえらるうさ。

そもそもって元女子校だからなのか、校風からなのか、人数の問題なのかは分からんけど、少し男子の肩身が狭く女子の発言力が強い。

……発言力はともかく、基本ムツツリなので、女子が多いという環境はその……うん、

ね？ ね？

まあ折角通うことになったのなら頑張るしかあるまい、と僕はせめて態度だけは優等生であろうと努力していた。ちゃんと一定の成績確保してたら、大学部はエスカレーター式だ。就職率も良いし、幸せな未来設計図的にはむしろいい環境だし。実際このままなら、両親に負担はかけることになるが、ちゃんと大学も行けそうなのだ。そこは奨学金とか、バイトとかで補填をしよう……バイトは今もしてるし。

……だが、その未来設計図に修正を施さないといけないかもしれない。最近の変調のせいで、最近は優等生とは程遠いことになってるし。……はあ、僕何かしたかな？

もし溜息つくことで幸せが逃げるなら、絶賛不幸のどん底になるぐらいの深い溜息を吐きながら、教室に入り自分の席に着く。もうこの時点で体力の1/3は削られた気分だ、しんどい。

「よーイツセー。貸したAVはどうだったよ？」

「…松田。今、凄く眠いし、突っ込む気力もないから昼休みにしてくれないか？ あと貸してくれたのただのイメージビデオだったろうが……」

「……お前本当に大丈夫か？ ツツコミがないとボケるのも虚しいぞ」

「いや、さっきの普通に素だったでしょ『エロ坊主』」

今にも寝そうな僕に声を掛けてきたのは、猥談仲間の松田。丸刈り頭の爽やかスポー

ツ青年なのは見た目だけ。いや実際いろんな記録を塗り替えてきたスポーツ万能な奴ではあるんだけど、まあエロな欲求に素直で。日常的にセクハラ発言のオンパレードで、こいつともう一人の変態コンビで生徒からちよつと嫌われているのだ。まあエロなところがなければ気のいい奴なので、道を踏み外さないように適度に誘導してやれば実害はないし面白いやつだ。ただ何故写真部に入ってるのかは未だに謎だ……まさか、女子高生をフィルムに収めたいと思つて……ないよね？

「まつたく……これでは今朝のパンチラについて語り合えないではないか」
「お前は小学生のガキか、元浜……」

そして続けて声をかけてきたのは変態コンビのもう一人にして猥談仲間の元浜。ちよつとキザつぽくきめているが、発言から分かる通りこつちもエロな欲求に素直なメガネ男子だ。なおメガネを通して女子を見ると、スリーサイズを正確に把握出来るという特技を持っている。……将来服飾関係にでも勤めたら活かせるんじゃないかな、うん。

「俺だつてその程度では満足したくはないさ。だがな……」

「覗きは犯罪です、もし次やろうとしたらお前らとの友情見直すぞ？」

「まだ捕まりたくないのて勘弁してください」

「そのまだつてところが信用ならないなあ……」

「そこまで言つて、口からアクビが漏れた。……本当に、眠いし調子出ないしで、踏んだり蹴つたりだ。」

「あー、どこかに甘やかしてくれる年上巨乳おねえさんいないかなー」

「包容力ありそうな年上巨乳さんなら、ウチの学校にいるじゃねえか」

「それも2人も」

「もしそれ駒王二大お姉さまのこと言つてるなら、馬鹿と言つておくぞ？　高嶺の花は

観賞用だつて何回言えば……」

「そうやって割り切れるの、お前ぐらいだと思うぞイツセー……」

「変なところで枯れてるな、本当。……つと、噂をすればだぞ？」

「そう言つて教室の窓を指さす元浜に促されて、窓から校庭を覗く。そこには、血を思わせる真紅の髪をたなびかせる女性が、周囲の視線を独り占めしながら歩く姿があった。今ちようど話題に登つた駒王の二大お姉さまの片割れ、この学園のアイドルである『リアス・グレモリー』先輩だ。」

「(……………やっぱり、ここまでくると『観賞用』だよなあ本当)」

彼女の美貌を僕の足りない語彙で表現するのなら、『人間離れしてる』といったところか。一流の人形師が精巧に作つたそれみたいに整つた顔に、男の欲望でも込めて作られたのかと思いたくなるボンツキュツポンの体型。髪だつて腰まで伸びてるし、そもそも

紅い。肌も白いし、少なくとも日本人じゃないよね……実際北欧の方の出身だと聞いている。まあ、率直に綺麗だよな。

だからこそ観賞用だ。

少なくとも僕は、あの人……正確には、あそこまでのレベルの人とどうこうなりたいとは思わない、まあそうなることは万が一、億が一ありえないとは思うけど。いやそりや見ててわーきゃーとかするし、恥ずかしいけど夜のお供にその曲線美を思い浮かべて……みたいなきことはあるさ。でも、だからこそ現実味薄いつて言うか、『身の丈にあった幸せ』を得たいと思う僕としては、あんな向き合うだけで破滅しそうな傾国レベルの方とお付き合いかマジ勘弁だつての。妄想の天野サンでもギリギリのラインだつたつてーのに。

……だから、それは完全に不意打ちだった。

「……………ッ!？」

朝から珍しいもの見れたなーって気分で見線を逸らす直前、遠くにあつた彼女の透き通る様な碧眼が、射抜くように僕を見つめた。

僕の錯覚かもしれない……………だけど何故か、その瞬間、心臓を掴まれたかの様子が詰まった。彼女が微笑んで、視線を逸らすその時まで、まるで蛇に睨まれたカエルの様な気分を味わうこととなった。

……とりあえず、もし何かの間違いで話すことがあるとすれば礼を言おう。お陰で、今日は居眠りをしそうに無いほど、目が覚めてしまった。

その3

グレモリー先輩のお陰で乗り切れた授業。怠さは消えないが眠気は吹っ飛んでくれたので居眠りという醜態は晒さずにすんだ。やったぜ。

まあそんなこんなで放課後。僕は部活をせずに、学費の補填とお小遣いのためにバイトをしている。どこでバイトをしているのかと言うと……

「いらつしやいませー！ 食券お預かりしますー！」

「平麺、麺かた、背脂かえしマシで」

「かしこまりました、少々お待ちくださいー！」

ラーメン屋である。

飲食店のバイトは、キツイ、ブラック……だと聞くが、実際その通りだと思う。それでも僕はかれこれ2年目に到達してる中堅アルバイトだ。時給は悪くないし、賄いでラーメン食べれるのもあってキツイ部分は帳消しになつてる。もともと、賄いのラーメンは何も大盤振る舞いしてくれてるといふわけじゃなくて、作り手がラーメンの味を把握するため、という側面が大きいけど。それでも食べ盛りの男子高校生には神からの施しに思える。

さてオーダーは醤油ベースの背脂かえしマシか、麺は平麺だからゆで時間は2分半、硬めなので30秒マイナスつてところか。ウチのラーメン、○郎系インスパイアのだから麺の上に野菜をこんもり乗っけるんだけど、焼くのに少し時間かかるからなあー。まあ今空いてるから焦らず慌てずきつちりと。ワンオペでも10人までなら一度に捌ける自信がある！……7時までにはワンオペなんだよ、なんで混み始める6時台も一人なんすかねえ……？ と、4時を回ったところを指す壁時計を見て、心の中で溜息を零す。あ、落ち込んでる場合じゃねえ、ラーメンだよラーメン。

まず、コンロに火をかけて、野菜を焼き始める！

少し放置してゆで麺機の手ボ(湯切り)に平麺投入、すこし解して2分のタイマーセット！

だいたいその辺で野菜がいい感じに焼けてくるので味付けをし、何度か鍋を振って焼き野菜完成、完成した野菜を避けておく皿にもっておく！

そしてラーメン丼ぶりに味のベースになるかえしダレを多めに入れ、同様に背脂も多めにし、ゆで麺機の上で温める！

麺の茹で上がる20秒前ぐらいになれば、丼ぶりをゆで麺機のうえからソーサーの上に移し、スープ寸胴からスープを掬って丼ぶりに投入！

タイマーが鳴ればテボをゆで麺機から上げ、振り下ろしつつ湯切り、スープの中に投

入!

麺をスープの中で解し、野菜を乗っけ、チャーシューを添えたら完成だ!

この間だいたい3分である、ラーメンは速さが大事なのだよ! ほら、伸びると不味いし。

「お待たせしました、醬油固め背脂かえしマシンです! ごゆっくりどうぞ!」

なお、混雑時には6個あるテボがフル稼働する場合もある。でも基本的には30秒から1分感覚を開けることで、手際良く、それでいてスープで麺が伸びないようにしていたりする……ウチの店のマニュアルにそう書いてた。ワンオペのマニュアルはなかつたけどなーあはは! ……店長は、月の出てない夜道には気をつけろと心の中で言うておく。

とは言え、悪いことばかりでもない。さつきも言ったように給料はいいし、賄いも出る。その上この店は学校から近いので、よくうちの学校の生徒もやってくる。見知った顔から見知らぬ顔、たまに先生や、ビッグネームもやってくるので案外面白かったりする。常連さんは好みの味まで覚えてる程だ(必須技能)。

と、そんな思考に耽っていると、店の入口から次のお客様が入ってきた。

「いらっしやいませー! お客様、1名様でよろしいでしょうか?」

「(ハ)くん」

「それでは、奥の席へどうぞー!」

噂をすれば、つて展開多いな今日は。駒王学園の制服を来た女子生徒がやってきた。白髪のちんまいあの子は、確か有名だったな。ロリコンのケがある元浜が騒いでたな、学園のマスコットだなんだって。えーつと、確か『塔城小猫』ちゃんだったかな? 今年度に入ってから何度か来てるね、彼女。

「食券をお預かりします! ……………ソフトクリームでよろしいですか?」

「(くくん)」

……………あと、ラーメン頼まないことでも印象深いね。

いや、ウチの店。何故かソフトクリームやってますけど。実はラーメンより評価高かったりするけど。でもソフトクリームだけ食べに来るのは彼女だけだったりする。勇者や、この子……………!

とりあえず、バックヤードに下がって、コーンにマシンから出したソフトクリームを上手いこと乗せていく。これをお客様に出せるレベルのを身につけるのに3週間かかったのは笑い話だったりする。

「お待たせしました、ソフトクリームです! ごゆつくりどうぞー!」

さて、今お客様少ないし、今のうちに賄い食っておくかなーつと。普通のストレート麺をテボの中突っ込んで、タイマーを3分でセットする。野菜は……………面倒臭いから

テボで茹でるか。

「ふん、ふん♪ ……ん？」

井にかえしと背脂を適量突っ込んで待つてると、カウンター席に座つてる……えーと、塔城サンか、彼女が若干羨ましそうに、さっきの平麵の常連さんのラーメン見てるような気がした。……本当はラーメン食べたかったんだらうか？ まあ、1杯750円だし、ソフトクリームも入れると結構な値段するか。

「……………」

……いつものことだ、いつものお節介だ、いつものことだ、なんてことはない。そう自分に言い聞かせて、井にスープを注ぎ、麵を入れ、ゆで野菜を乗つける。チャーシューの代わりにサイコロチャーシューと、あと割れて使い物にならなくなった味玉子を。

そして、その賄いラーメンを塔城サンの前に、デン！ と置いた。

「……………えっ？」

「先輩からのお節介ですよ、後輩さん。その制服、駒王学園のでしょ？」

「……………」

どうしていいのかオロオロしたので、トドメを刺すために言葉が続けた。

「もし良かったら、次からラーメンも頼んで欲しいっていう先行投資？ ……まあバイ

トの僕がここまですることないんだけど」

「……ありがとうございます」

「いえいえ」

腹は膨れないけど気分はいい。特に美味しく食べてくれる姿を見ると、作り手としては最高のつてやつ。武士は食わねど高楊枝つてこういうこと？ ……違うか。

……余談だけど平麵の常連さんがまた食券を買つて、それを僕に押し付けて帰つて行ったのは、賄いを上げたように見える僕に『これ食え』つてことなのだろうか？ 情けは人の為ならずつて本当だね、回収はやすぎだけど。



「おつかれさまでしたー」

そう言つて店を出て入口にかかった暖簾をくぐる。時刻は10時、条例の問題で（あと校則の問題で）高校生はそれ以降の時間働けないし。

……そう言えば、塔城サン。意味深に『先輩、帰り道に気を付けてください』と言つてたな。夜襲の宣言つてわけでもなさそうだったし、多分僕のことを心配してくれたつてことだよな。

まあ夜道に気をつけるのは当然のこと、店先に停めていた自転車の鍵を外し、ライト

のスイッチを入れて跨り、走り出した。

「ふーん、ふんふんふん♪ ……………」

……………鼻歌なんて歌ってみるが、何故か頭で警鐘が鳴り響いていた。いや、何故ではないか。妄想でのあの夕方の時みたいに、人通りが全くない。この時間なら、とも思うが、それ以上に静かすぎて耳鳴りがしそうな程だ。もしこの状況で、誰かの姿が見えたら、一目散に逃げてやろうと思う。いやマジで。流星にこんなのが続いたら、真相はともかく逃げたくもなる。

……………幸い、夜中なので身体の調子は必要以上がいい。夜目も効くのか、街灯の光がない場所でも鮮明に確認出来る……………遠くの方のブロック塀についた傷まで把握できるんだから。

「……………」

ずっと現実逃避してたけどさ、やっぱあの天野夕麻つての、妄想じゃなかっただろこれ。

同じ感覚を覚え、あの殺された日から僕の身体はまるで別物みたいに夜型になって……………視力とか聴力が明らか人間離れしてる。だって、その家の中から会話が普通に聞こえちゃってるし。なんなのコレ、単なる夜型にジョブチェンジって表現では追いつかない。

全てあの日からだ、ここまで来ると、流石のおめでたい僕の脳みそだって、寝ぼけたことは言つてられない。

(早く帰ろう、帰つて寝よう)

真相の究明はその後だ。僕は今、心の底から怖くて怖くて、自室のベッドで布団に包まりたくて仕方がない！

ドクンドクンと、跳ねる心臓を押さえつけて……ペダルを踏む力が上がる。……だけでも、フラグつてやつだったのかな？ 唐突に後ろから声がかけられちゃったんだ。

急ブレーキを掛け振り返ると、誰もいなかった所に、スーツを着た男が突つ立っていた。ホラーかな？ だなんて茶化すが、全然笑えないしそれどころじゃない。

「……ほう？ これは数奇なものだ。こんな地方都市の外れで、貴様の様な存在に

ここまで聞いて僕は自転車のベルを引きちぎり、全力で投げつけ、右目にクリーンヒットさせた。

いやだって、この状況で『貴様の様な存在』とか言い出したら、危険度役満級だったの！ 対面が白と中をポンして、まだ河に流れてない發を切るような暴挙だろスルーしたら！ 実際わなわなと震えだして黒い翼拵げてるからピンゴだし。

くっそう、逃げなきゃ！ 鳴り響く警鐘に従つて、僕は死ぬ気で自転車を漕いだ！



「(……な、なんとか撒けた、か?)」

家に着いてこられるのも困るので、ひたすら追跡しづらい小道を走りながら県境を指して走り、なんとか警鐘も収まった。途中右腕に光の槍が刺さったり(その時焼けるように痛かった)、自転車がひしゃげて乗り捨てるしかなかったりと踏んだり蹴ったりだが、生き残れたことを今は喜ぼう。

刺さって抉れた部分は、汗ふきタオルで縛って止血。染みて痛い、血を垂れ流し続けるよりはマシだし……腹を貫かれたあの痛みを思うと、耐えられないそれではなかった。ここ数日で、痛みに対しての耐性が自分でもおっかなく思う程付いてしまったな。

落ち着くと、泣きたくなった。なんで僕がこんな目に、と悲しくなった。基本的に品行方正だったじゃん、お節介なだけの男子だったじゃん。こんな私的制裁に巻き込まれる程、悪いことに手を染めたことはなかったじゃん。もうこれ、仮に神様なんて存在がいたとしても、それ信じるに値しない神様だろ。こんなスプラッタファンタジーに巻き込まれてる現状、神様だっているのかも、だけど。

……ファンタジーと言えば、僕の身体のこともそうだったな。平均、平凡がウリのス

ペックだった筈なんだけど、さつき明らか乗用車以上のスピードで走ってた気がする、自転車のベルも引きちぎれたし。光の槍が刺さった時なんて、前回と違って蒸発しそうな感覚したし。

ああもうなんてこった。誰にも頼れないし、もうこれ家に帰れないじゃん。これからあの墮天使に見える謎生物の襲撃に怯えながら、逃げ続けなきゃいけないのか？

本当に、耐えられなくなつた。もう一度立ち上がるにしても、泣かないとやってられなかつた。熱い液が、目からポロポロと零れて仕方がなかつた。

「くそっ……くそっ……！　なんだよ、なんなんだよこれ……！　僕が、僕が何をしたつて言うんだ……！」

先行きが見えない、喻え暗がりが見えてもお先真つ暗だろこれ。どうすればいいんだ、僕は……。

みつともなく、えぐえぐと泣いてへたり込む山の中。
ガサリ……、と草を掻き分ける音がした。

「ッ！　誰だ!？」

また謎生物か？　いいだろう、少し泣いてスッキリした。こうなつたらトコトン生き抜いて、復讐してやる……！

と息卷いた方がいいが、視界に入ってきたのは、紅い髪……

「……怖がらないで。もう大丈夫よ、今まで放つておいて、本当にごめんなさい」

「は……………え……………？」

リアス・グレモリー先輩が、若干肩で息をしながら僕にそんなことを言っていた。今朝方僕の心臓を掴んだ様な、竦む感覚は全くなく。その蒼い目は、慈しむ色を乗せて僕を見ていた。

本当なら、この先輩も謎生物であることを疑うべきだろう。いや、そうでないとおかしい。雰囲気、人から外れたそれにしか思えない。

「ただ、僕は、そのセリフを、どうしても疑えなくて……」

「あ、ああ……………」

手を握られ、そこから伝わる熱に心底安心しきってしまう。一度緩むと、もう力が抜けてしまい、そのまま一緒に意識まで抜け落ちた。

その4

『ピピピピッ！　ピピピピッ！　ピピピピッ！』

……久々に、悪い夢見じゃなかったな。なんというか、久々に安心して寝れたというか、目覚めも悪くないっていうか。そう思って、モゾモゾしながら布団から這い出ようとすると、ふによんと柔らかい何かが僕の手に当たった。

慌てて転がるようにベッドから転がり落ちた。脳味噌が久しぶりに朝から機能しているからか、今どんな状況なのか一気に把握した。

直ぐにアラームを止め、何故か素っ裸だった自分に服を着せ、飛び出るように部屋から出た。

『イツセー、大丈夫ー？　なんだか凄い音したけどー』

「だ、大丈夫ー！　久しぶりに目覚めが良かったからはしゃいだけー！」

階段下の母さんにそう言って、もう一度部屋に戻る。……待て、色々と落ち着こう。

天野夕麻の件は幻覚じゃなかった、昨日の謎生物襲撃も同様。そして僕は多分一度死んでいて、そのことについて、この人は何かを知っている……。

痛む頭を抑えながら、未だ僕のベッドで寝息をたてる眠り姫に視線をやる。

「すー……………すー……………」

紅い髪の毛、目の覚める様な美女。恐らく、昨日僕を助けてくれた人。リアス・グレモリー先輩が、一糸まとわぬ姿で布団にくるまっている。

「……………いや、なんで??！」

衝撃的なことに直面すると、興奮より先に疑問で頭を埋めつくしてそれどころではなくなる。一般的にはどうか知らないけど、少なくとも僕はそうだ……。

……………このままではいけない、冷静になれば兵藤一誠！ この時間だから、父さんと母さんが上にながってくることはまあないだろうが、変に声が出たら心配に思っただけに部屋に来ることは普通にありえる！ 僕も現状をちゃんと把握したいところだし、この先輩には早速起きてもらいたい！

「……………うん、すー……………すー……………」

……………起こすのが憊びなくなるな、美形は得だよな、けつ。

まあ急に身体起こされて見えちゃいけないものをご開帳するよりはマシだろ、うん。そう思っただけ書き置きを残し、部屋を出ることにした。

……………変に湿ってたりはしてなかったの、多分僕はまだチエリーのはず……………だよな？

絶対そうだ。

「……はあ。これもひっくりかえりて全部夢だったらなあ」

それこそが、案外僕にとつての幻想ファンタジーなかもしれないけどね。人の夢と書いて夢いとはよく言つたものだ。……ぶつちやけ、僕自身に人外疑惑ありますけどね。



「……『昨日はありがとうございます。お礼をしたいので、放課後旧校舎に向かいます』、ね」

「気を遣わせてしまったかしら……？」



いろんなことに頭を悩ませながら、それでも乗り切つた授業。余程変な顔をしてたのか、友達が大丈夫かとか心配してくれたのが心にくた。猥談コンビの2人も、食堂の惣菜。パン奢つてくれる程度には心配かけたみたいだ。……おい、これ月一10食限定のイペリコ豚サンドじゃないか？

「いつまでもそんなだと張合いないからな」

「そういうディスク借りるよりは安上がりだから気にするな」

正直、エロコンビがエロよりも僕との友情を優先してくれたことが嬉しくてたまらなかった。何があろうとも見捨てないと心に誓った。

ともかく、放課後ですよ。今日はソフト入ってないので、普段なら帰るだけ。だが今日は旧校舎の方にお邪魔しないと。お礼の品は用意できなかったけど、それはまあ仕方ないと大目に見て欲しいところ。

そんな風に思いながら荷物を纏めてると、教室の入口から声をかけられた。僕の名前だった。

「はいはい、兵藤一誠は僕だけど」

「ああ、君が。どうも」

僕を呼んだのは、この学校で1番のイケメン……隣のクラスの木場祐斗くん。金髪で、日本人とは思えない爽やかなマスクから放たれるスマイルは、この学園の女子達のハートを撃ち抜いているのだ。……ああ、通りで女子が騒がしいわけだ。

「んで、君も『異常な普通』の顔を見ようときたクチかい？」

「ううん、伝言と案内かな」

「伝言と案内イ？」

心当たりはない……と思つてすぐに気がついた。

この学校には、オカルト研究部という部活がある。部室を旧校舎に構えていて、その部活の部長がリアス・グレモリー先輩なのだ。放課後旧校舎に向かうと書き置きしたのは、それもあつての事である。

そして確か、木場祐斗クンもオカルト研究部所属だったか。……あの部活、何やつてるかは謎だけど、顔面偏差値高いことは有名なんだよなあ。僕の中では絶賛観賞用対象である。

「なるほど、先輩が。……ということとは、もしかしてキミも？」

「それも含めて、部長から説明があると思うよ。というわけで、着いてきてもらえるかな？」

「むしろこちらからよろしくお願いするよ」

そう言つて纏めたカバンを背負つて、木場クンについて行く。……その時間こえた『木場くん×兵藤くん』とか、そんなおぞましい掛け算は聞かなかつたことにしたい。腐女子率高くねえ……？



案内された先は、校舎の裏手。木々の中に囲まれた中にある、昔使われていた木造の

校舎。実はここに来るのは初めてでワクワクワクワクだったりする。

まあだからといって、特に目新しい何かがある訳ではなく、木造だけど手入れが行き届いた二階建て校舎の中を、案内の下進んでいく。

階段を登り、廊下を進んで目的の教室に辿り着いたのか、木場クンの足が止まった。

……確かに、『オカルト研究部』って看板が戸にかけられてますけど。ううん、入りたくないって気持ちでいっぱい。おい僕、お礼を言うってのはどうなったし。

「部長、兵藤くんを連れてきました」

と、そんな葛藤も知ったことかと木場クンが引き戸を開いて中の先輩に確認を取っていた。くう、覚悟キメろってか？

『ええ、入ってちょうだい』

先輩の声が返ってきた。若干くぐもってるのは気のせいか？ まあいいけど……。

促されてその中に足を踏み入れると……その内装に驚いた。

どこに目線をやっても目に入る、オカルティツクな文字、模様、エトセトラ。少しS AN チェック入りそうになる。

中でも目を引くのは、教室の中央に描かれた、魔方陣っぽいなにか。……なるほど、確かにここはオカルト研究部だわ。

とはいえ置いてある机とかソファは普通の物に見えるな、安心安心（明らかに高級

品っぽいことはスルー。

「……ん？ あ、ソフトクリームの後輩ちゃん？」

とここで、ソファに座っていた見覚えのある女子の姿に思わずセリフが零れた。えつと確か名前は……

「……塔城小猫、です。昨日はありがとうございます、先輩」

「いえいえ、こちらこそ。兵藤一誠です、よろしく」

そう言って頭を下げると、塔城サンも軽く頭を下げて、机の上の羊羹を食べ始めた。なるほど、甘い物好きなのね。あと言葉数少ない感じ。

……しっかし、塔城サンもオカルト研究部だったのか。もしやここ、謎生物の集いだったりするのかな、まさか……いや、その可能性普通に高いよね。

そうやって、思考を現状分析に没頭させる。断じて、部屋の隅にあるカーテンの向こうから聞こえる水の音と、カーテンに浮かぶシルエットに意識を向けないためではない。これは必要なことなのです。というか部室にシャワーって……運動部が泣いて不公平を訴えてくるぞソレ。

しばらくすると蛇口のしまる音が聞こえ、シルエットにもう1つの影が追加された。思うにもう1人の方はオカルト研究部の副部長で、二大お姉さまのもう1人の方の姫島朱乃先輩じゃなからうか？ 声の感じもそれっぽいし。

一周まわって冷静になった思考であれこれ考えてると、制服に着替えたグレモリー先輩がカーテンを開けて現れた。

「ごめんなさい。昨夜兵藤くんのお家にお泊まりして、シャワーを浴びてなかったから」
……なるほど、部屋にシャワーがある理由はともかく、女子にとってそれは死活問題ですよね。

「いえ、大丈夫です。というか気が利かなくて申し訳ないです」
頭を下げると若干先輩が困った顔をした。どうしてだろう、なにか粗相でもしたかな僕は。

まあそれは一旦置いておいて、先輩の後方に控えていたもう一人の方先輩の方に視線をやる。

「初めまして、2年の兵藤一誠です。よろしくお願ひします」

「あらあらご丁寧に。私は、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後お見知りおきを」

かーっ！ 柔らかな印象を与える和風美人の顔と揺れるポニーテールが堪らないね。観賞用観賞用。

「さて、これで全員揃ったわね。兵藤一誠くん。いえ、イツセーと呼びましょうか」
「構いません。親しい連中は、皆イツセーと呼ぶので」

そう返すと、ありがとう。と微笑んでグレモリー先輩は言った。

「私達、オカルト研究部はあなたを歓迎するわ」

——悪魔として、ね。

そうして告げられた言葉に、いろんなことの辻褄が合っていくのを感じた。

……そうか、僕は悪魔になっちまったのか。

その5

今更、そんなファンタジーがあるかなんて言わない。少なくとも、僕は悪魔、彼女たちも悪魔。

……もちろん、なんで早く教えてくれなかつたんだといつ気持ちは大いにある。いろんな意味で耐えられなくて、死にそうだった。

それでもこうして助けてくれて、恐らく悪魔になることにはなつたけど命まで拾ってもらえて。そう思うと、怒る気どころか感謝しか零れてこない。

「……………ありがとうございます。僕の勘違いでなければ、僕はあの時死んで、貴女に生かされてる。そうですよね？」

「ええ。あなたがあの天野夕麻と名乗つた墮天使に殺されかけて、虫の息だったところを、悪魔に転生させたということなら、私がそうしたわ」

……若干、自己嫌悪が滲んでるのは何故だろうか？ 責めてるように、思われてるのだろうか？

「本当にごめんなさいね。本当なら早くにでも伝えるべきだったのに、追い詰めてしまったみたいで」

「あー……いや、まあ精神的に不安定だったとは思いますが、間違った判断ではないかと思えますヨ？ 急に『お前は悪魔になったんだー！』なんて言われても、適応力に定評のある僕だって妄言を疑いますよ。おそらく、自分で別の物になってしまったっていう自覚を促すために、しばらく期間を置いてたのだと推測しますけど」

「その認識で間違いないわ」

なるほど、なるほど……。

とりあえずお礼を言えてスッキリしたので、頭の中で質問を幾つかまとめる。

「悪魔とか、堕天使とか、そんな事情は今はいいです。まず2つ質問があります」

「分かったわ、どうぞ」

「僕の今の扱いはどうなってるんでしょうか？ あなたの下僕とか、そんな扱いになつてたりするのですか」

「ええ、そういうことになるわ。悪魔に転生した者は、転生させた悪魔の下僕となる。悪魔のルールね」

そんな気はしていた。というか昨日心臓掴まれたような気分になってたのは、上位者が下僕の手綱を握る的那れってことか。

「分かりました、受け入れましょう。僕はあなたの下僕だ。主人リアス・グレモリー様」

「……即決ね、本当にいいのかしら？」

「ルールなら従うべきですし……死にたくはなかつたけど、あの時死んでもいいと思っ
たんです。捨てた命を拾われたんだ、もうコレは僕のモノではないでしょう」

それに、と言葉を続ける。

「僕は貴女に救われた。これは、命を使い潰してでも返すべき恩義だ。誰より何より、僕
がそう在るべきだと思っている」

「……………」

「…………あれ、もしかして僕要らない子だったりします?」

なんか、そんな微妙な顔をされるとすごく死にたくなるんだけど。観賞用レベルの美
貌だけど、この人（悪魔?）僕の好みにどストライクだし。

「…………いえ、そんなことはないわ。ただ、マツチポンプの様に思えてね」

「マツチポンプも何も、恩人なのは疑いようも無い事実じゃないですか」

少なくとも悪いことはしてないのだし、気に病まれても困るんだがなあ。そのツケは
全部あの元カノちゃんに払わせた。大勝利（勝ってない）。

まあ、僕は気にしちやダメだよ。これからの頑張りで払拭していこう!

「では改めて、新人下僕悪魔の兵藤一誠です。よろしくお願いますっ!」

さあ、ここから新生兵藤一誠が始まる。

僕の頑張りが世界を救うと信じて…………! 【完】



……なーんて打ち切りエンド風のモノローグは置いておいてだよ。まだ質問あるし。

「では主人リアス・グレモリー様。もう一つ質問よろしいでしょうか？」

「そんな堅苦しくしないでイッセー。部長でいいわ部長で」

「分かりました、では部長と」

それで、何聞こうと思ったんだか……あ、そうそう。

「なんで僕は殺されたんだと思います？」

「直球ね」

「そりゃあ、そうもなりますよ……殺される理由に思い当たるところがまるでないんですから」

品行方正で通ってたと思うよ僕は。恨みを買うようなことは……まあ、ない？ ないよね、ないと思いたい。少なくとも墮天使なんていうファンタジー種族には。

「あら？ でもあなた、かなりの頻度で危ない橋を渡っていたでしょう？」

「……ふへ？」

間抜けな声が漏れたのを、部長は微笑ましいものでも見るようにくすりと笑って、姫

島先輩に言った。

「朱乃、調査報告書をお願い」

「はい、部長」

そう言つて、先輩がどこからかファイルを取り出して、それを部長に渡した。……見間違いじゃなけりや、どう見ても『兵藤一誠』つて書いてるんですが。

「ここに、あなたの調査報告書があるの。それを踏まえて、恨みを買つた覚えは本当にないのかしら？」

「少なくとも墮天使なんてファンタジーな連中相手には。あつたことありませんし」
「ふふつ、上手いこといわね。それとも、慣れてるのかしら？」

………あ、これアカンやつ。僕がこれまでやつてきたことバレてるパティーンでは？

「最近、この駒王町ではちょっとした噂があつて。どうも、素顔を隠したヒーローが出没するそうね」

「そのヒーロー、多分隠してる自覚なんてないと思いますよ」

「あら、そうなの？」

「赤いパーカー着ただけで、フードを被つてるわけでもない。単にその顔が印象に残らないだけです、異様な程に」

そう、まるで僕のような。と観念して吐き捨てた。

「そもそも、ヒーローしようと思つてやつてるわけじゃないです。ただ、僕の精神的安寧のために、困つた誰かを放置できないだけです。心の狭い人間だと思われたくない見栄つ張りとも言います」

バイト帰り、夜も遅いので不穏な場面に出くわすことは稀にある。ひつたくりとか、酔つ払いが殴り合いしてたりとか。……見て見ぬふりは出来ないんだよね、モヤモヤするし。

だからその場面に出くわした時だけ、何かしら自己満足のために身体を張る、自己満足のために。大事なので2回言つた。

そんなことをしてたら、姿のないヒーローとして有名になるんだから、何が起ころるか分からないよね。ちなみに、天野夕麻からの告白を受けて突っぱねなかつたのは、そうした流れで関わりがあつた人かもしれない、という判断もあつたからだつた。勘違いも良いところだけどき。

「……………もしかして、そのせいだなんて言いませんよね?」

「ええ、言わないわ。違うもの」

「……………では何故」

「あなたの人となり直接把握したかつたから……………かしら?」

悪戯っぽく笑う様がとても絵になりますね、部長。流石悪魔なだけあります。

「真面目な話をする、貴方は『常人には持ちえない何か』を持っていて、それを危険視されたために狙われたのよ」

「……心当たり、全くないのですが」

だつてほら、自他ともに認める平凡オブ平凡です。庶民サンプルとして優秀な、どうも僕です。

「確かにそうね。どう見ても発現している風には見えなかつたし。恐らくあちらも、ギリギリまで判断が付かず、調査のためにあなたに近付いたのでしょうし」

「……………」

まあ、よくわからないけど。僕にはなんかの力が備わっている。目覚めてはいないけれど、危ないから処理をしたい。だから殺された、と。そんな感じなのは分かった。

「……驚く程冷静ね」

「ええ、まあ。実際に殺された身としちやたまつたものではありませんが……人間もよくやることです、なんとも」

ほら、鳥インフルとか豚インフルとかで殺処分をするじゃん。『危険』だからって理由で。納得は出来ないけど理解はできる。

「それに結果的に生きてますので、『そうなんだ』ぐらいのことしか。ちゃんと仕返しも

しましたし、特にこれと言って何か思うことはありません」

「そ、そう」

まあ、運は悪かったんだろうなと思う。そして悪魔として拾われたので、僕の中では打ち消されてる。生きてりやめつけもん、だ。これ以上何を望めばいいのやら。

「それでその不思議パワー、名前はついてないんですか？」

「私達はその何かのことを、『セイクリッド・ギア神器』と呼んでいるわ」

「セイクリッド、ギア……ねえ」

そんな物が、僕の中に？ というか、どういふものなんだろうか？

という風に首を捻っていると、木場クンが口を開いた。

「神器とは、特定の人間の身に宿る、規格外の力。例えば、歴史上に名前を残す人物の多くがその神器所有者だと言われているんだ」

「へえ……。じゃあナポレオンなんかは、カリスマを得るような神器を持っていた、とか？」

「ありえない話じゃないね」

そうなのか……まるで『才能』みたいだな。

「現代でも、神器をその身に宿している人はいるのよ。世界的に活躍している人達の大半は、神器所有者でしょうね」

「い、今明かされる衝撃の真実ウ……」

姫島先輩が続けて入れた説明に、少し頭がクラっとした。意外と身近なものなのね……。

しかし、だとすると僕の神器って一体……？ 危険視されるようなものだとは思わな
いんだけど、その程度なら。

と思つてたら、補足を入れるように部長が口を開いた。

「大半は、人間社会規模でしか機能しないものばかりよ。ところがその中には私達悪魔
や、堕天使の存在を脅かす程の力を持った神器が存在しているわ。おそらくあなたの中
にある、まだ目覚めていない神器も」

「……うえ、いらね」

おっと、思わず本音が。だって現状厄ネタでしかないじゃん。

しかしその本音がウケたのか、お姉さま方はくすりと笑っている。なお、木場くんは
苦笑、塔城サンは無表情だが。

「でも、使いこなすことが出来ればこの上なく便利なものよ。特に、これから悪魔の社会
で生きるあなたにとつては」

「……なるほど、言われてみれば」

人間社会では持て余すものだが、悪魔を相手にするこれからの生活では、確かに有用

なのかな。……これのせいで死んだことを考えると、実質±0だな。

「ちなみに、発現させるのって何か特別なことをしないとイケないとかってあったりするんですか？」

「いいえ、なんなら今からでもできるわ。早速だけれど、手を上にかざして貰えるかしら」

「分かりました」

とりあえず、言われるがままに右腕を上げた。

「目を閉じて、あなたの中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてちょうだい」

一番強い何か、ねえ。

まずフィクション系は全て除外。いや、強いんだろうけど、僕が『現実にはいないし……』と思ってしまうからダメだ。すまんな空孫悟、二次元に生息していたのがダメなんだよ。

あと強くても、実感が湧かないものは同じ理由でNG。銃火器とか強いと言えるけど、現物見たことないし。

となると、一択だな。僕を殺してくれやがったあのこんちくしょうの元カノ、天野夕麻。

「想像出来たら、その存在が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

「……………相手を見下す様に、『死んでくれないかな?』と言って槍を突き出す姿? これ、どうなんだろう、確かに強そうなんだけど。」

「……………では、ゆつくりと腕を下げて、その場で立ち上がって」

右腕を下げて、立ち上がる。さあ、次はなんだろう? まあなんか僕の頭の中で警鐘鳴ってるから、碌でもないことな気はしてるけども!

「そして、その姿を真似なさい。強くよ? 適当にしては発現しないわ」
「ウソだろおい」

え、今から僕、『死んでくれないかな?』って言って槍を突き出すモーション取らなきゃいけないってわけ? ……レベル高えなあ。

まあ、いいや。やるからには本気でやろうか。おままごとでも、振り切って遊ぶ方が楽しいってもんだ。

すう……………はあ……………。

……………あの日が沈む瞬間の出来事。まだ心に焼き付く、絶望の瞬間。アイツは、まるで消しゴムを貸してくれないかな? みたいな調子で、ニツコリと笑って、言った。

「……………「死んでくれないかな?」」

誰かの、息を呑む音が聞こえた。

そしてそのまま、左腕を僕の腹部に突き出すように……………オルア!

「……さあ、目を開けなさい。魔力の漂うこの場所のなら、神器も容易に発現するはずよ」

部長の指示に従って、ゆっくりと目を開く。……何も、起こってないな。と思った瞬間、突き出したままの左腕が、赤く、眩く光りだした。

あ、これアレやつとかなないとダメかもしれない！

「目がア、目がアー!?!」

実際、目が灼ける様な光だった。赤く、力強い、光だった。この期に及んで信じてなかったわけじゃないけど、確かに僕の中に変なものが入ってたんだな。あと誰も僕のボケに反応してくれなかった、残念。『海底の城アトランティス』のカムス大佐は有名だと思っただけだ。

光が収まって視界が回復してきて、僕はようやく『それ』を見た。左腕に装着されていた、それを見た。

かなり凝った装飾の、赤い籠手。手の甲の部分に、翠の宝玉が埋め込まれている。見た感じ、何某かのコスプレアイテムのようにも見えるが。

「それが、あなたの神器よ。……見た感じ、『トウワイス・クリティカルの手』の様に見えるけれど……おかしいわね」

「トウワイス・クリティカル。なんか、二撃決殺みたいなカッコイイ響きですね！」

でも首を捻ってる部長を見ると、恐らくそう大したものではなさそうだな。

「ふふつ、確かに言葉の響きはそうね。でも、その神器は割とありふれたものよ。使用すると、所有者の力を一定時間倍にする力を持つているわ」

「なんで、そのチート」

力を倍つて、それ普通にヤバくない？ と頭を回転させてあれこれ考える。

「そ、そう、かしら？」

『力』の範囲が適用されるのかは不明ですけど、仮に僕にかかる『摩擦力』にも適用されるなら、上手く使えば壁登りにも使えそうですし、そんな凝ったことしなくても視力、聴力を倍化すれば諜報には便利でしょうし、『エネルギー』も力の範疇に収められるなら質量だつてエネルギーだし、重さだつて上げられる。普通に有能なのでは？」

あーでもどうなんだろ、僕が思い付くようなことつて誰でも思い付くような気もするけど。それで微妙評価なのだとしたら……ま、いいか。検証検証。

「まあ、でも安心しました」

「それは必要以上に強力な神器ではなかったから、かしら？」

「あれ、顔に出てました？」

「あなたの様子見てたら何となくだけど、分かるわ」

ああ、まあそうかもしれないね。

変なものが入ってたから殺されてしまった、というのは置いておいて。ほら、悪魔になっちまって普通とは外れてしまって、その上で悪魔社会での普通すら飛び越えてしまふようなものが入ってるんじゃないかってドキドキしていたけれど、実際はありふれた物。やっぱり、身の丈に合ったものが一番なんだって。

「ふふっ、まだまだ『異常な普通』の名前は返上しなくて良さそうです」
機嫌良く呟く僕を、4人はおかしなものを見るような目で眺めていた。



「……おかしい」

「危険視されて殺されたイツセーから出てきたのは、龍の手」

「……少し、調べる必要がありそうね」



その6

『さて、それでは簡単に私達悪魔についての説明を始めるわね』

といって伊達メガネを掛けた部長の姿を脳裏に浮かべ、その後に行われた簡単な説明を思い出した。

まず、僕が転生したこの『悪魔』という種族の他に『墮天使』『天使』という種族が存在しているらしい。

悪魔は太古の昔から墮天使と、『冥界（人間の認識で言う地獄）』の覇権を巡って争っているらしい。悪魔は人間と契約を結ぶことで得られる代価をもらい、力を蓄え。墮天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。その外で、神様からの命令を受けて悪魔も墮天使も問答無用で倒そうとする天使を含め、三竦みの状態で今に至るようだ。背中から翼を生やさない限り見てくれは大体人間のそれに近いので、この人間社会にも、彼ら人外は紛れ込んで生活していることもある、らしい。というか僕の主であるリアス・グレモリー部長が実際そうだ。

そしてまあ、そんな永きに渡る戦いを続けていると考えるまでもなく消耗することに

なり、戦争かなんかで純粋な悪魔もかなり数を減らしたらしい。

それを補填するための、下僕集め。一応、悪魔にも性別があるので生殖行為で個体を増やすことは可能だが、極端に出生率が低いのだとか。……まあ、寿命が万単位とか聞いて確かに納得したけど。それだけの超寿命なら、種の保存の観点から考えてもお魚みたいにポコポコ生まれはしないだろう。

でもそれでは墮天使にも天使にも対抗できないため、素質のありそうな人間を僕のように悪魔にして引き込むと。でもそれだけだと反乱とか招きかねんし、増やすだけで勢力を再び盛り上げることはできないし。ということ、転生した悪魔にもチャンスを与える制度を導入したんだって。力あるものには、『爵位』を与えると……。

で、ここまで部長に聞いて僕は頭を抱えた。悪魔、貴族社会なのかと。

貴族ってメンツの生き物だからなあ……どうせ足の引つ張り合いしてるんだろなあ……一生下僕でいいからそういうくろーいやり取りとは無縁でいたいなあ。

なお、余談……で済ませるにはあまりにも重要情報だが、リアス・グレモリー様は次期公爵なんだって！ ……ドロドロに巻き込まれたくねえよお。

まあそれはともかく、そんな背景もあって悪魔に転生してる人は結構多いのだとか。多分、今までもそういった悪魔達とすれ違つてるだろうと言われて、少し安心した。どうやら目ん玉飛び出る程の異端ではなさそうだと。

『まあ、認知できない人もいるんだけれどね』

と部長は言った。欲望に満ちた人間や、魂を売ってでも何とかしたいほど困ってる人間程、悪魔の存在を認知しやすいんだってさ。なるほど、だから今までの僕は特に困ったことがないからのんびんだらりと生きてこられたんだ。

『ちなみに悪魔なのに欲望が薄いのは？』

『出世したいなら絶望的だね』

『よっしゃあー！』

ガッツポーズをした僕を許して欲しい。だって根っからの小市民が権力持ちやいかんよ。そういうのは、意思と欲と才能があるヤツの領分だ。意思も無けりや欲もない。才能があればまた話は違ったんだろうけど、僕にあるのはありふれた神器とド平凡サンプルと言うべき本体。それっぽく過ごすだけで充分っての。

『ふふふつ、私からすれば欲塗れの様にも見えるわ？』

『んん？ 何故です』

『元人間のあなたからして、この状況はとても特異で、抜け出せないことが決まってる。それでも元の環境に戻りたいのがありありと見えるあなたは、欲塗れと言ってもいいのではないかしら？』

『……あつ』

『もつとも、私達悪魔からすれば好ましく映るのだけれど、ね?』

直後にこんなやり取りして、後頭部ぶつ叩かれたような気分になったけど。……これからは、悪魔の基準で『普通』あたりまえを追求していくべきかもね、と思い直した。

適度に上を目指す。適度に物欲に正直になる。まず初めに僕が悪魔として達成すべき目標として、そう設定した。



というわけで今、下僕として最初に命じられたのは、『魔方陣の描かれたチラシ配布』だった。欲望の持つ人が使えば、部長とその眷属（僕を含めた、部長以外のオカルト研究部の面々）を召喚できるそれを、欲を持つ人間の元に配るという作業だ。所謂下積み、というやつだね。

しかし、これに幾つか問題があった。

まず、この作業に自転車を使うようにと言われていたんだけど、つい先日自転車は壊れてしまったばかりだ。

これに対し部長は、『先行投資ね』という名目で、僕にママチャリを買ってくれたのだった。2万円がポンと出るなんて……貯金だと余裕で買えるだけの分はあるが、それ

でも結構な出費なので僕なら躊躇う。でも黒いカード出たての辺り、端金なのかもしれないね、部長にとつて。

次に、この作業は夜中に行うことになっていてということ。あんまり遅くに帰ると親に心配される。

これに対し部長は、両親に説明をしてくれた。……のだが、どう見ても暗示にしか見えなかった。目が怪しく光ってたしね、部長。ともあれ夜間の外出が許されたので、これもクリア。

最後に、バイトが出来なくなってしまうという問題。どつちを優先させるかと言われたら明らかに部長の方なんだけど、バイトはバイトで僕の生活費を稼ぐ手段として必要なものだった。

これに対し部長は、『すぐには難しいわね。でも暫くは、溜まってるはずの有給を使って休んでちょうだい』と言った。え、僕の働いてるラーメン屋『九頭龍亭』にそんなものあったの？ と店長に聞いたら、若干バツが悪そうにある、と答えた。なるほど、黙ってたんだな？ と溜まっている3週間分の有給の存在を聞いて思った。なお全て使うと言うと『お前がいなくなった穴はどうする？』と若干脅されたので、ボイスレコーダーを突きつけ、ダメ押しで部長に連絡した。この駒王町、学校も含めて部長の支配下にあるようで、この街でならある程度の無茶も何とかできるようだった。顔が青

ざまた店長を見て、若干被害者と化していた僕や先輩アルバイターの中村サン、中国人留学生の張サンとで笑ってやった、ざまあwww（なお、足りない人手はグレモリー家の方から派遣してくれるらだって）

ここまで至れり尽くせりだったので、これはもう一生部長には頭が上がらないと思いなながら、お爺さんに救われた鶴の気分で恩返しを改めて誓う。

そんなわけで現在、部長より渡された悪魔製のスマホのようなもので、欲を持つ人間の家を確認し、そのポストにチラシを投函する日々。配る範囲は、部長の縄張り……悪魔ごとに決められた、活動のできる範囲の中で。要は他の悪魔のお仕事盗っちゃダメよってことね、イツセー覚えた。

「でも、異様に広くねえ……？」

明らか駒王町の範囲を超えてるので、流石（次期）公爵……ということなのだろうか？ 下積みが終われば、契約の仕事は何か貰えそうだ、と前向きに考えて只管に投函を続ける。

しかし、仕事、ねえ。

基本的に、悪魔のお仕事は『契約』。召喚され、契約を結んで、願いを叶える。代償として、それ相応の代価を貰う。

昔は命を代価に、みたいなこともあったようだけれど、現代だと願いと釣り合わない

のでだいたい破談になるのだとか。

『人間の価値は平等じゃないわ』

と微笑んだ部長がおっかなかった。

まあそれはともかく、僕にそんな仕事ができるのかという話だよ。大したことが出来るわけでも……あ、そういや願いを叶えるのは別に僕の力が及ばないこともできるのか。なら巧みなトークで契約者を納得させれば勝ち、なのね。騙す、じゃないのはリピーターを作るため。もう一度契約したい、と思わせるのができる悪魔の契約術なんだった。

……ふつつつぶ。これはもう、ここまでアルバイトで培ってきた接客術が活きてくる展開、来るんじゃないんですかね？ これはまさかの兵藤一誠クンの時代が来ちゃいます？

「よおし、やる気もつと出てきたア！ 凄腕営業マンに、僕はなる！」
もつとも、今は下積みだけどね、トホホ……。

その7

慣れ、とは恐ろしいものだ。悪魔になつてから聖なるものと光が弱点になつて、それでも慣れれば陽の光は克服できるらしかったのだが、2週間位で克服した。もう授業中寝ることは無い、やっただぜ！

なお聖なるものに関してはマジで無理なようで、家に置いてあつた清めの塩触つたらジユつていった。めっちゃ痛くて涙が出た上、部長に後で怒られた。

『あなた、自殺したいの!?!』

ちやうんです、好奇心には勝てなかつたというか。あと最近酷い目に合ひすぎて感覚が麻痺つてたというか。

「というわけで、これはこの間のお礼だ。……見つからないように、こつそりな？」

「『おオイッセー、心の友よ!』」

そんな頃の昼休み、心配かけたお詫びとお礼として、僕秘蔵のコレクションアイテムを袋に入れて猥談仲間の2人に渡していた。松田はどんな形のエロも好きだが元浜はロリが好きなので、コレクションの中に気に入るようなのが少なくて困った。僕と趣味がまるで違うからね、殴りあつたことも数回では効かない。

「にしても、結局アレはなんだったんだ？」

「なんだったと言われたら……軽い鬱？」

肩を竦めて冗談でも言う様に。実際精神的に参っていたので嘘ではないけれど、深刻なものでもなかった。けどどそうとは取らなかつたようで、二人とも神妙に顔を歪めた。

「……いじめとかだったら、相談乗るからな？」

「あつはつは！ もしそうなつたらそいつら纏めて地獄に落としてやるよ！」

最近ボイスレコーダーを手放さないようにしている。元々授業を録音するために使っていたものだが、アルバイトの件で反省した僕は、決定的な瞬間を逃さないようにすることにした。あとはカメラでも使えればいいのだけれど、生憎うちの学校、表向きはケータイ持ってきちゃダメなのよね。

「……俺、時折お前が極悪人に見えるよ」

「右に同じく」

「あるえ!? どうしてさ!」

「そりやお前、『地獄に落としてやるよ!』って言いながら笑顔になられても……」

「過去稀に見る眩い笑顔だった」

その言葉に周りもウンウンと頷くのでぐさり、と傷付いた。慣れと共に若干悪魔っぽ

く性格変わっていつてるのでは……？ あ、元からですか？ そうですか……。

いじいじしながら弁当をついついていると、ここ最近で聞きなれた声が聞こえてきた。

「やあ、兵藤くんはいるかい？」

「……ん？ ありやりや、木場クンじゃん。どしたの？」

最近では教室の外から、ではなくてわざわざ僕の席まで来るようになったよね、キミ。僕は別に構わないけど、悪友二人が殺気立つからタイミングは配慮してもらいたくないな。

「部長からの伝言を頼まれてね。今日は、部室の方まで来てちょうだい、とのことだよ」
「ほいほい了解。わざわざありがとね」

木場クンとの仲はボチボチ、と言ったところか。同じ部活で唯一の同性同士ってこともあって、好きな小説を勧め合う程度には。見た目に反して意外と渋い趣味しててビツクリしたよ。

「いやしかし、お前がオカルト研究部になあ」

「本来なら羨ましがる所なんだが……」

「観賞用の人達に紛れても肩身狭いだけだつて」

「「これだからなあ……」」

これだからな、と言われてもな。実際に美男美女の中に紛れても、場違いだと息苦し

いだけだつて。いやホント。まあ僕の場合そうも言つてられない事情があるが。しっかし、まだ下積み中の僕を呼ぶなんて、なんかあつたんだらうか……？



「と、言うわけであなたにもこれから悪魔としての仕事を本格的に始めてもらうわ」「あ、そういうことでしたか」

短いけど下積みはこれで終わりというらしかった。意外と楽しかったんだけどな、夜中に自転車で駆け回るの。音楽プレイヤーがいい仕事してくれたぜ。

ちなみに、普段あのチラシは部長達の使い魔が人間に扮して昼も夜も配ってるんだつて。……いいなあ使い魔。僕もいつか持てるんだらうか？

「もちろん初めてだから、簡単な契約内容なものからだけけれど」

まあですよ。それでいいし、それがいい。

「それではイツセーくん、魔方陣の中央へ」

「分かりました」

姫島先輩に手招きされ、魔方陣の中央に立つ。……むむ、これはもしや、僕が魔方陣で召喚されちゃうとかそういう夢のあること？ いいねえ、これはワクワクする！

姫島先輩が何やら詠唱をする傍らで、若干ウキウキの僕。平和平穏大好きとは言え、そういうのに心が踊らないわけじゃないからね、僕も男ですから！

「今回は、小猫に予約契約が2件入ったから、その片方を頼むわね」

「……よろしくお願いします」

なるほど、両方行くのは難しいのね。……アレ、これ地味に責任重大じゃなからうか？ コレ、僕がヘマをしたら塔城サンの顧客も失うことに……。

「と、塔城パイセンの顔に泥塗らない様に頑張ります！」

「……先輩、変なものでも食べましたか？」

「あ、いや、緊張し過ぎてつい。それに悪魔のことなら塔城サンの方が先輩だから間違いではない気もするよ？」

「……気持ち悪い、却下」

ぐつ、割とズケズケものを言うよね。嫌いじゃないけど傷付くわア……。

と、落ち込んでる間に、姫島先輩の詠唱が終わったみたいで、魔方陣が妖しく輝いている。

「……ふう。部長、イツセーくんの刻印を魔方陣に読み込ませました」

「ありがとう朱乃。さあイツセー、手のひらをこちらに」

言われるままに左手を差し出すと、部長は僕の手のひらに指先で何かをなぞって

る。……ははーん、コレあれだな？　ついこの間説明されたばかりだから覚えてるよ僕。

悪魔が魔力を使うとき、だいたい魔方陣を介して発動させるのだという。使う魔方陣は、今まさに僕が立っている魔方陣を絡めたもの。僕を含めた部長の眷属悪魔にとつてこの魔方陣は家紋のようなものであり、契約をしようと悪魔を召喚する人間にとつての記号であり、力を行使する媒介でもある、ということらしい。とりあえず、身分証兼、魔力というエネルギーで回す万能回路って認識で大丈夫だろ。

そんでもってその魔方陣を身体に書き込んで、魔力を通すことで起動する……と響きはお手軽だが、魔力の扱いが赤ん坊レベルの転生したての悪魔は、まず魔力のコントロールから始めるんだと。

とはいえ、僕を召喚（もしくは転移？）なんて大掛かりな現象は、魔方陣でもないと思えないってことだろう。

そして僕の予想通り、何らかの模様を描いていた部長の指が離れると、円形の紋様が光ながら僕の手のひらで浮かんでいた。

「なるほど、これが転移用の魔方陣ですか？」

「あら、先に勉強でもした……わけないわね、まだ下積みだけしかさせていないし。察しがいい、と言ったところかしら？」

「『魔方陣』『召喚のチラシ』『魔力の使い方』について説明されたこと覚えてたら、大方の想像はつきますよ」

「そういうことね。でもこれは転移だけではなく、契約が終わればこの部屋に帰還するためのものでもあるわ」

「なるほど……」

なお、この察しの良さは勉強などには使えない模様。万年平均点って、一体どうなってるの……？（困惑）

「朱乃、準備はいい？」

「はい、部長」

そして部長と姫島先輩が魔方陣から出て、中で突っ立ってるのは僕のみとなった。

「さて、イツセー。覚悟はできている？」

「もちろん！ 一発目、バシツと決めてやりますよー！」

「いい返事ね、じゃあ行ってきなさい！」

魔方陣が輝きを増して、視界が白い闇で包まれて……………。

視界が回復すると、そこは小綺麗なアパートの一室のような……………。

「……………あれ!? 君、九頭龍亭のアルバイトくん!？」

「えっ嘘!? かえし増しストレート固めの常連さん!？」

まさか、顔見知りには……!？」



かえし増しストレート固めの常連さんの名前は、森沢サンと言うらしかった。

常連なのに名前覚えてないのかよとか言った壁の向こうのお前、仕事中に必要以上の無駄口叩けると思ってるのか。常連さんの中でも僕らに声をかけてくるガチ勢の方は、常連さんの中でもひと握りだったの。

ちなみに平麺をよく頼むこの間の常連さんは、名前は知らないけど通称『ベル』さん。向こうからそう呼ぶように言われた。あの人マジでガチ勢だよね、食べる前から一目見るだけでスープの背脂の炊き込みの甘さとか見抜くもん。やべえやべえ。

「このところ店にいないなーって思ってたなら、そういう事だったのか……!？」

と、森沢さんがグラスにお茶を入れて僕の前に置いてくれた。あ、お気になさらず。え、知り合いを招くの初めてだから飲んでって? それなら遠慮なく。

「いやあ、それがつい最近墮天使に殺されちゃいましたネ。今の主人がたまたま通りかかって悪魔に転生してくれなきや今頃あの世でしたよ! アッハッハッハッハッ!」

「笑い事じゃないと思うよキミ!」

「でもドラマチックで面白くないですか? 契約営業の掴みにしようと思ってるんですけど」

そう首を傾げて言うのと、若干森沢サンが表情を陰らせて言う。

「……初対面の相手なら、冗談と受け取って笑い話になるかもだけれど、僕は無理かな。流石に知り合いがいなくなつてたかもしれないのは、ね」

「……なんか、ごめんなさい」

話を聞くと、彼は昼間は公務員の仕事をしていた、真面目にやってきたそうなのだが、人との触れ合いが少なく、悪魔の召喚をしたのだとか。ついでに九頭龍亭に来るのも、それが理由の半分だとか。

「仕事なんだろうけど、キミいつも笑顔で話しかけてくれるから、そっちでも救われてたんだよね。僕の好み覚えてくれてるし……」

開幕で殺された話をした数分前の僕を全力でどつき回したい。

「とはいえ安心したよ。一応店長は有給で休んでるって言つてたけど、2週間も休むなんて、普通だとなんかあつたと思うからさ」

「心配おかけした様で……」

しかし、意外なところで人と人の繋がりはあるものなのだなあ……あ、僕は悪魔だつ

た。

「それで、今日僕は小猫ちゃんに来てもらうようをお願いしたんだけど……」

「すみません、塔城サン人気みたいです、指名が被ってしまって。ここは一つ、顔見知りということでお目こぼししてくれませんか？」

「うーん……まあ、アルバイトくんだからいっか」

「ありがとうございます！」

立ち上がり、深くお辞儀をする。案外、僕の運は捨てたものではなかったらしい。あ、殺されてることに關してはノーカンで。あんなの事故事故。

「ちなみにですけど森沢サン、小猫ちゃんを呼んでどんなお願いするつもりだったんですか？」

「ああ、実はコスプレをしてもらおうと思って……」

そうやって彼が部屋の奥から持ってきたのは、パツと見どつかの女子高生の制服だった。

「……あ、それ暑宮シリーズの」

「そう、短門キユの制服……」

……代わりに行けることがあれば、と思ったけど、それは流石に難しいかな。本職のレイヤーさん連れてこないと。

「アルバイトくん、短門は好きかい？」

「クールキヤラは好きですけど、それ以上に夜水可子が好きです」

「理由は？」

「胸です」

女性のどこに目が向くかと聞かれたら、僕は間違いなく胸、おっぱいだと答える。次点で尻、もしくは脚。

ちなみに男が胸に目がいく理由は、猿の時の名残りらしいね。オスザルはメスザルのケツを追っ掛けてたけど、立つことによつて、代用品として乳房が肥大化したと。つまりオツパイスキーは尻も好きなんだろうな、僕も嫌いじゃないよ！

「つまりは巨乳派、と」

「YES. 貧乳も可愛いと思えますけど、並べたら僕は迷わず巨乳を選びます」

しかし森沢サンのこのノリ……実に猥談コンビとのそれを彷彿とさせる。案外あの2人と合わせると思わぬ化学反応が見れるかもしれない。

「そういう森沢サンは貧乳派、と。なるほど、塔城サンにその服を着せようとした理由が分かる。身長足りてないですけど、雰囲気似てますもんね」

「ああ、だからこそ着て欲しかったんだけど、なあ……」

そうガツクリ肩を落とす彼に僕はなんとも言えなくなる。流石に代わりに着る、とは

言えないしねえ。次に塔城サン来るまで我慢してください、としか。

「……えつと、僕にできることなら、ある程度は」

「うーん、そういえばアルバイトくん。名前は？」

「兵藤一誠です。親しいヤツはイツセーと呼ぶので、気軽にそう呼んでください」

「そっか、じゃあイツセーくん。僕に、何かご飯作ってくれよ」

「……ご飯？ ご飯、ですか。」

「普通の料理とラーメンは大分毛色が違うけどさ、厨房にいるキミ、手際が良かったから。多分普通に料理も出来るんじゃないのかい？」

「まあ、多分一人暮らしの男よりは凝ったの作れますけど。よし、分かりました。そのお願い、承りましょう！」

「うん、ありがとう。冷蔵庫にある材料は適当に使っていいからね！」

そう言われて、ウキウキ気分で冷蔵庫を開けて……愕然とした。

「(……食材、ほとんどない!?)」



……意地とプライド、あと普段の習慣がそうさせたのか、今ある食材で一つ、作れそ

うなのを思いついた。

お米、ある。

卵、ある。

だし醤油、ある。

ザラメ……はなかったが、三温糖はある。

冷凍刻みネギ、ある。

七味、ある。

手を洗って、それらの素材を取り出して、精神統一。

最初に、コンロに火をかけて鍋で水を沸騰させる。ちゃんと蓋をして、早めに沸騰させよう。

次に、お米を研いで3合を早炊でセットする。水は少し少な目の方が森沢サンの好みに合いそうだ。

お湯が沸く前に、卵を4個取り出す。森沢サンから画鋏を借り、ケツの方に穴を開ける。

そうしている間にお湯は沸いた。そこに穴を開けた卵を投入して、ケータイのアラームで6分セット。

この6分の間に、隣のコンロで雪平鍋を使い、4倍希釈のだし醤油を水と1:3ぐら

いの割合で適量投入。さらに三温糖も大きじ一杯くらい入れて煮立たせ、火を止める。これで卵が4分ぐらいか、シンクにボールを用意して水を張る。氷があれば良かったんだが、ないので水でさかっと洗ってから冷凍庫に入ってた保冷剤をその中に入れる。冷えてないという意味が無い。

ケータイのアラームが鳴った、すぐ様卵をお玉で掬い、先程のボールに入れて冷やす。充分に冷えたとおもったら、スプーンを用意して卵をケツからぺちぺちと叩く。先程穴を空けたのは、剥きやすくするためだ。

全体的にヒビが入ったら、ケツから殻を、薄皮ごと破くようにして取る。慣れてる人なら、そこからスプーンを滑り込ませてつるんと剥ける。

そうこうしてるうちにご飯が炊けた。……早いな、いい炊飯器使ってるね。

お茶碗を棚から取り出して、適量盛る。そしてその上にさっきのゆで卵をのっけて、スプーンで割ってやる。するといい感じに半熟になった黄身が、トロオ……って白いご飯の上に拡がる。

さて、ご飯の熱で黄身に火が入ってしまうのでここからはテキパキと。先程煮立たせたタレをカレースプーン3杯分ぐらい掛けて、刻みネギ、七味を掛ける。

僕特製、半熟玉子飯の完成だ。

さて、残ったタレと卵は……つと。



「うまい、うまいねえこれ！」

「気に入って貰えたようで何よりです」

かき込むように半熟玉子飯を食べる森沢サンを見て、思わず笑顔になる。やっぱり、作った料理を美味そうに食ってもらえるのは何物にも代えがたい、作り手の幸せだね。

「さて、今回のお代は……普通に300円ですか。なんか普通で店で売ってる気分になりますね」

貸し出された端末を見て、思わずゲンナリである。

「そうだよ、これ九頭龍亭で出したら絶対売れるって！」

「いやあ、ご飯と卵、原価率悪いんで……」

ウチだと小盛(ご)飯を100円で提供しているんだが、元取れてるとは言い難いんだよなあ。

「さて、そろそろお暇しましょうか」

「あ、そうか。契約が果たされたから。ありがとねイツセーくん。機会があつたら、次も

よろしく頼むよー!」

「ええ、いつでもお待ちしております! ……あ、後で冷蔵庫見てくださいね?」
そう言つて僕は帰還の光に包まれながら、くふふと笑みを浮かべるのだつた。



「冷蔵庫を見てくれ、かあ。どうしたんだろ?」

「……これは、タツパーと、メモ?」

『タレは違うので味は変わってますけど、味玉子を仕込んであります。多分朝ぐらいにはいい感じに浸かつてると思うので、朝食に是非。今後ともよろしく願います。』

『兵藤一誠』

「……………これは、ズルいなあ」



その8

「……………という感じで、次からも契約して貰えるようにサービスをですな」

翌日の放課後。部長に昨日はどうだったのかと聞かれたので、余すことなくマルっと報告しました、まる。

そうすると、部長が何故か思案するような顔をしました。……僕、なんかまずった？
「……………ん？ ああ、ごめんささい。イツセーは良くやったわ。顔見知りなのを抜きにしても、新人とは思えないくらい」

「いやあ、そりゃ僕も1年程お客様相手にラーメン作り続けてましたし……」
結局のところ、やってることの本質は変わらないからね。代価を貰って、サービスを提供する。貰うのがお金なのか他のものなのか、提供するのがラーメンなのか他のものなのか、という違いはあるけど。

ぶつちやけラーメン食べたければ、近くのコンビニに駆け込んでインスタント買えば食える。手間を惜しまないなら、スーパーで中華麺と中華だしの素、あと好みの具材を買えばそれっぽいのは食える。そして、学食のラーメンでもない限り、間違いなく外で食べるラーメンよりも安上がりだ。まあ、元取るために人件費の他にもサービス料上乗

せしてらるだろうからね。材料の発注してると、如何にぼつてるかが分かる（但し、一部メニューは原価スレスレだったりもするゾ！）。

ラーメン屋に必要なのは、それでもこのラーメンが食べたいんだ、という環境を作ることだ。それが味なのか、提供速度なのか、サイドメニューなのか、店員の態度なのか、内装なのか……上げていけばキリがないが、そういつたあらゆる要素を以て代金以上の満足を作り出すことだ。そうすることで、ようやくと店が成り立つんだ。

同じことが、間違いなく僕ら悪魔の契約にも言える。

頼み事するなら別に悪魔でなくてもいい。コスプレしてもらいたいならレイヤーさん雇えばいい、ご飯食べたいなら出前を取ればいい、出合いが欲しけりや出合い系サイトに登録すればいい、それがいやなら結婚相談所いけばいい（まあ余程困った時の願いはそうも言ってもらえないかもだけど）。そもそも悪魔になんか頼むのって、困っていて、どうしようもなくても、普通の感性してたら怖いはずなんだ。

それでも悪魔に頼みたい、願いを叶えて欲しい、という強みがなくてはならないんだ。とはいえ現状、僕に『悪魔』としての強みはないも同然。なので『僕個人』の強みを生かすことで、満足させるといふ方向に持ち込むしかなかった。それも相手が森沢サンだったからなんとかあったようなもんだ。……部長は褒めてくれたが、これはまぐれだ。あるいは部長もそれに気がついて、微妙な顔をしたのかもしれない。

「もう、そんなしかめっ面しないの。勝って兜の緒を締めよって、この国のことわざにはあるけれど、誇るべき所はちやんと誇るべきだわ。どうあれ、あなたは依頼人を満足させたのだから。ほら、これを読んでみなさい?」

紙を渡されたので、読んでみる。これは……アンケート? 『悪魔との契約は如何でしたか?』って……。

『誰かが自分のために作ってくれたご飯が美味しいものだったことを思い出させてくれる、最高の時間でした。イツセーくんにはまた、お願いしたいと思います』

率直に、涙腺が緩みそうである。

「少なくとも、満足度ならベテランともいい勝負よ。自信持ちなさい」

「はいっ!」

元氣よく、返事をする。反省、というか振り返りはちやんとしたから喜ぶべき所は喜ばないとね!

「ところで、イツセー。実際のところ、あなたの……というより、あなたの所のラーメン屋はどれ程のものなのかしら?」

若干目がギラつき始めた部長に少したじろぎつつ、客観的にどうだったかなあ……?と頭を回す。

「……系統というなら、味よりも腹で満足させるラーメンですね」

基本的に、ウチの1杯が他所の大盛りに対応するぐらいの量と言えば伝わるのだろうか？ スープ自体は豚骨白湯で、こつてりだけでもそこまで苦しくはないはず。だがそこにかえしと一緒にいれる背脂がこつてり度をガン上げしてくるので、女性はキツイのは間違いないな。実際女性客多くはないし。味も悪くないよ？

「……『外食ログ』で★4. 2。食後の満腹感は最高、脂の量は店員が聞いてくれるので調整が利く、トッピングとサイドメニューが豊富、ソフトクリーム美味しい、等」

「え、塔城サン？」

なんて言ったものかウンウン唸っていると、隣で塔城サンが『外食ログ』をスマホで検索して表示してた。あれま、意外と人気なのねウチの店。

「……低評価意見、店員の目が死んでるのに明るく対応してくるので気持ち悪い、やはり脂っこい、つけ麺がメニューにない、厨房から焦げた匂いがする、焼き餃子がメニューにない、等。基本的に、脂っこい以外では味の面では高評価、です」

ああ、目が死んでるのは多分中村サンだな。次の日も出勤だからって店で一晩明かすとかやってるし。(店長のために)シャワーもトイレも洗濯機も付いてるから、寝る時に横になれない以外はなんとかなるもんねえ。つけ麺は無茶言うなと言いたい。焼き餃子に関しては焼き野菜とチャーハンでコンロがいっぱいいっぱいな……水餃子で許して？

「……あと、個人的な感想としては、財布には厳しいですが、普通に美味しいです」

あ、そういうや塔城サンには賄いラーメン上げたんだっけ？ 自分用の味付けしちやつ

たけど、美味しいと言ってくれて安心した。

「ふむ……新規事業としては悪くないわね」

「え、なんですか？」

「なんでもないわ……今は、ね」

……小声で聞こえた中身は聞かなかったことにしたい。血迷ったと投げ捨ててくれないかなあ……。



そしてこの日の夜の依頼者はミルたん……いやマジでそう名乗ったというか、一人称が『ミルたん』だったというか。いやあ、すこぶる強烈な御仁だった。多分あれを一言で表すなら『漢の娘』だ。世紀末覇者がミルキーのコスをしていたのだから（ミルキーとは、アニメ『魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブ』の主人公である……断じて世紀末覇者のような漢の娘ではない）。

なお、その依頼内容は、

『ミルたんを魔法少女にして欲しいによ』

という内容だった。思わず素で『異世界にでも転移したらいけるのでは?』と言ったが、それはもう試したとの事。……嘘言ってる気配はないから、余程自分を騙すのが上手い方なのか、それとも本当のことなのか。どちらにせよ、現状で僕よりもフアンタジーしてるんじゃないだろうか?

しかもその願いを端末で入力すると、この人では無理だっていう。僕の力量云々じゃないところで引つ掛かれるとマジでどうしようもない。

そこで僕は懇切丁寧にその事を説明した上で、教材なら取り寄せられるという旨を伝えた。あと魔法を使えない原因を、僕の方でも勉強しながら探っていくとも。誠実な対応が功を奏し、定期契約を結ぶことに。やったぜ。

なお教材『スライムでも分かる初級魔法』の取り寄せに対する代価はミルキーのDVDボックス初回限定版だった。視聴用、観賞用、布教用で3つ揃えたのだとか。僕はそのうち布教用で保管していたのを代価として徴収することに。ミルキーは僕もたまに見ていたので(魔法少女とは思えない熱い演出が割と好きである)、どうにかして部長から貰えないかなーと思ったのだが、いつもの如く警鐘が鳴って調べてみると、オークションでウン十万ぐらいのプレミアになってた。しばらくするともつと跳ねるかもしらん。……恐るべし、ミルキー。

しかし僕の召喚者二人とも、サブカル好きだね。僕もその手のはある程度は手を出してるので置いていかれない程度に話はできるが。……なんか、召喚者とあつた悪魔が呼び出されるのが基本らしいので、これからの依頼者はサブカル好きで固まつてるのかもしれない。……まあ、眷属同士での仕事の奪い合いがないということで、良いように捉えよう。

そんなこんなで次の日の部活で褒められたし、いいスタート切れてるんじゃないかなろうか？ その事が恐ろしくある。だってこれアレだろ？ どつかで心折られるパターンだって。

というわけで、表の部活も終わったので解散！ 早く帰って僕も貸し出してもらった『スライムでも分かる初級魔法』読まないと。ついでに『新人転生悪魔でも分かる魔力講座初級編』も。そんな感じで気分だけはルンルンと歩いてると、

「きゃう!？」

と背後から声がした。

振り返ると、どう見てもシスター服を着た女性が、顔を路面に突つ伏して転がっているではないか。今どきにしては奇妙な転げ方をしていますな、漫画でもあまり見ないぞ昨今。

これ、助けてもいいものなのだろうか？ 悪魔つてバレて殺されそうになるとかない

かな？ お互いに。

……危険な目にあうのと見捨てる後味の悪さを天秤に掛けて、後者に傾いた。まるきり善意と嘯いたら許してくれないだろうか？ 悪魔としては失格かな？

「大丈夫ですかシスターさん？」

「うう……なんで転んでしまうんでしょうか……？ ああ、すみません。ありがとうございます……」

ふうむ、声からして思ってたけど、顔見るとえらい若いな。ついでに観賞用レベルの美少女だった。エメラルドの様な目と、少し溜まっている涙が、並の男ならハートにバキウンされてる事だろう。なお現在僕は彼女の胸に輝くロザリオを見て命の危険的にドキドキしております、死にそう○。

……というかあかん、嫌な予感が警鐘鳴らし始めた。多分僕らと同じぐらいで、その上でシスターって、僕には『孤児』とか『捨て子』とかチラついてしかたがないんだが。とりあえず風が強いので『ヴェール飛ばないように気を付けて』とも添えて、手を引って張って立たせてあげた。

「旅行……には見えないね。こんな辺鄙な街に十字の方と会うのは久しぶりだ。もしかして、今廃教会になってるところに来た方かな？」

そう、この街にも教会があつ『た』。過去形だ。確か、昔お隣に住んでた家族がクリス

チャンで、彼らが引越してから教会も廃教会になっちゃったみたいな話を母から聞いた気がする。

「あ、はい。実はそうなんです。あなたはこの街の方なんですわ……これからよろしくお願ひします」

「あ、あはは……うん、よろしくお願ひします」

教会なんて死んでもお世話になりたくないなあ今となつては！……お隣さんに再会したら嫌われちゃう？ 厄ネタ転がってて草も生えないよ。

……しかしおかしいな。人事異動にしたって、普通こういうのって日本支部みたいなのところどころにかするんじゃないのか？ このシスターさん、目の色と顔の形からどう考えたって日本の血混じつとらんし。それに、『廃教会』だぜ？……やーな予感が拭えないよ。

「この街に来てから困つてたんです。その、私って日本語上手く喋れないので、道行く人皆さんに言葉が通じなくて……」

「ああ……」

日本人マジそういうところ冷たいよね。でも昨今ならスマホでなんとかなったりするもんだから、僕は声掛けられたらボディランゲージとスマホ駆使して対応してる。

しかし、悪魔になってそれも必要なくなつた。それが今、恐らく欧州系の顔してるシ

スターさんと会話できてる理由だろう。

悪魔になった特典で、悪魔の話す言葉は聞き手の1番馴染みのある言語で聞こえ、僕が耳にする言葉は、僕にとって1番馴染みのある日本語で聞こえるようになると教わった。実際英語の授業では先生の話す英文が日本語に聞こえて戸惑ったものだ。……悪魔の話す言語って、もしかしてバベルの塔が崩壊する前の統一言語だったりするのかな？ いやいやまさか……。

「……とりあえず、廃教会の場所なら分かるよ。案内しようか？」

とりあえず、廃教会なら行っちゃっても大丈夫だろう、と判断して案内することにした。だってここでバイバイは流石に可愛そうだ。

「本当ですか!？ ありがとうございます! これも、主のお導きなのですわね!」

………だから、さつきからうるさくて鳴り止まない警鐘は黙っててくれ。僕を怖がらせないでくれ。

その9

「(……ああ、やっぱり)」

僕は現在進行形で死地に向かっていることを、警鐘以外の面で確信した。

時間は日が暮れようかというぐらいの時間帯。まだ人通りはあつて然るべきだし、気合いの入った小学生が走り回って転んでる位はしていてもおかしくない。

だということに人通りが全くないって、これ墮天使が現れる予兆だよな？　僕ら2人以外にいたのが、何処かに飛んでく黒い影だけって時点で察して欲しい。それに、酷く息苦しくて仕方がない。シスターさんが僕の様子を訝しんで『大丈夫ですか？』と聞いてくるが、全く大丈夫じゃなかった。

案内を少し遠回りしながら考える。僕の勘が正しいのなら、今僕の後ろを某有名使い魔栽培ゲームのアレみたいに着いてくる彼女は、あまり知らないのだと思う。

しかし多分、廃教会にいるのってもしかして墮天使一味だったりするんじゃないだろうか？　そうになると、不自然な人事も納得がいくんだよ。

……正直、僕もうここで見捨てて逃げていいと思う。見知らぬ誰かのために命かけるとか、馬鹿みたいだし、そんな義理もない。自分のことが可愛い云々の前に、僕の命は

もう僕のものではないんだからね。『シスターの手助けして死にましたー』とか悪魔としてアホもいところだ、やめやめ。逃げよう逃げよう。

……………と、ならないのが、僕の阿呆たる所以なんだろう。悪友から『ノータリン』と呼ばれる程度には、脳味噌が足りてなかった。もしかしたら、この状況に酔ってるのかもしれない、お姫様を助ける騎士ムーヴって？ ……言つといてアレだけど、ねーわ。

とはいえ、学校に向かうように歩いていて良かった。あそこにはまだ人がいて、もしかしたら主人と眷属の誰かがいるはず。

「……………時にシスターさん。君は、墮天使という言葉に耳馴染みはあるか」

「……………っ！」

その反応はピンゴか……………あーヤダヤダ、警鐘さん仕事し過ぎ。

「僕が思うに、君みたいな人畜無害そうな女の子と墮天使と接点があるように思えないし、墮天使達にまともな扱いされれるとも思わないんだよ。だから切実に、今から逃げるかお寺か神社に駆け込むことを強くオススメしたいんだけど」

「あら、ダメよそんなこと」

横切るために通った公園の中。まるであの日の再演か。鳴り止まぬ警鐘とは裏腹に、

僕の心臓のドキドキは驚く程治まっていた。

シスターさんを庇うように振り返れば、そこに居たのは口元を包帯でグルグルと巻いている、目付きの鋭い女性で……墮天使。僕の思ってる存在なのだとしたら、随分と寝れない夜を過ごしたらしい。声からも、僕に対する怒気が抑えられていない。いやこれはむしろ……殺気というヤツではなからうか？

「あ……だ、墮天使様……」

「この日を、この日を死ぬ程待ち侘びたわ……。アザゼル様の寵愛を得ることばかり考えてたのが嘘みたい。最近の私は、もうそれだけしか考えられなかったわ。今の私には、あなたのそれがどうしても、欲しい。あなたなら、言ってる意味が、分かるわね？」

「ひっ……」

背後のシスターさんを睨む、女性墮天使の濁った目は……多分、欲と憤怒で汚れ切ったそれなんだろうなあって。どこか他人事のように感じてしまう。

「だというのに、時間には来ない、グズな子だと聞いていたからなんとか自分を騙せたけど、あまりにも遅かった。待ちきれなくて、探しに出てみれば………またお前か………また、お前かア………兵藤一誠エエエエツ!!」

「ていつ」

脚を払って蹴飛ばす。真夜中トラブルで身についた喧嘩殺法の1つだった。不意を

つくと人外相手にも有効なのね。イツセー覚えた。

「さあ逃げろシスターさん！ その出口を出て表通りの道を右に走り続けたら、左手に大きな校舎がある！ そこで『兵藤一誠を助けて！』とでも叫べば事情を知ってる人が何とかしてくれる！」

「で、ですが……！」

まごつく彼女に、言葉を重ねた。

「僕は詳しいことはよー知らん！ でも、なんか今の反応からして君の命も無事では済まされる感じではない！ 死にたくなければ逃げてくれ！」

「でも、こんな私が……！」

何かに怯える彼女に、また言葉を重ねた。

「詳しいこと知らないと言っているツ！ いいか、僕は神様なんか信じちゃいねエ！

苦しい時に助けてくれもしなかった、死ぬ間際に手も差し伸べてくれなかったお天道様なんかコレっぽっちもご利益なんてなかった！ それでも救ってくれたヒトがいた！

だから今度は僕の番だ、僕にお前を救わせてくれ、シスターさん！」

「だからア、ダメだと言って」

ゆらりと起き上がった気配、着地狩りをするように振り返って、左腕を振り抜いた。いつの間にか装備されていた龍の手が、堕天使の口元を打ち抜いた。

「だアつてろ墮天使が！ 行けよ、行つてくれシスターさん！」
「ぜ、絶対に助けを呼んできますから……！」

……よし行つてくれた。途中でまた転げないか心配だけど、多分大丈夫と信じた。ほら、シスターさんが学校着かないと多分僕もお陀仏だろうし？ あ、お陀仏つてそりゃ仏教だったな、イツセーくん反省。

さて、イチバチの賭けではあつたが、上手くいったようだった。もし飛んで、シスターさんを追い掛けられたらどうしようかと思つたけど、余程彼女は僕にキレていたらしい、またもゆらりと起き上がったその目は……昏い炎を宿してるかのような、その憤怒に染まつた目は、僕をこれでもかと睨みつけていた。

そうそう、僕あなたに会えたら言つてやろうと思つてた言葉があるんですよ。

「ところでアンタ、誰？」

心底不思議そうに、首を傾げて言つてやつた。想定外のことになりすぎて、まるで無様な反応だ。あ、無ではないか。だつてケータイのバイブレーションみたいにブルブルブル震えてんだもの！

「いやあ、僕悪魔に転生したから、墮天使と会つたら襲われるとは思つたよ？ 実際男の墮天使に襲われたし。でも女の墮天使に、昔からの宿敵みたいに名前を呼ばれても、い

まひと一っピンと来ないんだよね? いやほんと、アンタ誰です?」

ああ言つてやった、言つてやったぞ! 人間としての僕の命を終わらせてくれやがった、あの天野夕麻と名乗ったアンチクシヨウに言つてやったぞ!

今からまた殺されることになったとしても、仕方ないと諦められそうだと思える程度に、スツキリした!

「ハ、ハハハハハ、ころ、」

「ん? もしかして君、元カノちゃん? あら久しぶり、随分と様変わりしたから気が付かなかつたよ。え、なに、イメチエン?」

「殺すツツツ!」

これ以上ない殺気と共に放たれた光の槍は、僕の脇腹をかすり、その一部を抉りとつた。多分、また腹を刺すんだろうなつて思ったから、なんとか避けようとしたけど、やっぱり持つていかれた。すつげえ痛い。息もできない様に錯覚する程に痛い。悪魔にとつて、光は毒なんだと再認識した。

けれど、けれども、今ここにいるのは、どうしようもなく、僕のカモだった。

今目の前にいるのは、刃物振り回す酔っ払いと大差ない。そりやあ僕は死に体で、雑魚で、神器もありふれたものでしかないけども。でも、どうしようもなく、カモだ。感情に振り回されて、まともに戦えなくなつてるような相手なんて、避けることに徹すれ

『Boost!!』

抱き寄せるために使っている左腕から、力強い音がした。恐らく、倍化する合図。全身に漲る力を、右手に集中させた。

口から赤が漏れる。鉄の味でいっぱいいっぱいだ。でも、悪くない気分だ……自分を台無しにしてくれた相手を、これから台無しにする気分というのは。

さて、口を使わなくて済むようにさせようと思つたら、何を潰すべきか。そう考えて、僕は右手で元カノちゃんの喉に爪をたてて、掴み、引きちぎった。

「——ツツツ!!」

音にならない叫びが響き渡った。突き飛ばされて、僕の身体は無様に公園内を転がって、その跡を赤く染めていく。

それでも、それでも、笑って、立ち上がる。悪魔になって頑丈になったからなのか、光以外のダメージは、さして大きくはなかった。いや、血はダラダラと垂れ流してるので今にも力が抜けそうなんだけどね。

「あはっ……ほら、もうこれで喋らなくていい」

ついでに、頸動脈もやったから致命傷だろう。殴っても傷があんまりついてなかったから、右手の爪の『貫通力』に力を寄せて本当に助かったし、その判断は正解だった。僕の神器は、ありふれたはずの『龍の手』は、それでも僕に、可能性を掴ませてくれた。

ああで、も……僕ももうダメ、かも、ね……ごめんなさい、ぶ、ちよ……
意識が、また闇へと落ちていく……。

その10



『僕はただ、あたりまえ普通になりたかったのです』



奇跡的なことに、僕はまた生き延びることが出来たらしい。身体中穴だらけだったはずなんだが、一部の痣を除いて全部塞がっていた。

目覚めた場所は病院で、意識が戻ったのと同時に父さんと母さん……あと例のシスターさんが駆け込んできた。おいおいと泣かれて、すごくいたたまれなくなった。申し訳ない。

どうやら、僕は『シスターさんを守るために暴漢から体を張って、その末で打ちどころが悪くて昏倒したのだ』という設定になった。多分、そうしたのは部長なんだろうと思う。でも打ちどころが悪くて3日も昏睡つてあるのか……いや、植物状態とかある

しな。

『無茶をしないでちようだい』と、母さんに泣かれた。

『男らしくて誇らしいが、肝が冷えた』と、父さんに怒られた。

『本当に無事でよかった』と、シスターさんに泣かれた。

検査して特に問題がなければ、明後日には退院出来るのだそうだ。……どういこと

なんだろう？ どんな奇跡が起きたんだろう？ 頭が回らない。

『心配かけてごめん』とだけ言い残して……力尽きた。まだ、疲れていた。

次に目を覚ますと、窓からは夕日が射していた。

僕が横たわってるベッドの側で座っていたのは、部長だった。

「気がついたかしら？」

顔は微笑んでいたが、目が笑っていない。強ばっていた。

身体を起こそうとして、止められる。安静にしろとのことだった。

「聞きたいことが、沢山あるわ」

「でしようねー……」

「それでも、最初に言う言葉は決めていたの。………本当に、無事でよかったわ」

「……腑甲斐無い下僕で、本当に申し訳ないです」

本当に、悪魔として腑甲斐無い。シスターさん助けて死にかけるとか、もう本当に。

後悔はしてないけど、反省はしなきゃだろう。もつとも、リストラされなければ、だけで。

「僕は、リストラですか……?」

「バカ言わないでちょうだい。あなたは、私の唯一の『兵士』^{ポーン}なんだから……」

「……ポーン? チェスですか?」

「そうね、そんなこともまだ教えられてないのよね……ちゃんと教えるから、今にも捨てられそうな仔犬の様な目をしなくても大丈夫よ。でも今回のことは二重の意味でやめて頂戴。私も心配したし、心情的な面を抜きにしても危ない橋を渡っていたのだから」

「そんな目をしていたのか……想像以上に不安だったのか? ……不安だったのだからね、恩人に失望されるのは、怖い。」

しかし危ない橋、とは?

「墮天使が何かコソコソと私の領土で何かの準備をしているのに気がついていたら。それを踏まえた上で、放置していたの。現在、天使、墮天使、悪魔の三陣営は冷戦中という話はしたかしら?」

「……チラツとだけ」

「ならやつぱり私の落ち度ね。今この三陣営は停戦状態であり、だからこそ迂闊にあの墮天使達を潰すわけにはいかなかった。何かの準備というのが、墮天使全体の計画だつ

た場合、何かの拍子でまた戦争が始まってしまふもの。いずれはそうなる相手とはいえ、今は時期尚早。今回はたまたま一部の墮天使による暴走だったから良かったもの……つてことよ」

「う、うわあ……」

え、これ一步間違えてたら大戦犯としてその名前が後世に刻まれてたパターンですか……？ 一気に汗がダラダラと吹き出すと同時に、自分の悪運の良さが半端ないことに感動した。

「今回のことは実際に問題がなかったことと、私の判断を仰げない状況にあったこと、それと私が説明責任を果たせてなかったことで不問とするけれど、次からはちゃんと私に相談しなさい。そうでない場合は、自分の立場を考えて行動すること。分かった？」

「分かりました、部長」

と、ここで説教フェーズは終了したらしい。少し部長の表情が柔らかくなったことで、僕の強張りも幾分マシになった。

「まず、先に現状確認するために説明をするわね。もう聞いているかもしれないけど、兵藤さん達や学校含めた表向きには、女の子を庇い、暴行の末の昏倒ということで処理したわ。実際、外れてはいないみたいだし」

「ありがとうございます。……いや、なんというか、すげえ恨まれてみたいで。僕を殺

した堕天使から」

そう言うのと、微妙な顔をしつつも『納得がいった』と言わんばかりの表情をした。何故に？

「……イツセーを悪魔に転生したあの日、あなたは原型をとどめてない程に、ぐちゃぐちゃにされていたわ。……一体、何をすればここまで恨まれるものなの？」

「あー、なるほど。いえ、その日デートという名目で出掛けてたんですけど、その最後で『死んでくれないかな？』なんて言われて、実際腹にぶっ刺されたもんですから、最期に仕返しぐらいはしてやろうと、唇を噛みちぎってやったんですよ」

「……………そう」

幾ら仇敵にあたる堕天使とはいえ、同じ女性として思うところはあるのだろう、少しい情の色を孕んだ返事だった。

「あなたの怪我については、あの子が治してくれたわ」

「……そんな力があつたんですか、あのシスターさん。そう言えば、よくあのシスターさん追い出してませんよね？ 普通に仇敵なのでは？」

「それ、あの子を全力で守ろうとしたあなたが言えたセリフではないわよね。大丈夫よ、取引……というよりは提案をして、受け入れてもらったから」

「提案、ですか」

大丈夫なんだろうか、悪魔に取引持ちかけられるシスターさんって。もつとも、あの子ワケありっぽかったしなあ……。

「その辺の説明は……私が先にするべきではないわね、あの子から聞いた方がいいわ。あの子の名前も」

「分かりました」

次会ったら、まずお礼を言おう。まだ生きていられてるのは、間違いなくあの子のお陰だ。じゃないと、天野夕麻を名乗った元カノ墮天使と相討ちになっていただろうから。

「……あ、そう言えば、あの墮天使は？」

「あの子に呼ばれて私が来た時には、既に事切れていたわ」

「そう、で、すか……」

今になって、実感が追いついてくる。僕は、命あるものを、殺した。殺して、しまった……。

仕方ないじゃあないか、と思う。のだが、やはり割り切るには、墮天使が人間に近づいた。

「気に病むことはないわ。それに、いずれは慣れなければいけないことよ」

「……そうですか、なんとかします」

そう、慣れなければならぬということとは、『普通あたりまえ』ということだ。人間にとつての普通でなくとも、悪魔としての普通ならば……耐えられる。

天使と墮天使を殺すことは『普通あたりまえ』、命のやり取りをすることも『普通あたりまえ』。

何度も、暗示をかけるように呟くことで、若干気分がマシになった。まだ慣れないだろうけど、ちゃんと当たり前にしてみせる。甘えは許されない。

「……今はこんな所かしらね。まだ疲労も抜け切つてないだろうし、また明日にするわ。ちゃんと、安静にしていること」

「了解です」

そうして部長は立ち上が………らない。何かを迷つた表情で、僕を見ている。な、なんだよう、そんな綺麗な顔で見られても『わーい観賞用だー、眼福眼福』としか思えないぞう！

「……ねえイツセー。どうして、あなたはあの子を助けたの？」

「……………？」

しばらく待つっていると、投げかけられたのは、そんな問だった。意図が掴めない。

「あなたは私に真実を告げられてから、これ以上なく冷静で、自分の立場を理解して、立ち回っていた様に見えるわ。少なくとも、自分から愚かな振る舞いをしようとはしなかった」

「うーん……まあ、そうなるんですか、ね？」

自分から馬鹿なことをするやつは稀だろう、と思うのですけど。少なくとも、そんな馬鹿ではない……と思いたい。

「そのうえで、あなたはあまり精神的に強いとは言い難いのも知っている。理不尽と変化に苛まれて、耐えきれなくて泣いたあなたを、私は知っているわ」

「……………」

そう言えばそんなこともありましたね。遠い昔のように思えます。……ぶっちゃけ思い出したくもうごさいます、ビービー泣くとか黒歴史なので。

「だからこそ不思議で、不可解なの。あなたがお人好しなのを加味しても、あなたは自分の行いの危うさに気がついた筈よ。しかも、眼前には格上であろう墮天使。あの子を助けるにしても、一緒に逃げようとは思わなかったのかしら？」

「うーん、どうなんでしょう？　なんか随分と部長は僕のことを高く評価してくれてるみたいですけど、友達からは『ノータリン』と言われちゃうような、考えたりてない系の男子ですよ？」

おどけてそう答えると、睨まれる。真面目に答えると、雰囲気物が語る。……態度はともかく、大真面目なんだけだな。

「……分かんないですよ、本当に。ただ、僕はずっと、自分の思う『普通』あたりまえをし続けてき

ただけですから」

「当たり前……?」

「はい」

本当に、それだけの話なんだ。

「恩人に救われたら、その恩に見合ったお返しをするのが『普通』です」

「自分の思うかっこいいヒトになりたいという思いも『普通』です」

「困ってる誰かの力になりたいと思ってしまうのも『普通』です」

「心の狭いヒトに見られたくないのも『普通』です」

「ムカつく相手に仕返しをしたいという気持ちも『普通』です」

「何をやってもいい相手にやり過ぎてしまうのも『普通』です」

「それだけの話です。僕はただ、『普通』になりましたかっただけです。何をやっても『普通』っ

ていう『異常』を塗り潰せる以上の、個性ある『普通』になりました」

「ああ、だからと言って心情をおいてけぼりにして、当たり前前に固執する様なヒトと思わ

れては困ります」

「あなたに救われて、恩を返したいと思うのは僕の心だ」

「あなたのように、誰かを救いたいと思うのは僕の心だ」

「誰かが困ってたら目をそらすことが出来ないと思うのは僕の心だ」

「少なくとも、出来ることから逃げて心が狭いと思われたくないのは僕の心だ」

「僕を殺してくれやがった女に仕返しをしたいと思つたのは僕の心だ」

「僕を殺したんだから、何されても文句言えないだろつて思つたのは僕の心だ」

「僕の心に準じて、当たり前と思つたことをやった。本当に、それだけの話です」

そう言い切ると、部長はなんだか泣きそうな顔をしていた。

「……あなたの渾名、『異常な普通』つて言うらしいわね」

「気に入つてるので、自称もしてます」

「本当に、ピッタリね。……本当に」

そう言つて、部長は立ち上がつて『また明日来るわね』と病室を後にした。

一人になつた病室で、独り言が漏れる。

「当たり前、当たり前、当たり前、ねえ」

僕を救つてくれた、あのヒトのことを想うのも……………

「……いいや、それは違うな」

そんな気持ちはあつてはならない、あのヒトをそんな風に見てはならない。それが、

『あたりまえ普通』。観賞用、観賞用つと……………。

だけど何故だろう、妙に悲しかった。

その11

色んなヒトにお見舞いしてもらいながら、無事僕は退院。通学も問題なかったのでもま学校に……とはならなかった。いや学校行くには行っただけ、真夜中の学校……つまり、悪魔の時間ですよ。

呼び出されて向かったオカルト研究部の部室の引戸を開けると、いろんな意味で全員集合だった。

『無事で何よりですわ』と姫島先輩は胸をなでおろしていた。

『こんな無茶をするなんて意外だったよ』と木場クンは何処か呆れ顔だ。

『……………』と、無口な塔城サンは芋羊羹を差し出した（それお見舞いの品にあつた気がするぞ……………）。

『退院おめでとう、イツセー』と綺麗に微笑みつつも、部長はあの日から何処か影のある表情で僕と接してくる。

そして、何よりも僕を驚かせたのは……………

「あ、あの……………お久しぶり、ですう……………」

「……………いや、キミお見舞いに来てたからお久しぶりでもなんでもないじゃん」

「そ、そうですね、えへへ……」

照れたように笑う『元』シスターさんがいた。何故元シスターさんなのかって言うところ……シスターさんの背後から、『悪魔』の翼が生えていたから、だ。部長がいう提案とは、こういうことだったらしい。

……今、ものすごく頭が痛い。

だがそれを無視して聞くべきことと、言うべきことが、僕にはある。

「シスターさん、名前を教えてくださいませんか？」

「あ、はい！ 私はアーシア・アルジエントと言います。アーシアと、呼んでください」「ありがとうアーシア。僕の名前は兵藤一誠。親しいヤツはイツセーと呼ぶよ」

「では、イツセーさんと呼びます」

……なんだろう、この子の背後で尻尾がブンブン振れてるのが幻視できてしまう。嬉しかったのかな？ そうなら、まあ悪い気はしない。

「本当にありがとうアーシア。キミのお陰で、僕はまだ生きていられる」

「そ、そんな……私の方こそイツセーさんには」

「あ、それはもうお見舞いの時にめっちゃ聞いたからキャンセルで」

「も、もう！ いいじゃないですか！」

「ウケケケケ！ お互いに命の恩人ってことでいいじゃんかよ」

本音を言うと、その、恥ずかしいんだよ。美少女が面と向かってお礼言ってくるのか。まるでギャルゲーだね！ フラグ建てた気もするが残念、兵藤一誠は主人公ではなかった！

「……それで、これは、どういうことです、部長」

一転、僕の口からは自分自身でもビックリするぐらい冷たい声が漏れた。部長を尊敬してる気持ちも、恩を返したい気持ちも何一つ変わってない。だが、コレはどういうことだという憤りが漏れた声だった。

「私は、提案とメリットとデメリットを説いただけよ？」

また小悪魔モードですか部長、可愛いですけどそれ僕には通用しませんから。真面目に答えてください。というかそれ、おどけた返事をした僕への意趣返しだったりしますか？

「そんなに怒らないの。言った内容に嘘はないし、そうでもしないと、立場の問題もあって私にはアーシアを助けてあげることが出来なかったのよ。アーシアの力……いえ、セイクリッド・ギア神器は私としても見逃せないものだったし、私と、アーシアと、あなたの3人が納得するには、アーシアを悪魔にするしかなかった」

誓って無理強いはしてないわ、と言うが……あなた悪魔ですよ？ 弁は立つだろうし、無理強いはしてなくても思考誘導してませんか？ ……いやまあ、立場というのは

確かに考慮してなかった。そりやそうだよな、反省。むしろ（悪魔としての立場の中で）誠実に対応してくれたみたいだ。それとこれとは別な気もするけど！

「あ、あの、イツセーさん……」

「んん？ はいはいどつたのアーシア？」

「私のために怒ってくれるのは嬉しいのですが……悪魔にしてください、と言ったのは私なんです……」

ウソだろ……!? と言いたくなるが、マジである様だ。でも、あの敬虔そうなシスターさんがどうして……？

「……そうさせちゃった様な僕が言うのもアレなんだけどサ。本当に良かったの？」

「ええ、もちろん。神様には顔向けできませんし、まだ信仰を捨てることは難しいですけど……」

そう言つて表情を少し曇らせて……振り払うように綻ぶような笑顔へ変えて、彼女は言った。

「悪魔だったイツセーさんが、シスターだった私を、『それでも』と助けようとしてくれたように……私は『どうしても』、イツセーさんを助けたかったんです。後悔は、していません」

「……そう、だったの、ネ」

部長が若干僕に対して影のある表情で対応してくる理由が、臍気ながらわかったかも
しらん。

上手く言葉に出来ないが……なんかこれは、居た堪れない。

「と、言うわけで、アーシアはイツセーの家にホームステイすることになったわ。面倒を
見てくれるかしらイツセー？」

「……………へ？」

いやあの、え？ どうしよう、唐突なことに頭が上手く回らないんだけど、え？

「一応設定としては、留学生だったアーシアが、ホームステイ先で暴行を受けそうになっ
て、それをあなたが守ったということになってるの。そういう風に伝えたら、兵藤さん
たちが『是非とも私達のところで』と言ってくれたのよ」

「……………暗示は？」

「ちよつとしかしてないわ。人をお人好し程度にするぐらいの、ね？」

……………あ、そういうやなんか物置になってた部屋が片付いてたような気がしたけど、あれ
そういうことだったのか!?

「か、観賞用レベルと同じ屋根の下……………僕また殺されるんじゃないか……………？」

最近、僕の周りがえらいファンタジーになってる気がする。誰か助けてくれないか
な、切実に。

まあ、でも……………。

「? どうしたんですか、イツセーさん」

「いいや、悪いことばかりでもない気がしてね」

前に(苦)と付くだろうが僕も笑っていて、アーシアも笑ってる。なら、それが真実なんだろうと、この場では思うことにした。



「あ、そうそうイツセー。あなたのアルバイトの件なのだけど」

さあそれでは解散、みんなはお仕事で僕とアーシアはまた明日……………になる前に、部長がそんなことを言った。

「あ、はい。そう言えば、ここの所色々ありすぎて忘れてましたネ」

あと出来れば忘れたかつたとも言おう。ほら、なんか不穏な発言してらしたじゃないですかン我が主。将来はあんな胡散臭い感じの人になってみたい。あ、今でも充分ですか? そうですか!

「あのラーメン屋『九頭龍亭』、買い取ったから」

「……………」

そういうえば、昔はよく公園で変身ごっこもしたよね。仮面騎士は幼少期の僕達にとつてのヒーローだった。一番好きだったのは虫を模した仮面騎士。あの素早く動くのつて本当にかっこいい設定だと今でも思うんだ！

「イツセー、イツセー。現実に戻ってきなさい。遠い目をしているわ」

「……あつ、部長。ですよね、やっぱり仮面騎士は最高ですよね」

「もう一度言うわね、九頭龍亭は買い取ったから」

「畜生、現実逃避しきれなかった!!」

どうしてそうなったんだろう。正座させて小一時間問い詰めたい。

「どうもあなたのその腕前は腐らせるには惜しいものみたいだし、せつかくなら九頭龍亭での業務を私達の方で管理しようってことにしたのよ」

「ちよつと待ってください、いやマジで。話の流れ的に、僕の悪魔としての契約……」

「ラーメン提供専門ってことになるんですか？」

「もちろん、ずつとでは無いわ。将来的にオーナーになってもらうことを視野に、今までと同じように週三での勤務ね。それ以外の日は、他のみんなと同じように契約を取ってもらおうわ。ある意味下積みの延長線上みたいなものね」

「う、うそーん……？」

ほ、本気ですのん……？ あと確かに店長から任されて店の立ち上げ作業とかワンオ

ペとか新メニュー考案とか売上計算とか発注とか清掃とか後輩指導とかやれるけど！
……………あれ、なんだろう僕結構任されてない???

「あ、でもしばらくは九頭龍亭の方に顔を出してもらいたいのと、あなたにマニュアルの整理と再編してもらいたいわね。あの店の一番のベテランだった中村さんが『そういうことなら、イツセーくんに任せるといいですよ、彼そういうの得意ですし』と言ってたわ」

「まあ中村サンは店回すのは得意だけど後輩指導とか向いてないし……」

指導された僕が言うから間違いない。というか店行つたんですか、部長。

「ちなみに、元いた店長は……?」

「従業員の反乱にあつた、と言っておくわ。彼が雇われで本当に助かつたわ……」

あの店長雇われであんな無茶苦茶しとつたんかい……逆に尊敬するわ……。え、バラなかつた原因がアルバイトが変に頑張つて取り繕われてたから? そんなー。

「ちなみに新店長は?」

「イツセーよ」

「馬鹿じゃないの!?!」

主とかそんなものを抜きにして叫んでしまった。業務内容を完璧にこなせるだけで店長が務まるかい! あと僕高校生ですが!?

「あら、でも従業員の皆さんで投票したらイツセーが圧倒的だったわよ？　あなたがいからどこに票を入れても覆らないわ」

「アイツら僕が2年目突入したばかりのペーパーだってこと忘れてるんじゃないの؟!」

脳裏に浮かぶ戦友達の笑顔が憎たらしくて仕方がない。テメエらマジで覚えとけよ。

「もちろん、こちらから補佐となる人員は付けるし、経営の方も専門の方を招聘するつもりよ。あと、これは私がイツセーを店長として雇う契約だから、給料も……」

「……………?!」

「こしょこしょと耳元で具体的な金額を告げられる。……こ、これは大卒初任給程とは言わないが、数ヶ月で学費を充分に払える金額だ！

「新規の事業開拓として悪いものではないし、適材適所、使える人材をいつまでも遊ばせておく気はサラサラないの。さてイツセー、どうする?」

「乗ったア！　一生あなたに着いていきます主人リアス・グレモリー様!」

「ええ、ありがとうイツセー！　責任重大よ、頑張つてちょうだい!」

数十分後には勢いを乗せられて領いたことを、頭を抱えて後悔することになるうとは知らず、僕は陽気に喜んでいたのであった。いやあ、馬鹿だねえ……。

「よろこんでくれたかしら……?」



『……………』

『………今代の相棒は、どうやらいつもとは毛色が違うようだ』

『だが、まだ分からない』

『俺はお前を見定めよう、兵藤一誠』

『真実を知ってなお、俺を『可能性を掴む手』と言うのなら……』



CHAPTER 1: エントランス・オブ・ジ・アンダーワールド

T
h
e

E
n
d.
.

Sub CHAPTER 1: ウエルカム・トウ・アウト・レイジー

その1

「さてアーシア、準備は出来たかな？」

「はい、いつでも！」

今日は日曜日。神様だけじゃなくて悪魔も休んじやう日ですよ。なお人間は……うん。皆まで言うとかダメージ受けそうな人多そうよね。

いつもなら、朝っぱらから店に行つて立ち上げ、営業、閉め作業のフルコースがあるのだが色んな人に無理矢理休まされた。いやでも、僕曲がりなりにも店長ですよ？ マニュアルだつてまだ完成してないし。

『ブラック勤務をさせるつもりはないのだけど!?!』

とお怒りの部長オーナからの通達を受けてやむ無く。……まあ部長が連れてきた補佐の立山サンと経理の平野サンが優秀だったしいいか……。

なお今名前を挙げた2人は部長が悪魔として契約して雇つた方々らしい。理不尽な

リストラの憂き目にあい、『仕事欲しい』という願いとしてウチの店での業務を提供したのだとか。喜びに喜んで高校生の僕にまで頭下げ出すもんだから肝が冷えた。……いやあしかし、部長はこういうの上手いのではないだろうか？ よく分からんけど、人材を拾って活用するって点だと、うん。

とりあえずマニュアルの整理と最低限の追記事項は纏めたから、新人が一気に増えた状況でもなんとかなる……はず。中村サンと立山サンいてくれたらとりあえず店は回る。明日の発注に關しては客足次第だけど、月曜日だから金曜日程じゃないにしても多目……だけど天気予報だと明日は雨だからその0.8倍ぐらいか。平日は野菜大盛りが意外と出るから、モヤシとキャベツ、ニンジンが多めに……と、平野サンには伝えてあるけども。一応確認はしたいから18時の中間売上と材料ロスを送ってもらった上で判断しなきゃな……。

余談だが、僕の復帰は従業員並びに常連さんに大層喜ばれたことをここに記しておく。

……とまあ、とりあえず九頭龍亭のことはいいんだ。せつかく休みを貰えたので、どうせならアジアと交流を深めておこう！ ということにした。

アジアは留学生として、僕のいるクラスにやってきた。とは言え僕が暴漢相手に大立ち回りをして留学生を守ったって話は結構広まったので、騒がれたけどそこまで大

きくはならなかつたかな。あと悪友2人が『美少女と同じ屋根の下とか……どこでフラグを建てた、言えエ!』と叫んでたのが笑えた。おう二人とも、モブ顔が美少女とくつつくとか漫画の世界でしかねーから、と笑顔で言うとう肩を叩かれた。うん、その反応は逆に傷付くぞ。

んで、ホームステイ先の生徒つてこともあつて、学校での案内も僕が大半を受け持つことになり(女子しか行けない場所の案内は、友人と言つてもいい女子、桐生に任せることにした)、勉強やら何やらで、多分ここ最近で一番の接してるヒトになつたね。

夜間は、僕は店の方に顔を出し、彼女は僕の通つた道でもあるチラシ配りをしているらしい。大変だけれど、やり甲斐があります! と(うつすらとも見えない)力こぶを作つて言うアーシアは、まあ可愛かつた。

ただまあ……まだ慣れてないのか、それともトラウマがあるのか、朝アーシアを起こしに行くと若干目が腫れてたりするし、まだ日本のことについて知らないこともあるだろうから(そもそも世間知らずなところがあるから、それだけに留まらないかもしれない)、ガス抜きも兼ねて連れ出してあげようと思つた。

本当ならグレモリー眷属の女性陣の誰かに頼んだ方がいいと思つたんだけど、助けた責任もあるし、最初は僕が聞いた方がいいんだらうなあつてこと。

知らない人から見られたらどう見てもデートだが、そんな甘いだけのものではない。

いいね？

「晩御飯までには帰ってくるのよ二人ともー！」

「あいよー」

「わ、分かりましたお母さま！」

そう返して、意気揚々と玄関を出て……さて。

「じゃあ、服買いに行こうか」

「えっ、服ですか？」

だってキミ、ウチの学校の制服きてるじゃん。



学校とはそう遠くない所に、ショッピングモールがある。僕もよく雑貨や服を買うのでお世話になっていたりする。

「アーシアは此処に来たばかりなので、無いと困るものがまだ用意できてない事だと思
うんだ」

「いえ……机と、筆記用具があれば……」

「あまい、あまいよアーシア！ 凍らせたスポーツドリンクの一口目ぐらいあまい！」

そりや、シスター時代は質素儉約で暮らしてたのかもしれないよ。そうあるべきなんだろう。

でもニツポンの花のJKですよ？ 部屋をオシャレに飾るとか、メイクとか、服とか、色んなものがあるはずだ！

「まあ僕も詳しくは分からんから、それっぽいことしか言えないけど。でもこうやって雰囲気でもつかんでおけば、友達と出かけた時にスムーズだと思うぜ？」

『『友達』、ですか……』

まるで、届かないものを見る子供のような顔で、彼女は呟いた。……ううむ、これは地雷を踏んだかもしれないな。

だが僕はそんなこと気にしないぞ、ウケケケケ！ 畳み掛ける様にセリフを吐く。

「だからまあ僕は男だけど、今日は日本での友達1号と来てるってことで、大目に見てくれよん？」

「え、友達、1号………私の、ですか？」

「他に誰がいるんだよアーシア。いいかい、確かに友達はなろうと言ってる場合もあるが、そうでない場合もあるんだ。一緒に行動して、一緒に飯食って、一緒に遊んで、それが楽しかったらそいつは友達だよ、多分。少なくとも、僕の方はそう思ってたよ？」

「……あ、わ、私もですイッサーさん！」

「ん、よかったー！」

本当によかった、一方通行だったから少なくとも傷を負ってたところだったぜ……！
物理ダメージ換算で腹部に光の槍。あ、それももう即死じゃん！？

「そういえば、私の服を買うと言ってましたけど……私、そういうことも詳しくなくて……」

「ああ、そこはちよつと調べたんだ。基本的に決まった店で買うから久しぶりだったよ」
「……私、イツセーさんと同じ店の服でよかったのに」

「それは本当にオススメしない、うん」
基本的に僕はパーカーとジーンズ信者なので、アヴェクロの様などで充分なんだけど、母さん曰く『要らんとところに要らんワンポイントさえなければ……』と言ったので、何かしらまずいんだろう。なお今日の僕は半袖の少し大きめの赤パーカーとジーンズで、超無難に決めている。流石だね『異常な普通』、服装まで個性があまりない！
そんなことはまあいいんだ、いつまでもアジアが制服だと悪目立ちするし、早いところシヨツピング、だ！



……結局、無難な感じになってしまったなあと、白のワンピースに、紺のカーディガンを羽織ったアーシアを見て思う。履き替えたヒールに慣れてないのか、時折よろめく姿が不安である。

「すみません……こんなに買って貰っちゃって……」

「いーのいーの、お祝いみたいなものだよ。それに、バイトの給料跳ね上がってウツハウハだしね」

とはいえ、白ワンピースを来たアーシアの可愛さは、それはもう目が焼ける程だった。観賞用、此処に極まれり。店員さんも息を飲んでた辺り、僕の感性はそうおかしなものではなかったようだ。

しかしさつきから若干目立つような……まあ美少女とモブ顔歩いてたら目立つか。おいその僕を見て釣り合いが取れてないって言ったお前、安心してくれ荷物持ちだ！
「ところでお昼ご飯どうするよ？」

対シヨックで有名な腕時計を見て言う。気がつけば時刻は昼を過ぎて1時を回っている。結構服選びに時間かけてしまったな……。

「あ、それなら私、食べたいものがあるんですけど……」

「ほほう？」

「その……イツセイさんが作ってるっていう、ラーメンというものを……」

まさかのまさかの選ばれたのはラーメンでした。である。無難にファミレスカバーガーシヨップかなと思っていた所にそんな希望を言われて面食らってしまった。

「本当にいいの？ 言ってはなんだけど、結構な量で女の子には……」

「何事も経験なのです！」

ふんす！ と気合を入れる彼女に、仕方ないなあと苦笑して……じゃあどうしようかと頭を回す。

こつてり系やガツツリ系はNGだな。男ならともかく、女性がラーメンの入門としてそれらを食べるのは難易度高いと思う。じゃあ、無難に醤油ラーメンを出す店がいいな。

となると、とカバンからスマホを取り出して、ここのシヨップピングモールのフードコートには何があったかなーと検索して……ピンゴ！ 大手のチェーンである『峡楽苑』があることを確認する。

ここの醤油ラーメンはオーソドックスで美味しい。僕にはたまに味が濃いかなーつて気もするけど、まあ誤差みてーなもんです。

「じゃあ、此処にラーメンあるみたいだし、そこに行こうか」

「はいっ！」



「い、飲食店がこんなに密集して……!?!」

初めてのフードコートに、元シスター驚愕。まあ初めて見る人からすれば異様な光景に見えるよね。

「こういう形にしておく、食べたいものが同じにならなくても一緒に食べられるっていう利点があるわけだねえ。さ、まだお昼どきだから人もごった返している。イス取りをちゃんとしないと!」

とは言え運良くテーブル席に座り込めたので、貴重品だけ抜いてカバンと荷物を置いて、目的の『峽楽苑』へと向かう。

オーソドックスな醤油ラーメンと、餃子セットを注文。お金を払って、呼び出しベルを貰って席に戻る。

「イツセーさん、そのアイテムは?」

「アイテム言うほどのものじゃないよ。これは無線で料理が出来たのを教えてくれるベルだね。こいつがなかったら、取りに行くって感じ」

「さ、流石技術大国……!」

「いや、この程度のはどこにでもあるよ!?!」

……いや、呼び出しベルがあるかはわからんけど。でも余程のド田舎でもない限り……ああ、世俗と切り離されてたらそうなるか。

ラーメンだから、用意するのもそんなに掛からない。5分もすればベルが鳴り、テーブルの上に醤油ラーメンと餃子が並んだ。

「これがラーメン……」

「和風スープスパゲティとでも思えばいいのかな？ 味は醤油だけだ」

「確かに近いものがあるかもしれないですね、それでは……」

と言って、アジアが固まる。どうしたんだろう？ ……と思った時点で答えは出て行動は終わっているっ！ 客商売をナメるなよ！

「まだ箸が使えないと見た！ 丁度僕のカバンの中に使い捨てのプラスチックフォークあるけど、これ使う？」

「ありがとうございます！」

そう言つて、彼女は袋から出したフォークで、麵をクルクルと……うん、スープスパゲティみたいになって言ったのは僕だし。それに音を立てて食べるって言うのが通だと思ってる人もいれば、マナーに欠けた食べ方だと思ふ人もいる。食べやすいように食べる方がいい。

とはいえ若干苦戦してるようなので、助け舟を出そう。麺長いからスパゲティのよう

には行かないのよね。

「お嬢様、その食べ方ですと、こちらのレンジなるスプーンを使うとですね」

箸で麺を少量すくって蓮華に入れ、少しスープを入れてやると、プチラーメンっぽくなる。それを口元に持って行って……パクリ！ うん、上手い。

「なるほどー」

とアーシアも真似をして、フォークで適量を救ってレンジに乗せて、スープと一緒にパクリ。

「……お、美味しい、美味しいですー」

「ふふっ、それはよかった」

では僕も、今度はいつもの様にチュルチュルと頂きましょうかねっと。

……うちのと比べて麺の弾力がすげえな。あわでもウチがこの麺使うとイマイチだからどうしようもない。

あとこの焼き餃子、野菜も多めで美味しい美味い。人によるけど、僕は焼き餃子なら野菜多めで噛みごたえのある方が好きである。

「そういうえば、前はどんな食事だったの？ 食べ慣れてる味の方がいいってこともあるだろうし、ちゃんと母さんに言うんだよ？」

「いえ、お母さまの料理はとて美味いので全然気になってませんよ、大丈夫です。」

……そうですね、前はパンや薄味のスープなどが主でした」

やっぱり、そういう質素な感じのものになるのか。なまぐさの入らない精進料理とはまた別物だろうけど、贅沢ではないって所は同じかもね。

「つて、アーシア!? スープまで全部食べちゃったの!」

「お残しは『もったいない』つて聞いているので……。うう……。お腹いっぱいですう……。」
……先に言っておけばよかったね、イツセーくん反省。ともあれ、アーシアは文字通りラーメンに満足したようだった。



あの後も、ウインドウショッピングを楽しんだり、ゲーセンに寄って一緒に遊んだりして、十分に休日を満喫した。

二人してヘトヘトの帰り道を歩く中、この辺りかな……と僕は話を切り出すことにした。

「アーシア、今日は楽しかった?」

「はい、とても」

満面の笑みを浮かべる彼女に、さらに言葉をかける。

「辛さは、マシになった？ ほら……起こしにいったとき、泣いて腫れてたりしたから、サ……」

「あ、あはは……恥ずかしいところ、見られちゃってたんですね」

困ったような、少し泣きそうな、そんな笑みに変わった彼女の顔を見て、思い過ごしではなかったと、そう思った。

「でも、今はもう大丈夫です。……イツセイさん、もう少しお時間を頂いても、いいですか？」

日はまだ沈んでおらず、茜色の空。そして、通り過ぎるところだった、公園。……どうも、大事な場面ではよくこの公園と関わることになるらしかった。

公園のベンチに座り、彼女の話を聞く。語られたのは、『聖女』と祭り上げられた少女の末路。

創作ならよくある話だ。生まれてすぐ捨てられた少女が、治癒の力を持つ『神器』を発現させ、周りにあれよあれよと祭り上げられる。そしてたった一回、悪魔を癒してしまふことで、掌返しを喰らい、『魔女』の烙印を押されて追放。誰一人、助けてくれることはなかった。誰も、彼女の味方はいなかった。

ああ、創作ならよくある話だ。ただ残念なことに此処は現実であり、現実で聞くには胸糞悪いってレベルじゃない話だったこと。本当に、胸糞悪い。

「……きつと、私の祈りが足りなかったのだと、思いました。私、抜けてますから。これも、主の与えた試練なのだ、自分を騙していたんです。そうやって目を逸らして、我慢してたんです」

「……アーシア」

「だから私、あの時イツセーさんに救われたんです。シスターでしたから、敵だったのに、それでも助けてくれようとしたイツセーさんに、救われたんです」

「そうだったのか……とその言葉を咀嚼する。確かに色々考えたけど、深く考えた発言ではなかったから、若干の申し訳なさを覚えた。」

「私、夢だったんですよ。こうしてお友達と一緒に出かけ、おしゃべりして、買い物して……。今、とても幸せです。今までの我慢はこのためにあつたんだと思える程に」

「だから、とアーシアは一筋の涙を零しながら、言った。」

「ありがとうございます、イツセーさん」

「……………つたく」

「そう言つて、カバンからタオル地のハンカチを取り出して、涙を少し乱暴に拭つてやる。まさに友達といった気安さで。」

「泣くんじゃあない。幸せなら、この世の春を謳歌してる様な顔で笑うんだ。この国のことわざにも、『笑う門には福来る』ってあるくらいだ」

「え、えへへ……そうですね。でも、まだどこか夢の様で……」

「夢じゃ無くなるように頑張れ。僕も、友達として付き合っただけだから」
「はいっ！」

そう返事した彼女の表情に、もう影は残っていなかった。

その2

新体制となつて、九頭龍亭は凄く働きやすくなつた。まあそれは単純に人手が増えたことで過酷なシフトがなくなつたのと、発注などの重要な業務を行える人が増えたことが大きい。あ、前も後ろも結局人が増えたからつてことで説明がつかない。

「というわけで昨日の売上はこのようになっていきます店長」

「……………ふんふん、平日なのに結構行きましたね。ここ、不自然に売上が伸びてる時間帯は、もしかして団体客でも来りましたか？」

「何やら魔法少女のコスプレをした団体様が。カウンター席とテーブル席を全て埋めたのでてんやわんやでした……………」

「あ……………それ先に言つておいた方がよかつたかもですね。この時期、近くで魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブのイベントやるんですよ。そのときのレイヤーさん達がよく此処に立ち寄つてくれるんです」

しかし変だな……………いつもはテーブル席埋まる程度で済むんだけど……………。

「実は……………どう見ても屈強な漢！ って感じのレイヤーさんも沢山います……………」

「…………………………」

ミルたんか、それともミルたんみたいな方々がまだまだいたのか。まあとりあえず、いろんな意味でお疲れ様だと言いたい。

「……中村さんは凄いですね。あの状況でも狼狽えることなくラーメンを提供していたのですから」

「いやあ、立山サンはまだ研修中みたいなどころあるから、団体様の捌き方を知らなくても無理無いですよ。今やつてもらいたいのは、きちんとレシピ通りに、丁寧にラーメンを作ってもらうことに尽きます」

「はい、分かりました店長」

「……別に畏まらなくてもいいですよ？ 僕高校生でお飾りですし」

この、忠誠心みたいなのは本当になんなんだろうか……？

「ウチのオーナーが、徐々に展開していくつもりらしくて、中村サンと立山サンは新店舗の店長候補なんです。だから……店長扱いするにしても、同列ぐらいで大丈夫ですよ？」

「ですが……」

『5名様御来店です、いらっしやいませー！』

おっと、今厨房にいる新人達には難しいかもしれない人数だ。

「行きましようか。僕はホールの方行くんで、厨房のヘルプお願いします」

「分かりました」

さあて、厨房でなくとも忙しいぞう！ テーブル拭いたり、お冷のピッチャー、グラスは足りてるかの確認も必要だ。調味料で置いてる一味と胡椒、カレー粉もちやんと確認しないとなー。

意気揚々と、バックヤードから戦場へと繰り出し……僕と立山サンは思わず固まった。

「ぶ、部長!? それにみんな!?」

「お、おお、お、オーナー!」

なんと、オカルト研究部全員集合だった！ え、今部活中だったのではあなた達？

「はあい、イツセー。繁盛してるかしら？」

「あらあら、その格好のイツセーくんは新鮮ですわね」

「あはは……ちよつと、みんなでお邪魔しようって話になって」

「……どうも」

「な、なんというか、イツセーさんが職人さんに見えます……!」

上から部長、姫島先輩、木場クン、塔城サン、アーシア。なんだろう、抜き打ち監査みたいで胃が痛てえ……。

というか、そりゃこの格好は珍しいでしょうよ。頭に黒タオル巻いて、灰色の生地

『九頭龍亭』と赤で印字されたユニフォームのTシャツ、紺の前掛けに長靴ですし。

「あ、あの店長？」

厨房の西条クンがオロオロしてる新人代表として僕に声を掛ける。うーん……他にお客さんいないし。

「あー……キミたち3人はバックヤードで25分ぐらい休んでください。タイムカードは切らずにお願いします。立山サンはごめん、ホール整備お願いします」

「「分かりました」」

「はい、ということは」

ええ、そうです。そういうことです……………。

「……………この場合、僕が作るのが筋でしょうしねえ」

そう言つて、厨房に設置されてる水道で手洗い、アルコール消毒して、紙ナプキンでちゃんと拭く。

「では、食券をお預かりします。麺の硬さや味の濃さ、脂の量のご希望はございますか？」

「じゃあ、私はそのままのを貰おうかしら？」

「私も同じく」

「じゃあ僕は麺硬めの味濃いめで」

「……前と同じものを」

「お、おまかせで」

「かしこまりました、少々お待ちください！」

さあて、腕がなるぞオ……！



今回は全員ストレート麺での注文だ。今日の気温と湿度的に、麺のゆで時間は2分50秒が基準。固めでマイナス30秒つてところか……よし。

まず、いつもの様にコンロに火を入れて中華鍋に油を敷き、温まったら5人前の野菜を突っ込む。

それが終わったらストレート麺を5玉突っ込む。タイマーは2分50秒と2分20秒でスタート。

ソーサーと丼を用意して、それぞれに背脂とかえしを入れていく。

部長と姫島先輩のはそれぞれのレードル（小さいお玉みたいなの）で1杯ずつ。

木場クンのはかえし増しになるからもう少し多目に入れる。

塔城サンのは僕のに合わせたのだったから背脂抜きだ、かえしだけ入れる。

アーシアのは……かえし1杯と、背脂をレードルで半分ぐらいかな。

丼の量が量なので交互にゆで麵機の上に置くしかないな。先に木場クンと塔城サンのを置く。

さて中華鍋の方に戻って鍋を煽る。……うん、片面はいい感じに火が通ってるな。

またゆで麵機の前に移動、温まった丼をソーサーの上に置き、残りの3つを乗つける。

野菜が焼き上がりそうだと、皿に避けて胡椒などを振って味付け、鍋にチャーシュー漬けるのに使ってる秘伝のタレを引いてそこに焼けた野菜を再投下。よく混ぜるように煽って煽って煽りまくって完成。また皿に戻す。

2分20秒のタイマーがあと10秒で鳴りそうだと、乗っかっている丼を全てソーサーの上に置き、スープ用のおたまで寸胴から木場クンと塔城サンの丼に注ぐ。

タイマーが鳴った、テボを2つ上げ……一気に振り下ろす！

『おお……お』

と感嘆の声がカウンターから聞こえるが、基本技能ですよコレは、新人クンたちでもできる。

そして麺を丼に入れ、トングで解すように返し、皿に乗つけた野菜を適量盛ってチャーシューを1枚！

「お待たせしました！ お先こちらが濃いめ固めです！ こちらが背脂抜きです！ 残

りのお客様、少々お待ちください！」

と提供してる間にまた残り10秒だ。また寸胴からスープを注ぎ、タイマーがなったら、テボを上げて湯切りをする。麺を入れてトングで返し、野菜を盛り付けてチャーシュー1枚。

「お待たせしました、こちらが醤油ラーメンですねー」

と同時に部長と姫島先輩の前に置き、

「こちらが背脂少なめでございます。ごゆっくりどうぞ！」

あとは、中華鍋を水でゆすいで一連の流れは終了っ！ うーむ、我ながら手際良くやれたな。で、

「……………どうでした？」

『『『どう見てもプロ』』』

「そりゃ、ユニフォーム着てお客様の前に立てば新人だろうがなんだろうがプロですよ」
前店長に教わったうちで数少ない納得したお言葉である。

制服を着てお客様の前に立てば、彼らから見れば等しくプロなんだ、だからその振る舞いに責任を持って……………というのは本当にその通りだと思う。

「さっ、冷めて伸びると美味しくないなので食べて下さいよ」

しばらくの間、僕はみんなが食べるのを見てニコニコしていた（但し寸胴は焦げ付か

ないように混ぜつつ)。

概ね満足して帰っていったようなので、僕としては安心だ。胸をなでおろしたって感じだった。

とりあえず、新人クン達にはちゃんと伝えておかないといけないね……『あの赤い髪の高校生は、この店のオーナーだから、気を付けて対応すること』って。



一応余程のことがなければ、最近の僕は12時には上がる。店を11時に閉めて清掃と締め作業、明日の仕込みをしているとその位の時間になるのだ。一人でやると……2時間はかかる。

法律違反に関しては、僕が悪魔なので特例を認めさせてる様だ。夜間働くことはあまり宜しくないのだけど、ぶつちやけ悪魔の契約業務のことを考えると今更感が強い。むしろ他の皆よりも早く帰れるまでである。まあ、それでも清掃が終わった時点でバイトの皆には帰ってもらうので、最後なのは間違いない。

「ふんふん、今日も悪くないですね。人件費は増えましたけど、これならプラス収支です」

チュルチュルと、メニユーにない汁なしラーメンを啜りながら確認する。なお汁なしなのは洗い物の手間と、作り置きでも十分美味しいからだ。

「平野曰く、仕入先の見直しをすればもう少し原価を下げられるかもしれない、ということですよ」

同じく隣でチュルチュルと汁なしラーメンを啜る立山サン。あ、美味しい？ これ、新メニユーで出してもいいかもね。

「その辺は、本っ当に分かんないから丸投げするしかないっすね……あ、でも麺だけは慎重にやってももらわないと、ですねえ」

カレー粉を手にとって少し掛ける。ラーメンに入れてもだけど、意外と合うんだよなあ……カレー粉たっかいけど。

「店長、100円出すのでチーズ掛けてもいいですか？」

「お、いいですよ。……なるほど、粉チーズは盲点だった」

じゃあ僕はチーズに加えてコーンも入れてやれ。もちろん、ちゃんとお金を払って、だけど。

なお、粉チーズにコーン、あとバターはウチでも人気のトッピングである。かえしの代わりに味噌を使う味噌ラーメンだと、よく一緒に頼まれるんだなあコレ。

「しかし、今日のオーナー達の反応から、やはり女性客にはウチのラーメンはキツイみた

いですね」

「あー、美味しいのと胃にきついのは別ですからねえ……」

と、ここでトッピングが追加された汁なしラーメンを見る。

いや、汁なしラーメンをすぐ追加するわけではないけど、トッピングてんこ盛りラーメンは、見栄え的に女性ウケしそうだなあつて。もちろん綺麗に盛ることが前提だけど。

「……麺半分で、スープの量を少し減らして、トッピングをいっぱい載せたものを、一杯分に近い値段で提供するって案はどうでしょう？」

「背脂の量も減らさないと、それでもきついように思いますが……でも、悪くないと思います」

「今度中村サンと平野サン、あと張サン集めて試食会かな。それで美味ければ、バイトの皆にも試食してもらって。……一応完全に任せられてるけど、部長にも話しておかないと」

「そうですね」

あれやこれやと議論を交わしながら、試作のメニューを考え、ノートに纏めていく。あんまり学生らしくないけれど、とても楽しい時間になった。

その3

「というわけで、座学の時間よ」

「はい、部長！」

時は放課後、場所はオカルト研究部、ホワイトボードを前に部長がいつかのよう
に伊達メガネと指示棒を装備した状態で立ち、新人である僕とアーシアはノートを広げて机
に着く。……なんというか、松田の持ってたエロ本に出てくるエロ教師みたいなナリを
してるな、眼福眼福。

「……イツセー？」

「なんです？」

「いえ……何故か不埒な視線を向けられた気がして」

……やっぱり女性って勘が凄いやね。もう余計なこと考えないようにしよつと。
「いや、相変わらず素敵性能高いなあつて」

「素敵性能……？」

「ああ、正しい日本語じゃないから覚えてくれるなよアーシア。単に見た目がいい、綺
麗、ロマンがある、とかいうことを遠回しに表現してるだけだから」

なお嘘はついてないんで、部長はそのメガネの奥のジト目をやめてくださいよ。

「どうしてなのかしらね、あなたに綺麗だとか言われても、全く褒められてる気がしないのは……」

「褒めてますよ？　ただ美貌に誑かされないように予防線張ってるだけです。やったね部長、ハニトラ対策は万全ですよ！」

「イツセーの場合誑かす云々の前に対象外って気もするけれど……まあいいわ」

とりあえずこれ以上追求する意味は薄いと思っただけ、呆れたようにため息をついて、彼女は黒マーカ―を手を取った。

「基本的な話はしたから、今日は主となる悪魔が下僕悪魔に与える特性の説明をしようと思うわ」

「特性、ですか」

「あ、それ僕のことを『兵士』^{ポーン}って言ったアレですよね」

そう言うのと部長は頷いて、黒マーカ―の蓋をあけ……

「えいつ」

「!？」

あ……ありのまま今起こった事を話すよ！

『部長がマーカ―で何かを描き始めたと思っただけ、いつの間にかチェスの駒の絵が描き

終わっていた』

！
な、何を言っているのかわからないと思うが、僕も何をしているのか分からなかった

頭がどうにかなりそうだった…催眠術とか超スピードとか、そんな手品じゃ断じてない……もつと恐ろしいものの片鱗を味わったよ……！

「い、今どうやって……?!」

「全く動きが見えませんでした……！」

「慣れの賜物ね」

……インク飛ばして描いたとかじゃなくて良かったー。

「さて、大昔に我々悪魔と、堕天使、天使の三陣営で戦争をした……というのは覚えてるかしら？」

「はい……確か、勝利者が無いまま終わったとか」

アーシアがそう答える。えっと、数百年前に終わったんだって話だよな。

「勿論、悪魔も大打撃を受けたわ。軍団を率いて戦った約三十ぐらいの爵位を持つ悪魔が亡くなり、戦線が維持出来ないほどに」

「え、それだいたい半分ぐらいの悪魔が消えたってことになりませんか？ ほら、確かゴ

エティアの悪魔って72柱って聞いたことが……」

「あら、まだその辺を教えてないのだけれど、博識ね？」

いやあ、最近は悪魔をモチーフにしたゲームとかもあるから覚えたと感じなんですよねえ……。

「純粹な悪魔はその時に多く亡くなつた。しかし戦争が終わつたところで睨み合いという冷戦は続いている。神の勢力も、墮天使の勢力も等しく被害を被つたとはいえ、隙は見せられないわ。そこで、悪魔は個体数を増やすことにした。ここまでは分かるわね？」

「はい、部長」

この説明は、初めて部室に来た時もうつつら説明されたので覚えている。

「そこで悪魔は、あるアイテムを開発し、それを使って個体を増やせるようにした。それが、『イヴイル・ヒース悪魔の駒』」

そう言つて部長はホワイトボードに描かれた絵を指さして言う。種類がそれぞれ……これ、チエス？

『『悪魔の駒』……』

「……なるほど、だから」

僕は噛み締めるようにその名を呟き、アーシアは納得の色をその言葉にのせた。多分、アーシアはその実物を見たんだろう。

『悪魔の駒』は、その特性を人間界のボードゲームである『チェス』に似せて作られたわ、悪魔に転生する大半が人間ということもあってね」

「わかりやすい、または受け入れやすい?」

「だいたいその辺ね」

なるほど。となるとこの制度は『チェス』というゲームが形になってからの話になるということか。

チェスの起源（実は将棋も）は、古代インドの『チャトランガ』というゲームだと言われている。それが徐々に形を変えて国へ国へと伝わっていく。それが『チェス』となった……。だいたい今のルールに近くなつたのは15世紀末つぽいので、500年前ぐらいの発明つてことになるのかな。

「……変なところで本当に博識よね、イツセー」

「いやあ、こういうボードゲームは得意なのでその一環ですよ。相手がコンピューターでもない限り、定石を覚えて早指ししてコツコツと嫌がらせしてやれば勝てますし！」

「単なる盤外戦術じゃないの……」

なお精神的に強い人とその道のプロには勿論勝てるわけもない。あくまで普通の範囲で、強いつてことです。

でも、相手の嫌がることをするのは、どんなゲームに於いても必須の技能だと思っ
ている。あんまりやり過ぎると友達無くすけどな。トレーディングカードゲームでハン
デス（手札を捨てさせること）もデッキ破壊もやり過ぎると殴り合いになるからネ！
ウケケケケケ！

『『悪魔の駒』は15個のセットで下僕を持つ資格を持った悪魔……つまり上級悪魔に渡
されるわ』

「チエスで15個ですと、『王』^{キング}以外の駒ということでしょうか？」

「そうよアーシア。なぜなら『王』は、主である悪魔……私たちの間で言うなら私のこと
だから。必要ないでしょう？」

まあ、だよね。

「説明するまでもないことかもしれないけれど、一応しておくわね。特性は5つ……
『女王』^{クイーン}が1つ、『騎士』^{ナイト}『戦車』^{ルーク}『僧侶』^{ビショップ}が2つずつ、『兵士』^{ポーン}が8つ。軍団を持てなくなっ
た代わりに、下僕に強大な力を与えることで少数精鋭の軍団を、率いることにしたつて
わけ」

……『兵士』が強力とは思えないのだけど、とりあえず後にして話を聞いておこう。

「そして、この制度が意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよ」

「そうなんですか？」

「ええ。自分の下僕を他者の下僕と競わせるようになったの。『私の騎士は強いわ!』
『僕の女王に勝てる者はいない!』と言ったようにね。その結果、チエスのように実際の
ゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったわ。私達はそれを『レーティ
ングゲーム』と呼んでいる」

「なんつー贅沢なチエスだ……。というか、それ無理矢理強い下僕悪魔を揃えようと、
『やってはいけないこと』しようとする悪魔が出てくるんじゃないですか? だって、
『悪魔』ですし」

「……社会問題になってるわね。このゲームが悪魔の間で大流行。大会も開催され、駒
の強さ、ゲームの強さが地位や爵位に直結する。『駒集め』と称して優秀な人間を手駒に
するのは良くも悪くも流行してるわ」

「……将来的にそのゲームに駆り出されるのに否はない。けど、被害者をぶん殴るのは
覚悟が鈍りそうだ。」

「あのう……部長さんは、そのゲームをしたことはあるんですか?」

「いえ、私はまだ成熟した悪魔ではないからしたことはないわね。公式な大会に参加す
るには色んな条件をクリアしなければならぬし、非公式のゲームも……」

と、そこで言い淀む部長。

「……部長さん?」

「大方、家同士のトラブルを解決するための手段といったところですか？」

「そんなところかな、と思つて冗談交じりで言つてみると、部長の顔が強ばつた。おいおいマジかよ……。」

「…そういうこと。そういつたことも含めて、私と私の眷属達はレーティングゲーム未経験よ」

「とりあえず、思つたより悪魔は人間に近いけど、やっぱり闇も感じられて怖いなー、な
んで思う。いずれは慣れないとねえ……それが悪魔にとつての『普通』あたりまえだろうし。」

「ではそれぞれの駒の適性を説明するわね。では、イツセー。あなたの駒である『兵士』
は、まあ他の駒と較べて基本的な能力は劣つてるわ」

「ああ、やつぱり」

「胸を撫で下ろす。だよね、モブキャラが騎士とか女王とかじゃなくて良かったよイエ
イ！」

「嬉しそうな顔をしてる所悪いのだけど、『兵士』には他の駒にはない特殊な能力がある
わ」

「実際のチェスで考えると……『プロモーション』ですか？ 相手の陣地に突つ込んだ時
に『王』以外の駒に成れるルール……」

「その通り。レーティングゲームでなら敵の拠点、通常時でなら私が『敵の陣地』と認め

た場所の、1番重要な場所に足を踏み入れたとき、他の駒の特性を獲得できるわ。『可能性』という点では他の駒以上よ」

「なるほど……」

それは素直に便利だと言えた。完全にあてにするわけにはいかないが、それでもいざと言う時に使える可能性が高いというわけだ。……あれ、これ地味にレーティングゲームでも重要な役割だったりするんでは？ 今は気にしないようにしましょう。

「次に、アーシア」

「は、はいっ！」

「あなたの『僧侶』は、眷属の悪魔をフォロワーする能力を持つているわ。具体的には、魔力の底上げ、魔力の操作技能の向上などね。あなたの神器『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』のこともあつたし、あなたは僧侶が適任だと思つたわ」

「が、がんばります！」

確かに、アーシアは僧侶だよ。シスターだったことも考えると、ハマリ役と言えよう。

「次は『ナイト騎士』。ウチだと祐斗がそうね。特性はスピード。『騎士』となつた者は速度が増すのよ」

「なるほど、他の駒を飛び越えられるナイトらしい挙動つてわけですね」

イケメンは、駒もイケメンだったということか。うらやましいー（棒）。

「あとは『戦車^{ルック}』。ウチだと小猫がそうよ。『戦車』の特性は、怪力と堅牢な防御力」

「あ、そう言えば小猫ちゃんがこの間車を持ち上げていたのを見ました」

「アーシアの言葉にぎよつとする。ロリでマスコットで怪力とか、キャラ盛り込みすぎかよ。」

「最後に『女王^{クイーン}』。悪魔の駒の中では最強の駒よ。ウチだと朱乃が女王ね。駒の特性は、他の駒の特性を全て兼ね備えているというところね」

「つまり、ウチの眷属最強は姫島先輩ということつすか……」

「ううん、一応その筈なのだけれど……」

「と言って、部長は意味深に僕を見る。な、なんだよう？」

「ざっくりとした基準になるのだけど、『女王』の駒価値は9、『兵士』の駒価値は1、とされているわ」

「確か、実際のチェスもそんな感じだったと……」

「普通に天と地の差があるじゃないですか……でも、話には続きがあるようだった。」

「あなたは覚えてるかしらイツセー？ 私が、あなたを『私の唯一の兵士』って言ったことを」

「言ってましたね。つまり、名誉ある一人目の兵隊アリなのかなあと」

「間違つてないけれど、それが全てではないわ。実はねイツセー……」

とここで扉が開く音がした。その方向に身体を向けると、姫島先輩が若干困ったニコニコ顔を披露していた。

「お勉強の途中、申し訳ありません。部長、討伐の依頼が大公から届きました」

「ふむ……丁度いいわね。夜の契約業務の指揮はあなたに一任するわ、朱乃」

「承知しました。部長は？」

その問いに部長は僕に一度視線をやってから、こう答えた。

「今回は、イツセーの力を見せてもらうことにするわ。私はその監督ね。アーシアには……まだ早そうだから、次回ってことで」

………何やら、雲行きが怪しくなってきたぞう？



『はぐれ悪魔』、そういう存在がいる。

爵位持ちの悪魔に下僕として転生した者が、主を裏切ったり、主君殺しをするなどして、宙ぶらりんになったならず者悪魔のことを指すらしい。

悪魔の力は強大だ、僕もその恩恵を受けてるからそれがよく分かる。そして、その

力を欲望の赴くままに使いたいという連中もいる。

あるいは、無理矢理に悪魔にさせられて、それから逃げるために主を殺す、または去るって連中もいる。

はぐれ悪魔は危険だ、安全装置のついてない銃器に等しい。故にはぐれ悪魔の元主人や、他の悪魔が消滅させることになっている。悪魔だけじゃなく、天使側、墮天使側もはぐれ悪魔を見つけたら、即殺不可避なんだって。……もしかして、スーツの墮天使に殺気ぶつけられたのって、はぐれと勘違いされたからなのでは……？ セーフ、セーフ

！
……さて、ここまでの話から、『討伐』というのが、はぐれ悪魔の討伐というのが分かるわけなのだが。

「……素人の僕で、なんとかなるものなんですかねえ？」

「少なくとも自分より遥かに強い墮天使を倒せるのだから、素養はあるのだと思うわ。それに、倒すことに拘らなくてもいいのよ。今回の目的は、これからの課題を確認したい、というのが大きいもの。恐らく、最終的に私が一撃で吹き飛ばすことになると思うわ」

「お、お強いんですね、部長」

「ええ、才能には恵まれてる自覚はあるわ」

ちよっと自慢げに胸を張る部長、なんかようやくと歳相応の面が見れて可愛いって印象だ。でも、それをこの殺気ビンビンの環境で見たくはなかったかな！

現在僕と部長は、町外れにある廃屋近くにいた。辺りが草木で生い茂って視覚が確保しづらく、精神的な恐怖を助長するロケーションだ。

今回の依頼は、人を喰うはぐれ悪魔が部長の活動拠点でもあるここに逃げ込んだから、その始末をしてくれ、というものだった。

「ああ、そうそうイッサー。あなたにとっては敵地も当然だから、プロモーションの許可を出しておくわ。慣れないうちはあまりオススメできないのだけど、どうしてもって場合は遠慮なく使うといいわ。でも、『女王』へのプロモーションは、身体への負担が大きいかから注意して」

「了解です」

と、ここでようやく警鐘が鳴った。珍しいね、殺気ビンビンだったのにまだ鳴ってなかったよ。つまり墮天使よりは面倒な相手ではないということか、やったぜ。

「不味そうな匂いがするぞ？　でも美味そうな匂いもするぞ？　甘いのかな？　苦いのかな？」

腹の底に響くような、ひっくい声音。不気味さだけなら過去一番だ。

「はぐれ悪魔バイサー。あなたを消滅しにきたわ」

部長は、まるで確定した未来を告げるように言った。表情を見るに、それは自惚れでもなんでもないらしい、自分の才能から裏打ちされた自負だ。

とりあえず、このケタケタって笑い声ほんつと怖いんですけど、本当に僕やれるのかな？

とここで暗がりからぬうってナニカが姿を表した。

最初は、裸の女性の上半身。そして重い足音と共に見えてきたのは、獣の身体。ケンタウロス系かな？ でも尻尾とか蛇っぽいし、脚めつちや太い。爪も見てわかるほど鋭そう。

総評：バケモノ。自分の警鐘信じないわけじゃないけど、ぜってえ強いだろこれエ!? 「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れ回るその暴挙、万死に値する！ グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる！」

「そろりそろり」『Boost!』

「ござかしいいいい！ 小娘ごときがああ！ その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げて……グギャアア!？」

「えっ?」

怖いので、名乗りの最中に忍び足で駆け寄って、龍の手を装備した左腕で敵の右前脚に貫手どーん！ 例によって例の如く、貫通力と、あと腕力と脚力を倍にした。

『Boost!!』

『龍の手』は、使うと自分の力が倍になるが、文字通り全て倍化しちゃうので、維持が大変難しい。

故に僕はちよつと訓練をすることで、倍にする力を選択できるようにした。その感覚は元カノ墮天使を斃す際に使ったので身体が覚えていたから、修得自体は実にスムーズだった。

とりあえず骨まで貫通、左腕を骨肉が更に傷付くように抜き、骨を折った。バランスを崩した……えーつと、そうそう。はぐれ悪魔のバイサーさんは、痛みに絶叫しながら横に倒れた。

「敵の前でくつちやべるとか、舐めてますのん? いや、舐めてくれたお陰で脚一本奪えたようなものですけど、ネツ!」

『Boost!!』

「ぎやあああああああああ!」

強化項目を変更、『脚力』と『重量』。倒れたので僕でも攻撃できる位置に来てくれた。ありがたーく、その武器を持った危ない両腕を踏み抜く。ぐちゃり、と肉と骨が潰れる音がした。

「うん、確かに墮天使よりはやりやすかったのかな」

『Boost!!』

……にしてもこれ、うるさいなあ。音がなる度に力が増していくのはいいんだけど。自己訓練してる間に変な機能ついちゃったな。

「さて、はぐれ悪魔サン？ 辞世の句でもよんでみては？」

「殺せ」

では遠慮なく、と強化項目を『腕力』と『握力』に変更。首を掴んで、握り潰した。生首が転がる……うえっ、殺し方考えれば良かった。

とりあえずコレで終了。まあ汚かったけど外道相手に配慮する必要もないでしょ、と部長の方に振り返ると、表情が凍り付いていた。

「イツセー……その神器、よく見せてちょうだい」

「いいですけど……」

1度戻した『龍の手』を、もう一度展開する。そう言えば、壊れた玩具みたいになってスト！ って叫ぶようになってから、翠の宝玉に赤い龍のマーク浮かぶようになったよな。もしかして、故障？

「……そう、そういうことなのね。1個の『兵士』で転生できず、全ての駒を使って転生させなければならなかった理由は」

「……………えっ？」

CHAPTER 2：バーニング・アツプ・ユア《マイ》 ハート

その1

暗い暗い夢の中……いや、ここはそもそも夢の中なのか？ 身体は休眠状態でも、今
見ているのは恐らく違う。

『ようやつと、俺の声が届いた様だな』

眼前にいるのは、赤い赤い、ドラゴン。

『お前の心が拒んでいた。お前が真実から目を逸らしていた。故に俺の声は届かなかつた。しかし、お前は目覚めさせた。そして認識した、この俺を』

「……なるほど、アンタが『赤き龍ウエルシュドラゴンの帝王』ア・ドライグ・ゴツホ。ブリテンの守護龍」
『妙なところで博識だな、今代の相棒は』

知ってる人は、知ってると思うけどね。

「僕は、アンタにお願いがあって、ここに来た。一か八かだったけど、ここに來れた。受け入れてくれたことに、まずは礼を。ありがとう、ア・ドライグ・ゴツホ」

『礼などいらん、呼び方も『ドライグ』でいい』

「それは、僕がアンタの言うところの『相棒』というヤツだからか？　なら、余計に初めでは気を使うぞ。コレから多分、僕は長くアンタの世話になる。そしてアンタは意思ある何某だ。親しき間にも礼がいるんだ、初対面の相手に尽くさない道理はない」

『……真面目な男だ』

そりゃあ、真面目が数少ない取り柄ですからネ。

『それで、お前は俺に何を望む。力か？』

「偽装」

『……何？』

「偽装。このままだと僕死んじやうって」

赤い龍が、少し狼狽えたような表情をした……気がする。だってほら、僕ドラゴンの表情とかさすがに分からんよ。

「サラツと聞いたよ。よく分からないけど、僕はいずれ訪れる宿敵と殺し合わないといけないんだって。それは仕方がない。本音を言うとすっげえめんどくせえし、もつと言うとこの神器を投げ捨てたい。でも、僕はこの神器の恩恵を受けた。僕になかった『可能性』を掴む手になってくれた。だから……少し愛着が湧いた、受け入れようって気になった。問題は、今のままだとさっくり死んでしまうという事なんだよ」

僕は、弱い。それは、墮天使との死闘で分かったことだ。

「アレは、中級の墮天使なんだって後で聞いた。そしてこの神器は神をも超えられる力を秘めた神殺しの道具で、対になる宿敵の神器もそうなんだって。つまり、あの程度で手こずってる様では、僕は然るべき時に生き残れない。それは非常に困るし、恐らくライバルに負けるのはアンタも嫌だろう？」

『故に、偽装……ということか？』

そういうこと、と言つて僕は頭を搔く。

「力を付けるまで、僕は『赤龍帝』であることを隠す。そして時間を稼いで、死なないように気張る。アンタにお願いしたいのは、偽装することの許可と、その手伝いだ」

『それは俺の許可がいるものなのか？』

「ドラゴンはプライドの生き物だと聞いた。誇るべき名を隠すことは、プライドを傷付けることになるかもしれない、と思つた」

『……つくづく真面目だな。いいだろう、構わん。所有者が悪魔になることは稀に見る例外だった。それに、もう一つ例外を重ねようと、大差はない』

「ありがたい。感謝する、ドライグ」

『共に戦うことになる相棒が礼を尽くしているのだ、それに応えねば、それはそれで俺のプライドが許さん』

だが、と赤いドラゴンは口の端から炎を漏らして言う。

『俺に『名を隠せ』と言った意味を忘れるな、兵藤一誠』

「ああ、分かっている。どんな時でも諦めずに、『可能性』を掴む為に足掻くことを、僕のプライドに掛けて誓おう」

『いいだろう、今はそれで、いい』

「どことなく機嫌が良さげな笑い声を聴きながら、意識が遠くなっていき……目が覚める。」

「……………物分りのいいドラゴンでよかった」

神器を展開する。その宝玉から、赤き龍の紋章は消えていた。

「しばらくの間は、この神器を亜種の『龍の手』という扱いにする。名前は……そうだな」
トウワイス・クリティカル・プレイヤー
 『決 殺 の 手』とでもしておこうか。



『いいですか部長、これは厄ネタです！ これはこれ以上ない厄ネタです！ バラしてはいけない……バラしたら狙われる……！』

『え、ええそうね』

『僕は何とか隠せる様に交渉します！　だから部長も、眷属と信頼できる上役以外には絶対に漏らさないでください……！　これは下手をすれば、部長達も巻き込みかねない爆弾なんです……！』

『わ、分かったわ』

といった話をしたはぐれ討伐から少し経った。

……いやだってさあ、ライバルにあたるドラゴンが封じられた神器の所有者と殺し合う運命にあるとか、アホみたいに強いドラゴンなんだとか、歴代所有者の末路とか聞いてるともう嫌な予感しかしないよ。でも無視し続けるワケにもいかないじゃん！　神器って剥がすと死ぬんでしょ！　じゃあ受け入れなきゃダメじゃん！　それに比べたら、部長の魔力が触れる対象を滅殺する滅びの魔力だってことも『紅髪の滅殺姫』ルイセン・ブリンセスってことも大した情報ではなかった！（いや、重要情報ではあるが、それで命狙われるってことはないだろ、多分）

というわけで、神器の中の龍ひとことドライグにも手伝ってもらって、『龍の手』の亜種（いわゆる同種ではあるけど別バージョンになったソレを、元の神器と比較してそう呼ぶらしい）という風に偽装した。亜種という扱いにしたのは、堕天使に殺された理由から疑われた時にのりくらりと躲すためだ。『龍の手』でも、亜種ならもしかしたら危険視されるかもしれないな……みたいな。

ただ隠すだけでは意味が無い。僕は少しでも強くならなければならぬ。それは来るべき日に備えてのことだ。できればスルーしたいけど……まあ無理だろうとは無慈悲なドライグの言だ。マジで厄ネタ。

故に、部長に頭を下げて自分を鍛えてください、と言った。部長も同じことを思っていたのか、二つ返事でそれを引き受けてくれた。

早朝、訓練、部長の為だと思えば……！

「……まあ、気合いだけで乗り切れるなら、人類みな勝利者ですよねえ」
へばりながら、スポーツドリンクをがぶ飲みする。

まず部長が僕に求めたのは、『忍耐』と『基礎能力』だ。その理屈は確かに分かる。中学時代はバスケット部に入っていたのだけど、その練習は時として効率的なそれではなかったりする。必要以上にしんどいことをすることで、極限の状態に耐えうる精神を養成することが目的なのだと言った。でないとコートで倒れちゃうからね。基礎能力の向上は言わずもがなだし、僕の場合神器の関係上、基礎能力が高い程、神器で上げられる能力の上げ幅が大きくなるということなんだ。

ということ、僕は早朝から訓練をしている。朝日に焼かれ体力を奪われながら、20キロマラソンと100本ダッシュ、バラエティに富んだ筋トレメドレーと、何処のスポーツ選手だ？ っつてメニューをこなしている。率直に言おう……死ぬ。

最初は出されたメニューをこなすことすら出来なかった。学校には通わねばならず、久方振りに授業中に居眠りするハメになった。根性が足りてない……。

でもやって行くうちに適応してきたのか、効果が現れてきたのか、ようやくと出されたメニューを時間内にやりきることが可能になってきた。平々凡々、中肉中背がデフォルトだった僕の身体が、若干筋肉質になってきたのは悪い気はしない。

でも部長？ 『ではもう少しギアを上げましょうか』 って言ったのは冗談ですよ？

「冗談ではないわよ。慣れてしまつては意味が無いわ」

「……そうですねー」

強くなりたいとは言ったが、その前に心が死にそんな心配がしている。……だが、無

視は出来ないんだよな……頑張るしかあるまい。

「僕は『普通』あたりまえになりたかっただけで、『異常』こせいできになりたかっただけではないんだけどなあ

……」

呟く言葉は、宙に消えていく。さあ、運命に流されようか。それが『普通』、それが『普通』……。



アーシアも下積みの子ラシ配りを終えて、契約業務に入ったらしい。気合十分で『私もイツセーさんみたいに!』と言っていたが……僕を参考にするのはどうかと思うよ。部長も妙な表情してたし。

そういうや、部長と言えば最近物憂げな表情をするようになったなあ。僕には根本的な原因聞き出せないからどうしようもないけど。だって何聞いたって『気にしないで』と言われて追求できないじゃん……。

「……つてわけで、僕も色々悩んでるんです。お待たせしました、ストレート固めです」
「どこも大変だね……あ、ありがとうイツセーくん」

いつもの九頭龍亭、時間は10時であと1時間で閉店である。今日は立山サン休みなので、アルバイトの子達を指揮するのは僕の仕事だ。この時間になると、寸胴からスープを全て角ポットに移してIHヒーターで温めつつ、寸胴を洗ってもらっている。これを早くやっておくと、早めに背脂が炊けるのだ。明日のスープの仕上がりはこれで決まる。

「あ、そうそう森沢サン。新メニューで半熟味玉飯始めましたよ。240円ですけど」
「あれ、結局始めたんだ?」

「新しいオーナーの意向で。米の仕入先も見直しすることで原価も大分抑えられましたしね」

「道理でござ飯の量が増えた気がした。んー、じゃあ頼んでもいい？」

そう言つて、森沢サンは財布から小銭を出して250円を出した。釣り銭は……つと、あつたあつた。

「はい、10円のお返しです。少々お待ち下さい」

そう言つて味玉をつけダレに漬けて少し温めつつ、業務用の炊飯器からご飯をよそい、温めた味玉を匙で割る。ネギを振り、一味を振り、最後にチャーシューのつけダレを掛けてやれば完成。提供速度は格段に早いね、味玉から作らないからなんだけど。

「お待たせしました、半熟味玉飯です」

「あー、これだよこれ。いやあ、自分で作つてみようと思つたけど、半熟ゆで卵が思いの外難しくてさあ……」

そう言つてラーメンと玉子飯を交互に食べる森沢サンを見て気分が良くなる。ここの色んなことが有りすぎて心が荒んじまったよ……へへっ。

「まあ、そう簡単に作られちゃつたら僕らの立つ瀬がありませんって。年季と経験ですよ、お客さん」

「言うねえイツセー店長」

私語はあまり褒められたものではないが、お客様とのコミュニケーションは必要だ。客も少ない平日夜中だし、コレぐらいはいいだろう。

「店長、寸胴洗い終わりました」

「分かりました、ではバックヤードの冷蔵庫から背脂2ケース出して、それを寸胴に入れて水を張って強火に掛けてください。分量は覚えてますね？」

「はい、大丈夫です！」

「よかった、ではお願いします」

そう指示を出すと、田所サン（駒王学園の大学部に通う大学生アルバイトさん）がバックヤードに向かう。いやほんと、高校生が店長やってて本当に申し訳ない。

「なんだ、立派に店長やってるじゃないか。お飾りって言ってた癖に」

「後輩指導に関しては、やってることは前と変わりませんからネ」

「そういうものか……ん、ご馳走様イツセーくん。また頼むよ」

「ありがとうございます、またどうぞ！」

そう言って森沢サンが帰り、あと店内はテーブル席が何個か埋まつてるって感じか。……この分だとビールがまた出るかな？　って感じで麺類やご飯が出そうな気配はない。

田所サンも背脂を炊き始めた。あとはしばらく放置だろう。

……うん、ならば。

「バイトさん達、タイムカード切らんでいいのでお願いがあるんですけど」

試作メニューの感想を、貰うことにしよう。



「ふいー、疲れたー」

今日の売上を纏めつつ、チユルチユルと一人でラーメンを啜る。微妙にスープが余っちゃったからね、翌日のに使ってもいいけど一杯分なら角ポット入れるだけ冷蔵庫圧迫するし、賄い食べてなかったから使い切ることにした。うまうま。

清掃は終わってるので、バイトさん達は上がってる。いずれは閉め作業も覚えてもらいたいけど、まだ先の話だね。

「あー、終わった食った。じゃあシャワー浴びて帰るかー」

そう言っただけでノートを閉じて、カウンター席から立ち上がろうとした時に、店の入口が開いた。

「あ、すみません。本日もう閉店で……あれ、部長?」

「こんばんはイツセー。そろそろ終わったかしら?」

「ええ、丁度今からシャワーでも浴びて帰ろうかと」

「そう……なら、一緒に帰りましょう?」

「……………ええ、まあ、いいですけど」

……………警鐘が鳴り始めた。命の危機ではなさそうだけど、相当面倒臭いことが始まる気がしてならない。

その2

僕は、ここ最近で普通のパンピーが一生のうちに遭遇するチミドロファンタジー……の5倍程に遭遇したわけだが（※推定）。

まあ、それでも暫くはのほほんと過ごせるんじゃないかって思ってたんだ。だってライトノベル半分程度のチミドロファンタジーだぞ、心臓ぶっ刺されて、唇奪って（物理）、穴ぼこになって、首噛みちぎって、握り潰してだぞ？ 一生に一度あるかないかぐらいのバイオレンスファイバーを5回も体験してるっておかしくなあい???

……だからまあ、そういう理不尽系ファンタジーには遭遇しなかった。ああそうだが、そんなことは起こらなかった。

「イツセー……私を、抱いてくれないかしら？」

でも、観賞用美女にベッドで押し倒されるっつーエロゲファンタジーもノーサンキューなんだけどオ！ 仕事してください運命の神様!?



そんなワケの分からない状況に至った流れを、簡潔におさらいしよう、整理するために。

まず、部長と2人で帰ることになった。

……脳裏で警鐘鳴つとるし、部長の表情も何処か影があるからヤバイ案件でも抱えてるんだろうかと危惧。家に着くまで、適当な話題を振り、探りを入れようとするが鉄壁ガードで躲される。いや、直接的に聞かない僕も僕だけど、そのザマで『なんでもない』は無理がないかな部長？

んで、家に着くと何処か物言いたげな表情になるんで、思わず家に招き入れてしまった。……でもさー、仕方ないでしょう？　なんか迷子に見えてしまったんだから。いやほんと、自分の主人にこういう言い方するのどうかと思うけど『人生（悪魔だけ）の迷子』っていうか。店でたまに見かける、進退窮まった人が放つダウナーオーラを若干纏ってたというか。

時間は深夜、父さん母さんはもちろんのこと、仕事を終えて帰ってきてたらしいアシアも寝てるため、リビングに案内する訳にもいかず、自室へ案内。

そもそもこんな時間にお客さん招くのどうなんだ……？　と悪いことしてる気分になりながら。それはそうと、アシアがいるからいつ如何なる時も見せて恥ずかしくないように掃除片付けをやっててよかった……。女性に見られるとまずい雑誌も隠蔽

済みである。

とまあ鳴り続ける警鐘もなんのその、人生相談も初めてではないし、じゃあ根気強く語りかけて聞き出すしかねえな……と覚悟をキメた。

そして押し倒された。おさらい終了。



心臓がバクバクしてる。いやだってほら、自分の好みドストライクの女性に押し倒されたら、観賞用云々は言ってられんよ。いや、自分の身の丈に合った相手とくっつて言葉は本心も本心だけど、自分を傷付けたくないが故の逃避&予防線であることは完全に否定することはできないし。

……あ、なんか一気に思考が冷えてきた。やばいやばい、魅了とかそんなことをされる前に、なんとかこの状況を打破する一手を打たないと。このままだと考えることするままならない。

「とりあえず、お茶と茶菓子の用意がまだなんで、どいて貰っても大丈夫ですか?」

「……そうまで冷静だと、逆に腹が立ってくるわね」

「冷静じゃないです、まともな思考できてないです、一瞬とはいえこの僕が『傾国レベルの美人観賞用』相

手に流されてました。凄いですね部長、快挙ですよ！ あ、待つてごめんなさいその右手に溜めてる滅びの魔力しまつてくれませんか？ そんなの喰らうと僕死んじやいます」

マウント取られてる状況だと本当に命の危機しか感じない。余計な嘘をつくんじやなかった、反省。とはいえ完全にピンクな空気は消えてくれたので計画通りである。部長も苛立ちと呆れの表情になったし、僕の側も今まさに恐怖でチビリそうな程だ。

「……いやまあ本音を言いますと、別に流されてもいいんじゃないか？ とは思いましたが。部長なら……とか、命令だし……とか」

「ならどうして？」

「貴女の本意ならいいんですよ、本意なら」

若干力を入れて部長をどかしつつ身体を起こし、心理的アウエー感を消してから、続きを言う。

「思い詰めたようにしか見えない貴女が、若干強引にウチに来て、明らかに後ろめたさを感じてる相手を、訳も説明せずに押し倒す。……怪しむには充分すぎます」

「……っ」

凶星なのか、それとも本心がバレていたからなのかは分からないが、息を詰まらせる部長を見て、僕が『異常な普通僕』で本当に良かったと心の中で胸を撫で下ろす。普通なら理由を

問う前に理性ブチ切れて然るべき状況だった……。

「いいんですよ、本当ならどんな命令を下されても。僕は貴女の為に在る。そう在るべきだと思っっている。なんですけど……」

そう言つて、胸に手を当てた。緩やかに、心臓が脈動している。喪つて、しかしまた与えられた大恩の証明だ。大丈夫、僕は自分の分を見失わない。

「なんの為に、部長が自分を抱けと言つたのかは分かりません。ですが先程の表情から、男女の色恋的な感情から来るものではないと断言します。そこで部長の立場、抱かれる必要などから一つだけ、推測できることがありました」

部長の立場というのは、『次期公爵』という『貴族』の立場。抱かれる必要がある状況は、昼ドラなんかを想像したら、何個か候補は出てくる。

それを踏まえて、僕が思うに……

「部長が結婚してるのなら、離婚の要因に。してないのなら、婚約破棄の要因。なんにせよ、そういう何かを台無しにするために、僕を出汁にする必要があつた、なんて思うのですが」

「……………」

「その沈黙は肯定と受け取ります」

まあそうだよね……とシヨックを受ける。だつて僕が好かれる要素なんて……。

まあそうだよなあ……と安心する。そんなことになったら天変地異もいとこだ……。

「多分、部長は凄く悩まれて、もうこれしか方法がないと覚悟を決めて行動に移したと思うんです。その覚悟をふいにしてしまって、本当に申し訳ありません」

「……謝ることはないわ。どう考えても、私が」

「据え膳食わぬは男の恥、と言いますし、僕が悪いということにしておいて下さい。それに、本題はここからですし」

「本題？」

「このままだと、部長の計画をご破算にしたという事実しか残らないじゃないですか。恩を礼で返すつもりはあっても、仇で返すつもりはないですよ僕は」

乗りかかった船とも言いますし、と言って口の端を吊り上げる。

「死んだ祖母が言っていました、本当に最期まで考え抜いたんなら、暗い顔になんかならないって。結末まで含めて、笑顔で受け止められると。僕はコレが真理なのだと、あの畜生墮天使との殺し合いで確信しました」

実際、心残りはありませんでも死にきれない心情ではあったけど……復讐して、満足して、逝きかけた。仕方がないと苦笑して、受け止められる心境だった。ばあちゃんも孫がこんな風に悟るとは思ってなかっただろうけど。

「最期まで、本当に最期まで、手を尽くしましょう。どんな結末を迎えることになったとしても、それは『納得』と『笑顔』と共に在るべきです、我が主。間違つても、先程の様な表情で迎えるものじゃないですよ」

「……その上で、同じ結論になつたら？」

「ははは！ 人選はちゃんとしてくださいよ？」

「……まったく、らしい返答ね」

おどけて返す僕に、苦笑を向ける部長。思い留まつてくれて、本当に良かった。

「さて、こんな時間だし帰ることにするわ。本当に、ごめんなさいねイツセー」

「いやまあ、それはいいんですけど。今から策とか練らなくて大丈夫なんです？ なん

となく緊急性のある案件だと思うんですケド……」

ご破算にしているだけどね……。

「時間はあまり残されてないわ。けれど、慌ててもいいことはあまり無いし、どうせなら皆を頼ることにするわ。ほとんど独りで悩み続けた様なものだし」

「ならいいんですが……」

なお、現在僕が提示できる助言と言えば、

「闇討ち……吊し上げ……社会的死亡……」

「なんで悪魔よりも先に悪魔の様なアイデアがポロツと出るのよ……」

「え？ 不祥事でつち上げて社会的に死亡させるってのは、その界限では割とメジャーな方法なのでは……？」

「……そこまでする程恨みのある相手ではないから、物騒なことは方針から除外するわ。いいわね？」

「はい」

そう言つて、今度こそ別れの挨拶を交わして、部長は魔方陣使つて帰つていった。

さてと、

「……宿題するか」

現実感のある単語を口にして、僕の意識は急速に現実へと引き戻される。そう、これだよ、僕の吸いたい空気はこれ……！



「お嬢様」

「……まあ、そうよね。大方、何らかの間違いが起こりそうなタイミングで介入するつもりだった……ということかしら、グレイフィア？」

「はい。一夜の過ちは、方々に禍根を残しかねませんか」

「ええそうね、たつた今それを諭されたばかりよ。……本当、いい下僕を持ったわ」

その3

「……ねむ」

宿題終えても寝れなかったので、『クロニカ滅殺帳』に色んな対策を書き連ねつつ朝を迎えることとなった。朝4時、薄ら明るくなってきたのが、部屋の窓から見て取れる。

「朝修行はないとは言われたけど……うーむ」

1日休めば、その遅れを取り戻すのに3日掛かるとはこれまた亡くなっているじいちゃんの弁だ。幸いこの身体は人間を超えたスペックである悪魔の身体、一徹程度は（肉体的には）屁でもない。気を張ればいけるいける……。

『意外や意外、強くなることにも真面目じゃあないか相棒』

「……アンタ、意識が現実にある時でも語りかけられるのか、ドライグ」

『別にそう言った縛りはないからな。気紛れで会話を楽しみたいことだつてある』

……楽しいんだろうか、僕と喋るの。それとも、会話することがあまりないパターン？ まあ僕にとつてはどっちでもいいことだ。何か変わる訳でもない。

「しかしちようど良かった。アンタに聞きたいことがあったんだ、ドライグ」

『要件は分かっているぞ、俺とお前は繋がっているからな。力を望むか』

そんな、力に溺れようとする闇堕ち騎士を唆すような言い方しなくても……。いや、部長はああは言ったけど最終手段で何人かに不幸な事故に遭わせるだけのスペックが欲しいだけなんだって……。

「勘違いするなよ、過ぎた力は望んじやいない。身を滅ぼすからね。ただ、この神器の鍛え方と、いざと言う時の必殺技が分かればいいなつて程度の話だ」

最低限の可能性を掴めるだけで十分だ……。これまでも、これからも。

『神器の鍛え方に関しては、お前の思うままにやれ。その方がお前にとっていい成長をするだろう。そして必殺技に関しては、今のままでは無理だ』

「まあ、そんなうまい話はないか」

『だが、犠牲を払えば話は別だ』

「ふむ」

その話、詳しく。

『どの神器にも、禁じ手というものが存在する。そして俺が封じられたこの籠手も、例外じゃあない』

ドライグがそう言うと、呼び出してもないのに左腕が赤い籠手に覆われる。甲の宝玉は、最近では隠れていたはずの龍の紋章が浮かび上がっている。

『本来それは、膨大な経験を重ね、力を高め、その果てに到達できるかもしれない領域。特異な才能があれば話は別だが……まあ、お前にそんなものは欠片もない。喜べ相棒、お前は歴代最弱の赤龍帝だ』

「悪かったね、僕がクソザコなメクジで。イヤミか貴様」

そも、僕に種別問わず『才能』なんざないのは分かり切つとるわ畜生。だから『異常な普通』やつとんじやい。つか平凡系男子高校生にそんなもん備わつとる方がおかしいわ。

しかし話の流れは分かつたぞ。何かを犠牲に払えば、その領域に到達することができるってことなんだな？

『一時的にな。なに、犠牲を払うだけの価値は与える。何せ、この俺が力を分け与えるのだからな。だが……』

「だが？」

『これをする、一発で俺とお前の正体がバレる』

「それがもう既に重すぎる犠牲じゃねーか」

少なくとも、すぐに使うかどうかは躊躇われるカードつてことだ。それなら地道に鍛えて、神器の扱いを熟していく方が将来的には安全確実だね。まあ、部長が切れと言つたら速攻でこのジョーカー切るけど。

「んで、肝心の払う対価は何さ？」

『お前の【存在】だ。魂でもいい、身体でもいい、その一部でもいい。お前の【存在】を、俺に寄越せ』

「……余計に重い対価だ。悪魔を前にした人間はこんな気持ちになるのかねえ？」

まあ最近の僕は専ら金銭でのやり取りですけどー。

「それで、アンタにやればその部分は消えるのかな？」

『消えるだけならまだマシだろう、治す方法があるからな。そんな程度では済まされな
い、俺に捧げた部分は、龍オレになるのさ』

「その話詳しく」

ウソだろ、それ捉えようによってはメリットじゃねえか。

『……メリット、だと？』

「いやだつてドラゴンってことは、少なくとも下級悪魔よりは強いでしょ？　つまりグ
レードアップ」

ただ、具体的にどんな感じで置き換わるのかが分からないなあ。

「例えば、左腕をアンタにあげるとどうなる？」

『……腕は鱗に覆われ、人であった時のような使い方はできんだろう。……いや、そうい
うことを聞いているわけではないのだな。骨、肉、表皮、爪に至るまで龍の其れと化す。辛

『愚か者、成り立ての悪魔の分際で俺の「――」に耐えられるものか。十分に慣らす必要があるに決まっている。幸い、その対価をお前に与えるタイミングは此方に委ねられている。ストックできる、とでも考えておけ』

そうか、それなら……安い買い物かな？

「それじゃあお願いするよ、ドライブ」

『では始めよう。ああ先に言っておくが……気を強く持てよ？』

えっ？　と思った瞬間にはもう遅かった。

「……ぐ、が、あ、」

全身が焼かれる感覚と共に、僕の意識はぶつつりと切れた。ただまあ、アレをぶち抜かれるよりはマシだったとだけ。感謝するぜ彼女ちゃん、安心して地獄に堕ちろ（呪詛）。



「お、おいイツセー、お前生きてるか？」

「救急車で呼ばれてもおおかしくない様相だが……」

数時間前の自分をぶん殴りたい。何処がメリットだよ、こんなの普通に死ぬるじゃん

…つかあの後から下手人のドライグはいくら声掛けても返事しねーし、くそう。

それでもなんとか燃えるように熱い身体を引き摺って登校、力尽きて机の上に突っ伏すと、悪友共が声を掛けてきた。

「……ど、道中アーシアの介護がなければ即死だった」

「どうしよう、急に殺意湧いてきた」

だろうな、さつきまで心配そうだった周囲の男子の視線も殺気に変わったし、立場が変われば僕だってそうする。女の子からの介護とか裏山けしからんとかいつて（まあ観賞用は除くと付け足しておくけど）。

いやしかし、マジでアーシアいなくなったら死んでたかもしらん。『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』のお陰で少しの間痛みが引いたし。朝から迷惑かけてごめんよアーシア、若干泣きそうだった彼女を見てさらにそう思う。

「いやでもマジでしんどい……保健室で横になりたい……誰かに甘えたい……膝枕されたい……」

『い、イツセーの口から欲望が垂れ流されてるだとう!』

『合金メンタルのアイツがまさか!』

「普段からどんな風に思われてるんだよ僕あ……」

周囲からの評価にさらにゲンナリする。割と欲望に正直に生きてきたつもりなんだ

けど僕ちゃん。

「まあ、仕方ねえ。ほら、肩かすから少し起き上がれ」

「その代わり、知り合いの女の子紹介で手を打とう」

「……やだ、授業出ないと皆勤賞消える」

「……………はあ」

ため息つくんじゃねえよ、それだけが僕を動かしたんだぞ、内申点でしか通知表の点稼ぎ出来ないのに！ エスカレーターで大学部に行くために必死なんだぞこっちは！ 今日のは自業自得だけどな！

「そ、それはそうと、出会いが欲しいのかキミたち。ならつい最近知り合った（心は）美少女がいるけど」

「マジでか!？」

「ちよつとメルアド渡してもいいか聞いてみる」

死に体でよろよろとメールを打って、送る。割と直ぐに返信がいて、その内容がOKだったのでそのメルアドレスを2人に見せた。

「おおイツセー、心の友よ!」

「アーシアちゃんの件は相殺してやろう!」

「いやいや、いいんだよ……チャンスは誰にだつて与えられるものさ……ごっつ」

いけね、喀血して若干口の中が鉄臭くなった。堪えたのでバレてない……ないよね？
「……むー」

いかん、涙目のアーシアがこちらを睨んでいる。見ない振り見ない振り。

「しかし、イツセーが美少女って言うってことは、これは期待が持てそうだな」

「ああ……そこは安心してよ。あれはもう紛うことなき（肉体美的に）観賞用だから……」

いやあ、そんなに『ミルたん』のメールアドレスで喜んでくれるとは。反応が若干楽しみだ。

それに悪いことばかりでもない、アレでいてミルたんは同じミルキーファンとの繋がりは広いからな。僕もその繋がりで（普通の）ミルキーレイヤーに会ったことあるし。チャンス、可能性はある。明日か明後日かに詰め寄られそうだけど、その時になったらちゃんと説明しよう……ウケケケケ。

……あー、死にそう。

その4

どのような状況にあっても、等しく全ての生徒に放課後は訪れる。たとえそれが望んでいなくとも、だ。ぶつちやけ死にそうなので帰りとうござります。

だが、昨日のことがある。昨日の今日で『死にかけてるので帰りマース！』は恥ずかし過ぎる。

それはそうと、昼休み辺りからずっと頭の中で警鐘鳴ってるの本当にやめて欲しい。旧校舎の方からどえらい気配がしてるんだけど。

「私は何も感じないのですが……」

「んー、僕もあまり。でも、イツセーくんだからなあ」

「ウソだろおい」

倒れそうな身体を無理矢理取り繕ってオカルト研究部に向かう中、部の同級生組……木場クンとアーシアにどえらい気配について尋ねると、そんなもの感じてないと言う。マジかよ。

「い、いや……僕より後輩悪魔なアーシアはともかくとして木場クンは何かしらあると思うんだけど！ 僕より先輩なんだからそういうのにも敏感だったりするでしょ普通

!？」

「あはは……多少は鍛えてるけど、特別感知に優れてるわけじゃないからね。案外、イツセーくんの方がそういうのは得意なのかもしれないよ」

「そ、そういうものなのか……？」

まあ、そういうものなのかもしれない。臆病がなせる技って？ 喧しいわ！（言っていない）

「あのう……イツセーさんの、その警鐘？」 というのは、どういうものなのですか？」

「うん、それは僕も前から気になってたんだ。差し支えなければ教えてくれるかい？」

「んー、まあ別に大したことじゃないけど。なんかヤバいこと、面倒なこと、まずいことが起こりそうな時、そうなってしまいそうな時に頭の奥でガンガン音がするんだよ」

案外神器の機能だったりするのかもしれない。

『赤龍帝の籠手にそんな機能は備わってはいない。が、神器所有者の中には神器の能力とは別にそういった第六感を獲得する者は、一応存在する』

解説どうも、ドライヴ。

「今の鳴らし方だと、生死に関わることはないけど、頗る面倒なことが起こるよー！ つて喚かれてる感じだ。多分、旧校舍から感じるどえらい気配の主がその面倒事を持ってきたんだらうけど……なんか心当たりある？」

「ふむ……幾つか心当たりはあるんだけど。そのどれにせよ、イツセーくんの言う通り『面倒事』かもしれない」

木場クンの表情が張りつめたそれになる。空気が重くなつて、ただでさえ死にそうなのに余計に死にそうになる。

「だとするならば、急いだがいいのではないのでしょうか？」

「そうだね。少し走ろうか」

「……こんなこと僕が言うのもアレだけど。信じるの？」

「部長からある程度は聞いてるからね」

「この状況でイツセーさんが嘘を吐く理由がありませんから」

「さいでつか……」

なんか凄いでできるヤツみたいな扱いされてるけど、僕って主に新規事業任されてるだけの、中級墮天使ぶつ殺せるぐらいの戦闘力しかない下っ端下級ポーンだよ？ ……冷静に考えると普通に期待の新人感がすげえな、意義を申し立てたい。

まあ、昨日のこともあるし十中八九それ絡みだろうと思うし、僕もこの警鐘を疑つてはいない。竦む脚を無理矢理回して走り、旧校舎の前に辿り着く。そこで木場クンが顔を強ばらせた。

「……なるほど。この距離でようやくと気付けたよ。これは確かに……」

「うへえ……マジで当たっちゃったかア」

暗い面持ちでそのままオカルト研究部の部室まで。扉を開いて恐る恐る部室に入ると、めっちゃ機嫌の悪そうな部長と、笑顔を本来の意味……威嚇で使ってる姫島先輩、部屋の隅で誰にも関わりたくねー！ って感じで座ってる塔城チャンがいた。

……そして初めてお会いする、銀髪メイドさんがいた。観賞用とか以前に、これがどれくらい気配の正体だと思おうとマジで関わりを持ちたくないよ、うん。

「全員揃ったわね。では、部活をする前に話があるのだけど……」

そう部長が言うと、メイドさんはこちらの方に……多分僕と、アーシアの方に向いて口を開いた。

「そちらのお二人はお嬢様の新しい眷属悪魔ですね。初めまして。私は、グレモリー家に使える者、名をグレイフィアと申します。以後、お見知り置きを」

「あ、はい。ご丁寧にどうも」

ペコペコと同時に頭を下げる。ううん、いい感じにアーシアが僕に似てきて、イツセーくんちよおつと複雑だな！

「それでお嬢様。その説明は私の方より……」

「結構よ。実はね——」

そう言つて、部長が説明を始めようとした瞬間、部室の床に描かれている魔方陣が光

出した。

「…………え？　でも、ウチの眷属揃ってるんだけど」

普通の契約業務してる時によく見る転移のそれだけど、今全員いるから違うのかもしれない。なんだろう……と首を捻っていると、木場クンがコソリと疑問に答えてくれた。

「うん、だけどよく見て。グレモリー家の魔方陣が……」

「…………どれどれ」

注視すると、確かに紋様が変わっていく……これはつい最近勉強したから覚えているぞ。確か、『フェニックス』の魔方陣……。

「——ッ！」

点と点が繋がる感覚。昨日のやり取り、そして別の家の悪魔の登場。つまり、リアス・グレモリー様は、フェニックス家の誰かと婚約しているということだ。それも、恐らく今から現れるだろう悪魔と。

そんな感じで、思考に没頭しているうちに魔方陣から炎が渦巻き、噴き出す。余波で火の粉が飛び、学校指定のカッターシャツが少し焦げ付いた。……これ、高いのに。

まあそれはそれとして、案の定ガンガン警鐘が鳴り始めた。しかも今度は『場合によつては死に至る危険』を報せてくる。炎の渦の中で佇むシルエットの主は、そういう

存在なのだ」と認識、覚悟。案外早朝にやらかした取引は、して損はなかったのかもしれない。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

そうやって腕を軽く振ることで炎を振り払い、現れたのは赤いスーツを着崩した金髪の男。ちよい不良な感じも相まって、どう見てもホストっぽく見えてしまう。アレも一種の観賞用だな、見てて愉快って意味で。あーというのが女性にピンタされてるシーンは最高に笑えるはず……いやわかんないけど。

「愛しのリアス、会いに来たぜ」

「……………ライザー」

まあ、予想通りの展開だ。そして名前も判明、『ライザー・フェニックス』と。うん、心の中のクロニカ滅殺帳に記入した。

「さて、リアス。早速だが式の会場を見に行こう。日取りも決まっているんだ、早め早めがいい」

「あの、少しよろしいでしょうか？」

ライザーさんが部長の腕を掴もうとした瞬間、挙手をして言葉を挟む。全員の視線が僕に集まって少ししたじろぐが、それは心の中のことだ。

「……………誰、お前？」

ライザーさんがまるで路傍の石を見るかのような視線で僕を見下す。その感覚に少し安心。そうだよ、基本的に僕ってば『異常な普通』！ 路傍の石もいい所だからライザーさんの反応が正しいんだよ！

「リアス・グレモリー様の眷属悪魔、兵士の兵藤一誠です」

「ふーん、それでなに？」

「貴方の登場演出でカッターシャツが焦げたのでその弁償をして貰えませんか？」

「……………は？」

空気が弛緩、全員から『今それを言うか……………？』って視線が集まる。

「いやだって僕の予想だと、貴方がリアス様の婚約者なのでしょう。知らなかったですけど」

「まあその通りだが……………リアス、俺の事話してなかったのか？」

「話す必要がないから話してないだけよ」

「あーら、これは手厳しい。……………それで？」

ライザーさんに続きを促されたので、とりあえず咳払いして口を開いた。

「ゴホン……………いやそれですね。そうだとするならこれはまずいんじゃないですかね？ 婚約者の眷属悪魔に配慮できないって風聞が立つのはよろしくありませんか？」

とりあえず厭らしく嗤ってみるが、多分これは効果がない。実際、ライザーさんが鼻

で笑ってるし。このタイミングで差し込んだのは、皆の肩の力を抜くため。焦げ付いたのは想定外だったが、丁度よく突っかかるネタが出来て良かった良かった。

「ふん、まるで当たり屋の理屈だな。まあいい、この程度で五月蠅い蠅が黙ると思えば」
そう言つてライザーさん、懐を探つて僕に何かを投げて寄こした。洒落たマネークリップに挟まれた……ドル札。日本円じゃないのかよ。

「それごとくれてやる」

「はい、どうもありがとうございます。多大なご配慮、感謝の極み。余計なことはナシにしましょう、お互いに」

しかし上手く行けば気分を害して潰す云々でゴタゴタに持つていくはずだったんだけど……いやはや手強い。この男、存外懐が深いぞ。態度は悪いけど！



とりあえず、正式な紹介はメイドのグレイフィアさんから。

彼の名前はライザー・フェニックス。名門フェニックス家の三男である、純血上級悪魔。

フェニックスといやまさに不死鳥で、不死身かつ強力な炎を扱う一族。古い時代から

の名門だったが、昨今レーティングゲームの流行に合わせてその力を拡大させていつている、らしい。

最も有名なのは『フェニックスの涙』だろうか？　いかなる傷もその場で癒すことのできる、某携帯獣でいう『かいふくのくすり』だ。製造方法は分からないけど大量生産はできないらしく、一部の上流階級が購入するのが関の山。しかもレーティングゲームで需要が上がったために値段が天元突破。ふむふむ、100ドル札が何枚か挟まったのをポンと投げて寄越されたけど、それも納得のブルジョワさんだと見た。

「ライザー。私は以前にも言ったはずよ、貴方とは結婚しないと」

それはそうと、部室のソファーに並んで座る部長とライザーさん。彼が肩を抱いて馴れ馴れしく触れるのを『いい加減にして』と払い、付け足されたセリフがコレである。めっちゃ嫌われとるやん。まあパツと見た印象だと女にだらしなさそうな感じだけど、実際そうなのかは分からんし。

「ああ、そう聞いたよ。だがリアス、そういう訳にはいかないだろう？　キミの所の御家事情で、そんな我儘を言っている場合じゃあないと思うんだが？」

「余計なお世話よ。私が次期当主なのだから婿の相手は自分で決めるのが道理でしょう？　共に家を経営していくパートナーだもの、やりやすい相手の方がいいわ。……そもそも、当初の『契約』では、私が人間界の大学を出るまでは、自由にさせてくれるとい

う話だった」

「もちろん、キミは自由だとも。大学に行ってもいいし、下僕も好きにしたらいい。ただ、その前に俺と結婚するだけだ」

「……なるほど、そういう風に穴を突いてきたのね。まあいざと言う時に私を黙らせるためにそうしたのでしょうか」

悪魔らしいやり口ね、と賞賛と侮蔑を乗せて部長は吐き捨てるが、ライザーさんは何処吹く風だ。

「必要だからそうしたんだ。ただでさえ先の戦争で純血悪魔が大勢亡くなったんだ。戦争から脱したとはいえ、堕天使、神陣営とは相変わらず拮抗状態。奴らとの小競り合いで純血悪魔の跡取りが殺されてお家断絶、なんて話も無いわけじゃない。純血であり、上級悪魔の御家同士がくつつくのはこれからの悪魔情勢を思えば当然だ。相性なんてものは二の次だ。もつとも、俺はキミと上手くやれる自信はあるぜ？」

「純血悪魔の新生児が貴重なことは同意するけれど、上手くやれるかは甚だ疑問ね。それに、」

半目で睨みつけて部長は言う。

「私個人の意見としては、純血悪魔は『貴重なだけ』よ。この先、どうしたって外からの血に頼らなくてはならなくなる時代が来るわ。だから、それを理由に無理矢理婚姻を結

ばされるのは納得がいかないし、ナンセンスと言うしかないわ」

「……正気かりアス？」

「ええ、正気よ」

どうも、古いしきたりと新しい風のぶつかり合い的な話になってきたな……。僕はあまり関係無さそうだけど。

「数を減らしたのなら増やさなければならぬ。ええ、その通りね。いちいちごもつともだわ。ところでライザー、純血悪魔同士の子供の出生率って、いくら程のものかしら？」

「それは………だが、」

「昔ながらの風習を守ることは大事なこと。けれども悪習に縛られて種族ごと沈むのは勘弁よ。いずれ立場のある某がそれを示す必要があるわ。場合によっては『現魔王の妹』が、みたいなね」

その為にこの札は残しておきたいのだ、と部長は言う。

「私の家も、そちらも、揃いも揃って我儘娘だのなんだのと、腹の底では思ってるのかもしれないけれど、舐めないで頂戴。貴族ある立場貴族の私が、悪魔の未来のことを考えてないわけがないでしょう」

は、話が大きくなってついて行けない……ついて行けない、が。何となく、嘘だろう

なという予感がする。

多分、悪魔の未来について考えているのはそうだと思う。だが、昨日のアレのことを思い出すと、やっぱり婚約を破棄したいのは部長の我儘が起点な気がする。あれこれ言い連ねたのはそれに説得力を持たせるための後付けであり……このやり口は多分、僕の常套手段。無理を徹すやり口だ。

基本的に僕には、何もかもが足りてない。平均で平坦な糞凡人だ。だから僕はいざと言う時に手段は選ばない。そこにあるものを何でもかんでも利用しようとする。そうでもない。我を通せない。

分かりやすい例で言うと、『赤龍帝の籠手』の件だ。アレは確かに厄ネタの宝庫であり、バレると面倒事にしかならないものだ。だが、その最初は『異常である事実から目を逸らしたい』という僕の現実逃避があつてのこと。説得に使った理由は本心からくるものであれど後付けであり、『こう言えば納得してくれる』という打算があつた。

多分部長はそのことに気が付いていたけど、納得したから触れずにいただけで、僕がやったことを理解していた。だって常日頃から『平凡バンザイ!』とか叫んでたもんね。……多分、昨日の夜必死で対策練つてたんだろうな。それで、多分僕のやり口を真似したんだろうさ。

部長は部長で、他者を言いくるめるのは得意だ。だがそれは意識を誘導するそれで

あつて、その話術は基本格上には通用しない。なるほど、こういう時『逃げ場を塞ぐ』僕のやり方は確かに効果的だ。

「……だが、キミがどれだけ声高に叫んだところで、俺とキミの結婚は決定事項だ」

「決定ではないでしょう？ 時期を無理矢理早めただけで、本来は大学を出てからの話。契約の穴を突いただけで、そもそもその話は変わつてはいないわ」

部長の言葉を受けて、ライザーさんの顔に怒りの色が浮かぶ。

「……キミがキミで冥界のことを思っているように、俺も俺で冥界のことを考えている。俺はフェニックス家の看板を背負った悪魔だ、この名前に泥を掛ける訳にはいかない。故にこの婚姻を破棄するわけにはいかない。キミの下僕を全て燃やし尽くしてでも、冥界に連れ帰る覚悟があるぞ、リアス」

ライザーさんが炎を纏う。部長もそれに合わせて滅びの魔力を纏う。ただそれだけで吐きそうな程に息苦しい。

警鐘、まるでいつかの『ゲームオーバー』のそれに近い感覚。

だが、しかし、死にそうだからってだけで膝を着く理由にはならない。少なくとも、主人が意志を示した。故にその為に我が生命を磨り潰すは確定事項。だって、それは僕の意志だ。

左腕を構える、籠手が現れる。『決トゥウイス・クリティカル・ブレイカー殺の手』、可能性を掴ませろ。その為なら、

この生命をくれてや——

「お嬢様、ライザー様、そこまでです。これ以上は私も黙って見ているわけにもいかなくなりません」

外からの声に、冷水をぶっ掛けられた様に意識が冷えた。今の台詞は2人に投げ掛けられたと見せかけて、その実僕に向けて放たれた。……バレている。いや、多分部長が真実を伝えた、信頼できるウチの1人ってことなんだろう。

ともあれ僕も、周りも、2人も、殺気立った空気は納めた。多分、この人凄い強いんだらうね。

「……最強の女王と称される貴女にそんなことを言われたら、俺も流石に怖いよ。化物揃いと評判のサーゼクス様の眷属を相手にしたくはない」

強いなんてレベルじゃなかった。サーゼクス様と言えば、現魔王ルシファー様じゃないかやべえよ!?

……というかちよつと待って。確かこの人グレモリー家のメイドさんで、そして部長にはお兄様がいると聞く。そしてさっき部長から『魔王の妹』とかいう恐ろしい単語が聞こえた気が……うん、僕は何も気が付かなかった!

「こうなることは、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も重々承知でした。正直に申し上げますと、これが最後の話し合いの場だったのです。そして、この場で決

着が付かない場合を想定し、最終手段を取り入れることとなりました」

「……最終手段。成程、そう来たのね。家同士のいざこざを納める常套手段、我儘娘を黙らせるには都合のいい手、ということ」

……えっと、それってつまり。

「はい。御自身の意志を押し通すのであれば、ライザー様と『レーティングゲーム』で決着をつけるのは如何でしょう？」

こ、これはひっじょーに不味いのではなからうか……!?

その5

フェニックス相手にレーティングゲームは自殺行為ではないか？

不死身で、フェニックスの涙の製造元。そして恐らくライザーさんは公式のレーティングゲームをやってるはずだ。……勝ち目あんの？ いや、さつき籠手構えといてなんだけどさ。

「いいでしょう、レーティングゲームで決着をつけましょう。それ以外に道は無さそう
だわ」

「へえ、受けちゃうのか。ただ、俺の方は公式ゲームでの経験がある。今のところ勝ち星
の方が多し。それでもやるのか、リアス？」

「ええ、せめてこっぴどく負けるぐらいでもしないと納得出来ないわ。納得は全てに優
先する、らしいわよ。倒れるなら前のめりって言うじゃない？」

あ、それも昨日僕が言ったの……でも部長風に言い直してる？

それはともかく、なんだろうこの『諦めてる風の演技』。まさか、過小評価させようと
してたりするわけ？

「それもそうだが。でもそれをキミの眷属は納得するかな？」

「私は大丈夫ですわ、部長」

「僕は貴女の剣です、部長」

「……私も、です」

ライザーさんの問いに、僕より先輩の悪魔達が納得している旨を伝えた。

「わ、私も大丈夫です、部長さん……!」

アーシアが、若干怯えながら、しかし覚悟の色を目に宿して言う。荒事に慣れてない筈なのに、いいのだろうか。

「ありがとう、皆。……イツセーは？」

「今更聞かれるまでもねーですよ、部長。我が命は既に主人のモノ。如何様にも」

覚悟なんざ疾うの昔に出来ている（言う程昔じゃない）。大丈夫です、部長。

「ならいいだろう。そちらが勝てば好きにすればいい。だが、俺が勝てばリアスは俺と即結婚してもらおう」

「ええ、それで構わないわ。皆、ありがとう」

……とりあえずこれ、レーティングゲームをするという方向で話が固まったということなんだよね？ となると、ここからすべきなのは……と不安になって部長を見る。

すると部長、こっさり僕に向かってウイंकをする。考慮済み、ということだろうか？

「承知致しました。お二人のご意識は私、グレイフィアが確認させていただきました。ご両家の立会人として、私がゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね？」

「ああ」

「構わないけれど、少しいいかしら？」

部長が厭らしく嗤った……あ、それも僕のヤツ！

「レーティングゲームで決着をつけることに納得したけれど……これ、あまりにも不公平よね？」

「まあ、そうだな。どうやらキミの眷属はここにいるだけの人数のようだし、そもそも経験値が違う。それで？」

「私の方から頼むのもどうかと思うのだけれど……そうね、準備期間に3週間程くれなにかしら？ 人数を減らせ、というのは納得出来ないでしょうし」

「猶予を用意するのに否はないが、流石に3週間は長過ぎる。10日、それが限度だ。それぐらいあればキミなら下僕をゲームの体裁が整う程度までは仕上げられるだろう」

「短過ぎるわね。契約破りについて問い質してもいいのよ？ それとも後で『婚約者がボコボコにして組み敷いた悪魔』と噂を撒かれてもいいのかしら？ 18日」

「……………2週間だ。それ以上はまげられん」

「ふむ……………まあ妥当なところかしら。いいわ、ありがとうライザー」

「その代わり、必ず約束は守るんだな」

「ええいいわよ、何処かの誰か達と違って、私は契約を遵守するわ。悪魔ですもの」

二人の間に火花が散る。当然、僕らも倒すべき敵としてライザーさんを睨む。

しかししかし、はてさて……最悪禁じ手とやらを使わなければならないかもしれないかもしれない……。

「ドライブ」

『ああ分かった、もう一つだな』

その日僕は、二度死線をさまよった。



身体が思うように動かない。慣れない異物が体内にあるせいだろう、起こすことすらできない。

全身を駆け巡る焼けるような痛みは更に増していた。……無理矢理作り変えられてる感覚。身体を弄られた改造人間達は、最初はこんな感じだったのかもしれない。

慣れてきて、ようやくと身体を起こせるようになる。口の中は鉄の味、拭えば手にこびり付く、紅より赤い『赤』。これはもう赫とか言った方がいいかも知れない。少なくとも

も、これは僕の血の色ではなかった。

これは見られるとまずい。起き上がり、ベッドのシートと枕カバーを外して、適当に押し入れの中に突っ込んだ。替えのものを準備しないと。

時刻は早朝4時、誰も起きてないことを確認して自室を出て1階へと降りる。キッチンで水を飲む。鉄の味を無理矢理嚙下して、意識と息を落ち着かせる。

「ハア……ハア……」

視界が霞んでい、手が震えている。明らかに重症だった。自己改造の副作用と思えば納得だが。

『恐らく、明日にはその「――」も「――」も馴染むだろう。先に「――」を慣らしておいたのはやはり、間違いではなかったな』

「それ本当だろうな……場合によっちゃ、2週間後には僕が不死鳥殺しやらないといけないんだけど」

『……兵藤一誠。無慈悲なことを言うようだが、お前には不可能だ』

聞き分けの悪い駄々っ子を諭すような落ち着いた声で、赤い龍は言う。

「正体がバレることを承知の上で禁じ手を切れば？」

『そうするつもりはないのか？』

「必要とあればするよ、どうなんだ？」

『……五分五分、といった所だろうな』

神をも屠れる力を与える神器の禁じ手を使っても五分五分な辺り、僕の才能……といふより、戦闘力の低さはいつその事笑えるレベルだな。まあ、本来普通の男子高校生にそんなもの求められても困るんだけど。

「まあ、だからといって最初から諦めるのは趣味じゃない。なんの為に――」まで置換したと思ってるんだ」

『……底上げが理由ではなかったのか？』

「それが半分。『赤龍帝の籠手』で使うにしろ『決殺の手』で使うにしろ、この神器は元の力が強ければ強い程、効果が上がる。単純に倍になった時の増加量から考えてね」

だが、ぶつちやけそれは「――」で事足りる。というか無理して死ぬ思いをしてまですることじゃなかった。

「結論、僕がその最期まで諦めず、燃え尽きることがなければ大丈夫なんだ。……自分を駒のように使い潰すことができれば、多分フェニックスは倒せる」

『……成程、道連れを狙うということか。殆ど命と引き換えに』

「そゆこと」

もし完璧に恩に報いるとしたら、ここだろう。ここで何も出来なければ、僕に価値は無いとさえ思う。それなら、価値のある内に使い潰すのが正しい駒の使い方だろう。

「そうだ、僕はあのヒトになら全てを捧げてもいい。何の間違いか、惚れてしまったのだ、仕方がない。」

「お前にとつても悪い話じゃないだろうドライグ、僕が早々に死んでくれた方が。今度は才能あるヤツに取り憑けよな」

『……お前は、死にたいのか？』

「まさか。死ぬのは嫌だ、そもそも痛いのも嫌だ、怖いのだって嫌だ……でも、格好がつかないのが一番嫌なだけだ。だって、男の子だからね」

「元々死んだ命だ、今度こそカツコ良く最期を飾りたいじゃないか。それで恩人を救えたなら文句無しだろう。……父さんと母さんには申し訳ないけれど。でも、悪魔になってたなんて言えないから、やっぱりそこそここのところで死んでなきやダメだ。」

「……まっ、最初から諦めてるわけじゃないよ。それだと約束破りも良いところだしね。『何れ訪れる宿敵と出会うまで、力をつけて、勝ち残る』。忘れてないよ、大丈夫。結果的に死ぬことになる可能性はあるかもしれないけど、生きることが諦めることは絶対にしないから」

『……………』

2杯目の水を呷る。もう、鉄の味はしなくなっていた。

その6

「……で、合宿ですか」

「ええ、決戦までの時間は無駄にはできないわ」

貧血で倒れそうな身体を奮い立たせながら、気合満々な眼前の上司の顔を拝む。

時間は5:30、そろそろ早朝訓練の時間かな？ と準備をしてたらまさかまさかの部屋の扉から現れた部長がそう言った。

「いやまあそれはいいんですけど、何も言わずに2週間も店放置するのは流石に」

「そこも含めて根回しは終わっているわ。と言っても立山さんを臨時店長、補佐に中村さん任命するだけだったのだけどね。あなたが店長業務のマニュアルも作ってくれていて助かったわ」

「いえあのそれ多分マニュアルじゃなくて店に置いてた僕のスケジュール表……」

共用スペースに置いてるので誰でも読めるようにはなってたのはそうだし、全然活用してもらっても構わない。だけどマニュアルと言うには足りない物が多い気が……。あそこに書いてあるの売上目標と実績、発注の管理とあと僕用のカンペ（主にクレーム対応）だからなあ……。

「使えればなんでもいいの。そもそもしつかり仕事を見せてたのでしよう？ 緊張こそあれ、特に不安げな様子も無く『任せてください！』と豪語していたし大丈夫よ」

前より悪くなることは無いだろうし、と悪い顔で笑う部長を見て、そりやそうだと思った。発注に関しては若干の不安が残るが、桁さえ間違えなければ後でどうとでもなるし僕がどうとでもする。それにここしばらく新人教育に力を入れていたこともあって、人員も厚い。前みたいでランチャタイムをぶん回すような絶望シフトとはおさらば。今から3週間以内で特別大きなイベントもなく、天候も恐らく問題なし。なら問題は無い、か…？

「それに例の2号店計画の準備の関係で、近いうちに立山さんに店長業務をやってもらう予定ではあったでしょう？ まさに言う渡りに船と言うやつね」

「マジでチェーン展開狙うつもりなんスねえ……」

「なんならフランチャイズ展開も視野に入れてるわ。売り付ける先は人間じゃなくて悪魔だけねど」

やつぱはこのヒトやり手の悪魔だよなあ……だなんて思いつつ、となれば反対する理由もないのでそのまま合宿の準備をすることに決めた。まあどうせ上司のお願いだからね、逆らえないね。僕ちん下僕悪魔だもの。

「ところでアーシアも合宿に連れていくんです？」

「もちろん、先に話を通しておいたわ。そうじゃないと貴方、あの子の参加を渋るでしょう？」

「そりゃあ、よく僕のことをご存知で……」

だから扉から入ってきたんだなあ、と納得。そして話の流れからしてアーシアも参加表明したっほくて付け入る隙が恐らくない。ぐぬぬ……まあ自衛の為の力が着くと考えたなら悪いことではないけど、若干心配だよ僕。

「じゃあ6時にこの家の玄関前に集合ね。大体の荷物は準備してるから、用意するのは服ぐらいで大丈夫よ」

「分かりました、じゃあ早速準備始めていきます」

さあ時間が無いぞ、ちやかつと身支度を済ませよう……と思ったところで、部長が怪訝な顔をしているのに気が付いた。

「部長、どうされました？」

「……気のせいかな、と思っていたのだけれど。妙に血の匂いをするのよね、この部屋」

何か危ないことでもしたのかしら？ と睨む部長に対して鼻血が出まくりました、と平常心を保って返せた僕の鋼メンタルを褒めて欲しい。本当にチビるかと思つた。



「死ぬ……死ぬう……」

で、コレである。

荷物を準備して家を出たら、こんもりとした荷物如山とグレモリー眷属達勢揃い。じゃあ行くわよ！ と部長が魔方陣を使って僕らを転移させた先が山の麓。うへえ、ここから修行なのかな？ と若干げんなりしたところで『コレとコレとコレがイツセーの荷物ね。神器は使わないこと』と荷物の3割を背負い、部長の意図と僕が死にかける未来を悟った。ちなみに残りの5割は塔城サンが背負い、その残りを他の面々が背負っていた。

朝の眩しい光と荷物の重さ、あと昨晚の後遺症で嫌な汗が止まらない。普通にキッツインだわ、これ。

……だが、荷物自体は思いの外すんなりと持てている。コレには部長も驚きだったよ。うで『早朝の訓練が実を結んだのね』とお褒めの言葉を戴いた。いやでもおかしくねえ？ 数週間でどうこうなる強化じゃないと思うんだけど……。

『貴様、どういう意図で俺に自分の一部を投げ売ったのか忘れたのか？』

「(あ、そーゆー……)」

僕にだけ聞こえる呆れたような声で、左腕に眠る相棒がその答えを教えてくれた。単

純に生物として強くなっただけのようだ。身体は心底ダルいが、狙った効果が早速現れているようだ。

『意図していたのかさうでないのかはともかく、お前の採ったあの選択が思いの外幸をそうしている。だがそれは、お前の身体が人間どころか悪魔からも掛け離れていくということだ。今はまだいいが、何処かで対策を講じなければ解る者には見ただけで正体を看破されるだろう』

「(赤龍帝つてバレなきやなんでもいいよ……龍の手の亜種ならこんなこともある、つて思ってくれたら万々歳だ)」

そう上手く行くかは知らないけどね、と思いつつそこそこに険しい山道を進んでいく。天候も相俟つて景観も相当いいはずなのだが、それを見る余裕は無い。舗装されていない地面と、そこに吸われる垂れて落ちる汗の滲みしか見えない。

何とか顔を上げると、かなり先に自分以上の荷物を背負った塔城サンが割と軽快に進んでいくのが見えて気が滅入る。後輩に負ける先輩って格好が着かねえなあオイ。

『さて、思いの外負けず嫌いな我が相棒。負けてられるのか?』
嘲るように、煽るように言う憎き左腕の相棒に返す答えは一つだ。

「いんや、無いね」

気力を振り絞り、脚に力を入れ、何とかペースを早歩きまで持つていく。疲労が溜

まっているからなのか、それともドラゴンパワー的な何かなのかは分からないけど、力を含めた場所が熱を持ち、気持ち軽く足を前に踏み出せるようになる。

片手で水分補給用の水筒を握りしめ、せめて自分より重い荷物を持つている後輩よりは早く、と無意識にペースがジョギングレベルになり、すぐに塔城サンの横を通り過ぎる。

だが、負けず嫌いは僕だけではなかったらしい。

「……む」

と声が後ろの方から聞こえ、すぐにザツ、ザツ、と荷物がテンポよく揺れる音が大きくなり、すぐに僕の横まで並び、

「……お先に」

と過ぎ去っていく。よろしい、ならば競走である！ と僕も何とか脚の回転を速くし彼女を抜く。そしてそれを受けて彼女もまた速度を上げ僕を抜く、という繰り返しが始まる。なんかもう途中から脚の感覚無くなってきたけど、僕から始めたもんだから辞められず、不毛な抜かし合いが目的地の建屋に着くまで行われることになった。

結局無様に負けて地面に倒れ伏した僕を、皆がなにやっつてんだと呆れた目で見下ろすので、あのドラゴンに乗せられるんじゃないや無かったと後悔することになった。トホホ…。



『身体を酷使する結果にはなったが、その分交換したパーツの定着が早く済んだ。訓練には間に合つて良かったな』

『そういう意図があるなら先に言えよ……』

脳内で返事を返すという余裕もなく、今僕は目的地の建屋……部長が所有してららしい木造の別荘、そのリビングで倒れていた。

『フン、情けない。それでは白いのには勝てんぞ』

「え、いや今別にそんな未来の宿敵のことなんて考えてる余裕が」

『付き合いは浅いが俺には分かる。お前に近い未来の目標を与えるとロクなことにならない。故に無理矢理未来のことを意識させることにした』

え、何？ 僕つてば太く短く短く星人に見えてたりするワケ？

『その通りだ、愚かで度し難い我が相棒。貴様、なるべく普通っぽく見せる立ち回りだけは完全に熟す癖に、目の前の課題に関してはなりふり構わず、文字通りの全身全霊を賭して、考え無しに突つ込むだろう？ 凡そお前に理性という物はない。感情で考え動くよく分からん生き物、それがお前だ』

「アレ、これ相当馬鹿にされてますよね僕ちゃん」

事実、自分のしたいことしかしてないのは否定しませんけどね？ そんな人格破綻者みたいな言い様はどうかと思いますことよ？

『よく言う。事実、自分の立場が悪くなるかもしれないと気付きながらも、自分の命を落とすことになるうとも、貴様は貴様の感情のままに突き進み、我を通した。これを愚かと言わずしてなんと言う！』

「……………」

言い返せなかった。あまり意識したことは無かったけど、多分自分を生まれた時から見てきた中の龍ひとにそう言われると、確かにそうかもしれん、となる。

『だが、だから気に入った』

不死鳥如きに遅れをとることは許さんぞ、そう言い残してクソトカゲの意識は神器の深く深くまで潜った……と思う。気に入った云々の真意を問う質すために何度呼び掛けても反応が帰ってこなかったので、多分睡眠に近いもんに入った、気がする。感覚的なモノなので上手く表現ができなくてもどかしい。

「……どの辺りが琴線に引つかかったんだろう？」

「なんの話だい？」

「おわっ!?!」

独り言を呟いてたら木場クンに聞かれていたでござるの巻。急に話し掛けられると

キヨドるからやめて欲しい。根つこの部分は陰キヤなんだよ僕……。

「あー、口から心臓出るかと思った」

「ははは、驚き過ぎだよ。別に今は気配を消してたわけじゃないのに」

「サラツと気配消せるって言ったな君？」

なんだコイツ人外かよ？ ……人外だったわ（悪魔）。

「それで、琴線についていのは何の話だったんだい？」

「ん？ ああ、なんで知らんけど、割と部長に目をかけて貰ってるから、なんか琴線に振れる部分あったんかな？ って思ってたさ」

息するように口から出た嘘。現状僕の神器の中身については、部長と副部長、あと部長の上司にあたる魔王様だけ知ってるトップシークレットだ。まあ近いうちに木場クンや塔城サンにも伝えないとまずいとは思いますが、今ではないと思う、多分。

とはいえ、口について出た言葉の内容については僕の偽らざる本音だ。副部長から『グレモリー家は情愛の悪魔の一族』というのは聞いたけれど、それにしたつとは思わないでもない。いやまあそれを言うなら悪魔とは不倶戴天の敵である元教会勢力、墮天使勢力のアーシアに対して、眷属になったとはいえ、ほぼ家族では？ みたいな距離の近さだし、やっぱその辺おかしくなくなるか？ ということを口にする。

すると木場クンは苦笑して、そう思うのも無理はないよね、と言った。

「でも、確かに兵藤くんに対しては特に目をかけてるとは思うよ」

「あ、僕の自意識過剰とかじゃなかったのね」

「何となく僕もその気持ち分かるからね。目を離していると兵藤くん死にそうだし。平気で無茶しそうだから不安に思っつて、若干甘くなるのも仕方ないんじゃないかな？」

「あー……つて納得しちやダメか。程々に反省しますうーつと」

まあ変える気あんまりないけど、と心の中でだけ呟いて身体を起こす。左腕の中の相棒が言った通り、昨晩感じていた体内の異物感が消え、幾分か身体が軽い。手を握って開いてを繰り返して、特に痺れがないことも確認する。

その間に、「はいこれ」とさり気にグラスに注いだ水を寄越してくるイケメンムーヴも、僕が要介護者に見えるからなのだろうか。ありがとう、と受け取りながらそんなことを思っつてしまう。

「じゃあそれ飲んだらジャージに着替えてくれるかな？ そろそろ特訓を始めるつて」
え、もう？ と思っつて木場クンをよく見たら、既に彼はジャージに着替えていた。やばい、もしかしたら僕待ちだったかコレは？

「急いで着替えてくるわ、30秒も待たせないから」

慌てて荷物を引っ付かみ、階段を駆け上がろうとして、

「あ、2階は部長達が使っつているから、浴室を使うといいよ」

「……何から何までごめん」

確かにコレは見てて危なっかしいだろうなあ、と何処か客観的に自分を見ながら浴室の方まで駆けていくのだった。

その7

【①木場クンとの剣術訓練】

「割と兵藤くんって、場馴れしてるよね」

軽い準備運動（これっぽっちも軽くは無かった）を経て、僕は木場クンと剣術稽古をすることになった。というかまず僕とアーシアは眷属の面々と1対1で組むことで、皆の戦い方等の理解を深めて欲しい、との事だった。まあレーティングゲームは団体戦だから必要な事だよな。そんなまあ同じ男子ということもあつて精神的にやりやすいだろうということ、トップバッターには彼が選出された、という話。

……木場クンが俊敏性を大幅に上げる『騎士』^{ナイト}の駒を使って転生するのは知っていたけど、リアル騎士だとは知らなんだ。しかも持つてる神器も魔剣をなんでも、幾らでも創造できる『魔剣創造』^{ソッドバース}！ イケメンは神器もイケメンだった。だってソレ、もうアレじゃん！ 身体が剣で出来てるヤツじゃん!!

で、だ。まずは実際に立ち会おう等とふざけたことを言うもんだから、渡された木刀でまあ打たれまくる打たれまくる。その癖こつちの一撃はひよいと躲すモンだからストレスも溜まる。10回打たれたら一段落、というのを5セット程繰り返して、才能

ねえなあと逆に開き直っていたら、木場クンがそげなことを言ったのだ。場馴れしている、と。

「んー……？ 別に木刀を日常的に使ったことはないけど。ただの喧嘩殺法なのよさ」
「まあそれは分かるよ。身体の動かし方に訓練の跡が見えないから、兵藤くんが武術を身につけている、という意味では言っていない」

ただ、と言つて木場クンは不意打ち気味に木刀を投げつけて来た。それも頭に。

「うわっ!？」

何とか左手で握っていた木刀でガンツッ！ と叩き落とす。あにすんだよ？ と睨み付けると、彼は余計に理解を深めたように、何度も頷いている。

「兵藤くん。キミが僕に打たれた箇所は、全部腕や脚等だ。キミは決して、僕に急所にあたる部分を打たせなかつたんだ」

「それはまあ、普通だろ？」

ボツコボコにされても腕と脚なら腫れるか、血が出るか、最悪骨折れるぐらいで済む。ただ一気に継戦不可能になるような頭とか股間とか、そういうところはなるべく守るもんじゃないのか？

「うん、だから場馴れしてると思つたんだ。少なくとも僕は何回か、キミを昏倒させるつもりで後頭部を狙いに行つたからね。余程場数を踏んでるに違いない、と思つたのはそ

ういうことだよ」

なんて酷いことをしてるんだこいつ。さわやかに言っても通用しないぞ、ソレ。

「もう一つ理由がある。成程、逃げに徹するなら急所ばかりを避け続けるのも不可能じゃないのかもしれない。けれど兵藤くんは果敢に攻めてきたよね？」

「じゃなきや訓練になんないでしょうが」

避ける訓練とは言われなかったしな。じゃあ普通に木刀でしばき合うと思うじゃん。

「そこなんだよ。キミは打たれることに關しては全く怯んで無かった。普通なら反射行動で身体が退く筈なのに、それがまるで無かった」

キミ、一体今までどんな生活してきたんだい？　と言外に聞かれてるようだった。その目をやめて欲しい、笑ってるけど笑ってないだらうテメエ。

「……あー、その、なんだ。九頭龍亭つて駅前にあるじゃん？　ンで、（違法な）夜間シフトの時なんかは不良とかのたまり場を横切ったりもするわけだよ」

「ああ、あのですとろい？　高校とかいう……」

いやもう本当にマジでアイツら怖えつての。あんなテンプレ不良が現代日本に生息していることが最早ファンタジーだよって話！

で、なんの問題もなく逃げれる日もあればそうでない日もあるし、なんなら見過ごすと後味悪そうだから首突つ込む日もあるわけよ！

「そのせいで自然と立ち回りとタフネスだけは身に付いてね……打たれ慣れてるせいで感覚麻痺つちやつてさ……」

「あはは……まあ、そういうことなら納得かな。喧嘩殺法つて言つてたのもそういうことだったんだね」

……まあ、その、まあ。それは高校に入つてからの話で。僕みたいな糞凡人が1年ぐらいで剣士ガチ勢の木場クンからの猛攻をある程度防げるようになるわけもなく。こういう危ない橋を渡るのはここ一年間の話では無かつたり。

んー……元気してるかなあ小学校時のガキ大将。あの傍若無人な僕の相棒、引つ越してつたきりまるで連絡が無いからなあ。

「だつたらそうだね……兵藤くん、剣術を習う気はないかい？」

「え、いや遠慮します……」

別にお上品な戦い方をしたい訳じゃない。普通に殴る蹴るの暴行、その辺の石を掴んで殴る投げる、鉄パイプぶん回す方が僕には合つてる……気がする。

「何も本気で修行しろとは言わないよ。ただ、ある程度の技を覚えてたら、キミなら上手く使いこなせるんじゃないかな」

「それはまあ、確かに？」

ということで、僕は木場クンにさせられる形で、残りの時間を稽古に当ててのだった。

【兵藤一誠は、（そうとは知らず）平正眼と縮地の基礎を身につけた！】



【②塔城サンとの組手】

今度の先生は戦車な後輩塔城サン。最初に木場クンと何をやったのかを聞かれ、それならばとこちらは組手をする事になった。

『戦車』の駒は腕力と固さを大幅に上げる。それもあつてか彼女はヤバい怪力の持ち主。その上殴つたらこつちの腕がひしやげるんじゃねえかつてレベルで衝撃が徹らないモンだからやってらんない。あと小柄な体型と駒の特性からくる脚力もあつて、機動力もハンパない。速さだけなら木場クンの圧勝だが、僕としては彼女の方が圧倒的にやりにくいと感じた。

何度も何度もぶつ飛ばされ、何度も地面と熱いキスを繰り返しながら、もう起き上がる回数を数えるのも億劫になった頃に、塔城サンは言った。

「……先輩つて、実はとてもタフなんですか？」

「と、言うとう？」

「……手加減はしています。でもそろそろ朝食が口から出てもいいぐらいには殴つてい

るんですが」

「サラツと凄い告白するよねキミ!? 執拗に腹パンされたのはそれか!!」

腕でガードするのも辛かったのに、その威力のボディブローは普通に死ぬますことよ??? それに体格を活かして懐に潜り込んでくるもんだから避けようがない。

「……最初はそこまでするつもりはありませんでした。適当なところで根を上げると思っていたので。ただ、いつまで経っても平気そうな顔だったから、つい熱が入り」

「そんな風に見える? もう今立つのも精一杯よ?」

まあ気合いで震えも止めてるんだが! 弱さを見せたら負けである、囲まれるからね!
! 時としてハツタリも立派な戦略だ。

「……私の直感ではありますが、先輩は開始30分ぐらいで限界を越えていましたよね」
「時間感覚麻痺ってたから分からないけど、まあ割と早い段階で『もう無理い!』とは思ってたかな?」

「……だけど、そこからも割と平気そうに立ち上がって構えていたと思います。何度か拳も貰いました。ハッキリ言って気持ち悪いです」

「ねえ、ねえ? 僕にも傷付く心はあるんだよ?」

「……7割は褒め言葉です。とりあえず、なりたての転生悪魔としては常軌を逸したタフネス……というよりは精神力が、先輩にはあるんだと思います」

へえ、そうなのかあ、と軽く流しながら水を飲んでるとジト目で睨まれた。本当に分かってんのかコイツ？　って目だ、よくそんな視線を貰うのでよく分かるぞ！

「……とはいえ今のままでは宝の持ち腐れ、です。先輩は、とても軽い」

「んーと、それは物理的に軽いつて意味じゃあないよね？」

そう言うと彼女は小さく頷いた。

「……先輩は攻めまくるといふ戦い方をせずに、カウンターをよく狙っていました。先輩のタフさと噛み合う戦い方なので、これ自体は悪くありません。だけど受け主体の戦い方なのに殴り飛ばしやすかった。これは問題だと思えます」

「ふむふむ」

「……ひとつ、もしかしたら相性がいいかもしれないものを知っています。一先ずそれを覚えて、試してみましよう」

と、言うことで少しだけその相性が良いかもらしい構えを教えてもらう。

「……では、実際に試してみましよう。今から私は、先輩を少し本気で殴ります。それを防いでみてください」

「お、おうさー」

変則的な仁王立ちにも思える構え方で、少し距離を取った塔城サンを迎え撃つ。これ本当に役に立つのか……？　と思ったのも束の間、ザッツ!!　と地面を蹴り、僕の腹目

掛けて拳を振りぬこうとする後輩。

こりやまずい、と何とか間に合った腕を交差させたクロスガードで何とか防ぐ。先程までならば勢いを殺せずに足が地面とバイバイするところなのだが、今回はなんと後ろにザッツ！ つと後退するだけで済んだのだ！ ……腕は先程までと比較にならないぐらい痛いけどな!!

「……思った通り、です」

「すげえなこの構え方……確かに吹っ飛ばなかった」

「……ただ、それが一番の正解とは限らないです。それをベースに先輩に合う構え方を、この合宿中に身に付けましょう」

そうして残りの時間を、僕の構え方を試行錯誤するのに費やしたのだった。

【兵藤一誠は、(そうとは知らず)三戦立ちを身につけた!】



【③副部長の魔力講座 with アーシア】

流石にそのままでは次の訓練には向かわせられない、という塔城サンが見せた慈悲によつて急遽予定が変更となり、僕はアーシアと一緒に副部長から魔力を使う訓練をする

ことになった。ありがとう塔城サン、本当に助かる！

というところで別荘の一室を借りて、僕達は副部長から魔力の簡単な概要と使い方を習うことになった。

そもそも僕は、魔力の使い方は呪文を唱えたり魔方陣を使ったりするモンだと思っていたのだが、それは違うらしい。近いイメージとしては超能力だろうか？ 自分の考えたことを実現する為の力なので、才能さえあれば割となんでもできるのだそう。逆に才能が無ければそもそも魔力を体外に放出することすらも難しいのだとか。世知辛いなえ……。

「魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めるのです。意識を集中させて、魔力の波導を感じるのです」

「ぐ、ぐぬぬ……!!」

ただ運がいいことに、魔力を捻り出すこと自体は（気力はかなり使うもの）出来なくはなかった。多分僕が置換させた『——』も関わってるだろうけど、魔力自体もそこそこある……のかもしれない。手のひらの上にできた真つ赤なサッカーボールサイズの玉を見てそう思う。だが……、

「ぐああ……」

「ううん……魔力を集めることはできていますが……」

力が抜けて、魔力玉が一気に霧散する。僕はどうも魔力の放出が苦手なのかもしれない。

一方その隣でアーシアは、
「できましたー！」

と特に力むこともなく、パパッと手のひらにソフトボールサイズの緑の魔力玉を作っていた。僕みたいに直ぐに霧散することも無く安定している。ちよつと羨ましい。

「あらあら。アーシアちゃんは魔力を扱う才能があるのかもしれないね」

「えへへ…褒められちゃいました」

我がことのように喜び、副部長と、褒められて頬を染めながら照れるアーシア。その絵面のあまりの尊さに思わず目を瞑った。流石観賞用レベル美人同士の絡み、ご馳走様です。……つて尊さで意識飛ばして居る場合じゃないよ僕。

「では、その魔力を炎や水、雷に変化させます。これはイメージで直接生み出すことも出来ます。ですが慣れないうちはまず、実際の火や水を魔力で操作して練習しましょう」
こんな風に、と言いながら副部長が、机の上に置いてある水の入った500mlペットを指さした。

変化は一瞬、バチン！ と弾けるような音と共に中の水がボトルを食い破るように棘だらけの形に変わった。

「うおお……すげえ……」

「うふふ、この辺りは序の口ですわ。慣れてくると……」

そう言つて副部長は右の手のひらを前に出し、先程まで僕らがやっていたように魔力の塊を作り出した……と思つたら、バチバチと黄色い閃光がそこから溢れ出した！

「うひゃあ!?!」

「大丈夫ですよ、力は抑えているので触つても静電気ぐらいの痛さです。直ぐにこのレベルまで、とは言いませんが、魔力が足りていたらこのぐらいいはずれ誰でもできますわ」

そう言つてくれるとやる気も出るといふもの。僕だつて男の子、カッコイイことはいたいお年頃。……もしやリアルドラゴン波を撃てるようになるかとも思うとワクワクもしてくる。

「ではアーシアちゃんは、先程私がやったみたいにペットボトルの水を使つて魔力の操作をする練習に移りましょう。イツセーくんは引き続き、魔力を集め、留める練習を続けましょう。集めるのもイメージなら、留めるのもイメージです。……そうね、普段からイメージしているものなら留めやすいんじゃないかしら?」

普段からイメージしているものかア……それこそさつき想像したドラゴン波でもいいけど、あれは留めるといふより放出だから多分修行内容にはそぐわないだろう

なあ。

「最近イメージしてると言えば……ぐぬぬぬ……おつと!?」

ふと脳裏を過ぎった、僕にこびり付いてる『死』のイメージが、僕の手のひらの中で形を成した。

長く、細いそれは……赤くはあるが、記憶の中にある『光の槍』だった。あはー、そりやそうだよなあ。復讐し終わるまでずっとヤツのこと考え続けてたもんなあ。

ということに変則的な形ではあるが僕も魔力を留めることに成功したので次の段階に進むことができ、胸を撫で下ろした。

けれど、副部長もアーシアもなんだか微妙な表情をしていたのが気になった。アーシアは分かるけれど、副部長も何か、天使か墮天使と因縁があったりするのだろうか？

【兵藤一誠は、魔力槍を身につけた!】

その8

「④部長と2倍重力トレーニング」

修行、特訓と言えば、それはもう『重力トレーニング室』だ。ドラグ・ソボールに触れたことがある人なら真つ先に出る……とは言わずとも、パツと出てくる人も多いはずだ。

まあ、そんなものは僕は持っていないし、流星の部長も持っていない。作れるヒトに心当たりはあるらしいけど、今ここにいないヒトの話を仕方が無い。

なので、

『Boost!!』

「ツシャア！ 僕に掛かる重力を2倍ッ、だア!! では部長、よろしくお願いします！」
 休憩を挟みつつもここまでの訓練で溜まった疲労も合わせて、自分の体重が更に僕に負荷をかける。……ふふふ、今にも倒れそうだけど今から空孫悟もやった重力増加トレーニングをしようと思うと気合いも2倍になるっつものだ。今度森沢サンに自慢してやろう。

「……イツセー。掛かる重力を2倍にする、という発想は素晴らしいものだと思うわ。

けれど、何故今の今までそれを使わなかったのかしら？」

「単純に偽装剥げて身バレしないためですが」

神器は想いの力で強化されたりもするんだとか。一応これでも、命を賭けて臨んでるつもりだからね。何らかの拍子に気合いが入り過ぎて『赤龍帝の籠手』つてバレるとすこぶるマズい。

「だから既に話をしてある部長の前だったら使ってもいいかな、と」

「まったく……警戒心があるのか無いのか分からなくなるわ。私だって万能ではないのよ？」

と言いつつも周囲に何かしらの結界を魔力使って張ってくれる辺り、本当にこの方は優しい。……絶対に、絶対に、命に替えてでもこのヒトの願いを叶えてみせる。

「では手始めに、その岩を背負って山道を往復よ。……でも、ただ負荷をかけるだけなのは芸が無いわね」

そう言つて部長は、手のひらにうすうす魔力を表出させ、そのまま直径で2 mぐらいはありそうな岩に手を触れた。一体何を？　と思つたが、そのまま岩ごと腕を振り上げたことで意図を理解した。

ドスン！　と岩を置いて、特に疲れた様子もなく部長は続けた。

「別に方法はコレでなくともいいのだけど、魔力を使つてこの岩を背負つてみなさい」

「え、えー……。そのお恥ずかしい話、僕はまだ魔力を槍状に展開することしか……」

そう言つてブオン！ と赤い槍を手元に表出させてみる。アーシアが割とサクサク魔力変換を身につけていたのに対して、僕はこの槍を伸ばしたり太くしたり宙に浮かせるぐらいしかできないのだ。これはコレで便利だと思っただけ……。

「あら、そこまで操作できるなら、ちよつとイメージを付け足すだけで解決できるじゃない。後は自由に曲げるイメージがあれば縄の代わりに使えそうよ」

「で、出来ますかね……？」

でも部長が簡単そうに言うから、とりあえず挑戦してみる。表出させた槍を宙に浮かせて……針金を曲げるイメージで……！

若干額に汗が滲むぐらいに気合いを込め、イメージを練ると、なんとか槍がぐにやあ……と曲がり、輪っかの形を取る。いや何とかなったけど、これを維持するのすつげえ疲れるぞ!!

「あら、それはそうよ。疲れることをしないと訓練にならないわ」

さも当然の様にニツコリ笑う部長がおっかない。いやまあやりますけどねえ！

とりあえず槍を浮かせ、太くし、何とか輪っかにする。霧散しないように魔力の輪を慎重に動かし、僕ごと岩を縛るように縮めた。

とりあえずは上手くいったので、何とか背負うように背中を丸める。重力倍加の影響

もあつてえげつない程重く感じるが背負えない程ではない。それよりかは、この負荷が掛かっている状況でかなりの集中力を必要とする魔力操作を並行して行う方がキツイ。では行きましよウッセー。落としたら往復回数を増やすわよ」

トスン、と背負つた岩の上に乗る部長からただの死刑宣告受け顔を青ざめさせながら、僕はいつになつたら終わるのか分からない苦行に身を投じることになつたのだつた。

【兵藤一誠は、魔力輪の形成と集中力を身につけた！】



【⑤ドライブと……？】

結局5回目の往復で成功、もう息も絶え絶えの状態で別荘玄関の前で倒れ込む。流石にあと10分ぐらいは動けねえ……。

「お疲れ様、イッセー」

「へえい……」

もう今日だけでどれだけ地面とコンニチワしたか分かんねえなコレ。口から虹のエフェクトが出てないことだけが唯一の救いである。いやまあ半分は自業自得だけどな、

重力倍加したし。

「じゃあ、そろそろ晩御飯にしましょうか。今頃朱乃達が準備をしてくれているはずだわ」

「りよ、りよーかいで、あふんっ」

身体を起こそうとして、力が抜ける。マジで動けない。手足の痺れもあるし、若干水分が足りてないかもしれない。

「あ、あとから向かうんで先行っててください……身体起こせねえですう……」

「ふふっ、アレだけ頑張っていたもの。仕方ないわね、私がおぶってあげる」

「やめてください、マジで」

思わずガチめの声が飛び出した。自分自身でも驚く程だったからか、僕を上から覗き込んでいた部長はビクリ、と身体を硬直させていた。

「……あ、すんません。別に部長が嫌いだから、というわけじゃなくて、その……流石に無様が過ぎる、と言いますか」

いやでも実際無様ではある。幾ら自分より遥かに強い方つてのが分かっていても、命を賭けると内心で誓った女性に背負われるのは、流石に自死案件。男は見栄の生き物、あたりまえあたりまえ普通普通。

「それに今、僕も汗ダラダラかつ汚れて汚いワケですし、大丈夫ですよ。10分経った

ら無理矢理でも向かうんで、放置してくださいな」

「……………わかった、わ」

何処かしよげた様な…………いや違う、ハッキリと傷付いた顔で、部長はこの場を後にした。言葉のチョイスをミスったのか、それともお家の特性の問題か。もしかしなくてもかなり酷いことをしてしまつたんじゃないだろうか？ ……………この間も恥かかせちゃつたしなあ。

それでも僕は、自分が勘違いしないために予防線を張り続けなければならない。認めではならない、こんな感情。なんとしても己を騙し続けなければ。

「はア…………」

日は沈み、眼前に拡がる空には星が瞬き始めている。ガスの影響が少ないのか、それとも僕の視力が上がったのか、とても綺麗によく見える。

「全く、僕ちゃんはすこぶる弱いなあ…………」

誰もいないというのに…………いや、誰もいないからこそ弱音が口について出る。

コレでもちよつとした自負はあつたのだ。不良相手なら2対1までなら上手に立ち回れてきたし、独力で中級墮天使やぐれ悪魔を倒したことだつてある。だけどどうやら、それだけではまるで全然足りていない。今日の訓練で分かつた、僕は眷属の中で一番弱い。同じ新人悪魔のアーシア相手でも、今の感じだと魔力攻撃で早々に沈められる

未来図が浮かぶ。

いや、眷属最弱なのはまあいいんだ、良くはないけどまあいい。問題は、そんな僕よりも強いメンバーが揃って尚、部長が……と言うより、この早期の結婚に持ち込もうとしている面々が、部長とその眷属ではフェニックスに対して勝ち目がないと考えてることがマズい。現状マジで勝ち目が無いぞ……。

……グレモリー眷属の訓練合宿とは銘打たれてるけど、本当のところは、まだ使い物にならない僕とアーシアを仕上げるのが本命なのはノータリンの僕でも分かる。故に皆が僕らの訓練に掛かりつきりだ……多分これは良くない。僕より強いみんなを、より強く仕上げた方が勝ち目がある、ような気がする。

「せめて、僕が溜めた倍加を他人に付与することができたら悩まなくて済むんだがなあ」
『可能ではあるぞ』

『Dragon booster second liberation』

どうやら僕のボヤキを聞いていたのは僕だけでは無かったようだ。左腕にいる相棒ブーステッド・ギアが呼んでもないのに神器を表出させ、光らせていた。

『赤龍帝の籠手の基本的な能力は、10秒毎に所持者の力を延々と倍加していくことにある。無論、人間が背負える荷物に限界があるように許容量自体はあるがな。だが、それだけでは無い』

「それは一体……」

頭の中が疑問で埋め尽くされる中、左腕の光が収まり、より鋭くなつた姿を表した段階で氷解した。使い方が頭の中に流れ込んできたからだ。

「……『赤龍帝からの贈り物』。僕の力を別のモノに移譲する機能」

なるほどコレなら確かに、僕がさつき言つたように、僕が溜めた倍加の力を味方に分配することができる。……だが、

『ああ。機能自体は解放してやったから、偽装状態でも使えんことは無い。が、たかが2倍では旨みが無い。それはその通りだ』

「じゃ、じゃあ意味ねえじゃねえか。偽装剥げつてか？」

『強要はせん。貴様は必要となれば自分の願望に逆らつてでも剥ぐだろうから、そこはどうでもいい。重要なのは、貴様の手札が増えたということだ、相棒』

こう言い換えよう、とドライグは続ける。

『貴様のよく遊ぶ、トレーディングカードゲームとやらにはこういう言葉があるらしいじゃあないか。手札の数は可能性の数、と』

「！」

『さあ可能性は提示したぞ、兵藤一誠。貴様はこの可能性をどう使う？』

……思考する。ただ倍加するだけでは弱いが、ポイントを絞ればどうだろう？ 僕が

『決殺の手』を使う時は維持をしやすいように強化するポイントを絞る。貫通力だったり、今日みたいに重力だったりだ。それを味方に……………

「……………いや、敵に？」

『…………フフ、フハハ！ 代価を受け取った時にも思ったが、貴様の着眼点にはいつも笑わせられる！』

機嫌が良さそうな赤い龍の笑い声が、脳内に響く。

「でも、なんで。神器は意志力で強化されるって」

『それだけ、貴様がこの戦いに対する意気込みが強いということだ。無自覚では無かるう？ 必死に、必死に、自分を騙そうと目を逸らし続けているのだからな』

「……………ちっ」

癪に障るクソトカゲだ。……………だが、本当に、本当に有難い。

『俺は神器の偽装をより強固なモノにする。そうすればこれからの訓練でも常に使ってられるだろう。お前は倍加の維持と譲渡、そして魔力の操作により一層の力を入れろ。ギフトが解放したことによって、幾らか操作もしやすくなった筈だ』

「アンタ、なんでそこまで」

『貴様が可能性を掴むことを、足掻くことをやめない限り、俺は力を貸す。そういう契約をしただろう？』

だから強くなることを諦めるな、あとトカゲ言うな殺すぞ……そう言い残してドライグの意識は落ちていった。

正確には、それは偽装の許可だけの話だったはず。それでもこう言ってくれてるのは、それだけ僕のことを応援してくれている、ということだった。打算はあるんだろうけど、なんだか嬉しくて目に涙が滲む。

身体を起こし、目を拭う。疲れているが、妙に気合いが入ってる気がする。いつになく暗くなったメンタルも持ち直した。まだ頑張れる、まだ戦える、腐ってる暇なんて無い。

「よし、死んでも勝つぞー！」

『……………ハア』

また浮上してきたドライグの溜息を無視して、僕は意気揚々と別荘に向かうのだった。

【兵藤一誠は、『ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物』を身につけた！】

その9

〔⑥兵藤一誠の心折講座……え、僕!?〕

副部長とアーシアが用意してくれた豪華な夕食……食べたことがなかった猪に豊富な山菜を使った料理を涙を流しながら食べ終わり、これはもう僕も負けてられないな! と本職ラーメン屋店員としてのプライドを密かに燃やしていると、夜の訓練に備えて一度汗を流しましょう、という部長の号令により温泉に入ることになった。もう何も驚かんよ僕は。どんだけ金持ってるんだグレモリー家。

んで、あのドエロコンビならいざ知らず、僕に覗きなんてする理由はないので温泉イベントなのに盛り上がることも無く、死んだよーに湯に浮かぶ僕と背中の流れ合いを提案してくる木場クンという誰得な絵面が展開された。木場クン、今誰もいないからいいけど、間違ってもこの話学校でしないでね? ネタにされるから。なんか最近流行ってるらしいんだよ、僕とキミのカップリング。そういう趣味を否定はしたくないけど自分が巻き込まれると話は別である。ナマモノはダメだろナマモノは。

湯に疲れが溶けたところですがすぐに訓練再開! ……とは流石にならず、ホワイトボードを活用してのレーティングゲームのお勉強を先に挟むことに。とは言っても僕や

アジアに限らず、全員がレーティングゲームが初めてなので、軽く教本の読み合わせという形になった。

「まずこの教本を翻訳するのが大変だったわ……」

とは部長の弁。なんでも教本自体は悪魔の言語で書かれてるらしく、まだそこまでの勉強を進められてない僕とアジアには読めないだろうというところで、わざわざ日本語とイタリヤ語に翻訳してくれたらしいのだ。そうか、話す聴くだけならあらゆる言語を1番聞き馴染みのある言語で翻訳してくれる悪魔の種族特性も文字では意味が無かったね。いやホント、頭が下がる思いですよ……。

教本の内容は至ってシンプルで、レーティングゲームの成り立ち、基本的なルール、各種特別ルール、基本的な立ち回りなどが書いてあって、普通に読み物として面白かった。「とまあ、ここまで読んでもらって申し訳ないのだけれど、今回の対ライザー・フェニックス戦ではあまり役には立たないわ」

「ええーっ!?!」

え、意味無いの!?! 読み合わせした意味!?! と僕とアジアは驚きの声をあげたのだけれど、他の3人は納得、と言った表情だった。

「ふむ、意外ね。イツセーなら分かると思っただけれど」

「ヤダなあ、かなり買い被りですよソレは。僕は至って普通なノータリンで……」

と、ここまで言ったところで気が付いた。この教本の中にはほとんど16人フルメンバーでの立ち回りのことしか書いていないのだ。

「……そもそも人数の少ない僕達では、この基本的な立ち回り……云わば定石を使うことができない、ということですか」

「そういうことよ。でも、それだけではないわ」

「……？」

まだ何かあるのか？ と頭を回転させる。

「ライザー・フェニックス氏が16人のフルメンバーではないということですか？」

「違うわ。彼から送り付けられてきたメンバー表は、全て埋まっているわ」

おかしい、16人フルメンバーなら相手の戦略をここから学べるはず。だがそうでないなら、彼のチームはこの戦略を重視しない、特殊なチームということになるが……。

ここまでできて頭上の電球がティーン！ と点った。

「そうか、王がフェニックス……不死だから、王を取らせないことを前提にした戦略の一切合切が無意味なんですね」

「大正解、ハナマルをあげるわ」

となると確かにこの教本はほぼ無意味である。なら何故これを皆で一緒に読み合わせしたのか、という疑問が出てくる。

「それは決まってるわ。基礎無くして特別なことはできないもの。貴方は土台の無い家に住みたいかしら？」

「それはまあ、確かに……」

そして思い返すと過去の朝練も含めて、今まで部長が僕に課してきた訓練は、全て基礎を固めるソレだったなと改めて気がつく。派手なように見えてとても真面目で堅実なヒトなんだなあ、と感心した。

「ですがそれではゲームに勝てません。何か策があるんですか？」

そう言うと、部長は困ったように苦笑して首を振った。ダメじゃん!?

「もちろん倒す方法が無くはないわ。一撃で諸共吹き飛ばすか、相手の心が折れるまで何度も叩きのめすことよ」

一撃で吹き飛ばせば再生する余地もなく倒せるし、心を折れば精神力が尽き身体の再生も止まる、つまり倒したということになるとのことだ。

「ということ、朱乃とイツセーに相談があるのよ」

「なるほど、承知しました」

「え、え？」

何故に僕？ あと何でまだ何も言われてないのに分かったように頷いてるんですか副部長？ という疑問で頭が埋め尽くされたところで助けを求めよう周囲を見渡

す。木場クンは苦笑、塔城サンは無表情ながらどこかゲンナリとした様子。あ、アーシアごめんね、こんな視線向けられても困っちゃうよね？

「ああ、そういえばイツセーはまだ知らなかったわね。朱乃は、オカルト研究部の中では右に出るものはいない程のDSよ」

「うふふ…♡」

「ひ、ひえええ…」

特に怒るでもなく、意味深に嗜虐的に微笑む副部長を見て察した。あ、コレはガチなヤツや。

「な、ななな、なるほど。そそそういうことなら副部長という人選は分かります。で、でもそれじゃあ何で僕も一緒に選出されてるんです？ 僕別にSでもMでもありませんよ」

「あら、最初にライザーの社会的信用を落とすことで婚約破棄を狙おうとしたじゃない」「そういえばそういうことも言いましたねえ!!」

完全に過去の自分が今の自分の首を締めに来ている。おかしい、木場クンと塔城サンの僕を見る目が完全にドン引きしてるソレだ。アーシアもなんだか混乱しちやつてるし！

「イツセー……私は、貴方のそういう悪魔よりも悪魔な発想に期待しているわ。是非、私

に力を貸してくれないかしら？」

「う、うううう……！」

やめろよそんな上目遣いしないでください思わず絆されるじゃあないですか!!

「……分かりましたよ、心を折る案を出せばいい。そういうことですよね？」

「ありがとうイツセー、助かるわ！」

と言つても、今の情報だけだとパツと出せるのは一つしかない。

「要は心が折れたらいいんですから、わざわざ再生するまで傷を負わせる必要はないでしょう。再生する以上、死はある意味逃げ道です。となると、精神に作用するような拷問がベストかと思うんですが、どうでしょう副部長？」

「なるほど、それはいい着眼点ですわねイツセーくん。ですがまず相手を拘束しないといけない以上、それはあまりにも非現実的です。ここは痛みに慣れないようにあらゆる手段で1回ずつ痛めつけていくのが、無難ではありますが確実に思いますわ」

「んー、そうなんですけどねえ。なんか相手の意識だけをどこかに飛ばす幻術みたいなのがあれば拘束する必要もないんですが、実は副部長、そういうのできたりしません？」

「あら、それはいいですわね！ 意識だけの幻術なら、決まりさえすれば相手の抵抗を気にする必要はありませんし。となるとどんなセッティングがいいかしら……？」

「時間の感覚を失わせるのが発狂も狙えていいと思います。時計だらけの部屋とか音が響かない無響室とか」

「うふふ、中々の逸材ですわねイツセーくん。でも気を銜わずに五感を1個ずつ奪っていくのもありかもしれませんわ」

「っ！なるほど確かに、勉強になります」

「あの、待ってちょうだい。拷問談議の時間だったかしら??」

いや別に、拷問の話をしてはいませんか？ と副部長と顔を見合わせる。心を折るという手段が拷問になっただけだ。

「これでも性的に辱めさせないって良心はあるんですよ？」

「待って、待ってイツセー。それは良心とは言わないわ、当たり前のことよ」

「恋と戦争は全てが正当化されますわ、部長」

「レーティングゲームは戦争遊戯ではあるけど戦争そのものではないわ、戻ってきてちょうだい朱乃！」

そんなにおかしなこと言ってるかなあ…。言っていないと思うけどなあ。

「自分の敵は自分が死んでも嫌がらせしたいだけなのに」

「と、とりあえず今日はここまでにするわ！ さあ、外に出て準備運動から始めるわよ！」

若干消化不良のまま、僕らはジャージに着替えて次の訓練に備えるのだった。
 「グレモリー眷属は、外道の心得の基礎を身につけた！」



【⑦そして自己訓練で……】

昼間よりも一層厳しい訓練……それでも昼間よりも動きがいいのは、やはり悪魔が夜の生き物だからなのか、それとも「――」と「――」がさらに身体に馴染んできたからなのか。調子に乗って張り切り過ぎた結果、身体が動かせないギリギリまで疲弊してしま

う。

ここからは自由時間並びに就寝時間である、と聞いた時点で力が抜けかけて倒れそうになった。時間は夜の1時。一日二日寝なくとも問題無い悪魔ボディであるが、今日は寝たい、流石に寝たい。明日の朝もまあ早いし、汗を流してさっさと寝たい……。

……だと言うのに、何故僕は外に残って神器を使う訓練をしてるんだろうか？ 別に誰に言われたわけでもなく自主的に、だ。

『Transfer!!』

「ぐっ……！」

今やってる訓練はその辺の木に幾つか軽く傷を付けて、その『傷』に譲渡をする訓練だ。だけど中々上手くいかない。自分の身体や、掛かる力などに対して細かく指定を付けて倍加するのは息するようにできるようになったが、他者、自分の影響下にない物に対して倍加を付与すると、途端に難しくなる。細かい指定ができないのだ。

「…だが、できんことはない。難しいだけだ」

今のところ、10回に1回の成功。譲渡に成功した傷は、ほぼ2倍の大きさに拡がり、効果が切れた後もそのままだ。確実に成功できるようにすれば、これはとても使える手札だ。

「感覚自体はそう自分でやる時と大きく変わらない……イメージとやることを、より明確に……」

『Boost!!』

『Transfer!!』

ピシリ、と傷の拡がる音がする……成功。この感覚を覚えて、もう一度……!

『Boost!!』

『Transfer!!』

『Boost!!』

『T r a n s f e r !!』

『B o o s t !!』

『T r a n s f e r !!』

『B o o s t !!』

『T r a n s f e r !!』

『B o o s t !!』

『T r a n s f e r !!』

……で、気がついたら空が青白んでいた。

「……………まあでも、モノにした感じではあるな」

少し満足げに、自分の努力の跡を見る。大きくしていった傷は、最早傷ではなくなっていた。塵も積もればなんとやら、雨垂れ石を穿つように、木は伐採されていた。

さて、多分時刻は5時はまわっていない……はず。ならばせめて1時間は睡眠時間を確保するために一刻も早く汗を流しに温泉に向かわねば……！

せめて寝てる人を起こさないように、こつそりと僕は温泉に向かうのであった！

【兵藤一誠は、讓渡のコツを掴んだ！】

その10

【⑧職業病とは言うまいが】

合宿2日目、さあ気合を入れて訓練だ!! という僕の意気込みをコケにするかのように、今日の午前中は勉強の時間となった。レーティングゲームとか関係無く。

「ちゃんと公欠扱いで休みをもぎ取った代償よ。あなた達の普段の生活も蔑ろにするわけにもいかないし」

とのこと。そのため各教師から集まった課題が積んだか積んだか。合宿の後、これとちゃんと提出することが公欠扱いの条件らしい。12日間分の量を1日分はこれだけ、とちゃんと勉強する習慣を途切れさせない配慮済み。ちよつと変な先生もいるけど、そこは流石の私立進学校駒王学園。ありがたいやらしんどいやら。

つーかうチのボスの根回しの手早さ半端ねえな。え、合宿の為にまず公欠申請で教員達に話を付けて、その上で九頭龍亭でも話付けてるんでしょ? しかも半日やそこらで。やばあ…。

「それだけじゃなくて、僕らの契約業務の委託も済ませてるからね」

とこっさり耳打ちする木場クン。ただのやり手じゃねえか!! なんて学生やってん

のか分かんなくなるぜ部長。

しっかし、まあ……なんというか。勉強は得意じゃないんだよなあ。何やつても気持ち悪いくらい平均点だし。そう思いながら三角関数と格闘する。加法定理とか覚えんのダルいよお……。

課題自体は参考書や辞書片手に問題を解けるので苦労はしないが、後で復習はきつちりしないとなあ……と思う。したところで平均点っていう事実は見ない振り。

「あー……終わったー」

と一息つき、肩を回す。僕以外はみんな成績の方も優秀らしく、早々に今日の分の課題を終わらせて、まだ日本語に明るくないアーシアの先生をしていたり、自習時間に宛てていたり。最初入部する時も思ったけど、中々場違いが過ぎないか僕ちゃん。気にしちゃ負けだ。

あーあ、神器使って頭良くなったりしないかな？ でもそういうズルは趣味じゃねえな。もつとこう、誰かの度肝を抜くような……。

「……………ぬみい」

身体に不調をきたさないと眠くはないのは別の話。結局1時間しか寝てないしね。ショートスリーパーではないし、仕方がない。寝ていいかは別だが。

仕方がないので目覚まし代わりにキッチンに立つ。というか厨房に立たないと落ち

着かない。一応ラーメン屋店員なのでチャーハンとか餃子とか得意だけど、女性比率高めの空間で許可なくニンニクの匂い充満させるのは申し訳ないから………お好み焼きでも作るか。

まず冷蔵庫からキャベツを出し、あらみじんにする。ひと玉切り終えたらボウルに避けておく。芯は捨てずに袋に入れて冷蔵庫にしまう。結構だし取れるからねコイツは。

次に新しくボウルを用意して、そこに薄力粉と水と、木綿豆腐があつたのでそれをレンチンして水を飛ばし、それも入れてダマが無くなるまで練るように混ぜる。混ぜたら卵を割入れてさらに混ぜる。

鰹節……は無いね、じゃあ和風の顆粒だしを生地のボウルの方に入れようか。あとはこれは……山芋っぽい根菜だ。多分誰かが採取してくれたヤツ。こいつもすりおろして入れる。

先に切っておいたキャベツを生地のボウルに投入、よく混ぜる。

豚肉……はないから、昨日の余りっぽい牡丹肉を使うか、ちいとばかし贅沢だが。取り出して適当にカットしていく。

ホットプレートは……無いね、関西じゃないと一般家庭では中々お目にかかれないし仕方がない。デカ目のフライパンを用意し、サラダ油をひいて暖める。

あつたまつたところで生地をお玉を使ってフライパンに乗せていく。勿体ないので3枚ずつ焼いていくか。この時牡丹肉ものつけることを忘れずに。

4, 5分焼いたらいい感じに焦げ目が着くので、フライ返しで裏返す。もう4, 5分焼いてももう一度裏返せば、ちよいふわお好み焼きの完成である。

「よし……あつ」

『『……………』』』

と、ここでキッチンの向こうからの視線に気がついた。めつちや皆に見られてた。と
 いか勝手に料理してたの実はやばくない？

「えつとその……勝手に料理してすみませんでした」

「……………いえ、それは別に問題無いわ。元々料理当番はローテーションで回していく予定
 だったもの」

ただ、想像以上に手馴れてることに驚いたとのこと。いやねえ皆々様方、一応これでも飲食業やってますのよ？ まあ関係あるの包丁さばきぐらいだけど。

「じゃあその……………コレ、食べます？」

『『是非』』』

お好み焼きは概ね好評だったが量が少なかったもので、さらに生地を作って焼いていくことになるのだつた……。次合宿するようなことあつたらホットプレートを買って

持ってこよう、そう心に誓った。

「オカルト研究部は、お好み焼きの基本的なレシピを学んだ！」



【⑨アーシア先生のパーフェクト^{エクソシスト}悪魔祓い教室】

昼食後、ふと疑問に思ったことを口にしてしまった。

「同陣営とはいえ敵は悪魔だし、もしやアーシアって悪魔に対する有効的な攻撃方法知ってたりしない？」

と。実際に悪魔祓いっているらしいしね。

そう言うのと、思いの外皆の興味を引いてしまい、急遽アーシア先生による悪魔祓い講座が始まることになってしまった。

「で、では…僭越ながら私、アーシア・アルジェントが悪魔祓いの基本をお教えします！」
むん！ と気合を入れたアーシアがとても可愛い、癒される。

「まずは簡単に、どんな悪魔祓いがあるかを説明します。私が属していたところでは2種類の悪魔祓いがありました」

そう言ってアーシアは、持っていたバックから2つほどものを取り出した。1つは水

の入ったビン。もう一つは……『The holy bible』、つまり聖書だ。僕含めて若干皆の身体が後ろに引いた。

「一つはテレビや映画などでもよく見る悪魔祓いです。神父様が聖書の一節を読み、聖水を使い、人々の体に入り込んだ悪魔を追い払う『表』のエクソシストです。こちらはどちらかと言うと良くないものを祓う、といった面が強い為、皆さんにとってはそこまでする驚異ではありません」

もちろん聖書の一節を聞いたり、聖水に触れちゃうと痛んだりしますけどね……と乾いた笑いを浮かべるアーシア。成程、さてはやったな？ まあ僕も清めの塩触ってジユッ！ とやったから人のことは言えない。

「問題はもう一つ、『裏』の悪魔祓い。基本的に人間社会で日の目を見ない、真の意味でのエクソシストが、悪魔の皆さんにとつての驚異となります」

真の意味でのエクソシスト……普段は柔らかかほんわかかな雰囲気振り撒いてるアーシアが顔付きを鋭くさせてる時点で脅威度を察した。警鐘もその通りだ、と軽めにリンゴン鳴ってる。

「彼らは、神さまや、堕天使さまに祝福されたことで、その光の力を借ります。そうすることでも人並み外れた身体能力を持つ悪魔に迫る程の力と、悪魔を祓う力を得ます」

凄腕のエクソシストになると、下手な下級悪魔なんか相手にならない程の強さなのだ

とか。ひええ、おつかねえ。

「……イツセー、まるで他人事みたいに怯えてるけど、あなたは一步間違えてたら裏のエクソシストと交戦していた可能性があるのよ?」

「……………へ?」

「アーシアの説明を聞いていたでしょう? 裏のエクソシストが力を借りる相手は神だけではなく墮天使も。もつとも墮天使に力を借りるようなエクソシストなんて、教会から破門された真面とは言えないはぐれエクソシストなのだけど」

え、マジで? とアーシアの方を向くと、神妙に頷かれた。ま、マジかよ……。

「はい。……私のように、教会から追放された聖職者が頼る先は、ほとんどの場合墮天使の陣営、『神の子を見張る者』です」

だからかあ、と納得する。あの時アーシアは赴任、と言っていたけれど、墮天使のところに身を寄せようとしていたということだったんだな。あの時の僕、超グツジョブ。神器を抜き取るとか言ってた気もするし、スルーしてたらアーシア殺されてたよねコレ。

「……………」

「……………」

と、ここで二人ほど様子がおかしい事に気が付く。副部長は悲しげで何処か複雑な表

情をしてるし、木場クンは……目に力が籠っているように思う。あの目を、僕は見たことがある。あれは――

「さー、それを踏まえた上でどんな対策をすればいいか、教えてもらえるかしらアーシアア？」

空気を替えるように、パン！と部長が手を叩いた。様子のおかしい2人に、辛い過去を思い出したのか暗かった表情のアーシア、それと……堕天使に殺された経験のある僕の意識が戻ってくる。

「あ、はい。私たちは裏のエクソシストのように光の力を借りることができませんから、一番使いやすいのは、聖水などの物を使った悪魔対策がいいと思います」

そう言ってアーシアは手袋をはめて、カバンの中からさらに物を取り出す。今度は、十字架だ。見てるだけで若干嫌な気持ちになるのは、悪魔だからだろうなあ。

「こういった一般社会でも扱える聖なる力のこもった物は、大きく分けて3つに分けることができます」

そう言って、アーシアは今取り出したばかりの十字架のネックレスをテーブルの上に置いた。

「まずこの十字架のような、形に力がこもるものです。形にしつかりと意味がこもってれば、そこに力が宿ります。像や宗教画などもそうですね」

次に水の入ったピンを示す。話の流れからして、これは聖水なのだろう。

「こちらの聖水は、後から聖なる力をこめたものです。形に意味が無いものでも、特殊な工程を踏むことで聖なる力をこめられるのです」

最後に聖書を示す。

「最後に、聖書のように読む、口にする、聴くことによつて、そこに力が宿るもの、です。ここに書かれた神さまの言葉に力が宿っている、と言い換えてもいいかもしれません。触ったりなぞつたりしても特に何もありませんが、読むなどの行為をすると力が宿るようです」

と、ここまで説明したところで、アーシアは聖水の入ったピンを手のひらの上に乗せた。

「恐らく一番効果が見込めて、尚且つこちらの被害がほとんどないものは、聖水だと思います。作ること自体は悪魔の私でもできましたし、触れなければ何も痛みはありません」

今からその作り方をお教えします。そう言つて彼女はテーブルの上に何かしらの材料と道具を広げ、実演した。

僕は確信した。この情報は、とても使える。

「オカルト研究部は、聖水の作り方を身につけた！」

その11

「朱乃サン」

「はい。どうされましたか、イツセーくん？」

「魔力を使ってやりたい技を考えました。1つは、水に魔力を潜り込ませての操作を、完璧に、完全に仕上げたいと思います。これはそのイメージを纏めたノートです」

「……成程、よくできていますわ。それならば……紅茶の淹れ方を教えますので、毎食後に準備して頂いても大丈夫ですか？」

「はい、分かりました。ありがとうございます。それと、もう1つが……」

「……………正気ですか？」

「はい、やると決めました。僕が、ライザー・フェニックスを倒します」

「……………私からは、やらない方がいい、と言わざるを得ません。ですが、可能か不可能かで言えば、可能でしょう。……こちらの本が、参考になると思います」

「ありがとうございます」

「ですが約束してください、絶対に死なないでくださいね、イツセーくん。死んだら、私も、皆も悲しみますわ」

「……………考えておきます」



「…………先輩、気配を読むのが上手くなりました?」

「元々危ないことが起こりそうになったら第六感が働くタチでね、慣れたらこんなもんだよ。超痛いけど」

「…………じゃあ、あと教えることは拳の打ち方ぐらいかも知れません」

「お、マジすか小猫ちゃん?」

「…………打撃は、体の中心線を狙って、的確かつ決り込むように。今のイツセー先輩は、支えがしっかりしています。流石に私程、とは言えない。ですが、戦車や女王にプロモーションすれば、あるいは」

「支え、中心線、決るように…………」

「…………格闘技とは、突き詰めていけば力の使い方、それに尽きます。巧ければ巧い程、小さな力であつても大きな敵を打ち倒せます。コレは、弱者の技術なんです。先輩を単なる弱者と評するのは間違つてると思いますが、多分ピツタリだと思います」

「うん…………そうだね。ありがとう、小猫ちゃん」

「……また、ラーメンを奢ってください。では、もう1セットいきましよう」



「フンっ！」

「おっと!!」

「シイツ!!」

「……つと、と。とうとう一本取られたね」

「ふう……いやあ長かったねえ。いやはや、アンタ速すぎんぜ祐人クンよオ。ちよつとした隠し技切っちゃったじゃねえか」

「そう、それだよ。いつの間に震脚なんて身につけたんだい?」

「あんまり褒められたもんじゃないよ。ほれコレ。神器で地面の揺れを2倍にしてな」

「ふむ……面白い使い方だね、勉強になるよ」

「ん? でもお前の神器って……」

「うん、普段は手の中に生み出したり、撃つように作ってたんだけれど……ほら」

「わっ!! 驚かすなよビビったじゃんか! ……でも、成程これは考えたね」

「僕もイツセーくんにかけてられないからね」

「よく言うよ、僕よりめちやくちや強いくせに」



「……………これで、どう!？」

「はい、確認しますね……………はい、しつかりできてます。成功ですよイツセイさん!」

「良かったア……………もう途中から心折れそうだったもん!!」

「ふふふ、イツセイさんなら必ず出来るって信じてましたよ。……………ですがイツセイさん、これはどう使うんですか?」

「ちよつと考えたんだけど、これを魔法瓶の水筒に入れようと思うんだ」

「水筒、ですか?」

「そ。ちよつと考えてることがあつてね。あとは普通にぶつ掛けやすいように大小ガラス瓶に詰める予定でもあるけど。ルールだと著しくゲームのバランスを崩すようなアイテムじゃなければ持ち込めるって言うし、使えるものはなんでも使おうよ」

「……………あの、イツセイさん」

「ん?」

「無茶は、しないでください。またあの時みたいに、自分の命をかけるんじゃないかって

不安で……」

「……んー、まあ、戦うわけだし、無茶はどうしたってすると思う。けど自滅覚悟みたいなことはしない、と思う」

「断言はしてくれないんですね……」

「……すべきことをする。ただそれだけだよ、アーシア。君も、皆も、僕も」

「……そうですね、分かりました。私も、すべきことをします。絶対に、皆さんを死なせません」



皆とも仲を深め合つての合宿。その最終日、14日目の夜。明日の朝、僕らは駒王町へと帰り……その夜、ライザー・フェニックス氏とその眷属と戦うこととなる。

やるべきことをやりきった、とは言えない。タラレバを言えばキリが無い。それでも、それでも僕は、やれることは全てやったし、悔いはないと言いきれる。まあ、まだ負けてないから言える台詞なんだからね。

明日に備えて今日は軽く模擬戦と連携の練習をしただけ。疲れを残さず、共に食卓を囲み、共に湯に浸かり（流石に男女別）、共に床につき……そして僕は寝れなかった。遠

足前日の小学生のような面持ちだ。

「~~~~~」

建屋の外に出て、座り込み、夜空を眺める。時刻は12時、人里離れたこの場所で、明かりは月の光と瞬く星のみ。自分で淹れた紅茶の入った水筒を片手に、機嫌良く鼻歌なんて歌いながら。

こうしている間も、最後の調整は欠かさない。神器を片手に、視界に入った色々な物を2倍にしては元に戻していく。最初はかなりの集中力を使ったが、今では息するようになれる。継続は力なり、なのだ。努力は人を裏切るかもしれないが、身についたものは自分を裏切らない。まあ、僕は悪魔なんだけれど。

「随分と機嫌がいいわね。こんな夜中に何をしてるのかしら？」

そして、そんな僕に背後から声を掛けるのは、同じく寝られなかったであろう部長。振り返れば、憂いを帯びた美人の顔が、月明かりに照らされて非常に幻想的であった。眼福眼福、流石観賞用。

「夜中に何をしてるとは、悪魔の台詞とは思えませんねえリアス部長」

くつつつと笑い、紅茶を一口含み、口の中を潤す。

「そりゃ機嫌だつて良くもなりますよ。……この2週間、いや、悪魔に転生したその時から、本当に得難い経験をさせてもらいました。心の底から、楽しかったんです」

「まるで、それまでが楽しくなかったみたいない方ね」

「全く楽しくなかった、と言ったら嘘になります……まあ、自分で掛けた強迫観念に縛られていましたからね。今思うと息苦しかったのかもかもしれません」

一呼吸して、空を見上げる。

「ごめんなさい、部長。僕はあの病床で、1つ貴女に嘘をつきました」

「……それは、どんな？」

「僕は、僕の思う普通あたりまえのことをしましたと言いました。その後にはぶちまけた心の動きも含めて、それに関しては、何一つとして嘘はありません。ただ、『分からないですよ』と僕は言いました。その一点のみ嘘です。本当は、どうして僕がこんなことになってるのか……こんな風に生きているのか、自覚はしています」

兵藤一誠は、成長と無縁の存在である。正確には、成長を実感できない存在である。「僕は何やつても平均ド平凡で、どれだけ頑張っても、どれだけ手を抜いても、結局収まるところに収まってしまふ、どうしようもない、クソみたいな生き物です」

どれだけ上を目掛けて足掻いても一向に浮きも沈みもしない。身体は大きくなるのに、知識は積み重なっていくのに、なんにも変わらない立ち位置で、どうやって成長を、変化を実感しろというのだ。あの優しさの塊みたいな両親は品行方正だと褒めてくれる。先生もそうだ。周りだって僕が極端に落ちこぼれじゃ無ければ馬鹿にはしないだ

ろう。

このザマが、何より許せなかったのは自分だ！ 何も変わらない自分だ！ 誰にも誇れない自分だ！ 語る中身が何も無い自分が、自分のことを何よりも無様だと思っていた！ 何度も、何度も何度も何度も、腐りかけては踏みとどまるの繰り返しだ！ こんなんじゃ…屑に成り果てることすりやできやしない！

「ですが、だからって単純に諦められないじゃないですか。そんなどうしようもない生き物だなんて認められないじゃないですか。だから抗おうとしました。いいじゃないか、そんなに僕が異常どうしようもなくへいほんな普通なら、個性ある普通いいひとになってみせるって。必死に、必死に中身を詰めようとなりました。誰かに誇れるような自分になりたいと、ずっと足掻いていました。人当たりよく、誰かの力になれるような、良い人に…語る中身のある良い人になりました。人当たりよく、誰かの力になれるような、良い人に…語る中身のある良い人になりました。」

「……………」

「お人好しだなんてとんでもない、極めて利己的だ。誰かを助けようと心の底から思ったことは否定できないけど、それだつて自分の中の語る中身を増やすためだ。……そう考えると、余計に自分が嫌になつて、卑屈になつて、どんどん意固地になつていききました。自分で自分を追い込んでおいて、世話がないですよね」

だから、実はうつすら思つたんですよ。墮天使レイナーレに目を付けられて殺された

のは、天罰かもしれないって。生き汚く抗っておいてなんだけど、もしかしたらそんなんじゃないかって。

でも、僕は貴女に救われました。

「救われたのは命だけじゃありません、本当です。墮天使からみつともなく逃げて、怯えていた僕を落ち着かせてくれたあの時の暖かさを、僕は死ぬその時まで忘れません。悪魔に生まれ変わっただけじゃなくて、本当の意味で僕は変わりました。忌まわしかった普通が、実は本当に得難いモノだと認識出来ました。心の底から、本当の意味で、誰かを救いたいと思いました。そして今、心の底から、誰かの力になりたいと、全力で頑張っている僕がいます」

この合宿で、僕はかなり力がついたと思う。結局それも、大きな括りで見たら平均的なソレなのかもしれない。それでも、僕は自分が成長できたと、胸を張って言える。誰かに誇れる自分に、少しでもなれたんじゃないかと思ってる。語れる中身はまだ無いかもしれないけど、それでも僕は、僕自身に対して胸を張れる。

「こんなこと言うと、下僕悪魔として大失格もいいところかもしれないと思うのですが、それでも言わせてください。本当に、本当にありがとうございます、リアス・グレモリー

さん。僕を変えてくれたヒト。故に僕は全力を尽くします。主人だからでもなく、悪魔だからでもなく、僕は貴女のために、この戦いに挑み、勝ちます。絶対に、何があろうと、絶対に」

「……………イツセー、私は、」

パン！ と手を叩き、遮った。

「さてさて、夜も遅いですしそろそろ寝ましょう、部長。絶対に明日、勝ちましょうね！」
立ち上がり、その場を後にする。絶対に振り返らない。こんな顔、絶対に見せられない。

時刻は0時を過ぎた。決戦の日だ。

「……………死ぬには良い日だ」

『本当にか?』

「ああ、本当だとも」

惚れたあのヒトのために、貰ったこの心臓を、命を、心を燃やせるんだ。良い日ではなくてなんという？

その問い掛けに左腕の相棒は答えず、ただ心底愉快そうな笑いだけが響いていた。

その12

「ふう……ふっ」

時刻は21時、僕は家の自室で最後の準備をしていた。あと1時間後にはゲームが開始するから、もう後20分ぐらいで家を出なければならぬ。

服装は自由とのことだ、ならいつものように赤いパーカーとジーンズ……にしようかと思つて、やめた。だいたい皆制服をユニフォーム代わりにするつて言つてたから、空気を読んで……んーでもやはり僕と言えばパーカーだし……と、悩む。結局制服を着る、但しブレザーの下に着るのは赤パーカー。要は折衷案と言うやつだ。

少し大きめのシオルダーバッグを背負う。中には水筒やら水の入つた瓶やら10秒メシゼリーやらの小道具。脚にはナイフホルスターを巻き、その中にはウチの騎士が作つてくれたミリタリーナイフ型の魔剣。

「ここにあと拳銃かなんかあつたら、学生ヒットマンみたいな感じでかつこよかつたかもなあ」

『今の貴様には余分だろう』

「言つてみただけー」

左腕の相棒は相変わらずだ。茶々を入れるのかと思いきや、世話を焼くように助言を残していく。コイツとも会話をするうちに、幾分か打ち解けた……と思う、多分、メイビー。

『神器の最終調整もしっかりしておけ。一応偽装は何時でも剥せるようにしておく。切り札を切らない限り劇的に変わるわけではないが、ダメ押しには使えるだろう』

「あいよ。ちなみに切り札はどうやって使えばいい？」

『10秒寄せ、と俺に言え。そうすれば、お前の全身を鎧が覆うはずだ』

「うい。ま、使わんだらうけどね」

あくまで最悪の場合である。そうならないための準備もしてきたわけだしな。そう思いながらカバンをパンと叩く。

「なあ相棒殿よ、僕らは勝てるかね？」

『相棒、お前は勝つのだろう？ ならばその問いは無意味、無駄だ。後でどんな風に土下座するのかだけは考えておくんだな』

お前には無理だ、と言われたことを思い出す。そうするとなんだか嬉しくなってしまう。少なくとも、僕の中の相棒は、無理だとは思っていないのだ。

神器を起こし、左手に纏わせる。翠の宝玉がついてるだけの、色以外は質素な籠手。

握って、開いてを繰り返し、そして動作確認を行うように、自分の各所を倍加しては戻

していく。

「思考力…視力…聴力…触覚…腕力…脚力…」

順番に繰り返していき、最後に痛覚を2倍にして、戻す。もう譲渡の感覚も、自分の強化を割り振るようにできるようになったので、最終調整は自分の身体で試すだけいい。

「うん、異常なし！ 我が心に一点の曇りなく！」

緊張する段階はとつくの昔に越え、もうあとは雪崩のように崩れるだけだ。ヤケクソとも言う。

もうどこにでもなれ！ って感じで踊ってたら、コンコンとノックの音が。

「イツセイさん、入ってもいいですか？」

「おう、いいよー」

声の主は、アーシア。僕と同じく自室で準備をしていたはずだが、まあ終わったんだろう。ドアを開けて入ってきた彼女も、僕と同じく学校の制服を着ていた。そのことに、若干僕は驚いていた。彼女は部長に、シスター服でも構わないか？ という旨の質問をしていたからだ。

「あ、制服にしたのね？」

「はい。……情けないことかもしれませんが、悪魔になった今なお信仰を忘れたこ

とはありません。でも、私はすべきことをするために、皆と一緒に試練に立ち向かうために、1つの区切りを着けなければならぬ。そう思ったんです」

服装一つ、とは笑えない。誰にだって笑わせない。その覚悟に、僕は敬意を表する。誰にだってできることじゃないから、今までの自分を乗り越えることなんて。そのことを、僕はよく知っている。

「とは言っても、まだちよつと怖くて震えてるんです。情けないですよね……」

それは、そうだろうと思う。怖くない方がどうかしている。僕はそのどうかしてる方だ。それでも、その恐怖を飲み込んで立ち向かおうと気丈に振る舞う姿は、どう表現したって情けない、なんてことは無いはずだ。

「いいや、今のアーシアは超カッコイイよ。少なくとも僕なんかよりもね。恐怖を感じないことよりも、恐怖を乗り越えようとするこの方が、何倍も、何十倍もカッコイイに決まってる」

「そう、でしようか?」

「うん。だってそれは、アーシアが逃げない証拠なんだから」

そう言つて、僕はアーシアの手を握つた。……僕には、アーシアを必ず守ると言い切ることはできない。けれど、せめてこうすることで少しでも震えが収まれば。

「……ありがとうございます、イツセイさん。えへへ、勇気を貰っちゃいました」

「どういたしまして。さ、そろそろいい時間だし、家を出ようか」

いざ決戦の地、駒王学園へ！



待機室代わりとなっている旧校舎のオカルト研究部。21時40分頃にはもう皆集まって、始まるその時まで思い思いの準備をしていた。

まあもつとも、僕はもうやることやっちゃったので椅子に座り、精神統一を図っていた。やることと言えば……

「目、鼓膜、鼻、舌、神経、第六感……」

「何物騒な発言しているのよ……」

「あ、部長」

五感+ α を潰す練習をしてると部長が呆れたように声を掛けてきた。

……あの後から、僕は部長に対して壁を作っている。話し掛けられる隙を一切見せなかったし、作らなかつた。が、今まさに自分の手脚をもぐ練習をしていた為に隙ができてしまったようだ。ウカツ!!

「結局朱乃サンの幻術で五感を剥ぐところまではいかなかつたですけど、それはそれと

して現実世界で五感を剥ぐことを諦めたわけじゃないですから」
「何やってるのよ二人とも……」

視界の端で紅茶を嗜んでる朱乃サンが、こちらに気が付いてうふふと笑っている。彼女も彼女で次なる一手を準備していたので期待が持てるどころ。心を折るのは僕の方に軍配が上がるが、再起不能という点に於いては、僕は彼女にはまだ勝てない……くつ。「それに相手の三半規管イジれたら割と優位に立てますからね。目標は、恐らく大量に持ち込んであるであろうフェニックスの涙をまともに使えない状況に持つていくことでしょうか。長期戦なんて絶対に許しません、殺す。嫉妬やない」
「思い切り嫉妬じゃないの……」

フェニックスの涙とは、フェニックス家のみが製造できる、どんな傷でも即座に癒すことのできる反則じみた回復アイテムだ。レーティングゲームでも使用が許可されているらしいけど……ええ、そんなんアリか？ とルールブック読んで思ってから、絶対フェニックス家だったら沢山使ってくるだろ、という考えに至るまで時間は掛からなかった。僕が水……というより魔力による液状の物の操作を完璧にこなそうと思った理由もここにある。まともに使わせたら負けだ。

そのこと自体は皆にも伝えてあるので、各々対策を講じている。長期戦は僕らにとつては不利だ、長引かせる要因はなんとしても潰さねばなるまい。

「もうちよつと聖水の作り方が上手く出来たら、相手のフェニックスの涙を聖水処理して毒殺する、なんてこともできたのですが……現実のままなりませんね」

「まず悪魔が聖水を使おうと思うことに疑問を持ちなさいよ……いえ、今回ばかりは私達も人のことは言えないのだけれど」

そうなのだ。取れる手段はなるべく選ばない、をスローガンにんだかんだで皆アシアや僕の作った聖水を所持していたりしている。若干複雑そうだけど、まあ僕がデモンストレーションで見せた聖水の使い方を見たら、一応持つておこうって気にもなるよねえ……我ながらあれば酷い物を作ったと思う。そう思いながら、カバンの中に入った聖水入りの水筒に思いを馳せる。

「……あのね、イツセー。昨日の、」

と、ここで21時50分となった。床の魔法陣が光り、そこから2週間前に此処で遭遇したメイドさん……グレイフィアさんが現れた。詰めが甘いですねぇ部長。

「皆さん、準備はお済みになられましたか？ 開始10分前です」

その場にいた全員が彼女の方を向き、頷く。それを準備完了と受け取ったグレイフィアさんは、これから始まるレーティングゲームの説明を始めた。

「開始時間になりましたら、この魔法陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。そこではどんな派手なことをしても構いません。使

い捨ての空間ですので、思う存分、全力を尽くしてゲームを行ってください」

それを聞いて、部長の目が光った気がした。多分僕も、副部長も。何やってもいい、という免罪符を貰ったのだ、そうもなるうさ。……若干、アーシアが僕らに怯えてるのは申し訳なく思うけど、それはそれ！

「そして今回のレーティングゲームは、両家の皆様も他の場所から中継でフィードの戦闘をご覧になります」

そしてそんな僕らを咎めるように、続けて彼女が口にした。やだなあ、そうしたら迂闊なことできねえじゃん！ そうなると、後先考えずに使える駒は僕ぐらいか？

「さらに、魔王ルシファー様も今回の一戦を拝見されておられます。それをお忘れなきように」

「お兄様が？ ……そう、お兄様が直接見られるのね」

そうかあ、魔王様も見に来てるのかあ……実は今回のお家騒動って結構な大事なのかしらん？

………待て、今聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ。えつと……お兄様???

震えが止まらなくなり、とりあえず答えてくれそうな祐人クンにすぐ耳打ちする

「……オイオイ祐人クンや。今部長が魔王ルシファー様のことをお兄様って言ったけど

……」

今、冥界には4人の魔王がいる。魔王ベルゼブブ様、魔王アスモデウス様、魔王レヴィアタン様、そして魔王ルシファー様。悪魔になる前から僕でも知ってる悪魔の中でもビッグネームだ。えっと、もしや血縁とか、そういう……？

「うん、部長のお兄様は、魔王ルシファー様で間違いないよ。もっとも、ルシファーの名前を襲名したってことなだけれど」

そこで軽く説明を聞くと、どうやら先の三大陣営……天使、堕天使、悪魔の三竦みの戦争で、先代の四大魔王様はお亡くなりになられてしまったとか。だから、悪魔を束ねるために新しい魔王が、先代に負けなくらいの強い悪魔が魔王の名前を継ぐ必要が生まれて……

「なるほど。四大魔王は、今は襲名制なのか……」

「うん。……正直言うと、今の三大陣営の中で一番衰退しているのは、実は悪魔陣営なんだ。それでも今の魔王様達のお陰でどうか保ってはいるんだけど」

「それで、魔王ルシファーを襲名したのが部長のお兄様……」

「そう。サーゼクス・ルシファー……『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』、それが部長のお兄様であり、最強の悪魔であり、最強の魔王様」

最強、かあ。そらなんとも……遠い存在というか。

『……フーン！』

ちよつと遠い目をしてると、左腕の相棒が機嫌悪そーに鼻を鳴らした。あれか？ もしや俺の方がもつと強いかそんなアレか？ 僕お前の生前のことまるで知らないけど、流石にそれはふかしすぎじゃないか？

『……今に見ておれ、無知極まりない相棒。後で後悔しても知らんぞ』

そう捨て台詞を残して意識が沈んでいった。ど、どういうこつちやねん？

「イツセーくん、イツセーくん」

「……ん？ ああすまん、意識飛んでたわ」

肩を叩かれ、思考の海から意識が現実に戻ってくる。そろそろ時間ということで、魔方阵に集まるように指示される。

……戻ってこれるのは、ゲームが終わってから。マトモな状態で戻ってこれるかどうかは分からないけど、もう引き返せないということだ。まあ、どっちにしたってやることは変わらない。

今日だけは、負けられない。例えばどんなに現実という名の壁が立ち塞がろうと、今日だけは。

「それでは、いつてらっしやいませ」

グレイフィアさんの見送りの言葉と共に、僕らは光に呑まれた。

その13



結論から言ってしまうと、旧校舎は瓦礫の山と化した。



光がおさまり視界が回復すると、そこはオカルト研究部の部室だった。なんでやねん……と思つたのもつかの間、グレイフィアさんによる校内放送……レーティングゲーム開始前のアナウンスによつて、ここが再現された駒王学園だということを知る。確かに窓から外を覗けば、空がまっしろかつたので何も無い空間にポツンと駒王学園が乗っかつてる状態なんだろうと勝手に解釈した。……これも魔力とかによる産物？ 悪魔つてすげえのな……。

んで、グレモリー眷属は此処、オカルト研究部の部室が本陣。ライザー・フェニックス眷属は新校舎の生徒会室が本陣。兵士……つまり僕がプロモーションする際は、生徒

会室の近くまで行く必要がある。

「定石としては、序盤は兵士同士が互いを潰し合うの。少しでも敵の兵士が女王にプロモーションするのを防ぐ為にね」

ウチの眷属の兵士は僕だけ。なんせ僕が8駒分で転生しちゃったからね。なので石通りに行くなら、僕は8人もいる兵士悪魔を倒さなきゃならんのだが……。

『開始のお時間となりました。このゲームの制限時間は人間界の夜明け、午前4時までとさせていただきます。それでは、ゲームスタートです』

審判でもあるグレイフィアさんの合図でチャイムが鳴り、開始を知らせる。では、今から作戦会議かなー……というところで、部長が口を開いた。

「ではまず本陣、並びに旧校舎は破棄しましょうか」

流石に全員がギョツとした。部長、ご乱心なされました???

「……私でもおかしなことを言ってる自覚はあるから、まず説明を聞いてちょうだい」

そう言つて部長は、一旦紅茶で口の中を潤した。そして一息ついた後、説明を始める。「まず前提として、私達に本陣を大事に確保しておくメリットはあまり無いわ」

本陣を守るメリットは幾つかある。基本的に敵陣から一番離れた位置に置かれることが多いから、守りを固める準備がし易い。畏、支援、結界、なんでもやり放題だ。要塞を作るのに長けてる王とその眷属ならば、穴藏を決め込むだけで勝つこともできるん

だとか。

他にも色々あるが、鉄板の使い方が一つ。王と戦車の駒特性……実際のチェスにもある、動いていない王と戦車を入れ替える技、キャスリングを使つての兵士の着地狩りだ。基本的に本陣までやつてくる兵士というのは、途中の障害や兵士同士のぶつかり合いなどで疲弊している。だが女王にプロモーションしてしまえばこつちのものだ……という淡い期待を打ち砕くように、突如として現れた戦車が疲弊した自分達に襲いかかつてくるのだ。普通に恐怖である。

もつとも、キャスリングも何度もポンポン使える訳じゃあない。レーティングゲームに於いては、王が本陣を出ていないという条件があり、一度使つてしまえばそのゲーム中二度と使えなくなってしまう。鉄板戦術ではあるが、使い所は慎重にならざるを得ない。

「しかももう一つ欠点があつてね。キャスリングを使う時は基本的に、隠密行動をしている戦車と入れ替わるのが定石なのよ。兵士を倒すために王を危険に晒すのは、本末転倒でしょう？」

「……なるほど。私達の場合、戦車は私一人だけ。キャスリングを狙つてまで一人しかない戦車を宙ぶらりんにするのは、リスクの方が勝る。ということですね」

「その通りよ小猫」

それを踏まえると、僕達が本陣を抱えておくことのメリットは無いように感じる。要塞化をマスターしている悪魔がいるわけでもないし、キャスリングは前述の理由で論外。

「しかし、本陣に兵士が立ち入られたら、我々が劣勢になります。本陣に到達する前に食い止めるにしても、複数のルートで狙われる可能性が高い以上、何人かの兵士にはプロモーションを許してしまうことになるでしょう。やはり本陣を破棄するのはリスクが高いように思えます」

「そこはその通りね、祐人。でも、本陣を徹底的に使えなくする……もしくは本陣に辿り着かせなくしたらどうかしら？」

「それは、一体？」

とここで部長がテーブルの上に紙を広げる。これはどうやら……旧校舎の見取り図っぽいぞ。所々に赤丸で印が付けられているが……。

「この印をつけた所を爆破して、旧校舎を解体させるわ」

「……あの、あまりこういうこと言いたくないんですけど、何処か頭をやっちゃいました？」

「あら失礼ね。この建物を爆破するアイデアの原案は、あなたから出たでしょう、イツセー？」

そう言われて思い出す。そういや合宿中にアイデアを出し合っている際に『攻城戦だったら、相手の城を発破解体とか面白そうですよね!』とか言った覚えはある。ある……が、そもそも発破解体はかなりの技術を必要とするらしいから僕らには無理だし、あくまで敵陣爆破を想定しての案だ、間違っても自陣を吹き飛ばす発想じゃないんですよ部長。

「破壊したところで、元あった本陣の近くまで来られたらプロモーションはされてしまう……。部長は、これを解決するアイデアがある、ということですかね?」

「ええ、もちろん。と言っても、朱乃とイツセーに頑張ってもらわないといけないのだけだ」

そう言って部長は、旧校舎爆破処理作戦の概要を口にした。

……うん、ちよつと舐めてたわ。僕のこと悪魔だのなんだの言うけど、部長も大概悪魔みたいな発想をしているじゃないか。ほれみろ、DSの朱乃サンがめっちゃニコニコしてるもの!!

「では指示を出していくわ。あまり時間がないから迅速にね。朱乃は旧校舎を覆う結果を、この指定通りの内容で作ってちょうだい。多少効果は薄まっても構わないから、バレないことを優先して。その後、私達が仮設で本陣を建てる森に幻術を仕掛けて欲しいの。内容は任せるわ」

「承知致しましたわ」

「祐人は森全体に罠を仕掛けて欲しいの。殺傷能力よりは、とにかく脚を奪うことに重きを置いてちょうだい。そうね……トラバサミとワイヤートラップ辺りがいいわ」

「分かりました、部長」

「小猫は囷をお願いするわ。恐らく重要拠点として使えるであろう、旧校舎と新校舎の間にある体育館に敵を誘導して、その中で足留めを。通信機で合図を出したら、体育館を放棄するように逃走して、それとなく旧校舎に敵を誘導。いけそう？」

「……大丈夫です、任せました」

「アーシアは、私と一緒に着いてきてちょうだい。最初はテントの設営ね。それが終わったら、小猫と合流して神器で癒してあげて」

「わ、分かりました。頑張ります！」

「イツセーは一番責任重大ね。……印をつけたところに、例のアレをセットして、私が合図を出したら爆破して」

「承知しました、必ず成功させます」

「では、華々しく初陣を飾りましょう。私達を舐めてるであろうライザーに、誰を敵にまわしたのか、知らしめてあげなさい！ 総員、散開！」

『『承知！』』

それじゃあ僕は僕の仕事を……地獄を作る準備を始めないとね……。全く、ウチの王様はおつかねえや。



水蒸気爆発、というものがある。

簡単に言えば、水の温度が急激に上がり、気化して一気に体積が膨張することで起こる現象だ。熱したフライパンに水を垂らすとジュっ！　っというアレのこと。

僕は思った、魔力による水の操作を極めたら、水蒸気爆発を起こせるんじゃないか、と。基本的に温度とは振動、動き、エネルギーなのだ。つまり水蒸気爆発が起こる温度まで水の分子を一気に動かしてやれば、それはもう見事な水蒸気爆発が起こるんじゃないか、と。

そう思っ僕は朱乃サンに相談した。自分のイメージを補強するための絵図も付けて。そして彼女が僕に課した修行は紅茶を淹れること。正確には、魔力で水进行操作し、温度を上げる練習をしろ、ということだった。

「いくらイメージができていても、想像通りに操作ができるわけではありませんわ。まずは段階を踏み、温度を上げる操作の感覚を掴むのです」

実際にある物質に魔力を通し、それを操作すること自体は、そこまで魔力を消費しない。無から有を生み出してゐるわけじゃあないからね。とはいえ最初のうちは水の温度操作は困難をきわめた。まるで超音波洗浄機を水に漬けた時みたいにポコポコ波立ちはするものの、温度はそこまで上がらなかつた。魔力を使うにはイメージが大事だが、それだけではダメだというのがよく分かる一例だ。

行き詰まっていたところ、僕はある家電を目にする。電子レンジだ。アレは確か、マイクロ波を水分子に当ててゐることで、振動、回転させ、温度を上げる……温めるという家電だ。

「……波を当ててゐるイメージで、フンっ！」

記念すべき僕の一発目の水蒸気爆発の被害者は僕になつた。全身大火傷、水を入れていたケトルも破裂して破片が全身に突き刺さりの大惨事。アーシアがいなかつたらまず間違いなく死んでいた。原因は、思ひの外魔力を込めたことで急激に水分子が振動してしまつたことらしい。いやほんと、ありがとうねえアーシア。キミも僕の命の恩人だよ……。

まあ、そんな事故を挟みつつ、寝る間も惜しんで水の操作を続けていつて、何とか暴発させずに水蒸気爆発を使いこなせる域にまで達した僕は、あるアイデアを思い付いた。

「そうだ、聖水で水蒸気爆発すりゃいいじゃん」

後の対悪魔殲滅兵器の産声が上がった瞬間である。



そして今、その対悪魔殲滅兵器が敵の悪魔に向けて牙を剥いた瞬間を、僕は目の当たりにしている。

指定ポイントに配置された、建物の内側に向かって爆発するように調整された、聖水の入った金属容器。それが都合9箇所、同時爆発。

それだけだと単に聖水で爆発させただけなのだが、厭らしいのが朱乃サンの敷いた結界だ。旧校舍だったものを覆ってる結界は、中から水分子が飛んでいかず、高熱に保つ効果がある。つまり、仮にこの中に悪魔がいたとしたら……まあ、可愛く言ったら蒸し焼きになる、ということ。中は煙つて何も見えないけれど瓦礫や木片も吹き飛んで痛いだろうし、小猫チャンが誘導して中に入ってしまった4人の悪魔の皆様に対しては、申し訳ないという気持ちしか湧いてこない。

『……ライザー・フェニックス様の兵士3名、戦車1名、戦闘不能』

心做しか、グレイフィアさんのアナウンスの声音からドン引きしてる気配が伝わって

くる。いやでもこれは僕だけのせいじゃないよ。

『これで本陣には誰も寄つて来れないわ。結界の効果も4時までには充分に続く。では、次の指示を与えていくわね』

とりあえず第1段階は終了だ、と息を吐きながら通信に耳を傾けていると……

「……………ッ!!」

警鐘の音、咄嗟に鞆の中からただの水が入った瓶を取り出し、握つて割る。水が染み出し、そこに魔力を通し、運動を制御! 氷の壁を作る!!

目を焼かれるような光、轟音、衝撃! 腹の底が震え、全身を熱が襲う!!

「ぐ、ぐう……………!」

『決 殺 の 手』!!」

『Boost!!』

防御力を2倍に、襲ってくる衝撃を氷の盾を使っていなしながら、何とか地面に踏ん張り、耐える!!

「っ、があッ!」

何とか耐えきり、地面に膝を着く。そして、下手人であろう、上空に浮かぶ何某に視線を向けた。

「……………油断も隙もない。完璧に不意を突いたのに、どうして防げたのかしら?」

「お生憎様、こことら尋常じゃない程のビビリでね……!」

翼を拡げ、空から僕を見下ろす、フードを被った魔導師の姿をした悪魔！

「ライザー氏の『女王』^{クイーン}、ユーベルーナ……！」

「ご名答、リアス嬢の兵士君。貴方はここで脱落してもらおうわ」

爆破を得意とするライザー・フェニックス最強の下僕が、僕の前に立ち塞がった！
ちよつと待つて、これかなり大ピンチだよ!!!

その14

『イツセー、聞こえてる!? 返事出来そうに無かつたら通信機を1回叩いてちよーだい
!』

バン! と強めに耳を叩きながら、左腕で爆発をいなしていく。普段はうるさいだけの警鐘が、致命傷を受ける爆撃の選別に役立ってくれる。

「くっそ、なんだい大人気も無く!! 余裕無すぎるんじゃねーのオネーサン!」

「あの爆発を見て舐めるなんてありえないでしょう!?! あの火力とその油断の無さは長期戦に持ち込まれると面倒なのよ!」

くっそ部長のサブプランが若干破綻してやがんな……。仮にライザー氏を倒せない
と判断した場合、ライザー氏ともう1人以外を打倒した上で朱乃サンと僕が脱落しない
ように時間いっぱい部長を守るっていう作戦だ。公式ルールにおいては、制限時間が区
切られているゲームの場合、残ってる下僕悪魔の駒価値が多い方が勝利となる。仮にそ
うなつたとして向こうがそれを守るかどうかは不明だが、もう一度、今度は有利な条件
でゲームを仕掛けることができるだろう……と部長は考えていた。僕の駒価値は8、朱

乃サンの駒価値は9なので、マジで僕は脱落という意味では死ねなかつたりする。する……のだが、何故か危機感を抱いてるらしい敵の女王にロックオンされてる。マジでついてねえよ……！

だが、希望はない訳でもない。相手は舐め腐ってはいないが、舐めてないわけでもない。

今僕らが場所を変えつつ戦闘しているのは校庭、新校舎から見えやすく、狙い撃ちができる位置にいる。なるべく森から女王を引き離さないといけないと判断し、あえて相手にとって有利なフィールドに移動していったのだ。だが、現状フェニックス側から援軍が来る気配がない。つまり女王ユーベルーナ氏なら（駒8つで転生してるけど）兵士ぐらいけちよんけちよんにしてやれる、と思ってるんだろう。ぶっちゃけ大正解ではあるが、その油断が隙……になるとマジ助かる。

敵はまるで爆撃機のように僕に襲いかかってくる。しかも飛行が上手いからフェイントを掛けてもすぐ着いてくるんだ、やってらんねえ!! 僕はまだ悪魔の翼で飛ぶことが難しいため、迂闊に距離を詰めることもできない! 絶対撃墜されるだろうしな! 『イツセー、今から援軍を送るわ! それまで耐えきつて! 場所は校庭ね!? イエスなら1回、ノーなら2回!』

バン! と叩きながら爆破の魔力を受け止め、振り抜くように新校舎にぶん投げる。

減衰したのもあるだろうが、何かに阻まれて霧散した。くそ、惜しかったなアレ！

さて、援軍が来るとなると流石に向こうも援軍を寄越してくるだろう。どのぐらいの速さで来るか分からないが……1回は殺しておかないとマズイだろう。

「(1回、1回でいい。マーキングさえ付けられたら、可能性はある!)」

既に満身創痍、籠手の無い右腕は黒焦げ、中から骨がコンニチワ。痛みには慣れてしまつてると、焼けてるせいで出血が無いのが救いだ。だからこそ、もう1つの魔力ワザが使える……のだが、一旦魔力を纏いながら触れなければ起動できない。どうすれば……!!

「くそ、タダでは死ななくてここで殺す!!」

「ッ!?!」

最初の爆発は、相手に警戒をさせるって意味では失敗だけど、ハツタリに使えるという意味では大成功だった。カバンに手をつ突っ込むだけで普通なら有り得ないほどに警戒してくれるのだから！

聖水の瓶を取り出し、それを渾身の力を込めて投げつける。女王もまずいと思つたのか、それを撃墜するために爆破しようとする。が、それは悪手だ。何故なら水蒸気爆発とは、水に対して高温のものをぶつける時に起こるものなのだから！

僕がすることは、襲い来る聖水の水蒸気から身を守るために、水の壁を自分の周囲に

展開することだけだ！

「甘いわ！………何っ!?」

ダガンツ!! と爆ぜる音と同時に、周囲に破片と水蒸気が撒き散らされる。相手はローブを着用しているため水蒸気による被害はあまりない………その剥き出しの翼以外は!

「ぐっ……何よこれ、焼けるように痛い………!」

「墜ちろ、カトンボオ!」

『Boost!!』

『Transfer!!』

譲渡、相手にかかるGを2倍。爆風と、聖なる物によるダメージと、穴ボコだらけの翼もあって、重力に逆らえなくなり墜落する!

このタイミングを逃してはいけない。壁を消し、全ての力を脚力に回す。そのせいで身体が水蒸気に焼かれるが、必要経費だ!

「お、おのれっ!」

墜落の衝撃ですぐには動けない様子。だが魔力行使に関しては支障を来たしていないらしい。炎弾が脇腹を掠めて削り取っていく。

「ぐあっ………! くっ、効くかよオ!」

だがこちとら腹は焼かれ慣れてんだ、大体光の槍だけだな！ サンキュー元カノちゃ
ん、でも地獄に堕ちろ！（呪詛）

「格闘技とは、力の使い方！ 強く、強く踏み込んで！」

『Boost!!』

足の裏が完全に地面を捉え、倍加も加えることにより、僕の動体視力では追い切れな
い速度で身体が前に投げ出される！

「え、ちよ、待つ」

女王ユーベルーナの顔面に突き刺さる、僕の右膝。つまり、飛び膝蹴り。……胸か腹
を狙ったのに顔に当たってしまったのは、素直に悪いと思う。

「ぐえっ、がふっ、あうっ！」

蹴られた勢いはそのまま彼女に伝わり、回転しながら三度ほどバウンドを繰り返し、
ぶっ飛んだ。……ついでに、僕の右膝も砕かれた。何も防具無かったと思うけど、悪魔
……それも女王つてだけで硬いんだろな、今度はこつちが動けなくなった。

だがま、いい感じにダメージも与えられただろ……と前を見て……泣きそうになっ
た。

「よくも……よくもやってくれたわね……！」

憤怒のオーラを撒き散らしながら、ゆらりと女王ユーベルーナが立ち上がる。それも

『無傷』で。チクシヨウ、アイツ早速フェニックスの涙を切りやがったか！

「……舐めていたわ。8個とはいえ、プロモーションもしていないただの兵士だと」

「ちっ、そのまま舐め腐ってくれたら良かったのに……」

言葉の通り、彼女から油断の気配は全くと言っていい程感じられない。絶対に、僕を殺す。そんな怒気だけが僕を刺す。たかが僕相手にフェニックスの涙を切ったのがその証拠だ。

「全くやってらんないよ……フェニックスの涙の元締めだ、きつとたくさん持つてんでしょ？」

「ええそうよ。……半分享樂のつもりで、リアス嬢達の無駄な足掻きを見る為のゲームだったけれど、今ほどコレを持っていて良かったと思っただけじゃないわ」

全く、絶体絶命もいいところじゃないか。僕の全身は聖水で焼け爛れ、右腕に至っては骨すら見えている。脚もイカれてもう立つことすらできない。ライザー氏に挑む前に、女王にチエックを掛けられている。もう逃げられない、デッドエンドだ。

だが警鐘は鳴っていない。

口の端が、弧を描くように吊り上がる。

「ふひっ」

「っ！」

喉から、思わず笑いが溢れる。

「ふひひひひ、ひはははははははっ！」

合図は、右腕を突きつけて、宣告すること。僕はもう触れている。この女に触れている。マーキングは済ませた。

本能的にまずいことを感じたのだろう。距離を取り、炎弾を何度も何度も打ち出してくる。焼ける、焦げる、欠ける。死ぬほど痛いし、もう逃げたいくらいに力が入らない。けれど、それでもとうとう肉が剥げた右腕を突きつけて、宣言した。さあ、不死鳥に試す前の試運転だ。

『ベインサーキュレーター循環する苦痛』

2つ目の魔力技、僕の痛覚だけを、感じる痛みだけをマーキングを付けた相手に転写するだけの、まるで役に立たないクソみたいな技。

だが、僕が死にかけていれば死にかけている時は効果は覲面だ。そう、僕は今まさに死に瀕している！

「かひゅ……!?!」

わけがわからないのだろう。ローブ姿の女が、息の詰まるような音と共に倒れ込む姿が見える。

「なん、で……！　なによ、これ……!」

「こういう時、なんて言うんだっけな……。ああくそ、頭が朦朧として言葉が出てこないな。ああ、この状態で爆破はやめてくださいよ？　痛覚のショックでアンタも死にかねない」

「でも、貴方ももう何もできないじゃない！　単なる時間稼ぎにしかならないじゃない！　直に私たちの援護が来るわ……。その行為は無駄よ！」

話している間にも、懐から何かを漁っている。フェニックスの涙だろうか？　それとも別の薬だろうか。でも力が入らないみたいで、ボロボロと瓶を落としている。

「ま、そうですよね。しょーもない時間稼ぎです。が、」

「間に合った以上、無駄ではありませんでしたわね」

表情の焦燥が、ゆつくりと絶望に変わる瞬間を見た。見上げ、震え、逃げようとして、しかし立ち上がれず、地面を這い蹲るしかない姿を見た。

「お願いします、朱乃サン」

「ええ、任せました。お手柄ですわ、イツセーくん」

空から降る幾重もの雷光に、女王ユーベルナは貫かれる。幾らでもいたぶることができたのにそれをしなかったのは、瀕死の僕の為か相手に対する慈悲なのか。まあそんなことはどうでもよくて。

『ライザー様の女王、戦闘不能』

何とか大金星を挙げられた、その事実だけが重要だった。



敵から奪った資源を使うのは戦争のド定番である。僕は朱乃サンに掛けてもらったフェニックスの涙のおかげで何とか息を吹き返した。

「ふひい、久々に死ぬかと思いましたが……まあ今日で3回目ですが」

欠損もなし、バックの中身も破損無し。制服がもうボロボロだけど、それでも気力十分。これであと1週間は戦える。そんな心持ちだった。

「……それで、どうでしたか？ 2つ目の技は」

「相手に触れる必要があるので起動するのが面倒ですね。しかもこれでタネが割れたでしょうし、相手は迂闊に自分に近付いて来ないでしょうね。正直痛いです」

本来は、ライザー氏に使って相打ちを狙う為の技だった。相手に再生をさせず、しかし痛みだけを与えて相手の心を折る。そこに痛覚倍加の付与をすれば完璧だ。……まあ、もうまともにこいつは使わせて貰えないだろうね。

「……すみません、朱乃サン。アレだけ一緒に訓練に付き合っただけなのに、こんな形で無駄にしてしまうなんて」

「無駄とは思いませんわ。少なくとも、百戦錬磨の女王をほぼ1人で完封した……それだけでも意味のある成果です。イツセーくんはもつと自分に自信を持って大丈夫なんですよ？」

「……は？」

顔を叩いて気合いを入れる。泣き言なんて言つてられない。

「さて、それではイツセーくん……どうしましょうか」

「どうしましょうかね……」

互いにニヤリ、と強がりながら周りを見渡す。いつの間にか5人の悪魔に取り囲まれていたからだ。

メンバー表の写真と、ここにいる悪魔を頭の中で照合させていく。兵士が3人、僧侶が1人、騎士が1人。……戦車がない。1人は倒したからいないが、もう1人がいるはずだ。強がってみせるが、内心冷や汗が止まらない。

彼女達は足止めだ。最強戦力である朱乃サンと……多分、想定外を引き起こす僕を足止めするための。これは、間違いないく嵌められた。今の敵の狙いは、仮の本陣に突っ込ませた戦車を使つてのキャスリングだ！

「嘘だろ……女王を生サクリアイス贄戦術に使うんかよ……！」

「必要とあれば、悪い戦術ではありませんから。王さえ生きていればいい、それがフエ

ニックスの基本戦術でしょうし。……イツセーくん、魔力の効果を倍にする、ということとは可能でしょうか」

「いけます、合図だけやっていただけたら完璧にこなしてみせます」

「うふふ、頼もしいですね」

背中合わせになってるが、見なくても分かる。今、朱乃サンは見るものを不安にさせるような笑顔を浮かべている。

「せっかくですし、私も試運転をしましょう。対フェニックス用戦術……『五覚剥奪』を実行します」

白い世界に、黒い帳が降りた――。

その15

僕と朱乃サンとの共通見解、『心を折るには変化を認識させないことが基本』。簡単に言い換えると『終わりが見えないようにする』に尽きる。精神を攻めるときだけの話では無い。責め苦を負わせる拷問も、痛み、苦しみが抜けない状況に置かれることで心が折れるのだから。

「しかし基本は基本。状況が刻一刻と変わっていく戦場に於いて、時間を掛けて準備をし、罠にはめるのは良い戦術とは思いません」

「まあ、それはそうですね」

特に今回は長期戦になればなるほど基本的にフェニックス側が有利だ。不死……というよりは、歴戦のチームだって理由で。悠長に準備してる間にやられてしまう、今回に限り必要なのは奇襲性だ。

とはいえ、スナック感覚でお手軽に心を折る手段なんて……。

「無いわけではありませんわよ?」

「あるんです!?!」

「ええ、もちろん。人間、ないし悪魔の心を折るなんて難しいことではありませんもの」
なんなら欲深く、我慢するという感覚が薄い分、悪魔の方が折れるのは早いですわ：
なーんて軽い調子で言う朱乃サンにドン引きしたけど許して欲しい。いや普通に怖え
んだってアンタ。

「……イツセーくんは何か勘違いをしてないかしら？ 実は私、誰かを虐めることは好きでも、心を折るのは得意ではないわ」

心外そうに、わざとらしく頬を膨らませて抗議する朱乃サンだが、それを誰が信じるのだと言うのだろう。少なくとも僕は信じない。

「心が軋み始める瞬間が表情としてとても唆るんですもの。簡単に折ってしまったのは楽しめなくなるじゃないですか」

「ええ……」

だが納得はした。モノを壊すことに興奮する破滅タイプのSなら話は変わってくる
とは思いますが、簡単に苦しみを終わらせるのは状況によつては勿体ないだろう。再利用で
きないし。

「ちなみにそんな簡単にできるんですか？」

「視覚、聴覚、嗅覚を止めてしまえば割と早く心が軋み始めますわ。ひとりでに話し出した
辺りが表情としては唆るから私はそこで止めるのですが、心を折るのなら話は別で

す」

「まあ、ですわねえ。せめて錯乱して自害しようとするレベルまでは心が折れてもらわないと……」

「ですが、これでも時間がある程度かかってしまいます。そのため、他の方法を考えなければならぬのですが……」

そこで朱乃サン、肉食獣のような目で僕に視線を投げる。な、なんだよう……そんな目で見られても逃げる以外の選択肢は取れないゾ。

「怯えなくても大丈夫です、イツセーくんにアイデアを出すのを手伝って欲しいだけですわ。相手の心を折るための新技を。あの痛みを押し付け、廻すなんていう常人では思いつかないようなアイデアが、今の私には足りていません」

「アレ、これもしかしてすっげえ貶されてませんか僕??」

「うふふ、褒めていますわよ」

それで僕が苦虫を噛み潰したような顔をすると思ひ意味でニツコリしだすからたまったもんじやない。無敵かよこのヒト。

仕方ない、じゃあ考えるか……となるが、実は僕では実行できなかつただけで、案自体は作っていたモノが何個かあった。その一つ、朱乃サンなら確実にできるであろう、トンデモない案を。

しかし、まず聞いておかねばなるまい。それによつてちよつとやり方が変わる。

「朱乃サン、悪魔も人間と同じように、神経を通るのは電気信号ですか？」

ニンマリと、口の端が吊り上がったのが答えだった。



電気信号を操り、恐怖体験を押し付ける、という案があつた。それ自体は倫理的に問題があるのと、現実的ではないのでボツになった。魔力を操れるようになって分かつたけど、電気操作するのってマジ難しい。魔力で属性変換して使うなんて以ての外。もしかしたら属性変換の得手不得手も関係しているかもしれないが、朱乃サンとんでもない才能の持ち主なのだろうと思つた。

しかし、そんな朱乃サンでも電気信号を操つて思考を弄る、なんてことは出来なかつた。被験者である僕が言うのだから間違いない。それなら普通に幻術使う方が早いじゃん、ということになる。幻術は幻術で神経系含めて感覚を誤認させる効果も内包してるし。

次に、感覚器官からの電気信号を遮断して五感を奪つてみる、という案があつた。こつちも倫理的に問題はありそうだけど、洗脳には使えなさそうだしいいけるのでは？

となった。なった……のだが、これまた問題に直面しボツとなった。

朱乃サンレベルならもちろん、これなら僕でも使える、簡単に現実的な案だったのだが、視覚が上手く消せなかったのだ。悪魔の目は特殊で電気信号を遮断しても何らかの方法で視覚を確保してしまっていた。僕が実験台になったのでよく覚えてる。

朱乃サンの考察だと、夜目がきいてしまう種族特性が関係しているのだろうということだ。詳しく調べていけば判明するのかもしれないが、時間は無いということと断念。とはいえ後に続く結界術への応用に使えたので完全無意味ではなかったのだが。

最終的に幻術で感覚器官を誤認させるのが現実的だな、という風に落ち着いた。成り立てかつ才能のない僕には無理だけど、朱乃サンならその程度ちよちよいのちよいだつたようで、すぐに五覚剥奪の雛形にあたる、真つ黒な結界が誕生した。

詳しい仕組みは企業秘密ですわ♡ と簡単な仕組み以外は教えてくれなかったが体験はした。何も見えないし平衡感覚も無くなるしそもそも感覚奪われるせいで何も無い所に浮いてる感じがしてかなり気持ち悪かった。そのくせ心臓の鼓動だけは感じられるので耐性がないとこれはキツイだろうな、というのは感じた。

だが、ここでも問題にぶち当たる。準備に時間が掛かる欠点は取払ったが、そもそもこれでもかなり時間が掛かるだろう、ということだ。単純に僕に耐性があっただけかもしれないけど、1時間やそこらでは発狂しなかったからね。これはまずいのは……と

頭を悩ませようとしたところで、僕に天啓が降りてきた。いや天啓っていうのを悪魔が使うのは違うか。じゃあ地啓で。

『電気信号を加速させて思考も加速させちゃいましょう!』

『……それは、盲点でしたわ!』

というところで、最終的に完成した結界型幻術『五感剥奪』は、1000倍以上に加速した時間の中で、何も無い空間を彷徨わせる幻覚を叩き付けるといって、喰らう側に対して多少の申し訳なさを覚える技となった。その効果は絶大的で、実験台の僕も瞬殺されそうになるとんでもないハメ技だ。

そりゃ、こんな物を不意打ちで決められたら……

「コレは……その……」

「見てはいけませんよイツセーくん。彼女達の尊厳の為に」

色んな液体でグシャグシャに、表情も不思議なことになった。しかも無惨なことになってるのに、肉体的には傷付いても死んでもおらず、逆にそのせいでリタイアしてないという酷いことになっていた。申し訳なさから、朱乃サンの言うように視界に彼女達を入れないようにする。

……僕達ごと黒い結界を包んで数十秒後、結界の効果に倍加の付与。それが1000倍に加速して……少なくとも体感5時間は何も無い空間に放り出されたワケで。

そりやこうもなるわ……

「まさにスナック感覚でお手軽心折設計……僕はとんでもない怪物を生み出したのかも……」

「あなたが言いますか、あなたが」

軽口を叩かないとやつてられない、そんな心持ち。やつぱ倫理に逆らうとろくなことにならないよね！ ……とはいえしかし想像より遥かに早くケリが着いたので、僕らにとつては追い風だ。これはいいことである。

じゃあ早速森の方に向かいますようか、と声を掛けようとして、先に朱乃サンに声を掛けられた。

「……さて、イツセーくん。少し無理をしてしまったので、先に仮設の本陣に向かってください。私は少し休憩してからでないと動けなさそうです。あまり時間は無いでしょうし、急いでください」

「え、いやでも朱乃サ……」

息を飲む。その様子に息を飲む。

左目から、赤い液体が。

「ツ!? まさか……」

「うふふ、思った以上に負荷が掛かってしまったようです。イツセーくんを試し打ちし

たときは1人だけでしたので、こうはならなかったのですが……」

そう言つて、彼女は力が抜けたようにへたり込んだ。

……遅延された上で、疲弊した状態で仮設本陣に2人で向かうよりも、ほぼほぼ無傷の僕を向かわせる方がいい、と思つたのだろう。だから僕に先に行け。そういうことなのだろう。

「幸い、フェニックスの涙はもう一本確保しています。だから、安心して早く行きなさい。早く」

すぐに使わない時点で、その真偽は明白だ。無視はできない。……だが、その覚悟を無駄にもできない。

悩むのは、一瞬だった。脚部に倍加を施す。

「……分かりました、ありがとうございます」

見ないように、後ろを振り向かずに僕は森の方へと駆け出した。僕の感情だけであのヒトの覚悟を無駄にしてはいけない。決して、決して。

……それでも。分かつていて、それでも見捨てる判断をした自分に吐き気がした。



「……まったく、敏いのも考えものですわね」
「約束、ちゃんと守ってくれるかしら……？」
『リアス様の女王、戦闘不能』



その16

結局のところ、私達には何もかもが足りていなかった。敵を打ち倒す力も、出し抜く知恵も、何もかも。

唯一そこにあっただのは『なんと少しでも勝つてやる』という意思だけだ。ほんの微かな一筋の光明に、今出せる全てをベットした。それだけだったのだ。

……今、眼前のライザー・フェニックスが私に王手を掛けている。何時でもトドメは刺せると言わんばかりに余裕綽々な態度で以て私達を見下ろしている。

ほんの少し心の中で諦めが顔を出して……しかし引っ込んだ。眷属達ならともかく、私にその選択肢を選ぶ権利がない。

心の中で気合いを入れて立ち上がる。ゲームが終わるその時まで、私は倒れることはできない。そうよ、せめて『笑顔』で終われなければ……着いてきた皆に報いることができるのだから。

「さあ、行くわよ」

このレーティングゲームは、最終局面に突入した。



頭が痛い。

ずっと頭が痛い。

慣れない処理をし続けた弊害なのか、フェニックスの涙で癒えた筈の痛みや疲労がドツと押し寄せてくる。……ただの幻覚なんだろうけど。

『単純に精神がやられているだけだ、気を強く持て相棒』

『阿呆、コレでも僕のメンタルは強い方だぞ人並みに』

必死に走る僕に口を動かす余裕は無い。脚も痛てえわ肺も痛てえわ喉も痛てえわ。長く倍加を維持するために『脚力』だけに絞っているが、その弊害だ。全く、才能の無さを嘆いたのは初めてだぜ！

頭の中で軽口を叩き合いながらも、その裏で現在の状況を整理し直す。

まず、こつち側は朱乃サンしかまだリタイアしていない。王を除いた残存兵力は祐人クン（騎士：3点）、アーシア（僧侶：3点）、小猫チャン（戦車：5点）、僕（兵士×8：8点）、合計19点。

対してライザー・フェニックス氏側は、大半の兵力がリタイアしている。フルメンバーということで、リタイアした人員から計算すると、王を除き残っているのは僧侶1

人3点、戦車1人5点の8点だ。

つまりこのままタイムリミットまで部長がやられず、皆が生き残れば一応判定勝ちということにはなるが……。

『樂觀視し過ぎるのは良くないぞ相棒』

『だよねえ……』

願望とは裏腹の、冷静な部分で出た判断と同じ返答が相棒から帰ってくる。そうじゃなきゃ部長があんなに悩んでたワケがねえんだわ。

間に合いさえすれば、なんとかする方法が無くはない。無くはない……が、成功するかは別だし、本当にどうしたもんか。

ついでに言うなら朱乃サンと組んで敵の大半をぶっ潰した僕が放置されるとか有り得んし、そうなるとそろそろ第三の刺客が飛んでくるんじゃないかってヒヤヒヤモノだ。アナウンスで連中がリタイアしたのはバレーてるだろうし。

あー、ライザー氏が部長を舐め腐つてると助かるなあ、もうホント、心の底からそう思う！

「そっまでよ」

崩壊した旧校舎の側まで来た辺りで声がした。いやまあ素直に聞いてやる義理なんてないし無視して走り続ける……が、

「ちっ……私を無視するんじゃないわよ！」

「……ッ!!」

邪魔するように炎が僕の行く手を阻むように爆ぜた。そして目の前に降り立った、金髪縦ロールの如何にも気の強そうな少女だった。

「全く、私は観戦するだけだって言ったのに、お兄様つたらずっかり怯えちゃって……」

「ハア……ハア……お兄様ア……?」

息が上がってるから何も言いたくなかったけれど、思わず聞き返ししまった。お兄様???

「フン、仕方がないから答えてあげますわ。お兄様曰く『妹をハーレムに加えるのは世間的にも意義がある』ですって。まあ流石に兄も本気で妹に欲情するワケじゃありませんから、眷属として席を置いてるだけですわ」

「あのヒトも大概変なヤツだな……というかハーレムだったのかよ眷属。甲斐性があるのかバカなのかどっちか分からんな……」

「両方ですわね。鼻目かもしれませんが、アレで中々器が大きいんですよ?」

円満なようで何よりっと。他人事だけど。

「でエ? こーんな人畜無害の転生悪魔捕まえて、何の用だい妹フェニックスさん?」

「レイヴェル・フェニックスと申します。以後お見知り置きを。リアス様の眷属ですも

の、今後もお付き合いがありそうですね」

「ライザー氏が勝つからって？ そいつは少しばかりウチのボスと仲間を舐め過ぎじゃないか？」

勝つのは無理だろうけど、というか本人がそう思っただけで、様子を見る限り反骨心の方は強そうなもの。それでもって祐人くんも小猫ちゃんは僕より強い精鋭だし、回復役のアーシアもいる。耐久戦なら意外と勝ち目があるんじゃないかって僕の見解だ。

「兄一人なら、あるいははってとこですわね。それでもいいところー割ってとこるかしら？ ……あなたがいなければ」

氣迫と共に射貫かれる。だよなあ、やらかしたことバレてるよなあ。クソ、死ぬ程舐め腐って欲しかったのに。

「人畜無害だなんて良く言えますわ、グレモリーの兵士ポーンさん。こちらの精鋭の半分も削ってにおいて。ええ成程、一人だけならば大した驚異ではないのかもしれませんが。ですがあなたの本領はそこじゃないでしょう？」

「あはー……まあ分かっちゃうよネー……」

「その特殊な『龍トウワイス・クリティカルの手』、いわゆる亜種というヤツなのでしょう？ 自分の力だけじゃなく、周りのものにも倍加ができる特殊性。それを効率的に扱うあなた。素直に合

「流を許せば……そうですね、3割といったところでしょうか？ 決して無視できる数字ではありませんわ」

「そりやどーも。ここまで過大評価されたのは初めてだ」

『脚力』に回していた倍加を、『思考』へと移していく。不死鳥つてことはまともにより合つて勝てる相手じゃあない。身体能力に回す前に打開策を思いつかなければ。ノータリンでも無いよりはマシだ、少なくともおツムの出来も『平凡異常な普通並み』なのだから。それで、一つ提案なのですけれど」

「あん？」

しかし、問答無用で叩きのめされるつもりでいた僕に、全くの想定外な言葉が投げ掛けられた。

「ここで諦めて、私のおしやべりに付き合う気はありませんか？」

「……は？」

「元々は観戦だけのつもりでしたのよ、私は。兄はレーティングゲームのプロですし、リアス様は将来有望とはいえまだ若く経験が浅い。何の問題もなく勝てる……と油断していました。そのせいで私、なんの準備もしていませんの」

「……それで？」

「戦わずに済むならそれに越したことはない、ということですよ。もつとも、1人だけの

あなたに倒されることはありませんけど。面倒くさいだけです」

これは渡りに船……か？ とりあえず領くだけ領いておいて、観戦するとか言つてグレモリー眷属の仮設本陣まで行つてもらつて裏切る、的的な。

「ああ、先に言つておきますが、騙まそうだなんて考えないことですよ。悪魔の契約やくそく、破ると痛い目を見ますわよ？」

「……………ッ」

あーもうどうスつかない！ こんなに警戒心バリバリで来られるの初めてだからどうすればいいのか分かんないよ！ 基本舐められる側だし！

だからといって部長達を裏切る？ 論外だ！ 敵に加担するぐらいならいつその事ここでこの不死鳥相手に切り札使つて死ぬ方がマシだ！ よし決めた、ここでおさらばです、部長！

手元に魔力を広げる準備、バレると速攻で処理されるだろうか準備だけ。握手をするフリをして『循環ベイン・サーキュレーターする苦痛』を仕掛ける態勢を……………！

『待て相棒、早まるな』

『邪魔すんじゃないやねえよクソトカゲ、まずはテメエから沈めてやろうか』

『……俺としては正直気が進まんが、打開策を提示してやる。準備をするぞ相棒』

『準備イ？』

『【心臓】の準備をだ』

その言葉で動きが止まる。遠くの方で聴こえる戦闘音……炎の爆ぜる音と自分の上がった息だけがその場に響く。

【心臓】、僕がドライブに明け渡したパーツ。心臓と、それにくつつ着く血管は、もう悪魔のものではなくドラゴンのものに成り果てている。死ぬかと思ったが、なんだかんだでいい買い物だった。オマケで切り札も付いてきたしな。

『この状況でなんか使い道があんのかよ、オイ』

『確かに未だ制限している部分が多いがそうでは無い、本来の【心の臓】の役割を果たさせるだけだ。そのまま向かってても身体の方がお前の精神に追い付かずに自滅するのが目に見えている。同じ自滅するにしてもやりようがあるものだ』

ドライブがそう言うとき心臓が徐々に、不自然に速く打ち始める。全身が燃えるように熱くなり、鼓動が『ドツドツドツ』と最早エンジンだ。……あ、コレ知ってる、漫画で見たやつだ。赤熱する程じゃあないが肌から吹きでる熱で周囲が歪んで見える。

『實際理には適っているからな。強靱な龍の心臓と血管、悪魔の肉体でこの程度の高圧、高温には耐えられる。全身に掛かる負荷と引き換えに意識の加速、身体能力の向上が見込める。何よりだ、イッサー。この状態なら痛みも加速する』

『……………ケヒヒ、なんでえ相棒。テメエもよつほど悪魔じゃねえかよ』

強く持つてないと遠くに逝きそうな意識を必死に繋ぎ止めて、ゆらりと眼前の敵を見据える。なんだかより死にそうになってるけれど、身体が熱くて、軽くて、それなのに力が湧いてくる。

『完全にかかり切ればより効果は顕著に表れるだろう。今はまだ車で言うところの暖機に過ぎん。急げ相棒、勝つのだろう?』

「もっちゃん!!」

タイムロスしたが、打ち消して余りある銀の弾丸だ! どっちかってーと銀の弾丸に殺られる側だけどね僕!

「何が何だか分かりませんが……交渉は決裂、ということですよ、かしら?」

「ああその通り。僕がああのを裏切るとかありえんよ。だって僕は……ってそれはどうでもいいや」

最高にハイな気分のまま、僕は彼女に笑いかけて、言った。明日の晩御飯を聞くような態度で。

「というこで、ここで死んでくれよ不死鳥」



そして宣言通りに、僕は彼女を死の淵に叩き込んだ。

「ありえませんか……ありえませんか……っ！ この結果も……これをやろうと思つたあなた自身も……っ！」

訂正、息はあつたか。まあでも、もう終わりだ。必死に再生をしようと燃える彼女だが、最早コレは障害ではない。いわゆるお試し版だが、それでも不死鳥に対して一定の効果があることが分かつて良かった良かった。

「キヒヒ……正気で戦うことができるかよ。とは言つてもうるせえな、きつちりリタイアさせとかないとか。後顧の憂いなく仮設本陣向かいたいしねえ」

そうして僕は、一息入れるように水を飲んだ。

その17

そして僕は辿り着いた。もう全身ポロツポロで、今にも死にそうで、血も涙も出しちゃいけない液体も垂れ流しつ放しの、本当に無様な姿だけど。僕はようやくと辿り着いた。

「……リタイアアナウンスが誤報ではなかったか。まさか本当に倒したとは。油断していたつもりは無かったし、アイツこそがキミは危険だと提言してくれた以上、隙も無かっただろう？」

「勿論不意打ち気味に決めたからこうなつたんですよ。やつぱ無傷とはいきませんでしたが」

毘だらけの森の中にあつて、なおライザー氏は無傷でそこに立っていた。残り一人の戦車もリタイアしちゃつて、本当のチェスならもうほぼ詰みの状況だけど、しかし余裕そうに立っている。油断というよりは、これはもう自負つてヤツだろう。経験と実績に裏打ちされた、絶対に負けないという自信。

対する我々グレモリー眷属チームも、半分が退去している。今残っているのは王の部長と僧侶のアーシアだけ。恐らく継戦の要になるアーシアを守るために2人が立ち

回ったんだらう。それでも2人ともボロボロボロ。髪も乱れ制服も破れでちよつと目の毒だ。

「遅くなりました、部長。兵藤一誠、約束通り不死鳥を殺しに参上しました」

「待つてないわよ、馬鹿。見るからにまた無茶をして……」

「死んでないから大丈夫つてヤツです。死なやす死なやす」

「イツセーさん、今治療を……」

見るからにボロボロの僕を見かねてか、アーシアが『聖母の微笑』で治そうとしてくるが、それを手で制する。

「ごめんアーシア、今治されるとイツセーくんちよつと困つちやうの」

「それは、その傷の痛みを俺に押し付ける為か？」

「まあ、バレてるわな」

鼻で笑われるようにその理由を看破される。同じことをあの女不死鳥にやったが、ライザー氏にもそのまま効くということは無さそうだ。単純に彼は痛み慣れる訓練をしているんじゃないかな？

「というかそつちも余裕綽々ですね、攻撃もせず眺めてるだけで。いつでも此方を始末できるつて態度、癩に障ります」

「事実余裕だ。それにただ見てただけじゃない。観察は必要だらう、このゲームにおい

ての1番の不確定要素の動きを」

「……………」

「リアスの能力は割れている、眷属達の力も。分からなかったのは君とその僧侶。彼女に俺をどうこうできる力は無い以上意識を割くのは無駄。……問題は君だ、少年」

どう出るか分からない以上、迂闊に手を出せなかった。そういう事か。特に僕は相手に痛みを押し付ける技を抱えている。他にも似たような物がなければ警戒するのも自然、と。実際レイヴェル嬢をリタイアさせてるから必要以上に警戒もするわな。

「じゃあさつきとリアス部長をやりやあ良かったじゃあないですか。何故それをしない。いたぶるためか？」

「適度に希望を見せるためだ。今ここで撤退戦、防衛戦に徹されれば時間切れで俺は負ける。誰の入れ知恵か、リアスの中で意識改革があったのかは知らないが、この山に張り巡らされた罟、結界は侵入者の足を奪い、迷わせ、その間に逃げるように設置されている。オマケに俺の炎でも燃やせないように対策してるんだからどうしようもない。倒せなくともタイムアップでの判定勝ちに持ち込む。……プロリーグでも中々お目にかかれない、素晴らしい戦略だ」

「なあるほど。僕も含めてマトを一つに固める為の戦略、演技と。レイヴェル嬢や僕に差し向けたのも、始末と当て馬と思考誘導を兼ねた、まさに一石三鳥の一手だったわけ

だ」

「ああ。やられる、とは欠片も思っていないが……逃げる、ぐらいはすると思つていた。レイヴェルがちゃんと仕事を果たしてくれたかは分からないが、少しでも不安を煽るようなことを言えば、王を守るために合流を考えるはずだろう？」

……言つてたつけ？ どうかな？ 分からないけど、まあ元々大量に兵力差し向けられたから既に部長が危ない！ つて思つちやつてたし。いやこりや参つた、なんだかんだライザーさんの手のひらの上だね僕の動き。

「でもそれをここでバラしちゃうのはどうなんです？ ほら、ここで僕が盾になつて2人を逃がすとかは」

「考えないわけないだろ。逃げれない程度に消耗はしてもらつたさ。君が来るのがあと少しでも遅ければ、方針転換で俺は彼女にトドメを指していた。そこは俺の読み違いだ」

「お互い儘なりませんねエ」

「全くだ、素直に負けてくれたら良いものを」

なんだか愉快になって、ライザー氏と一緒に笑つてしまふ。良くは分からないけど、今確かに奇妙な友情を感じたような、感じてないような、そんな不思議な感覚だ。

「……………何故、お前はそこまでするんだ」

「おっと、時間稼ぎですか？ 乗ってやる理由はありませんし今からもう動き始めますけど」

「それができるならとつくにやっつているだろう？ お前は相当に頭が回るようだ。俺の思惑も、だいたいはここに着いた時に思い至っているだろう？ 一刻も早く動くべきということにも。時間稼ぎをしているのはお前の方だ、兵藤一誠。今までに出会ったことのない、お前という敵に敬意を評して、俺はソレに乗つかろうとしているだけだ」

「……………」

「だからこそ気になる。そこまで馬鹿じゃないはずだ。話の断片からでも、俺とリアスの婚姻が悪魔社会においてどれだけの意味を持つか理解してるんだろう？」

「まあ、分かりますよ。貴族の結婚なんてそんなものだし、特に悪魔陣営はそもその頭数大分減らしたって聞きますし。純血悪魔の旗頭、欲しいですよ。次期魔王だったりして？」

「そこまで思い至るのに、何故？」

「……………全く、本当。やになるね、どいつもこいつも」

「本当、どいつもこいつも僕を買い被りすぎだ。お陰で平凡とは真逆の生活だったの。」

部長は口八丁で僕を店長に抜擢するし、朱乃サンはまるで僕をDS仲間みたいに扱う

し。祐人クンと小猫チャンはなーんか僕に一目置いてる風だし、アーシアに至ってはヒーローかなんかを見る目だ。オマケに腕の中のクソトカゲは僕の何を勘違いしたのか死なせようとしないうし、今日会った敵の皆々様方はまるで僕が危険人物かのように警戒してくる。

まるで……そう、僕が凄いやつみたいに見える。気持ち悪くて吐き気がする。僕は『異常な普通』なんだ。凄いわけがあるわけない。

でも、何が一番気持ちが悪いつて……それが嬉しいと思つちやつてる自分自身なんだよね。

本当もう、嬉しいことばかりだ。自分に胸を張れるどころか、なんかこう………言葉にできないけど、胸の辺りがイイ感じなんだ。思わず頬も緩んじまう。

これなら、うん。もう思い残すことはないネ。

「たったひとつ」

「……？」

「たったひとつ、胸に点った小さな熱が全てを救うことだつてある。僕はその暖かさを、死んでも忘れない」

そう、死んでも忘れない。ガワだけマトモな屑鉄みたいな僕が、自分に胸を張れる凄いやつになれてるんだから。これはもう救い以外の何物でもないのさ。

「命の恩に報いることは、そんなに不思議なことかな。ライザー氏」

「ああおかしいね、余計におかしい。1度死にかけたのなら、もう二度と失わないように怯えるものだろう？ 今のお前のその目は……殉教者の目だ。いつか戦ったことのある、教会の戦士の目そっくりだ。手前の命を投げ出すことを恐れていない、何かに命を捧げる生贄の目だ」

「ひつでえ言われよう、僕ちゃん泣いちゃう。……だが、大正解だ」

でもそうだな……僕がそんな狂人に間違えられるのは勘弁ならないな。そんなだいたいそれたモノになった覚えはない。結局、僕は普通の男の子なんだ。

そう、普通の男の子なんだ。だからさ、仕方がないだろう？

「惚れちゃったんだよ」

「……なに？」

「惚れちゃったんだよ、リアス・グレモリーさんに。手を握られて、安心させられて、そこから伝わる熱にやられちゃったんだよ。全く、『異常な普通』が聞いて呆れる！ こんな対象外の、ド級の美人に惚れるとか！ 情けなくて涙が出るよ！」

「は、え、んんん??？」

本当、恥ずかしいったらありやしない。僕の夢はふつつの会社に就職して、社畜になって、なんかそれっぽい人とイイ感じになって、ふつつーな一生を終えることだった

んだ。全く人生設計どうなつてやがる、マジであの元カノ許さねえ、地獄に墮ちろ！
いや墮ちてたわ。

「でも、惚れちまつたんだから仕方がない。困つてるんなら、助けたくなくなつちやうモンだろなりふり構わず。例えそれが、僕の命を食い潰すことになつたとしても、だ」

「そんな、理由で……？」

「うん、そんなどこにでもありふれた、ちつぽけだけど、死んでも譲れない理由だ。テメエらみんな買ひ被りすぎなんだよ本当。僕は感情で動くノータリンなんだ」

心臓が早鐘を打つ。エンジンのような音と共に熱と血が全身から噴き出す。

「だから僕は命を、魂を燃やす。一切の後悔なく、一切の欠片も遺さずにここで燃やし尽くす。適当なところで死んどかないと後が怖いんだ。てことで、ここで余すことなく有効利用して死んでやる」

『Boost!!』

ボロボロボロの身体に鞭打つように、神器が倍加の音を告げる。後先考えない全体倍加だ。2倍だけ……それでも、その2倍は僕にこれ以上ない最期の勇気を与えてくれた。「やろうぜ、ライザー・フェニックス。僕と一緒に、死んでくれよ」

開幕の狼煙代わりに、僕は自分の血を前に飛ばし、爆発させた。



警戒して距離を取られると思っていたのだが、意外なことに僕らの戦いはシンプルな殴り合いに行き着いた。まあ空を飛ぶには森が邪魔だし、しかも燃えない。それなら直接死にかけの僕に一撃をぶち込む方が良いと思っただろう。こつちとしても願ったり叶ったりだ。

でも戦況はあまりよろしくない。僕が一方的にボロボロになつてくのに対して、向こうは無傷だ。殴つても殴つてもすぐに燃えて回復される。パツと見どころか、どう見ても僕の方がジリ貧だ。

「どうした兵藤一誠!? 俺を殺すんじゃないのか!？」

「ガフツ……! つてえな、そう簡単に出来たらアンタの妹ももうちよい楽に落とせたくソが!」

『Burst』

苛立ち混じりに顔面ストレートを叩き込むが、手応えが無いままその整ったツラを貫く。よろけて前のめりに倒れ込みそうなるのを、手伝つてやると言わんばかりに背中を蹴り飛ばされる。

地面で顔が削れ、右頬が完全に剥がれる。痛いし、上手く喋ることができない。

「ああふほ……ひぬほろいれえなひくひよう」

「……ッ!? 貴様、なんだそれは!？」

ゆらりと立ち上がった僕の顔を見て、表情が青ざめるライザー。心当たりが……いかに、思いつかない。

「悪魔の……いや人間の骨ではない! 血よりも赤い、その骨はなんだ!？」

「ああ、ほれは」

『Boost!!』

一度切れた倍加を、回復力に絞つてもう一度使う。シュルルル……という音を立てて、なんとか筋肉と血管は復元できた。空気が染みて死ぬ程痛い。

「いいだろこれ、特殊性だぜ。ちよつとばかし怪しいナニカと取引しただけさ。僕の【骨】をあげるので、力をくださいってね?」

いやもうホント、ろくでもない取引だったよな。

「これ、取引するまで僕は知らなかったんだだけさ。血つて【骨】から造られるらしいね。そして血は全身を駆け巡り身体に馴染んでいく」

「な、何が言いたい?」

「まあお察しの通り、僕の【骨】はもう悪魔の骨じゃない。そこで造られる血もそうさ。だからね、これは嬉しい誤算だったんだけど、僕つてば聖なるモノに対して耐性が付い

ちやつたのさ。身体の半分以上が悪魔じゃなくなっちゃまったんでね」

そしてポーチから取り出すのは、聖水の入った瓶。それを握り潰して、割る。瓶の破片が手の皮膚を割き、そこから聖水が入って皮膚と肉を焼く。皮膚はまだ全然血の影響が及んでないから簡単に溶けたが、肉は煙が出る程度で収まった。でもすげえ痛い、光の槍レベル。でも死なない程度だから丁度いい。

「馬鹿な！ その程度の聖水、蒸発させて消し飛ばしてくれろ！」

「おっと、これで殴って聖水パンチだつて？ 冗談キツイぜ」

「ならば痛みを押し付ける為か？ だからそれならば何故最初からそれをしない!? それはできないからだからだろう!!」

まあ、その通りだ。ライザーは攻撃を食らう瞬間に身体を炎に変換するという荒業で、僕からの直接攻撃を交わしている。『循環する苦痛』ペインサーキュレーターの起動条件はバレてる。

「うん、ホントもうそれ。お手上げ状態。……なのにライザー、何をそんなに怯えてるんだい？」

「お、怯えてなど！」

「分かるよーうん、すっごい分かる。分からないものが動いて喋っていると、気持ち悪くて怖いよねえ。……フヒヒ、ねえそれ普段のアンタの情動かい？」

「……!？」

「苦痛つてのは何も……直接的な痛みだけじゃあないだろう？」

「な、あ……!!」

お手上げ状態なんて真っ赤なウソ。実は初手でマーキングを済ませてる。血を噴き出して飽和水蒸気爆発させたのは、散布させた血でマーキングするためだったというわけ。

ただ最初から痛みを回せば警戒されて狙った行動をされなくなる。ライザーが部長達に対してやったことのお返しってやつさ。

「だからまずは精神的苦痛を押し付けた。元々これでも普通の高校生なもんでね、死ぬとか色々言っても本当は心の底から怖いし、あなたに立ち向かうのも怖い。その恐怖、ちゃんと回ってきてるだろう？」

「だが、所詮お前でも飲み込める程度の恐怖だ！ 何故、こんなにも足が竦むようなモノになっているんだ！」

事実、ライザーは腰が抜けたかのようにへたりこみ、震え、戦意の色を無くして僕を見上げている。

「勘違いしてらっしゃいますけど、『循環する苦痛』って名前から想像つきませんか？ 循環させてるんですよ、僕とアンタの間で」

それこそが真骨頂。僕の痛みを相手に押し付け、その押し付けられた痛みを上乗せし

た相手の痛みを僕に押し付け返し、それを無限に繰り返す。それこそが『循環する苦痛』。

増える恐怖を勇気で飲み込み続け、際限なく増していく痛みに根性で耐えなければならぬ。逆に言えば、それさえできれば相手は勝手に自滅してくれる。飲み込んだところで総量は変わらないのだから。

「狂ってる……貴様は、狂っている……!! やろうと思ったことも、それを飲み込む精神性も!!」

「そりやどうも。……さてと、気を強く持てよ。今から根比べが始まるからさ。」

「何だ……ガツ!?!」

突如全身から炎を噴き出し、のたうち回るライザー。そりやそうだ、たった今痛みの押し付け合いを始めたんだから。

全身から炎が噴き出しているのは、不死鳥の身体が損傷を受けたと誤認して、痛みの箇所を燃やして再生しようとしているからだろう。ちよどこさっきのレイヴエル嬢の反応がそうだったから間違いない、はず。全身燃えてるってことは全身痛いんだな僕。実際痛いし今も雪だるま式に痛みが加速していつてる。

「残念なこと、『循環する苦痛』は僕の意識がある間じゃないと機能しないんだ。痛みをやって失えば、アンタはこの苦痛の無限牢獄から脱出できるってワケ。先に心を

折つとかなないと苦痛を飲み込んで僕をリタイアさせようとしてくるだろうから、最初からしなかったって話。……聡明なあなたなら気がついてるはずだ。攻撃をすればその痛みが自分に帰ってくることも。それを理解した上で、僕に攻撃する勇氣はあるかな？」

何を言っているのか分からない叫びの羅列。痛みを耐える訓練はしてたみたいだけど、文字通り死ぬような痛みには慣れてないようだ。まあそれも仕方の無いことさ。だって死ぬ前に復活するんだから。受けるはずのない痛みってことだ。その辺、僕は経験済み。年季が違うね、1回だけだけど。

「どうだい、死に嫌われた鳥よ。死の味は、中々クルだろう？」

……さて、僕も長々と敵をいたぶる趣味はないし、僕の方もいつまで持つかは分からない。少なくともタイムリミットまでは持たないし、復活したライザーに部長とアーシアがやられる展開は避けたい。

だから、そう。やっぱりこうなるのだ。さつきは聖水を飲んでレイヴェル嬢を昏倒させたが、今度はそうはいかない。より確実に、絶対に。

「アーシア短い間だったけど本当にありがとう。部長をよろしくね。付き合い短いけどさ、それでもこのヒトが結構溜め込むのは傍から見ても分かるし。アーシアも支えてくれると嬉しいかな」

「い、イツセー、さん……?」

少しでも憂いを断つために、そう言い残す。ああ畜生、怖いな。震えてくるよ。

「それでは部長、おさらばです。本当に、ありがとうございました」

「待ちなさい、イツセー!!」

後ろ髪を引かれる気分で、でもどこか悪くない気分で。僕はホルスターに納めてあつたウチの騎士から貰った魔剣を抜いて、それを「心臓」に、祈るように突き立て、引き抜いた。

無理に加圧したせいで、どう見ても助からない量の血が、胸から噴き出す。

遠くで聴こえるアナウンス、ライザー・フェニックス脱落、リアス・グレモリーの勝利。そこまで聞き届けて、僕は意識を放り投げた。

へへへ………イツセーくん、だい、しよう、りい………



『本当に、度し難い』

『だがししまあ………悪くない男だった』



その18

『貴様、完全に俺との約束が頭から飛んでたな?』

「いや悪い悪い。その場のノリと雰囲気と終活テンションで突っ走ったわ」

まあ欠片も悪いとは思ってないんだが。こんな僕を宿主にする方が悪い。

今僕は、多分神器の中にいる。死ぬ前の走馬灯的なアレだろう。まだ現世に留まってるっぽいのは、多分ドライグが文句を言うためだけになんやかんやしてるんだろう。

「でもさ、本当に死んどかないと本当に不安だったんだ。ドラゴンなんて厄ネタを部長に抱え込んで欲しくなかったんだ」

『俺を前によくそんなことが言えたな』

「だって最期だもん、言いたいこと言つとかないと後悔するぜ」

あとまあ、父さんと母さんに悪魔だつてことがバレる前に死にたかったし。悪魔つてバレて嫌われたら、その……ちよつと死ねる。今もう死んでるけど。

それと……………

『告白まがいの宣言をした故、枷になる前に消したかった、だな?』

「うん。あの場では気合いを入れるためと、ライザー氏をこっちの雰囲気呑み込ませ

るために言うしか無かったけど、下僕の元人間の転生悪魔が自分の王に告白って、色々ダメだよ。立場的にも、その後の眷属内での雰囲気的にも。やー、綺麗さっぱり片付いて良かった良かった！」

まあその、なんだ。仮に天地がひっくり返るようなことが起こって、仮にそれが受け入れられたとしても。その後僕がやって行けるか？ って聞かれたら『No!!』と強く答えるよ。部長がOKでも家がダメそうだし、まかり間違つて家の方もOKでも貴族的なあれやこれやが僕に向いてるとは思えないしそーゆー勉強耐えられないよ。イツセー小市民だもん！」

「……もう既に結構な迷惑掛けてんだよ。返しきれない恩を受けたのに。だから、もう僕みたいなヤツは嫌いになって、懲り懲りだつて心の底から思つてほしいんだ。ほら、さっきの僕つてば、典型的な面倒臭いヤツでしょ？ ライザー氏の追い詰め方も色々アレだったと思うし！」

『意図的だったのか？』

「……………いやその、素です」

『何故貴様は悪魔に生を受けなかったのだろうか。いや、悪魔に収まりきるかも怪しいところだ』

ひつでえ言われようだ。否定できねえが。

「まあでもね、満足だよ。僕は心の底から満足した。胸を張れる、凄いやつにちゃんとなれた。平凡だけど、語る中身のあるヤツに、僕はなれたんだ。その一端に、お前のお陰もある。不甲斐ない相棒だったのに、手を尽くしてくれて本当にありがとうドライブ。心の底から感謝をしてる」

『……フン、感謝をされるようなことはしていない。単なる暇潰しに過ぎん』

「お、照れ隠しか？ 照れ隠しかこのこの〜！」

『うるさい、離れろ！』

ウリウリと足の鱗を撫でると思いつき蹴飛ばされた。痛みはないけれど。

『それに、だ。俺は本当に、お前に感謝されるようなことはしていない。もう一度言うぞ、俺はお前に感謝されるようなことはしていない』

「な、なんだよ。へんな含み持たせやがって。一体なんだってんだ」

見上げるようにドライブの顔に視線をやると……どこか笑ってるように見える。なんだらう、ようやくとドラゴンの表情が分かるようになったのにぜんっぜん嬉しくないこの感じ。警鐘も鳴ってるし………。

……待て、なんで警鐘が鳴っている？

『お前が俺との約束を破ったように、俺もお前との契約やくそくを破っている。お前に禁断の力を与える契約だ。既に対価は貰ったが、与える前にお前は死んだ。コレはあまり良くない

いことだと、そう思ってたな』

「思ってた……なんだよ……?」

『貴様の意識が切れたその瞬間に、1回分の権利を行使させて貰ったということだ。お前の傷を癒し、失った血を補填するには十分過ぎる力をな』

な、ななな、なアーツ!?

「やりやがったなクソトカゲ! 最後の最後までろくなことしねえなテムエ!!」

『最後、では無い。お前は死の淵から蘇るのだから。これでお互い、約束の続きを果たせるじゃないか』

く、くそう……どんな面して生き返ればいいか検討もつかねえ……。『おさらばです(キリツ)』とかやつといて生き返るの恥ずかし過ぎんだろ! 盛大に嫌われムーヴこなした上なのも嫌な要素だ!

『簡単には死なせんで、兵藤一誠。相棒だからな、当然だろう』

「疫病神とも読むけどな……つたく」

だがまあ、そうなったんならそうなたで仕方がない。約束通り、白いの? を倒すために奮闘してやろうじゃないのさ。

「まずはぐれ悪魔になるところから始めないと……殺されたくないし。そこからは適当な拠点を作るか魔法使いに保護してもらって生活基盤を立てて、それでそれで

………」

『しつかし……成程、自称するだけはあつて確かにノータリンだ。考えが足りん』

「なにおう、否定はしないけど今必死に考えてるんだゾウ？」

『逃げ切れる、などと馬鹿なことをほざくのがその証拠だ。言つただろう、後でどんな風に土下座をするのか考えておけ、とな。それは俺に対してではない。お前が愛してやまないあの女に対してだ』

………え？

『“こういう時、なんと言うんだったか。そうだな……お前の罪を数えろ、というヤツだな？”』

その姿を神器の中から眺めてやるさ。ヤツがそう言つた瞬間、急に意識が遠のく。叩き出されようとしてるのだろう。

「い、嫌だ！　なんか嫌な予感がする！　もう少しここに居させてよドライグさあん!!」
『断る。クソトカゲと繰り返し言つたこと、俺は覚えてるからな?』

「器ちつちえなテメエ!!　ヤダ、ヤダ！　小生復活したくなあ………」



「は、はア……ではお言葉に甘えて……」

僕もそういうこと意識しちゃうと何も出来なくなるしね……。うん、なんかもう色々察しがついちゃったけど、言葉にしちゃうと色々震えが来るし、もう何も考えないように。

「ここにいるのは、妹の心配をしているただの兄だからね」

「それも十中八九魔王様じゃないですか!!! 考えないようにしていたのに!!!」

「しーっ。静かに、兵藤一誠くん。今、リアスがここで寝ているからね」

「あつ、ハイ……って、部長が?」

見えてないし感覚も死んでるからなのか、全く気が付かなかった。もしか、相当に精神に負担を掛けたか? うーん、非常に申し訳ない。

「それはそうと一誠くん。君を一発殴らせてくれないかな?」

「いやあの、どういう流れ?」

「いやあ、そのこう……リーアさんを泣かせた君を、何も無しに認めるのは違うというか……」

「リーアたんて……」

僕の中での魔王像が音を立てて崩れていく。それはそれとして結構本気で言ってるらしい、命の危機を知らせる警鐘がガンガン鳴っている。うるせえ……。

「そもそも、こう言っちゃあなんですが、死ぬつもりだったんですよ。お節介な相棒が何やら勝手に延命処置をしちゃったせいで生きてますけど。だからその……ごめんなさい。後先考えないで、持てる全てを出し切って戦ったんです。部長が困ったから、どうしてもそうしたかったんです。まさか、泣くレベルで悲しんでもらえるほど良く思われていたとも思ってたし。今ちよつと青天の霹靂ですよ」

「……一誠くん。君はグレモリー家がどういう家かは知っている、よね？」

どこか呆れたような、怯えてるような声色だ。あまりの無知さに呆れられたのだろうか？

「綺麗な紅髪を持つ、眷属をとてても大事にしてくれる一族ということは。僕も部長には良くしていただきました」

「知っててこれなのかい……彼女も苦勞するだろうね……」

なんだろうこの、理解が足りてないって暗に言われてる感じ。……あー、頭が上手く動いてないな。

「とりあえず、殴りたいというのは一旦冗談にしておくとして。私は君にお礼を言いたかったんだ。リアスの力になってくれてありがとう、一誠くん」

「い、いやいや。そんな当たり前のことにお礼を言われても……」

「それでも、だよ。私では立場上、どうにかしてあげることができなかったからね」

「あア……魔王様ですもんね。身内鼻負すると角が立つ、と」

そうだよなあ、今軽く話しただけでもこのお方が相当なシスコンなのは分かる。そんなヒトが妹の意にそぐわない結婚を許容するわけがないんだよなあ。

「何も完全に反対というわけじゃなかったのだけどね。為政者としてはそっちの方がありがたい部分もあるし」

「部長に、納得の行く選択をして欲しかったんですよね？」

「うん、そういうことだ」

納得した上でライザー氏とくっつくならそれでよし。そうでないなら……ってやつか。いやあ、天上人達は大変だアね。

『どちらかと言うと天上人なのはお前の方だがな、二天龍だぞ俺たちは』

うるさいぞクソトカゲ、プライド高過ぎくんかよ。いやまあ事実かも知らんが、それでも僕ア悪魔！ 地の底の住人！

「なのでお礼として、何か力になれることは無いかな？ 私個人だとあまり大したことはしてあげられないんだが……」

「いえいえそんな恐れ多過ぎます!! 現状ですら過分な待遇なのに………あつ」
「？」

もしやこの状況、使えるのでは？ 個人とはいえ魔王になるほどの悪魔、僕一人をは

ぐれ悪魔にすることぐらいわけないはず!

「じゃあお願いします、僕をはぐれ悪魔にしてくれませんか!」

「一体何がどうしてそうなったんだい!」

あり? 通らなかつたか。ていうかそりやそうだ、一体どこの誰が『ご褒美に私を追放して犯罪者にしてください!』って言うんだらう。今まさに僕がいったが、非常におかしなことを言ってしまった気がする。

「いやちゃうんです、おかしいことを言ってる自覚はありますけど、このまま僕を置いとくのヤバくないですか! 赤龍帝ですよ、ただの劇物じゃないですか! 嫌ですよ皆がこの籠手由来のゴタゴタに巻き込まれて死ぬの!」

「言わんとしてることは分からないでもないけど、話の流れ的に察するものは無かつたのかい!」

「ハッ、分かつた上で逆らってますが何か!」

なんかこう、自覚が足りないのはわかつたよ畜生! 中々に僕は大事に思われてるつてのは察したさ!

「だからこそダメだ、絶対に巻き込めない。誰かが僕に死んで欲しくないように、僕もそのヒトに死んで欲しくない。………僕が強ければ、どんなことがあつても跳ね除けられるって言えますけれど。そんな無責任なこと、僕には言えません」

「……例えばそう、私が何とかしてあげようと言っても?」

「自分で自分のケツ拭くのは普通のことでは?」
あたりまえ

「……………」

なお、片腕に眠る相棒に関しては除外だが。原因こいっだしせいぜい振り回してやる。

てことで、いろんな意味で僕はこのままりアス・グレモリー眷属に席を置くのはノーセンキュー。死んで諸々処理するつもりだったのにめんどくせえことになったなあもう!

「どうしてもダメですか? それなら僕は隙を見て自分でどっか行くだけです。たとえば悪魔陣営の全てが敵に回ってもです。なんなら襲われるのは都合だ、適当なところで死ぬるか、強くなつて白い龍に立ち向かえるかできますし。それとも魔王様、今ここで、僕を処理しますか?」

そうであつてくれるのなら、僕も手間が省けるといふものだ。実際殴らせてくれないかなつて言つてたくらいだし、どうぞ存分につて感じだ。

そうして変な覚悟を決めて脱力していると、目の前にいるらしい魔王様が、深い深い溜息を吐いた。

「君は相当に頑固なようだ。しかし、私は君の胸の内を聴けてよかったよ」

「そりやどうも。……で、殺るんです殺らないんです?」

「それは私のすることじゃないからね。リアス、あとは自分で何とかするんだよ」

んえあ????

「では兵藤誠くん、また会おう。個人的に君のお願いを聞く件は、その時にもう一度ね?」

「いや待つて。ね? じゃない。今猛烈に警鐘がガンガン鳴って怖いんですけど!!! 一人にしないで、お願いします!!!」

「ははは、一人じゃないからそのお願いは聞けないね!」

「鬼! 悪魔! 魔王!!!」

ダメだ、どう考えても何処吹く風! しかもさつきまで無かった気配が増える気がする、めっちゃ覚えのある気配するう!!! 合わせる顔が無さすぎる!!!

「あ、そうそう。よく分からないがアジユカがよろしく伝えてくれと言っていたよ。なんでも君のラーメンのファンらしいね。あと20秒とも言ってたが」

「誰だよそのヒト!! 平麵の常連さんなのは分かったけど!!!」

背脂の炊き具合を秒単位で言い当てるのあの人しかいねえもん!! 悪魔だったんかいあのヒト!! いやそんなことは今はどうでもいい、扉の開く音と閉まる音でもう僕あのヒトと一緒に残されちゃいましたよね!!

「じゃ、じゃ僕もう疲れちゃったし寝ちやおうかなー」

「あなたはいつもそうね、逃げるようにはぐらかそうとする」

「……………逃がしてくれませんか？」

「ダメよ」

ダメだったかー、あっはっはっはっ。

猛烈に死にてえ!!!

その19

「……………」
「……………」

視界は戻らず、ただ沈黙が場を支配する。直に戻るとはドライグの弁だが、見えないせいで余計にこの重苦しい空気を感じちやうので早く戻って欲しい、切に。

いやもうどの面下げて生き返っちゃったんだろうね僕。冷静に考えなくとも目の前で死ぬとかアレだし、泣いてくれるほどよく思われてるってことはこれも結構なトラウマになっちゃったのではないのだろうか。既に気持ち悪いのに、急速に腹が痛くなつて余計に気持ち悪くなってくる。

仕方ない、悪いのは僕だ。意を決して口を開く。

「……あー、そのー。どこから聞いてました？」

「全部よ、あなたが起きてから、全部」

「魔王様が寝てるって言ってたのは嘘だったんですね……」

「逆に聞くけれど、あんなことされて寝れると思ってるのかしら？ 目を離すといなくなりそう怖いし、事実そういう話をしていたわよね？」

「うっ……………」

まさにその通りなので反論できねえ。というか今でも思ってますよ、ええ。ただもう多分……逃げられないよね、僕？

「そうよ、逃がすつもりはないわ。こんなに私の心を滅茶苦茶にしてくれたもの、責任を取ってもらわないとやってられないわ」

「それってムカつくからサンドバッグにするみたいなの……………あーいえなんでもないです」

突如警鐘がガンガン鳴ったので多分滅びの魔力を出された気がする。ステイステイ、怒るの良くない。

「この期に及んでまだ話を逸らそうとするのね？　じゃあ逃げられないように直接的に言った方がいいかしら？　それで少しは自分のやったことを理解してくれるかもしれないわね？」

「待って、早まらないで!!　それされるとどうしたらいいのか分かんなくりますので!!」

「どうしたらいいのか分からないのは、こっちのセリフよ!!」

涙声混じりの叫びに、流石にマトモな思考が戻ってくる。不誠実でもなんでもいいから逃げようはぐらかさそうとしてたけど、これはどう考えても僕がクソ野郎だ。本当に、

良くない。

「……………よく思われてないと思っていたのよ。あなたにとって是不本意なことばかりだったでしょうから。本当は私のような生徒と交流するのは嫌なんじゃないか、とか。面倒なことに巻き込まれたと思ってるんじゃないか、とか。…………だからどこか壁のある対応をされてるんじゃないかって思ってたのよ。いつもあなたの目を見る時、『お前のせいだ』って恨まれてる気がしていたのよ」

「……………そんな馬鹿な。確かに慣れないことばかりでしたが、あの時言ったように僕は、」

「ええ、ええ。そこはもう疑ってないわ。あなたは本気だった。本気で、私のために命を掛けるつもりだった。それを否応なしに理解させられたわ……………あんな!! ろくでもない方法で!!」

僕の手が掴まれる。握り潰しそうな強さで、でもどこから縋るような手つきで。それはどこか、迷子のそれを彷彿とさせる。

「私のせいだと思ったの……………! 私があなをここまで追い詰めてしまったって……………! 私なんかのために、どうして……………っ!」

「なんか、なんて言わないでくださいよ。死にかけて僕が馬鹿みたいだ。……………それだけの理由が、僕にはあつたんだ」

それはもう存分に、あの場にいた全員の前にぶちまけたワケだが。でもそれをこのヒトの前でもう一度説明するのは気恥しい。代わりに、少しでも安心して欲しくて手を握り返す。

「本当に救われて、本当に幸せだったんだ。それだけでもう何も要らないって本当に思っちゃったんだ。でも僕には返せるものが何一つないから。だから僕に何ができることがあれば、それを全力でやり遂げようと、そう思ったんです」

まあ死ぬ云々はいろんな思惑があつてそうしようと思ったワケだが……その判断はどうやらいろんな意味でマズかったらしい。

「結局、変われなかった部分もあつたつてことなんですよ。相変わらずのクソ凡人だし、何かと自分の中で抱え込んでグルグルするし。周りを頼るといふ発想も無くてこうなったワケなので、あなたのせいでは断じてありませんよ部長。100%僕が悪いです。というかそういうことにしてくれないと、今度こそ自分で自分の首括りたくなる」

「次そんなことしてみなさい、今度は首輪付けて監禁するわよ」

「あはは……部長でもそんな冗談言うんですね？」

茶化すように笑うと、何も返事が帰つてこない。おつかしいなあ、これどういうことなんだろうなあ。胃が痛くて仕方がない。

「だから部長、いいんです。もう流石に死ぬとかは言いませんが、僕のことです部長が

責任感することは無いです。前にも言いましたよね？ 僕は僕の心に殉じて、『普通』あたりまえだ
 と思うことをしただけです。僕は『異常な普通』兵藤一誠、気持ち悪いくらい普通に固
 執する変なやつなんですから」

だからその、泣かないでくれると嬉しいかなって。いやもう本当、女のヒト泣かせる
 とか……しかも観賞用レベルの美人とはいえ、僕が惚れちやつた相手ですし。マジでど
 うしたらいいのか分からない。今度はマジだ。

僕の祈りが通じたのか、少しずつ息から湿り気が取れていく。その間も僕と部長はお
 互いの存在を確かめるように手を握り合うのだった。



あれから時間をかけて僕の視界は徐々に徐々に回復し、今ようやくと完全にくつきり
 見えるまで回復した。原因は分からないがちゃんと見えてるので深く考えないように
 する。

僕はどこか病室みたいな所に寝かされてるんじゃないかな？ と思っていたが大正
 解、患者衣を見に纏ってベッドに横たわつてたみたい。まあ着てた服はもう着れたモン
 じゃないだろうしね。

部長は、相変わらずの観賞用美人だったけど、相当に泣き腫らしたのか目が赤い。今はもうほんのり笑顔を見せてくれてるけれど……さつきまで泣いてたことを思うと罪悪感がこれでもかとのしかかってくる。死に……いや、泣きそう。

「どう、大丈夫？」

「ええ大丈夫です、てか近い近い近い」

視界が戻ったことを察した部長が、デコに手を当てて僕の目を覗き込んでくる。心臓に悪いのでその観賞用の面を近付けないで欲しい、切に。

「いいですか、付き合ってもない男女の距離じゃないんですよ。前から思ってたんですが距離感バグってます」

「あら、これでも今までは遠慮していた方なのよ？」

「ウソでしょう!？」

だが表情見る限り事実らしい。ああ、眷属愛が深いから距離感もおかしいんだ。なるほどなるほど。……いろんな意味で将来が不安になるなこのヒト。将来の相手がヤキモキする展開が見える見える。

などと余計なことを考えてると、部長が少し不満げな顔をする。

「今余計なこと考えたでしょう?」

「いえ別に」

余計なことではねーでしょう、多分。主の将来を心配するのは眷属の務め、多分。

「ところでイツセー、将来のことを前提に私と付き合ってくれないかしら？」

「え、普通に嫌ですけど」

あまりにもサラッと告白されるもんだから、思わず素で返しちまったじゃねーか。しかし部長は想定内の返答だったのか、呆れたように笑うだけだ。

「即答ね、理由を聞いていいかしら？」

「観賞用レベルの美人とお付き合いする予定は無いんですよ」

「訂正するわ、私が納得できる理由を聞いていいかしら」

「失礼だったの認めますからその魔力を迸らせる手を下げてください。ビビって話もできませぬ」

あと僕がボケた時に滅びの魔力出してくるの本当にやめて欲しい。そもそもボケるなって？　ですよねー。

「単純に身分違い、部長はOKでもグレモリー家の方々が認めてくれるのは別の話ですよね？　あとは世間体、これも身分ですね。後ろ指さされる生活はごめんです、普通じゃないので。どんなところが琴線に触れたのかは分かりませんが、僕のこととは忘れて今度はいい感じに身分の釣り合いが取れた相手に運命感じた方がいいのでは？」

「……………一応確認するのだけど、あなた、私に惚れてるのよね？」

「ええ。ふざけたりおどけたりしますけど、相手を出し抜く以外で虚言は口にしません。何の間違いかは分かりませんが、確かに僕は部長に惚れてますよ」

「凄いですね、快拳ですよ！　って言うと、呆れながら睨んできました。器用なことです
ね部長。」

「今ほど自分の身分と顔を恨んだことはないわね。普通逆じゃないかしら」

「えー、僕『異常な普通』だからわかんない。……待つて、いや本当に待つて。おどけるのもやめになりますからアイアンクローの構えはやめてください」

「惚れてることは確認できたし、なんかこう……魔力で何とかできないかしら？　この期に及んでまだ嫌われようとしてる馬鹿男の脳味噌いじる感じで」

「ば、バレてらー……」

「そしてこのヒトなら実際できそうだから困る。されちゃったらそれはそれで諦めるしかない。」

「そもそもの話、一般論で考えて欲しいのだけど。自分が困ってる時に親身になってくれて、その上で命を掛けて戦ってくれた男の子がいて、しかもその男の子も自分のことを憎からず想ってくれているの。これで諦めろって言う方がどうか普通じゃないと思わない？」

「で、ですわー……」

「だから、私に諦めろって言うのを諦めて頂戴。信じて貰えないかもしれないけれど、これでも本気なのよ」

「この流れで信じないはないですよ……信じないふりも流石にどうかと思いますし……」

「それで、身分が問題だというなら、それはどうにかしてみせるわ。家族だつて説得してみせる。それでも嫌かしら？」

「嫌ですね。赤龍帝という厄ネタを抱え込ませるつもりはねーですよ」

「あなただつて上級悪魔の下僕つて立場を呑んでるじゃない。この場合は私の下僕つて意味じゃなくて、『関わりたくもない貴族つて連中とお近付きにならざるを得ない』って意味だけれど。だからそれぐらい呑めるわ」

「規模が違いますよ」

「私にとつてはその程度よ。見くびらないで頂戴」

「ぐぬぬぬ……この逃げ道をひたすらに潰されていく感じ……割と逃げ場が無くてどうしようもないぞ……」

「……………ま、いいわ。今は逃げないでいてくれるだけで十分。けれど覚えておきなさい、兵藤一誠。私は必ずあなたの首を縦に振らせるわ。たとえどんな手段を使つてもね」

「嫌な処刑宣告だ……勝てる未来が思い浮かばないんですが……」

「ええ、勝つつもりだもの。私の心を滅茶苦茶にした責任は取ってもらわなくちゃ。好きよ、イツセー。絶対に仕留めてみせるわ」

そう言つて笑う部長は……悔しいかな、これ以上なく可愛く見えたのだった。



………というわけで、今回の顛末^{オチ}。

部長が兵藤家にホームステイすることになりました。

「ホントあの女やベーですよ……なりふり構わないのマジで勘弁して欲しいんですけど」

「どこかの誰かのが移ったんじゃないのか？ あ、チャーシュー丼を頼む」

「お釣り出すの面倒だから万札で超越すのやめてくれませんか……。はい、9550円のお釣りです。少々お待ちください」

「半分は嫌がらせだ、ザマア」

そして何故か九頭龍亭に來ているライザー氏。先日閉店間際に來られた時は『復讐か!?'』ってビビって仕方がなかったんだが、『次は負けない』っていう宣戦布告だった。折

角なんて一杯食っていつてと提供したら、思いの外気に入ってくれたらしい。今日もこんな感じで豚骨醤油ラーメンを食いに來てる。

「はい、チャーシュー丼です」

「おつ、サンキュー。なあ、この店チエーン展開する予定なんだよな？ リアスに言つてウチの領地にも出してくれないか？」

「人員が足りねーですよ。あとマニュアルは人間向けだし、どんなルートで食材調達したらいいか分からないんで暫くは手を付けられません。人間界に領地持つてんなら、ちよつとは融通効かせられますけど」

「兄貴と相談するか……」

「そこまでするか……とげなりしつつ、スープ寸胴を混ぜる。なんかもう、疲れるなあこういうの。」

「それで、リアスがなりふり構わないつて話だったか？ いいじゃねえか、そのまま食われれば」

「リアルにハーレム持てるようなヤツと一緒にしないでくれますウ？ いやもう本当にいつ僕の心が折れるか気が気じゃないんですよ……」

「家の方はもう両親懐柔しちゃつて外堀埋まつてるようなもんだし、学校でも部長が僕に告白して返事待ちつてことになつてるし、逃げ場がねえ。」

「お前自身、悪魔の中の悪魔みたいなヤツだが、少々悪魔を舐めすぎだな。その辺の手際の良さは他の追隨を許さない種族だ」

「そういうえばアンタもそうでしたね……」

手際のいい部長を出し抜いて今回の結婚話進めてたんだから、やつぱこのヒトも相当な悪魔だよ本当に。

「まあ本気で何とかしたいなら手が無いわけでもないぞ。ウチの妹とかどうだ？」

「色々言いたいことあるけど、何よりも先にお前自分の妹半殺しにしたヤツを宛がおうとするなよ。狂ってんのか貴様」

「いやなに、将来性はあると思ってな。直に上級悪魔になるだろうし、唾付けとくのも悪くない」

あーヤダヤダ、お貴族様って本当に面倒臭いねえ。

「ていうかそんなホイホイランクアップできるわきやねえだろ……こちとら凡人転生悪魔ぞ」

「凡人かはともかく、100年やそこらで上がってそんな気がするがな」

「それって結構長……ああ、悪魔の尺度でだと短いのか。その辺の価値観の擦り合わせもしていかなくちやなあ」

まあ、先のことは先のことだ。今は目の前の問題を何とかしないと。ただでさえ面倒

臭いモノ抱えてるわけだし。

「ん、ごっつそさん、また来るわ。店の話、ちゃんとリアスにしてくれよ?」

「ありがとうございます、またお越しく下さいませ。通らなくても文句言わんでくださいよ」

ヒラヒラを手を振って退店するライザー氏を見送って、深い溜息が出る。恨んでくれりやいいものを、こんなさっぱり対応されちゃ困る。……やはり結構優良物件だったのではライザー氏。眷属ハーレムに目を瞑れば、器もデカくていい男。

『余計なことを考えると、あの女が飛んで来かねんぞ』

「ははは、まさか……」

相棒に茶化されて乾いた笑いしか出てこない。そこまではないと思うけど、最近余計なこと考えるとすぐに鋭い視線が飛んでくるのももしかしたら、とは思っちゃうよね。

……強くないと。そう思う。強くなれば、こんなことに悩まずに済む。胸を張って、『何があつても守る』って言うようになるなきや。

『ああ、そうしろ。だが自分の持ち味は忘れるな。お前は、お前のまま強くなればいい。力に溺れるような末路を迎えたら、それこそ承知せんぞ』

「うん、分かつてるよ」

決意を固めるように、僕はそつと自分の心に火を灯した。



CHAPTER 2 : パーニング・アップ・ユ^マアイ・ハート
The End.

Sub CHAPTER 2：フアンキー・ナイト（メア）
ウォーカーズ

その1

最近ラーメンばっかり作ってるせいで忘れがちになるが、基本的に悪魔は人間の願いを対価を支払ってもらうことで叶える生き物だ。いや本当はそうなんだよ、うん。

本当ならば僕もそういう普通の契約業務をもっとこなす予定だったのだが……その、思いの外九頭龍亭が繁盛しちまったものだから、結局店長業務に齧り付くことになっちゃったのよね。

前よりはとてども楽！ とはいえ、慣れない仕事も増えたので思った以上に大変だ。1番大変だったマニュアル作りが終わったので、後は次のステップ……オーナー業務を少しづつ部長から引き継ぐことだ。あのヒト僕を社長にでもするつもりなのかな……？

……とまあ話は逸れたが。そう、悪魔は契約する生き物なのだ。そしてやはり悪魔は悪魔というべきか、中には不幸な事件もあると言うもので。

今から語るのは、僕が巻き込まれたとある悪魔の契約……不幸な不幸な悪夢について



「というわけで、そろそろ悪魔っぽいことをしたいと思うのですよ」

『……………お前は何を言ってるんだ？ もう十分悪魔じゃないか』

「あのねえクソトカゲ、僕にも傷つく心はあるんだよ？」

『クソトカゲ言うな殺すぞ』

そんな、割といつものやり取りから始まる河川敷での特訓開始。お店は閉めたが素直に帰ると部長が攻勢を掛けてくるので少しでも時間を潰すように、閉店後の訓練が習慣になりつつある。強くなるのは必要だから部長も渋々ゴーサイン出してくれたしね、やったぜ。

「なんかこう…………アレだよ！ 悪魔っぽい技とか身につけたいお年頃なんだよ！」

『洗脳、脅迫、攪乱辺りは自前の口先だけでもできてると思うが』

「洗脳は流石にできねえよ馬鹿野郎。そうじゃなくて、こう『七つの大罪』みたいなカッチョいいモチーフ使ってなんかしたいんだよ！」

『…………これは驚いた。意外に悪くない案だ。もっとこう、人の心を無くしたようなこと

をするのかと思っていたのだが』

「一応これでもお人好しで通ってるんだけどなア!?!」

まあそんなことは置いといて、確か七つの大罪は『傲慢』、『強欲』、『嫉妬』、『憤怒』、『色欲』、『暴食』、『怠惰』で構成される、『死に至る罪』デッドリー・シンってやつだ。それぞれに対応する悪魔がいるので、転生悪魔の僕が力を借りる相手としてこれ以上ないモチーフと言えるだろう。

『しかしだな相棒、貴様に才能は毛程も無いぞ。この間の訓練で身に付けた正気を疑う嫌がらせに僅かにあつた才覚を全て注ぎ込んだだろう？ これ以上お前に魔力を使つた技の習得は不可能と云つていい』

「そこはもちろん理解してますとも。だけどほら、僕にはこの『決トウワイス・クリティカル・ブレイカー殺スレイの手』があるじゃないか」

『全く使つてない故に忘れてるのかもしれないが、『赤龍帝の籠手』ブリス・テッド・ギアだからな』

「……………んえ？ あ、ああそうだった。偽装してたんだっけか。すっかり忘れてたよ。」

『それで、どう解決するんだ？』

「ええと、まあ神器を魔法の杖兼呪文代わりにするんだよ。神器の機能として追加できるならそれに越したことは無いんだけど」

『……あのなあ相棒。そう簡単に言ってくれるが、神のシステムをそう易々と弄れる訳がないだろう。『譲渡』の件で勘違いしているのかもしれないが、アレはそもそも俺の力、もとい『赤龍帝の籠手』に備わった機能だ。同列に考えるものではない』

「うん、それも把握済み。でもほら、そういうのをブツチする機能だつて神器には備わってるじゃん」

ええと確か……『禁手』

「バランス・ブレイカー」

つて言うんだっけか？ ドライグと取引してストックしてる力も、確か『赤龍帝の籠手』の禁手だったはず。なんか仰々しく『世界の均衡を崩す力』だの言われてるけど、つまりそういうことだよな？

『相棒が真の意味で禁手に目覚めていればそれも可能かもしれない。が、今のお前には足りないものが多過ぎる。……あの壮絶な自殺ですら劇的な経験足り得ないとは、お前の精神はどうなっているんだ』

「僕に言われても知らねえよ。まあそれはそう、何より才能が無いよね。……でもさ、スケールダウン版とも言える『決殺の手』でやるならどう？」

『続ける』

何となく言わんとしてることが伝わったらしい。どこか愉しむ様な気配出しながら続きを促してきた。

「『決殺の手』の禁手なら、今の僕でもできるんじゃないかってこと。まあ厳密に禁手

じゃないような気もするけど。改造に使うリソースは……ちようどほら、本来の禁手用でストックしてる分を使えばいいじゃないか」

『……………稼働データ、リソース共に十二分。設計さえあれば、やってやれないことはないな。しばらくの間、俺が神器の奥深くに潜る必要があるが』

「お、マジ？　じゃあやってみようよ！　僕ちよつと七つの大罪龍・セブンスドラゴン！　みたいなのに憧れてるんだけど！」

『……………ハッ』

「テメエ鼻で笑いやがったなクソトカゲ」

『おう、趣味が幼稚だと笑ってやったのさノータリン』

「……………」

幼稚なのは自覚あるけどそんな言い方ないじゃん……っていうのは置いといて。じゃあどんな名前にすりゃええのん？　という話である。名前は大事だぜ、方向性が決まるし言葉には力が宿るからね！

『そもそも、ある意味もう一つの名前の方を使わんのか？』

「もう一つって……『異常な普通』？」

『九頭龍亭だ。店長だろ貴様』

ああ、そつち。オーナーこそ部長だけど、今店長僕だもんね……。

『七つの大罪に『虚飾』を加え、更にお前自身を含めれば丁度九つだ。名を借りるのにちょうど良からう?』

「いや、悪くないと思うんだけど、その並びに僕加えられるとなんか負けてない?」

『安心しろ、お前の非道さは中々のものだ。実際死に至ってるわけだからな』

「否定しづらい暴論を振りかざすな」

あの時ののは色んな意味でトラウマである。次やったら多分僕は陽の光とおさらば的な意味で。

「とりあえず名前は『九頭龍の積層装甲《ナインヘッズ・パラレル・プレート》」にしよう! これでいいよね、答えは聞いてない!」

『……まあ、別にいいが。どういうモノを想像してるんだこれは』

んーと、どう説明したもんか。

「装甲の重ねがけ。一つ一つが倍加と大罪に準えた効果のあるうつつい板を、身体のとっかに貼っつけて防具にする、みたいな」

『随分ふんわりとした説明だな……イメージはだいたい分かるが。……9回だけ倍加の重ねがけができるのか』

「9回も、だ。お前忘れてるかもしれないけど、僕ちゃん2倍だけでフェニックスに勝った男だぞ」

『自殺行為だったがな。だが2倍だけで相手を翻弄したというのは確かだ。お前に才能は無いが、戦争の適性はあるのやもしれんな』

「ヤダよそんな適性。物騒じゃん」

とりあえずそれぞれの能力は……まあおいおい考えるところとして。素で使っても最大512倍パワーですからね！ それだけの効果を譲渡したり嫌がらせに使ったりで夢が広がるなあ！

「だけど今の僕じゃ4回の倍加……16倍が戦闘に耐えうる限界だから、この案ですらフルに活かせるのは随分先の話になりそうだ……」

『努力が足らん。本来ならこんな与太話をしてる間があれば重りのひとつでも抱えて走り込みをしろというものだ。……しかし手札を増やすのは賛成だ。できることがあればある程、お前はその容赦の無さを以て状況を打破するのだから』

そう言ってドライグは少し黙り込んだあと、こう言った。

『一週間だ。捧げた骨を対価にその積層装甲とやらを完成させてやる。幸い、この神器の中は禁手の情報には事欠かんからな。その間、お前が使えるのは『決殺の手』だけだ。偽装を剥いでも『赤龍帝の籠手』は使えん。有事の際は死なぬ様、死力を尽くすことだな』

「へいへい、まあ大丈夫だって！ じゃ、よろしく頼むぜ相棒！」

『もう一度言うぞ、死なぬ様死力を尽くすんだぞ。貴様に次は無いのだからな』
 まるで物わかりの悪い子供に言い聞かせるように繰り返したドライブは、そうして神器の深層の中に潜っていったのだった。



「てなわけで1週間ほどクソトカゲがいません」

「あの赤龍帝をトカゲ呼ばわりできるのは多分あなたぐらいのものね……チェック・メイトよ」

「うげえ、マジで逃げ場がねえ。部長お強いですねえ……。あー負けた負けた！　アーシア交代〜」

「は、はい！　こ、今度こそ……！」

流石にドライブが遠くに行つてゐることは伝えとかないといけないよね、つてことで素直に帰宅。まだアーシアも起きてたのでパジャマパーティーが開催されることとなつた、僕の部屋で。アーシア起きててくれてありがとう、これで時間潰せるよ……！　なんて考えてたら部長が睨んできた。あ、顔に出てましたのねすみません。

3人それぞれが遊んだことあるゲームがチェスしかなかったもんだから、雑談を挟み

ながらこうやって負け抜けて対戦を繰り返していくことに。……僕思っただけど、これは高校生のパジャマパーティーとして正しい絵面か？

「それにしても、僕もそこそこやれると思っていたのですが、まさかの全敗とは……」

「悪魔の嗜みの一つね。上級悪魔の家なら教育の一環ではないかしら？」

確かにそもそも『悪魔の駒』のモチーフがチェスだからね。

「……ふふっ」

さて次はアーシアの番……とところで、思い出し笑いのようにアーシアが微笑む。急にどつたの？ 負けが混み過ぎて心が砕けたん？

「いえ。なんだか……お兄ちゃんとお姉ちゃんがいたら、こんな感じだったのかなって。なんだか嬉しくなっちゃって」

「うっ……！」

部長と僕、2人揃って胸を抑える。アーシアの純真な笑みにハートブレイク。砕けたのこっちだったね。

「ま、まあでも部長がお姉さんなのは分かるようん。頼りになるもんねえ」

「イツセーさんだって頼りになりますよ！ ……とても無茶をしますけど」

ジトーつと、それこそまさにダメな兄を見るような感じでアーシアが視線を超越すの
で思わず目をそらす。いやあ本当にごめんよ。部長だけじゃなくてアーシアも泣かせ

たと後で聞いちゃって暫く頭が上がりなかつたよ。1日口を利いてくれないだけで済んだのは奇跡だと思ってる。

『命を粗末にするイツセーさんなんて知りません！ フンだ！』

とは先日のアーシアの弁である。いや全くもってその通りである。

「…お姉ちゃん、と呼ばれるのは新鮮ね。お姉様と呼ばれることはあるけれど」

「部長、弟さんか妹さんがいらつしやるんですか？」

「ううん、甥っ子が1人いるの。ミリキヤスつて言うんだけれどね。……近いうちに、

絶つ対実家に連れていくから、その時に紹介してあげるわね」

しまった毒蛇だ。つつかないようにしておこう。

「まあでも、うん。そんなふうにしてもらえないのは悪くないもんだ。ウチにいる間は
実の兄の如くじゃんじゃん頼っていいぞ！」

「そうね。アーシアはいい子だし、うんと甘やかしてあげる」

「えへへ……」

気分はなんだか兄を名乗る不審者である。どけ!!! 僕がお兄ちゃんだぞ!!! (やりた
かつただけ) 実際兄弟姉妹いないので、憧れがないと言えば嘘になる。

「でもチェスでは負けてあげられないわ。全力で来なさい、アーシア」

「次こそは負けません！ イツセーさんの仇討ちです！」

「仇討ちて……僕は死んでませんわよーつと」

そんなこんなで、寝落ちるまでパジャマパーティー……というよりはチエスパ
ティーが続く。アーシアが僕の部屋で寝ちやうこと以外は、割といつものパターンだっ
たとき。

その2

〔月曜日〕

「来たな裏切り者」

「なあにが観賞用だ裏切り者」

「いや本当に待つて欲しい。僕は了承してないぞ、マジで」

「それはそれで女の敵じゃねえかこの野郎!!」

何の変哲もない月曜日、特に問題も無く登校……とはいかなかった。半ば強引に部長と一緒に登校……刺さる視線、美女と野獣。恨まれる要素しか無く、もちろんエロコンピからそんな風に絡まれるわけで……。

しかも悲しいかな、普段はエロコンピの敵であるところの一般生徒達がこの場に限っては奴らの味方だ。同意するようにウンウンと頷かれると僕だつて凹む。まあ奴らの言つてゐることは一々正しいのだが！

「いやお前ら部長のご実家を知らないからそんなことが言えるんだよ……今のままだと家が消されかねん」

「じゃあなんでお前はわざわざリアス先輩のお見合いをぶち壊しにしたと言うんだ！」

「ケツ、メンタルイケメンめ！　どこのエロゲ主人公だつてんだ」

……そう、望まない相手とのお見合いを口八丁手八丁、さらには身体を貼って無しにした。何故かそういうことになっている。だいたいあつてるので否定も出来ないし、あの憎きやり手女悪魔はそれを見越してそういう風に吹聴してるに違いない！　部長をどうやったら出し抜けるか、それができそうなハーレム焼き鳥に相談しても『ざまあwwww』と笑われて終いだし、もう本当に打つ手が無い！

「仮に！　仮にだ！　万が一そういうことになろうとも僕一般庶民！　甲斐性のかの字もねえ！　既に無責任男なのにこれ以上どの面下げて案件増やすつもりは無いんだよ！」

「でもでも、アンタ将来的に九頭龍亭のオーナー店長になるんでしょ？　立派な一経営者じゃん」

ちよつと規模は小さいけど、チエーン展開する予定らしいし、案外もしかしたりして、なんて爆弾発言嘯ましてくれやがったのは桐生。とある理由で『匠』と呼ばれ、恐れられているクラスメイトの女子だ。多分友人枠。

「ていうかオイ、どこから聞いたんだよソレえ?」

「ふふん、私の情報網を嘗めてもらつちや困るよ」

「少なくとも僕は漏らした覚えねえし、僕以外の出処無いと思うんだが!」

「まあうん、私も人伝に聞いたただけではある。出処はグレモリー先輩らしいんだけど」
「あのヒト本当に手段を選ばねえな!？」

ウソダンドドコーン!! と教室の床に盛大な台パンをかます。いや床パンか。表向き平野サンがオーナーやつてることになってるのでアレだけど、本当のオーナー部長だからどう考えても盛大なマッチポンプなんだよなあちくしょう!

「でも実際、見た目からは想像できない優良物件なのよね……。普段はアレだけ人助けもするし、なんだかんだ優しいし……。何も無かつたらその辺のいい感じの子とフラグ建ててそんな感じよね。よっ、エロゲ主人公! アソコの大きさは普通だけど」
「その呼び名流行らせたら、僕の全力でこの街にいられなくするからな」

なんか否定出来そうも無いけどな! だつて毎朝起きたら一糸まとわぬ部長が僕のベッドの中潜り込んでんだもん! 全力で僕の理性を削りに来てるのあのヒト!

なーにが寝る時はいつも裸なの、だ! 一つ童貞散らすことになるか不安で仕方がねえ!

「ところで兵藤、アーシアは? 普段なら一緒に登校してるでしょ」

「ああ、アーシアはなんかやることあるから先に行ってください、つてことらしい。何故かは僕にや分からん」

「ちっ、役立たずめ」

「今のお前の価値はアーシアちゃんの兄ボジってところしかないのに」

「本気でお前らとの友情見直してやろうか、あア??」

仮に僕を介してアーシアと付き合おうってんなら、まず趣味をある程度矯正してからにするぞテメエらマジですよ！

そんなこんなでプンスカしながら席につこうとすると肩を掴まれる。掴んだのは松田と元浜だった。

「なんでえ、まだ恨み言言い足りねえのか？」

「言い足りないな。だがその件じゃねえ」

「少し頼みたいことがあってな。HRまで時間あるし、ちよつと面かしてくれ」

「……あーもう、しゃーねーなー」

雰囲気割とマジだし、無視するのが気が引ける。そう思ってしまったのは単に僕が断れない性格だからなのか。仕方が無いので3人連れ立って屋上に行くことにした。



「社交場に幽霊が出るウ？」

説明しよう！ 社交場……正式名称『健全少年達の社交場』とは、エロ本の廃棄場に

なってる橋の下のスペースのことだ！ 読み終わったエロ本をそこに捨てて置くことで、健全少年の誰かがそこから拾い、読み漁ると言う………まあなんだ、未成年のエロガキ共の救済のためのつてヤツだ。あまり褒められたことではないんだが、僕もお世話になってたしで強くは言えない。多分駒王町でお世話になってない男子は、そういうのに免疫のないマジメくんだけなのではなからうか？

また社交場というだけあって、困った時にあそこに行くと、年上の誰かに相談出来るかも？ つていう一種の駆け込み寺的側面もある。なんなら僕はそういう風に使ってる方が多い。頼まれる側だが。

しっかしココ最近色んなことがあったせいで顔出してなかったが、そんなことになってたのか。

「しかもただの幽霊じゃねえ。エロ本を読み込んでる幽霊なんだ」

「近付くと震えが止まらなくなるし、なんなら気絶するヤツもいるつて噂で、最近あそこにエロ本が貯まりづらくなつたんだよ」

「なんかのギャグかよ。いや当事者からしたら笑えねえけどさ」

昨今ではネットでオカズをつてのが主流になってきてはいるが、それでも紙をめくるあのドキドキが堪らない、というストロングスタイルの猛者もいる。だからやはり、社交場に本が貯まらないというのは……あまり良くないことだと思う。

「でも、だからって僕に何かできると思うなよ。そういうのとは縁遠いぜ僕アよ」

これは大嘘だが、でも自分が悪魔だってバラすのはちよつと勇気が足りないの、でそう言うしかない。まあ幽霊が見えるかどうかは分からないし、そもそも件の幽霊が本物かも分からないけれど。

「でもお前だつたら、なんか不思議なツテでどうにかできるんじゃないか?」

「頼むぜイツセー、お前だけが頼りなんだ!」

手を合わせ、僕を拝み倒す二人を見てため息が出た。本当に僕なら何とかできると思ってるんだろうか、全く。(人間の時は)松田に身体能力で全く歯が立たなかつたし、僕は元浜より頭が良くない。それを知って僕に頼むんだから……………ああもう、ここ最近こんなのばつかだ。吐き気がするのに悪くない気分嫌になるぜ!

「……………はア。噂の幽霊は何時ぐらいに出るんだ?」

「おお、引き受けてくれるのかイツセー!」

「神様仏様イツセー様!」

「調子良過ぎだ馬鹿共! それにお前らにも付き合つて貰うからな! 実際現場見てみねえと何も出来ないし」

「ああ別に構わねえぜ、イツセーがいたら百人力つてもんよ」

「深夜徘徊は、それはそれでちよつと面白そうだしな」

エロに偏つてるとはいえ、僕もコイツらもアホな男子高校生だ。悪いことをするとなるとちよっぴりテンションも上がっちゃう様な馬鹿共なわけ。

「それで、結局いつなんだよ。それとも決まった時間には出てこないんか？」

「聞いた話だと、12時から1時ぐらいに出るらしいな。目撃情報もその辺りが多いつてよ」

「他の時間の目撃情報も無いではないが、狙うならその時間だろうな」

「あいあい把握。うーん、バイトのこともあるからどうスつかねえ」

何も問題なけりゃ、店を12時には出られるし……そうなるか……

「12時半、社交場の上の橋で集合でどうよ？」

「分かった、何とか抜け出して来るわ」

「家の勝手口を開ける時がついに……！」

「誘つといてなんだが無理はすんなよ、一報入れてくれりやそれでいいか」

「おう！」

てなわけで、そういうことになった。中身が中身なので……うーん、部長には言えねえな！ 訓練するつてことで誤魔化そうと決めた。



【火曜日】

「あー終わった終わった！ ではバイトの皆さん、お疲れ様でした！ 明日は僕いないので、立山サンと中村サンの言うことをしっかりと聞いてくださいね！」

「「お疲れ様でした、店長！」」

時間通りに締め作業も終了。ちょうど日付が変わる頃に店を出れた。うーん、バイトくん達のやる気があつて助かるなあ。時給1400円は美味しいもんねえ、分かるよ！

「では店長、私もこれで」

「はい、立山サンもありがとうございます。汗無しまぜそばの試食の方、よろしくお願ひしますね」

さあてお仕事も終わったことだし、社交場に向かいますかねえつと。途中コンビニに立ち寄って翼の生える例のヤツを買ってカシユつと一気飲み！ かあーつ、カフェインが効くなあ！（プラーシーボ効果）

そんなこんなでチリリンチリンと20分、待ち合わせ場所に到着だ。10分も前だといふのに既に現地には2人とも揃つてたんだから驚いた。

「おつすー、なんだ僕が最後かよ。気合い入ってんなお前ら」

「おー、おせーぞイツセー」

「まあ時間前だし許してやろうじゃないか」

……で、だ。あんまり騒ぐと近所迷惑だし、二人を寄せて頭を突きあわせ、小声で会話を始めた。

「どうせ二人で先に見たんだろ？ どうだったよ」

「少なくとも俺達には見えなかったな」

「背筋が震える感じもない。単に見たやつのお勘違いかもしれない」

「何も無いに越したことはないけどな」

「そんなことよりも、今日は久々に新しい恵みが落ちてたぞ」

「絶版になってた『巨乳学園2』だ……まさか生きてアレを拝めるとは……」

「ロリ系はなかった……くっ」

「もしかしてエロ本読みたかっただけか？ なあ？」

「ブレないところはコイツらのいいところでもあるが……」

「じゃあ、お待たせしちやっただけど本題「巨乳学園2」はどこに置いてある???に向かおうか」

「お前も読みたいんじゃないか」

「だって巨乳お姉さん大好物なんだもん」

本音を言うなら持って帰って読み耽りたいところだが……その、部屋にあの二人が結構な頻度で来るから置いとけないんだよね。3冊だけ残してあった秘蔵コレクション

もコイツらに放流したし……。

「お前も苦労してるんだな、同情はしないが」

「ケツ、リア充め」

「充実しなくていいから心の平穏が欲しいぜ……」

毎日が楽しい悪夢みたいなものだ……。心底残念なのが、これが現実だということだ。都合が良すぎるんで、覚めるなら早いところ覚めてもらいたいもんだ。

それはともかく、いつまでもダラダラしてるわけにもいかないの、階段で堤防に降りて社交場に向おうとする。

「……………ッ」

「ん？ どうかしたかイツセー？」

警鐘が鳴った。生き死にに関わることで無いが、頗る厄介事だと頭の奥で控えめにカンカン音が鳴る。僕の変化に気が付いたのか、松田が顔を伺ってくる。

「い、いや。なんでも。僕、実は幽霊とか怖くてさー！」

「へえ？ 鬼のイツセー様にも怖いものがあつたのか」

「お前なら『生きてる人間の方が怖いだろ？』って笑いながら言いそうなのに」

それなりに付き合いがあるせい、コイツら僕のことよく理解してやがる……。そうだよ、死んだ人間なんかより今生きてる人間の方が怖いに決まってる。悪辣さって意味

でな!

いやしかし困った、警鐘にハズレはないし十中八九厄介事だ。ここはひとつ、二人が何も見えないことに賭けて『やっぱ噂は噂だったんじやね?』って風に誘導して返すしかねえ。万が一の時は、正体バレること込みで聖水噴霧しよう。そうしよう。

………肝心の社交場、なんかいるう。なんか白いモヤモヤがいるう。

「……うーん、やっぱ何もいないな」

「たまたま今日ないだけってこともあるかもだが……ま、噂は噂ってことだな」

「あ、あははー、何もいなくて本当に良かった……」

よオしセーツフ! コイツらちゃんと見えてねエ!!!

「バイト終わりってこともあってなんか疲れたよ………とりあえず念の為明日も確認に来るけど、多分何も無さそうだ。今日のところは引き上げようぜ」

「だな。あー………どうやって家に忍び込もうか」

「出るは容易いが入るは難しい……」

さて、どうやって残る口実を……あつ、そうだ。

「……『巨乳学園2』だけ、回収してくる」

「おつ、イツセー氏なかなか勇氣あるなあ」

「そのままエロ本がバレて不潔って嫌われろ」

「アホウ、きっちり完全犯罪達成してやるわ。じゃあ馬鹿共、また明日学校でな」

「おう、寝坊すんなよ」

「じゃあな」

……………よし、行つたな？

懐にある小さな小瓶を掴む。護身用の聖水だ。効くかどうかは分からないけど、コイツを試してみないことには始まらない。

気付かれる前に、一瞬でカタをつけてやる！

「喰らえ聖水蒸気爆は——」



……………はっ!?

「いかん……………変な夢を見てたような……………」

「すー……………すー……………」

もうなんだか慣れたように、裸で抱きついてきてる部長からすると抜け出してスマホの画面を見る。時刻は4:30、昨日二人と別れてからの記憶があやふやだが、多分なんやかんやして帰ってきて……………アレ？

「チェス盤……？ 昨日の朝片付けたはずじゃ」

震えながら、もう一度スマホの画面を見る。日付が、昨日の月曜日に………嘘でしょ？

「……………なんで？」

どうやら僕は、心底大変な厄介事に巻き込まれたらしい。

【月曜日（ループ2）】

その3

〔月曜日（ループ2）〕

「イツセー、どうかしたのか？　なんか『微妙なアニメの再放送が流れてきた』みたいなの顔してるが」

「どんな顔だよ……大丈夫だよ父さん。なんかこう……朝起きる夢を見たせいで起きてるのか起きてないのか微妙なんだよね……」

嘘である、なんなら父さん大正解である。例えば方がアレだけど、よう見とるなあ……。そんなわけで、気分としてはまさに月曜日の再放送。昨日の朝の焼き増しを現在進行形で体感しているとこころである。

「それにしてもいい光景だなあイツセー……父さん、娘が二人できた気分ですごくよ……」

「ははは……そりや何より……」

実際目の保養にはなるよねえ……。1人は大人系の美人で、もう1人は可愛い系の美人。そんな二人がキッチンで母さんとキャツキャウフフやってんもんなあ。これが当事者じゃなけりや『眼福眼福ウ！』してる自信があるぜ。……そうなんだよ、当事者な

んだよ。これで学校の奴らに『毎朝部長に味噌汁作ってもらってる』なんて言ったら殺される……。

にしても部長、料理本当にお上手ですね。これもグレモリー家の教育の一環なのか、本人が自分で頑張ったのか。……多分後者だよなあ。舐められない為にとかさんな理由だぜ。負けず嫌いだなあ。

「……………」

今日は余計なことじゃねーですよ。キッチンの方から睨まれたけど、今日はジトつとされる謂れは無いよマジで。

「……………」で、本当のところどうなんだ？」

「どう、とは？」

「お前の本命だよ。どっちなんだ？」

「気持ちに分かるけどどうかと思うよ親父」

片方は僕を狩りに来るとか言ってみようか……ダメだな、感動の余り赤飯炊いてパーティーになりかねん。

「まだお前美人は対象外とかいつてるのか？　ダメだぞ男がそんなんじや。夢は高く持たなきゃな」

「今そんなこと言ったら方々からぶつ殺されるから言わねえよ……」

実際季節の宝くじ当てるより凄く幸運なのは分かってるよ。一生分の幸福が押し寄せてきてる気はする。素直に受け取るかは別だがなア!! (Ges顔)

「……ま、後悔だけはしないようにな」

「わーってるよ」

まあ、今はそれよりも直近の大問題に着手しないといけないわけだが。このやり取りも2回目だし、マジで時間が巻き戻ってやがる。

これどういふことよドライグ……と呼びかけようとして思い出した、アイツ今いないんだった。

(いやまじでどうしたもんか……)

素直に相談すればいいと思うんだが……

「……? どうかしたのイツセー。私の顔に何か付いてるかしら?」

「いえ、今日も頗る美人だな、と」

「…褒めてないわよね、それ」

「そんなことは無いですよ、ええ」

ドストライクなのは事実ですし、と続く言葉を飲み込みながら、最終手段だなど肩を落とす。多分親身になって助けてくれるとは思うんだが、それはそれとして1人で勝手に危険かもしれないことに頭を突っ込んでることに関しては怒られかねないし……部

長も悪魔だから、これ幸いとその弱味につけ込んできそうだし。こういう時、自分のノータリンさが嫌になるぜ。考えが足りてないってヤツだ。

今考えても仕方がない、今はとりあえず洗濯を回すぐらいはしようかな、と洗面所に向う。本来ならキツチンに立つのは僕の仕事でもあったのに、アジアが来てからそれが減り、部長が来てから完全に締め出された。あの忘れてるかもしれないが、私一応飲食店従業員なのですが。

「あー、これがタチの悪い夢だったら有難いんだがな……」

思わずボヤキながら、これで目が覚めてくれないかなと洗面台で顔を洗う。やつても目は覚めないし、鏡に映るのはいつもより3割増しでやる気が抜けた僕の凡顔だ。うーん、我ながら素晴らしいモブ顔。

なるようになれ、と若干諦めの入った心持ちで

、僕は洗濯機に洗剤を入れた。



「……社交場に幽霊が出るウ?」

説明しよう! 社交場……正式名称『健全少年達の社交場』とは、エロ本の廃棄場に

なってる橋の下のスペースのこと……ってこれも2回目だわな。

学校に着いたらほぼ昨日と同じ流れで屋上に誘導され、ほぼ同じ経緯を聞くに至る、まる。

「お前だったら、なんか不思議なツテでどうにかできるんじゃないか？」

「頼むぜイツセー、お前だけが頼りなんだ！」

「別に乗つかるのはいいけどさ、お前らは事が済むまで絶対に社交場に近付くなよ」

そう言うと、2人はどこか戸惑ったように僕の顔を見る。な、なんだよう、男にジロジロ見られても嬉しくねえぞ。

「その……危ないのか？」

「下手に手を出すと危ない可能性があるってこった。前にも似たようなことに首突っ込んだことあるけど……まー大変だったぜ。幽霊ってマジ怖い」

「……イツセーにも苦手なモンがあるんだな」

「どういう意味だそれは？」

現在進行形で恐ろしいことに巻き込まれてるからな。これで何もしなければなんにもならないんじゃないけど、このまま月曜日のループとか気が狂うぞ。嫌だぜそんな悪い意味でのSF時空に取り残されるの。

「いやでもお前が何とかしてくれるってんなら助かるぜ」

「よつ、『駒王の赤パーカー』！」

「調子いいなあてめえらよう。さつき嫉妬であーだこーだ言った口で煽てよつて」

「それとこれとは話が別」

まあそう言うだろな。誰だつてそうする、僕だつてそうする。普段の感謝とリア充への恨みは別腹つてな。

「つーかイツセー、俺たちに渡したメアドはなんだ一体!! 聞いてねえぞあんな生物がいるなんて!!」

「あー、ミルたんの? すっごい乙女だったでしょ」

「乙女というか漢女だったわ!! 可愛いコスプレイヤーだと聞いて、期待に胸を膨らませて待ち合わせした俺たちの純情を返せ!!」

「いやでもほら、ミルたんはアレで結構ミルキーのレイヤーとは横の繋がりが広いから、ミルたんと仲良くしとけばあわよくば、つて話は普通にあると思うけどな」

「先にそれを言えつ!!」

言つたらつままないじゃーん、と口笛を吹いて誤魔化すが、奴らの怒りは治まらない。仕方ない、追加で情報を投下するか。

「ちなみに可愛いレイヤーさん『も』いることは確認済みだ……ウチの店にも来てくれるしな。ミルたんと一緒にイベントに着いていけば……な?」

「お前、神か？」

「か、カメラの準備が必要だな!!」

「おーおーはしゃいどるはしゃいどる。まあ屈強レイヤーさんの割合の方が多いんだけど、それは黙っておきましょうねえーつと。ミルたんもカメラマン少ないって嘆いていたからこれでwin-winってね。あつはつはつはつ！」

「ともかく、今日僕がバイト上がったらそれとなく様子を見てきて、それ次第でそうというのが得意な人に相談するから、お前から絶対来るなよ。呪われたらどうしようもねえからな」

「お、おう分かった」

「全裸待機ってヤツだな」

「服は着とけアホウ」

さて、これで釘は刺したから来ねえだろつと。コイツらをそんな事情に巻き込む訳には行かねえしなあ。



「ごんちゃーつす……つてありや、閉まっとるな。珍しいな僕が一番乗りかよ」

シフトまでの時間潰しに部室でできること無いかな、と思つて1回目と同じように旧校舎の部室にまで来たが、おかしい。朱乃サンが来てたはずなんだが……まあいいか。僕は鍵を持つてないので、持つてる部長か朱乃サンに借りるか、職員室で借りてくるしかなさそうだ。

「……………そうだ」

昼の部活は定例会議の時以外は参加自由なわけだし、今日の僕はおやすみして図書館に行こう。意外と変な本が蔵書としてあるし、もしかしたら何か現状を打破する何かがあるかもしれない。足りない知識は他所から持つてこないとねー！

「あら？ お早いですわねイツセーくん。お待たせしてごめんなさい」

「あ、どうも朱乃サン」

ルンルンとその場を後にしようとする、タイミングがいいのか悪いのか、朱乃サンが部室の前まで来ていた。

「あとすみません。ちよつと調べたいことがあるので、ここまで来ておいてなんですケド、部活おやすみしようかなつて」

「あらあら、そうなんですか……。それは残念ですわ」

頬に手を当てて困つたように眦を下げられると悪いことしてる気分になる。実際、悪いことしてるしな、隠し事。

「しかし本当に困りましたわ……どうやらまた、イツセーくんったら隠し事をして
みたいだし」

「速攻でバレてやがる……え、そんなに顔に出てますか？」

「顔からは分かりませんが、少し気が昂つてるみたいなので。イツセーくんが心臓と骨
を龍のモノにして以来、結構分かりやすくして」

「隠せる訓練しておきますね」

色んな意味で死活問題な気がする。というかアレか、部長がなんか僕が余計なこと考
えると的確にこつち睨んでくるのソレか!!!

「まあでも前みたいな命の危機でもないし、個人的なことなので大丈夫ですよ。ちよつ
と気になることがあつて調べたいだけでして」

「嘘……ではなさそうですね」

僕の目を覗き込むように顔を近づけて、しばらく視線で舐め回したあと朱乃サンは顔
を引つ込めた。そうやって顔を近づけられるとビビるからやめて欲しい。観賞用美女
がやると余計に心臓止まっちゃう。

「本当に困った時は、私でも部長でもいいですから頼ってくださいね? ……約束です
わよ? 今度こそ守ってくださいね? 次破ったら……めっ、ですよ」

「は、はい」

「そういや前の約束は思いつきりブツチしたもんなあ………実際すげえ怒られたし。いやあ、本当にご心配お掛けして申し訳ありませんでした。」

「とりあえず、今はイツセーくんのことを信じて部長には内緒にしておきますわね」

「はい、そうしていただけると助かります………いや本当に」
「まずい時は素直に頼ろう。そう思った。」



【火曜日（ループ2）】

そして僕は、詰めが余りにも甘過ぎたことを知る。

「松田、元浜?!」

社交場に向かえば、そこにいたのは釘を刺しておいたはずの二人。そして、そんな二人に覆いかぶさらんとする白いモヤだった。

その4

「……………でえ？ これはどういうことなんだ？」

仁王立ちする僕の前で正座をする松田、元浜、そして白いモヤ……改めて幽霊少年。話は少し前に遡る。



「松田、元浜！」

白いモヤが2人を飲み込もうとしているように見えて、僕は肝が冷えつつも冷静に懐から聖水を取り出して投げる構えをとる。

またループするならそれでもいい、この二人は、僕の日常の象徴の一つであるこの二人は、何としても守らなければならない！

力を寄越せ、『決トゥワイス・クリティカル・ブレイカー殺の手』！

「頭ア下げる馬鹿共オ!!」

「っ!? い、イツセー!!」

「待て、早まるな落ち着け!!」

……………うん? どういうことなんだろう。何故か推定幽霊を庇うように前に出る2人を見て何とか動きを止め、しかし心底疑問に思っていると、広がっていた白いモヤが人型に収まり……透けてはいるが、ちゃんとした人間に見えるようになった。

『はは……随分と喧嘩っ早いダチなんだな』

「すまん、こいつ即断即決なんだよ」

「色々説明してなかった俺たちのせいだ」

うーん、なんだこの状況。やばいと思つて聖水構えたの、もしかや大失敗かつ身バレに繋がる大失態なのは。

「……えーと、何? 僕の出番ナツシング・ゼロ? 和解してるとかそんな話?」

「『そうそう、そんな話』」

3人揃つてそんなふうに言うもんだから、僕の中の何かがキレた。まあそれだけの話だ。

回想終了、話を現場に戻そう。



「そもそも来るなど僕は言ったよな？　しかもお前らループ前の記憶がある素振りも見せなかったし。なんで説明しなかったんだ？　アアン？」

「その……すまん。ぶっちゃけかなりヤバイことつてのは分かってたんだが」

「イツセーも前のループと違うこと言ってるから、これは何かあるぞって面白くなっちゃって」

なんで怖くならず首を突っ込む方向にシフトするかねえコイツらは。まあ僕も人のこと言えんし、仲良く揃って皆馬鹿野郎だちくしよう。

とりあえず話を整理すると、僕と同じようにこの2人も仮称1回目の火曜日までの記憶があるらしい。一緒にループしちまったんだな。

「イツセーがどんな本を物色するのか気になって」

「そしたらお前、急に小瓶取り出して投げて、驚いたところで……昨日の朝になってただよ」

「み、見られとる……」

つまり、結局あの場にいたからループしたって認識でOKっぽい。

そんなでもってどうやら僕は本職っぽくて、しかも自分達と同じくループしてるっぽいぞ。とのことだったようだ。その時に言えなかったのは、僕があまりにも真剣そうな顔だったからようだ。

「ところで昨日はなんも見えてなかったみたいだけど……」

「今日になつたらなんか見えるようになってた」

「昨日イツセーがなんかしようとしたの、コレだったんだなって」

「逃げろよ、そこは逃げろよ。近付くなつて言つたじゃん」

『すまん、それは俺のせいだ。昨日と同じ顔ぶれだったから思わず呼び止めた』

とそこで口を挟んできたのは件の幽霊。男子高校生っぽいのだが、どうも記憶がないらしい。自分のことがよく分からないままフラフラと流れてきて、今はエロ本が集まる社交場に根を下ろして今回の噂話に発展したらしい。とんだお騒がせ幽霊だ。

「アンタも軽々しく生者を呼び止めるんじゃないよ……といふかなんでエロ本を読み漁つてんだよ」

『いやすまん！ 本当幽霊つてのはヒマなもんでよ！ ちよつと誰か脅かすとかぐらいしかできなかった所に降つて湧いた娯楽でな。鼻血出るほど興奮させてもらったわ！ 出る血ねえんだけどな！ ガハハ！』

「色々と笑えねえよ……」

頭を抱える僕を許して欲しい。こんなしようもないことで慌てて、しかも話を聞いてもループする原因は分からないと来たもんだ。どうもループ条件は除霊されるか、成仏するときに起きるらしいんだが。

『いや本当に心が死にそうなんで助かったわ。もう途中から何回月曜日 came か数えるのもやめるくらい長いこと幽霊しててな!』

「楽しそうに何よりだよまったく」

何回目か分からない溜息が口から漏れる。孤独で狂っちまいそうな幽霊を助けられて良かった反面、コイツがド級の厄ネタなのは変わりないのだから。マジでどうしたもんか。

「……で、話してみたら意気投合して、今に至ると」

「女の趣味は合わなかったけどな」

『ロリなど邪道! やはりケツがデカイ方がいいに決まってる!』

「至極どうでもいい……結局胸が1番なんだから」

つといかん、僕が猥談の流れに呑み込まれたら收拾がつかなくなる。

「ともかく、大事に至らなくて本当に良かったよ。でも運が良かっただけだからな?

好奇心で触れるもんじゃやない。……こういうの関わりたくないけれど、なんかあったら僕に話してくれたらなんか対処するから」

「そう、そのことだイツセー!」

「なんだその左腕! 超カツコイイんだが!」

「あ、分かる? なんかつい最近出てくるようになった呪いの籠手なんだわ。これが

切っ掛けでオカルト研究部入ることになったんだけどね」

あながち間違いでもないが、正しくもない説明でこの2人を誤魔化す。流石になんでもないは信じてもらえなさそうだしなあ。

というわけで兵藤一誠クンは、急に呪いの籠手を身に着ける能力に目覚めてしまい、その情報収集をしてる最中にオカルト研究部に目をつけられ、話題を提供&正体を探ってもらう名目で席を置かせてもらってる……ということにした。流石に悪魔だ神器だなんだとかはバラせねーですし。

「お前がオカルト研究部に入ったのはそういう理由があつたんだな……」

「二重の意味で納得だわ。お前も最初はダルそうだったし、向こうもお前入れる理由が分からんし」

「まあとは言ってもそれで何が進展したってわけじゃないんだけどね。この籠手だつて、なんか変なものが見えるようになったのと、力を2倍にする機能がある？　くらいだし」

「『しよっぱい！』」

「うっせえわ！　身の丈にあつた力と見え！」

実際は延々と倍加できる物騒な神殺し兵装なのですが、まあそんなことが口にできるはずもなく。折角隠ぺいしてる訳だしね。

「そんなワケで眉唾物から本当のものまで、色んなオカルトを調べる中で、幽霊みたいな怪しげな話題にも触れるわけで……まさか本当にいるとは思わんよ」

『なはははは！ 俺もそんな奇っ怪な左腕は初めて見たぜ！ ショボイけどな。めっちゃショボイけどな！』

「強調すんなや」

これで中の人が聞いていたらブチ切れ不可避だっただろう。今でこそ僕はアレをクソトカゲと煽れるが、最初は心底キレてたし。

「つか、そうなるツイッセーは別に幽霊を成仏させる力は無いんだよな？ だけど一回目の火曜日の時になんかやってたけど」

「種明かしすると、聖水もってたんよ。オカ研の活動で手に入れた、本当かどうかも分からないパチモン臭プンプンのやつだったんだけど……なんかとりあえず本物だったみたいだなコレ」

「そんなモノまでネタにしてるのかよオカルト研究部。本格的だな」

「プレゼントしてくれた部長も、まさかこれが本物だとは思わねーよ。運の勝利だな」

まあ本当は聖水って分かって投げたんだが。なんなら作ったの僕である。とりあえず何があるか分からないってことで、小瓶に入った聖水を2人に投げて超越す。

「この状況で出し惜しみしてられねーし、お前らもこれ持つとけ」

「お、おう。サンキュー」

「つつても話聞いたらコレをコイツに掛けるの躊躇うよなあ……」

『頼むからやめろよ、マジでやめろよ』

そう言つて僕達から距離を取る幽霊を見て、ようやく僕は苦笑とはいえ笑うことができた。あー、本当にヤバかった。



「でよ、もう一度詳しく説明してくれないかな?」

『おう。つつてもぶつちやけ記憶がねえから役に立てねえんだがな……』

今回の事件の核になつてゐるであろうこの幽霊。学ランのようなものを着ているため、恐らく学生だったのは推測できるが、身に繋がりそうな情報がそれしかない。過去の記憶、名前すらも無いんだからマジでお手上げた。

『正直、成仏ができるならこのまましたい。多分このままフラフラしてるのもいいことじゃないだろうしな。その……力になつてくれると助かるんだが』

「ああ、構わないぜ。同好の士なんだ、水臭いこと言いつ子無しだ」

「ちよつと寂しくもあるが……それも仕方ない」

いつの間にもこの3人はこんなに仲良くなったんだらう？ 猥談は人を繋げるともいうのか。……うん、あるかもね。

「……僕も乗り掛かった船だ、君の門出をセッティングしようじゃないか。その為には君の生前？ の情報があると助かるんだが」

いや本当なんて成仏しようとするのループするのやら。原因が全くもって不明だし、死に方に特徴があったのではってところなんだが。覚えてないんだよなあ。

「一応カメラ持ってきて撮ってはみたんだが……まあ望み薄だろうな」
「ああ、見た目で身元特定ってか」

松田は中学時代は写真部に所属していたらしく、見るからにお高そうな一眼レフを持つている。今でも（女子の撮影で）活躍の場面があるそうだが……なるほどかした！

「ちよつと効果あるか分からないけど、僕の左腕で強化すれば心霊写真っぽく撮れる……かもしれない」

「そんなこともできるのか。小器用だな……」

そんなわけで記念写真的なノリで4人で肩組んではいチーズ。効果はあるか分からないけど『心霊的なアレ』を2倍にして譲渡したので上手くいく……といいなあ。

「一応明日このフィルム現像と印刷頼んでくるわ。ちよつと値が張るが」

「そこは割り勘でもいいぜ」

「おう、助かるわ」

「あとはその写真使ってそれぞれのツテでコイツの生前探すってことだが……」

「そこはイツセー、任せた」

「ええ……まあいいけどさ」

顔が1番広いの僕だからね……でもコイツらも中学時代の友達とかには当たって欲しいかなあ。

「あとはループするかもしれないけど、成仏とか昇天させる方法を試してみるとか」

「それなら知ってるヒトに心当たりあるから、それは僕に任せておくれよ」

「オカルト研究部がオカルト研究部してる……」

「美形ぞろいだが活動内容謎だったもんな……というか本当にそういう活動してたのさつき初めて知った」

実際はちゃんと活動してるみたいだけどね。なんか妖怪の生態を記録してるような活動報告があったような無かったような……。そもそも悪魔が妖怪みたいなモノって言われたらその通りだが。

「行方不明者だった可能性も追うか。そこは俺がやる」

「え、元浜。お前にそんな体力あったっけ？」

「失礼なやつだな。いやまあそうなんだが……。何も聞き込みしなくても行方不明者捜索掲示板つてのがあるんだよ、今スマホで調べた。そっちの方で探ってみる」

特徴もある程度掴めたしよ、といつの間にかメモ帳を取り出して何事かを書いている。覗いて見ると幽霊クンのだいたい身長と学ランとボタンの特徴、簡単な似顔絵が。普段は女子のスリーサイズを見抜くことに使ってる眼力がこんなところで生かされるとは！

『お、お前ら……。マジで良い奴だな！』

「べつつにー。困ってたらできる範囲で助けになってやりたいってのは普通あたりまえでしょうが」

「当たり前かはともかく、別に俺ら悪事をやってるわけじゃないしな」

「まあエロいことで周りに迷惑は掛けるが」

まるで僕まで同じ穴の貉みたいに言わないでくれ……。別に僕の性癖のせいで周りに迷惑はかけてない……。よね？ そうよね？

まあでもそういうことなのだ。進んで悪いことをしたがるヤツはそう居ない。このエロコンビも根は良い奴なのだ。

「じゃあ気合入れて行くぞお前ら！」

「『おーうー！』」

あんまり褒められた感じではないし、若干の後ろめたさもあるけれど、何故か僕らは今この瞬間、最高に青春していた。

その5

【火曜日（ループ2）】

「…………このヒトも懲りないなあ」

「すー……」

もはや僕も慣れたもんで、抱き枕状態の僕はするりと抱擁から抜け出す。なんか色々当たるが鋼の意思で気にしないことにする。

初めて迎えた今日の朝、やることはいつぱいだがそれはそれとして朝の訓練は欠かさない。時刻は午前5時である。

「んんっ……もう起きたのイツセー……？」

「あ、ごめんなさい。起こしてしまいましたか」

起こさない抜け出し方を考えにやならんな……と思つてると、部長が身体を起こそうとするので急いで背を向ける。見えちゃいけないものがボロンするのでね！

「ふふっ、別に見てもいいのに……。責任は取ってもらうだけよ」

「覚悟も何も無いので遠慮しますう。いやほんと勘弁してくださいよ……何度も言ってますが、理性がちぎれ飛ばないか不安で仕方ないんですって」

「私の知ったことではないわ」

いたずらっぽく笑う部長の声を背に受けて、ガツクリ来ながらも部屋の中を確認する。とりあえずチェス盤とか出てないから、おそらくループはしていない。スマホの日付からも確認できた。

……写真を印刷してもらって方々に確認をする以上、ループを一日二日で起こすのはまずいはず。となると成仏ないし昇天させるようなことは暫くは控えていた方がいいだろう。何するにしても準備は必要だろうし、それも踏まえて三日四日は期間を開けようかって感じだな。……ドライグが戻るまで待つって手もあるか。ヤツならなんか知ってることがあるかもだし。

「何を考え込んでるのかしら？」

「ひあっ!？」

背後から抱き着かれて思わず変な声が出た。この先の件について思考が没頭していたのでかなり油断していた。

まあありがてえことに部長はちゃんと部屋着を着てくれているので、イツセー君のイツセーがイツセーすることは無かったが。なんだよイツセー君のイツセーって。

「べ、別に変なことは考えてねーですよ……。新しい悩みの種が増えましたからね、強くなってもっと自信持てるようになりたいんです。これでもね」

「あら意外。そこまで強さに執着しない質だと思つてただけだ」

「あのハーレム焼き鳥がまさか冥界だとぼちぼちレベルつて聞いて背筋凍つたんですよ……ちよつとこの界限、魔境が過ぎませんか？」

ちなみにぼちぼちと表現したのは本人である。つってもフェニックスの特性、不死の魔力を抜きにしての話だから総合力は上の方らしいけどね。

「……………。随分と仲がいいのね、ライザーと」

「うん？　ライザー氏、中々器大きくていい男ですから。僕下級悪魔ですけどフランクに接してくれて話しやすいんですね。九頭龍亭にも結構来てますし、いい感じのお客さんですよ」

なんならメッセージも投げ合う仲ですよ、とスマホの無料通話アプリを立ち上げてその画面を部長に見せる。……なんか徐々に機嫌悪くなつてんな。また僕なんかスイツチ押ししたか？

「…もしま、こういう他所のところと繋がり持つのご法度とかそういうヤツです？」

「いいえ、特にこれといった決まりはないわ。……本当、ライザー『とは』随分仲がいいのね？」

「んん？　特別仲良くしてる感じはないですよ。普通のやり取りですつて。つか部長、それ部長とこういったコトしてないって理由でスネてるんならちよつち的外れではあ

りませんかね？」

これでもかなりマシにはなったが、僕は陰キャなので異性と話すときヨドるのである。仮に悪魔になる前部長と関わりが出来てメツセージ投げ合うことになったら一個送るのに5分は悩む位にビビるぜ。そんな僕なのだ、男との仲の詰め方が早いことを拗ねられても、ねえ？

「……私だつて頭では理解してるわ。でもその……こうやって気安く話せるようになるまでそこそこの時間が掛かったのに、ライザー相手にはこうも早いと率直にムカつくのよね」

「……………はあ。僕は貴女に特別嫌われたく無かっただけです。惚れた女性相手なんですよ？ 慎重にもなりますって」

「ちゃんと聞こえなかったわ。もう一度お願いできるかしら？」

「ICレコーダー突きつけて言うセリフではありませんね、やりませんよ」

弱みを見せるとすぐこれである。やはり悪魔、抜け目ない。まあでも目に見えて機嫌が良くなったので安心である。眼福眼福、観賞用が笑顔だと本当にサマになるね。

「まあ私の心情を抜きにすればコネクションを作っておくのはいいことよ。特にフェニックス家は。婚約破棄の件も有耶無耶になってくれれば最高ね」

「あ……………」

ライザー氏が器デカいだけで、その他のフェニックス家の方々が僕や部長をどう思っているかは別つてのはその通りだろうなあ。約束は遵守する悪魔じゃなかったら殺されてるだろ僕。

「でもそれは私の責任よ。イツセーがそれを意識してライザーと仲良くなる必要はないわ」

「うっす」

流石に部長の責任まで掠めとる程傲慢じゃありません。僕は僕の責任の範疇で頑張りますよっと。

「じゃあ、せっかく目も覚めたことだし、久しぶりに一緒に訓練しましょうか?」

「マジすか? では、お言葉に甘えて」



(意外と見つかんねえな…)

そらそうだ、と肩を落とす放課後。昨日も思ったけど、死とあからさまに関係しそうな本は意外と無いみたい。まあ自殺幫助になっても困るし妥当っちゃ妥当か。

現状分かったことと言えば幽霊は現世に未練や遺恨があつて昇天、ないし成仏できて

ないってのが和洋共通の解釈、らしい。実際はどうか分からのだけどね。

(あの幽霊、未練や遺恨の類はなさそうだったけどな……)

なんというか『快活』という単語がしつくりと来る、明るい野郎だった。記憶が無いからそうかもと思わないでもないが、少なくとも怨みの線で幽霊やつてそうには思えねえ。

となると、未練の方向で見当つけた方が良さげだな。その旨を元浜に連絡する。

「さて、どうスつかな……」

「何をだい?」

「わっ!」

本棚を前に漏れた独り言に問いが投げ掛けられて、イツセー君小便がチビリそうな程ビツクリした件。下手人は我らオカルト研究部が誇るイケメン騎士、木場祐斗クンである。

「ゆ、祐斗クンかよ……脅かすなよな。僕のミジンコハートが破裂したらどうしてくれるんだ」

「いやあ、イツセー君そんな小心者ではないと思うよ。思い切りが良過ぎるし」

相変わらずの優男スマイル。脅かされたことを許しそうになっちゃうぜ。面のいい

ヤツはお得だよな、けっ!

「で、何の用だい優男。これでもかなり忙しくてね」

「僕は借りてた本を返しに。そしたら珍しくイツセー君がいたから気になってね」

「なーるほど」

いや成程ではないが。どーせ朱乃サン辺りの差し金だろうぜ。ちったあ信じて貰いたいものだよ、無理もないけどな！

腹を探り合うような沈黙が数瞬、でもそういうの趣味じゃねえので諦めて口を開く。

「……幽霊について調べてんだよ」

「幽霊？」

「そ。友達からの噂で幽霊が出たって言うもんだから、ちよつと調べてやろうかなって。

そこまで大したことじゃないよ、見栄張ったせいで困つてるだけサ」

「そうだったんだね」

話してないことがあるだけで、本当のことしか話していない。これで信じて貰えないならそれまでだが……果たして。

「……本当に杞憂だったみたいだ。部長がかなり怪しんでいたみたいだから気になったんだけど」

「あり？ 朱乃サンじゃなくて部長？」

朱乃サンがチクつたか……いやそれは無い。あのヒトはドSだけど性根は良い方だ

から余程のことがないと約束破りはしない。となると、今朝から態度に出てたんか？意外とバレやすいのね僕。

「なんでも『いつもより素直だったから多分後ろめたいことがあるに違いないわ』のとこのどだったけど」

「あのヒトも大概失礼だな……たまには素直になることだってあるわい」

いやああのヒトもよう見とるなあはは………実はホラー的なの？ ヤダよ僕なんかに病まれるの。

「まあ大正解ではあるかな。大した感じじゃないけど警鐘が控えめに鳴ってるから、なんかあるとは思ってんだよ……相談すると部長は無駄に大事にしそうだし、あとあの二人を部長に会わせたくない（真顔）」

「あはは……成程そういうことなら納得かな」

あながち嘘では無い。いやまあ若干独占欲が混じってなくもないが！ それを見透かされたのか可愛いものを見る目で笑われている、畜生！

「じゃあ僕の方からそれとなく誤魔化しておくよ。ただあまり危ないことに首を突っ込むのは良くないと思う」

「助かるよ、いやマジで」

と、ホツとしてると祐斗氏がチョイチョイと図書室の机の方を指さす。いや、どうい

うごっっちゃねん？

「アリバイ工作は必要じゃないかな？　一緒に勉強でもしておけば何か聞かれても困らなくて済むと思うよ」

「……キミ、天才って言われたい？」

「買い被りすぎだよイツセーくん」

いやいや本当にいいアイデアだぜ。なんせこの男は本当に目立つので、わざわざ部長に言わなくても誰かが適当に『木場くんが』って話をしてくれるに違いない。積極的に嘘をつかなくて済むのだからありがたい誘いだ。

「じゃあついでだから対数について簡単に教えておくれよ、授業聞いただけだとチンプンカンプンなんだ」

「分かった、じゃあまずは指数の基本的な計算からおさらいしようか」

教科書を傍らに今日の授業の復習。意外とこういうのも、ありきたりな日常の一部分で感じて悪い気はしないのだった。数学はそんな好きじゃないケド！



「結局のところ、大した成果はなかったよ……」

「ダメじゃねーか」

適当に勉強した後、部長が外出中だったのでこれ幸いとオカルト研究部の方の蔵書も漁ってはみた。みたが……眉唾物のオカルト雑誌しかない。ゲロつちやつてるので祐斗クンに聞いてみると、そういうのは部長の実家にあるんだってさ。ガツデム。

とは言え火のないところに煙は立たぬと読み漁ってはみたものの、やっぱり結論は大差ないって話。この分だとアースシアに聞いた方がボロボロ新情報拾えそうである。ほら、エクソシストは何も悪魔だけを祓うものじゃないし。

つーわけで早々に部室を撤退して学校に程よく近いバーガーショップで2人と落ち合い、今に至る。正直なんも言い返せねえ。

「怪しげなブツが沢山あるからいけると思ったんだよ……そういう蔵書が無いと思わなかったんだよ……」

「何でもかんでも上手くいくわけじゃないってこつたな。まあ元気出せよ」

「なんだかんだ言って現状進展があるの松田だけだしな」

元浜に視線で促されて松田が出した写真は、バッチリくつきり半透明のあの男が写った心霊写真だった。

「イツセーの左腕が効いたのか効いてないのか分からんが、この通り。これなら上手いこと使えるんじゃないか？」

「さつすがー」

これを掲示板に上げたり聞き込みに使ったり……………

「いや待て、これを掲示板に上げるのはまあいいとして、聞き込みに心霊写真使うのダメでは？」

「でもどうしようもなくね？ 俺も出来ねえし…」

「右に同じく」

「仕方ないか…………」

揃って肩を落とすが、まあ細かく顔の造形確認できるぐらいハッキリ取れてるからまあいいかと一旦流す。問題があったらその都度対応、つまり行き当たりばったり。

「とりあえず1人5枚ずつありやどうとでもなるだろ、ほらよ」

「どうも。じゃあ僕は配ったり貼ったりする用のビラ作るわ」

軽く言うと思じられないものを見る目で2人がこっちに視線を超越してくる。なんだよう、僕にだつてちやちい技能の1つや2つぐらいあるわ。

「つーか九頭龍亭の店内ポップ広告は全部僕が作ったやつだが??」

期間限定のメニューが出る度に写真を撮って券売機に付ける広告を作り、前店長がモヤシを誤発注して何とかしろと無茶振りされた際に野菜増しや単品の肉野菜炒めを推す広告を作り……蛍光ペンと画用紙、あとラミネーターは僕のお友達だ。くたばれ前店

長。いやまあ社会的にくたばったか、僕の上司最高だな!!

「あの可愛らしいポップお前だったん？ 意外な特技来たなコレ」

「専用のホームページも作るつもりなんだが、そのレイアウトも相談していいか？」

「いいよジャンジャン任せな！ 汚名返上、名誉挽回つてな」

気分も乗ってガハハとハンバーガーをバクンと頬張る。どうも僕、語れる中身増やすこと以上に頼られることが嫌いじゃないのかも！

「となると、今日顔出すつもり無かったけど店に行かなきゃな。パソコンとスキャナー店に持ち込んでしょ」

「お、じゃあ今日はお開きだな。俺はお供え物持って社交場行くわ」

「俺は掲示板に情報を上げよう。何かしら有用な反応があったらグループトークで共有する」

「オケオケ。じゃあまた明日とか！」

やることは山積みだアね、さー頑張るか！

その6

【水曜日（ループ2）】

「……できた」

と独り呟く深夜。バイト達と立山サンを帰し、自主的にお店に籠って何とかできたビラの出来栄えに、静かに悦に入る。ついでに作られた新メニューの『汁無しラーメン』のポップ広告も中々の出来だろう。カモフラージュは大事よね。

「……くああー」

事務スペースで椅子の背もたれに思いつ切り体重を預け、腕を上げ背をのぼす。ボキボキと小気味のいい音が背の芯から弾ける。ふと時計を見ると、既に夜の2時を回ったところ。僕以外の皆も契約業務を終えて家に帰っている時間帯だ。

スマホを覗くと、『例の幽霊にお供えしたら、あいつ普通にハンバーガー食べたぞ』というメッセージと宙に浮いた食べかけハンバーガーの写真が送られていた。マジかよ、謎な生感してやがるな。死んでそうなので生感と言っていいかは微妙だが。……死感？

まあしかしなんだ、この時間に食べ物を見てるとなんだか……

「お腹すいた……」

となる。ということでなんか食えるものはねーかな？ と事務所の冷蔵庫を開く。前はあの思い出したくもない悪徳店長だけが使える専用の冷蔵庫（しかも冷凍庫もチルド室も野菜室も付いた中々いいやつ）だったが、今では誰でも使えるようにルールを決めて解放している。まあ、中に入れるものは誰のものか分かるようにしておけてだけなんだけど。物に罪はねえのでな。社会的に死んだ前店長も浮かばれるだろう、浮かばれろ（庄）。

で、淡い期待を胸に開いてみたが、何もなし。試作品を作るための調味料の類以外は従業員とバイト達のものだけ。提供用のラーメンの材料を使うのは論外だ。賄いの範疇ならいざ知らず、それを越えて勝手に食べるのはルール違反だ。僕も雇われ店長の身なのでそこは絶対を守る。ここを捻じ曲げていいのは試作品を食べてもらう時だけだな。その分は別途予算が組まれてるし。

道義的な観点を抜きにしても、もうゆで麺機は止めて掃除してるから使えないし、今日はスープのあまりも無し。汁なし麺のかえしは余ってるけど、それだけで食べるのはなんかこう……終わってる気がする。最早絶望メシの類だ。トッピングは原価も高えし懐からお金出すらもうちよいなんかあると思う。それにそうでなくとも味の確認の為に出勤したら絶対食べてるし、こういう時まで食べなくてもいいと思う、切に。ま

あだから2つの理由で店の在庫からなんか作るのは論外だな。

帰って冷蔵庫を漁………ダメだ、ガサガサしてたら親起こしそうだ。そもそも多分すぐに食べれるものはない。備蓄してるカップ麺やお菓子も今は切らしている。そもそもあったとしてもソレを自室で食べれる図が思い浮かばない。具体的には僕の帰りを待っているであろう部長のせいだ。巡り巡って自業自得とも言う。なんで僕ちゃんあんな公開告白かましちやったかなア!!! あれさえ無ければ弱味を見せなくて済んだと思うの。

「……………」

財布を見る。ユで始まる偉人が2人もいるので余裕はある。次の給料日までちょうど折り返しだし、たまには贅沢をしてもいいかもしれない。

というわけで、行くかコンビニ。シャワーを浴びて軽く身支度を済ませ、火元等の最終確認の後に施錠して退店。店の駐輪場から自転車回収して押して歩き、徒歩1分もしないとあるコンビニを指す。

「いらっしやいませー」

少し気だるげな声をした店員の声と共に自動ドアをくぐる。気持ちは分かるよ、この時間帯死ぬほど眠いもんね。なお悪魔なので今の僕は目が冴えてる模様。

おにぎりコーナー目指して歩くついでにレジ横ホットスナックケースをチラリ。

むう、流石にこの時間帯だとなんにも残っちゃいねえわな。フライドチキンとかめっちゃくちや食べたんだが。

「……………」

おにぎりコーナーのラインナップもしょっぱい。売れ残りのデカくて高いおにぎりと昆布しかない。……ふむ、たまにはお高いおにぎり買ってみるか。鮭といくらのおにぎりに……これはなんだ、豚のしょうが焼き？ 美味そうだな、両方ともカゴにぶち込め。

すぐ隣の弁当エリアを見ると、悲しく1つ残っていた焼肉弁当がポツリ。普段なら上げ底だの肉がちやちいだの450円は高過ぎるだの言って買わないけど、今無性に腹が空いている。遠慮なくカゴにイン。

お次にパンコーナー。甘いものが欲しい。お、このホイップクリームが挟まったパンはいいな。溢れるほど、とはいかないのが残念だがそういうものだろう。お、チョコココロネもある。チョコは好きだ、最高だ。入れとけ入れとけ。

お菓子コーナーではポテチの青のりをチョコイス。青のりは食べると歯についてしまうのがアレだが、普通にうすしおで食べるより風味がいい。2袋入れる。ポテチを食べるとなれば飲み物はコーラだ。それもカロリーゼロじゃない方がいい。好き嫌いの前に外せない組み合わせだ、500mlボトルを2本カゴに入れる。

コンビニで買い物するにしては重いカゴをレジに持っていき、お会計なんと1635円。大豪遊である。

「ありがとうございます」

店員の気の抜けた声を背中にコンビニを出て、停めてある自転車のカゴにレジ袋に詰め込まれたカロリーモンスター共を入れる。

これで素直に家に帰る………わけが無い。わしゃわしゃとしたレジ袋の音で絶対にバレル。なのでどこかでこの中身を胃に詰め込みたいところだ。

まあ行く宛ては適当に考えようかと、自転車に跨ってチリンチリンと夜の町を行く。いつも以上に町は静かで、殆ど街灯だけが夜道を照らす。

………何も考えずに自転車を漕ぐのは好きだ。特別自転車が好きなわけじゃないけれど、歩くよりも速く、しかし速すぎる程では無い速度で流れる景色を眺めながら、ただ目指すアテもなく走るのは僕の密かな気分転換の方法だ。悪魔になってからはそういう風に自転車を漕ぐことはなくなったけれど。

顔に受ける風が気持ちいい。夏に変わりつつあるこの季節、それでも陽の光が無いため涼しい風が通り抜ける。なんかもう心が穏やかになってきたし、このまま全部ブツチしてどこか遠いところへ逝っちゃまうのも……

『ぐう〜』

「……………」

そんな破滅願望を遮るかのように腹が鳴った。若干警鐘も鳴りかけてたので生存本能が僕を救ってくれたのかもかもしれない。おかしいね？ 死にいく流れで何故助かったと感ずるんだらうね？ まあ原因は僕の思考の大半を埋める紅いヒトなのだらうが。

「はあ……生きてるのがツライ……」

『お前それよく俺の前で言えたな』

「死にたいと思えるのも、生きてる人間だけができる贅沢だからね。いいじゃあないか」
……………んん？ ここでするはずのない声が出たと思つて視線だけ横にやると、能天気そうな顔した幽霊が並走……走つてはないな、僕の自転車に並びながら飛んでいた。

『よつすー』

「お前、地縛霊の類じゃなかったんか」

『なんなら多分隣町から流れてきてるぞ』

急に沸いた重要な情報である。それもうちよい早めに聞きたかつたんだが……。

「まあいいや。ちようどお前に用があつたんだよ」

『ん、そうなん？』

「イエスイエス」

とりあえず、その公園に行こうぜ。



「というわけで、ほれ。お供え物だ」

『何がというわけなんだよ。つーか買いきじやね?』

僕が一乙した例の公園のベンチに腰掛け、買ってきたブツをご開帳。あまりの多さに幽霊くんが怪訝な顔をするが、しかし目の奥の奥の物欲しそうな目は誤魔化せてはいないよ。うだな? ウケケケケ!

『そ、そりやそうだろうがよ。試そうとも思わなかったせいもあるが、モノ食えるなんざ知らなかつたんだ』

「自分一人だけだと中々発想に限界があるものねえ……。ま、差し入れみたいなものだから遠慮なく食えよ。僕一人じゃ食いきれそうに無いし、証拠は隠滅しておきたいし」
『……じゃあ、ありがたく。いただきます』

そう言っておずおずと幽霊はおにぎりに手を伸ばす。……あ、それ僕が狙ってたやつ。というセリフを飲み込みながら食事姿を眺める。特に変な感じは無い。普通に咀嚼して消えてるな。変じゃねえことが変だな、コイツ幽霊なのにヒトみたいに食べてるぞ。身体は透けてるのに実体のある米粒が口や食道を通る様子が見えるなんてことも

ねえ。

「……………むう」

『な、なんだよ。食えって言ったんだからいいだろうが』

「いや、そこじゃない。キミの何気無い挙動に何か、キミの記憶に繋がる要素が無いか探ってるだけだよ。意外と真面目なんだぜ、僕アよ」

『真面目なのは最初から重々承知してる。……会って数日程度なのに、本当ありがとう
な』

「本当だよ、感謝し倒してくれ」

照れ隠しのセリフを吐きながらチョコココロネの袋に手を伸ばす。袋を開け、チョコクリームに見える方から大きく口を開けてガブリ。んぐ！ チョコクリームが口の中いっぱい広がってくのがたまらんねえ……。

『で、生きてるのがツラいってなんだよ』

「あ、それ蒸し返す感じ?」

『当たり前だろ。絶対俺が悩みの種だろうが、それ以外のところでグチ聞くらいいはできるかと思つてよ』

「ん……………」

深い意味は無いんだけどね。いや無いのが問題か。

「実は最近、命を投げ捨ててもやりたい何かがあつて。実際投げ捨てたんだよね、命。死ぬつもりで進めてたらなんか生きてたんだよ。笑えるよね」

『いや笑えねえが』

「死ぬ前提で色々組み立ててたのにソイツが全部おじやんになって、割と今どう生きていこうかって感じでマジで悩んでるんだよ。人生の目標も既に達成率1000%みたいなところあるし」

そう、1000%である。まず自分に対して胸を張れるようになったし、いい感じの職に着けそう……と言うか現在進行形だ。残念なことにはいい感じのヒトといい雰囲気になることは無かったけど、べらぼうな別嬪さんといい雰囲気通り越してちよつとアレな関係になっちまってるので自分の設定してた目標を大幅に超えたという意味で達成率1000%。胸焼けし過ぎてなんかもう気分はボーマナスステージだ。

「だからなんて言うの？ もうやり切った感がすげえのなんの。どんなウルトラCカマしても『こうはならんやろ！』ってことの連続で、もう目標がほぼ無いんだよ。やりたいうこと、やらなきゃいけないことは山程あるけど、ソレとコレとは別なんだよね」

『……………』

言葉を失った様子の幽霊くんを尻目にペットボトルのコーラに口をつける。思った以上に自分にとって深刻な悩みだったのか、炭酸の刺激はあるはずなのに爽快感がまる

で感じられなかった。

「一過性のものだと思いたいけどね。ここ数ヶ月で一生分の波乱万丈イベントをこなしたから気疲れしてるだけなんだってさ。……………本当、なんなんだろうね今の僕」

そう考えるとき、やっぱり身の丈に合った何かであるべきなんだよどんなことでも。なんか今、幸せの海にぶち込まれて溺れそうなもの。いくら頑張ったからって、その頑張りに釣り合ってるわけもなし。よくもまあこんな愉快な悪夢があつたモンだ。

「だからまあ、死にたいとかじゃやないから安心してね。若いヤツ特有の若気の至りのサムシンの筈だから。どうせすぐに次の目標が、次の次の目標ができるよ」

『……………すまん、なんかなんも言えねえ』

「いいんだよ、聞いてくれることに意味がある。ありがとうね」

そう、こんな弱音を家や学校でなんか言えやしないので、本当にありがてえのだ。特にあの紅いヒトには聴かせられねえし。

『まあでもお前はアレだな。放っておくと勝手に自分で自分を追い詰めて自殺するタイプってのは分かった。胸の内をさらけ出せる相手を見つけた方がいいんじゃないか?』

「いるにはいるんだけど、今ソイツ昏睡中でさ」

いるといないでは大違いである、あの偉大な赤トカゲ。早く一週間経たないものか……………アレと軽口叩き合うの好きなんだよね。籠手要らねえからアイツの背後霊だけ付

いてこないかな、いやマジで。

「そうでなくとも何かとストレスに晒される現代社会だけ。僕の事情抜きにしても、生きるのつてツライと思わないかね幽霊クン？」

『でもお前所詮学生じゃねえか。人生語るにはまだ早えだろ』

「かはーっ！ ご最も過ぎて反論もできないねえ！」

笑つてると気分も上向き、買ってきたご馳走の山にも手が伸びるつてもんだ。ポテチうまうま！

『……………ん？』

「おいおい余所見すんなよ。ほらこれ食べよ焼肉弁当！ チャちい肉が乗っかってるだけの上げ底弁当だけど、たまに食べるとなんか美味いんだよコレ！」

『いやいや、おいちよつとなんかこっちに』

「それともあれか、喉潤したいつてか？ しやーねーな、そのの自販機で追加コーラ買つてくんべ」

『いやだからなんかやべえつて！ 俺を見てくる奴がいる!!』

「そんな奴あの馬鹿共以外いるわきやねえだろ、僕みたいな悪魔でもあるまい…………し」

指さされた方向に視線をやり…………固まる。そこに居たのは悪魔だ。多分僕が知る限りで一番厄介な。

「…………ふ、部長?」

「こんばんは、イツセー。随分と愉快なことをしているみたいね?」

その悪魔はニツコリと、これ以上ない程ニツコリと笑って近付いてきていた。しかも右手に滅びの魔力を迸らせながら。……僕には怒っているけど、いつもの折檻用の見せ魔力じゃねえな。意識は幽霊くんに向いている? いやまあ怪しげな存在だよね彼。

……………いや待てこの状況は色んな意味でまずい!!

「部長待ってこの幽霊悪いヤツじゃ——」

止めようと身を投げ出したその瞬間に、意識が薄く伸びていく感覚に襲われる。ヤバい、これタイムリープだ! しかも驚いた表情見るに今度は部長も巻き込まれてそう! クソ、こうなるなら迂闊なことしなきゃ良かったなと思いつつながら、部長になんて説明しようかと薄れゆく意識の中で悩んだ。こんなワケの分からない状況になってるんだもの、やっぱり生きてるのってツライよなあ!?

その7

〔月曜日（ループ3）〕

「……………そういうことだったのね」

「はい……………すみませんでした部長」

何言い訳しても仕方ねえなということ、起床と同時に問い詰めてきた部長に土下座。そのまま洗いざらいゲロつて今に至る。勢い余つて余計なことを口走った気もするが、まあ今更だろ！（公開告白済み）

「全く……………頭をあげなさいイツセー」

「うつす……………」

この勢いで解雇通知とか叩き付けてくれねえかなとかアホみたいなこと考えながら顔を上げると、仁王立ちしてた部長が目線を合わせるように床に座った。

「今回は私にも多分に非があるから、手打ちにしないかしら？」

「……………んん？ 部長に非？」

「単純に迂闊過ぎたわ。実力行使に出る前に貴方を問い質すべき場面だった。単なる幽霊程度なら貴方でも問題無く消し飛ばせることを、私は理解していたはずなのよ。その

時点で緊急性は無いと判断するべきだった。実際はどうあれ、私のせいで状況は振り出しに戻ってしまった以上、とんでもない大失態よ」

「ですけど、どう考えても僕が報連相を怠ったのがそもそもの原因では……」

部長に怒られるやっべ、と本来なら話すべき案件を隠したのだからそうなつても仕方ないんじゃないかなと思うのです。若干取り返しのつかないことになってるので、僕の方こそとんでもない大失態のハズなのだが……。

「そこはその通りね。だからお互い手打ちよ」

「はあ……部長がいいならそれでも構わねえのですが」

弱みの一つや二つぐらい握られるのかと思つてたのだが、結構寛大な処置に収まりそうである。思うところでもあつたんだろうか？

「別に大したことは思つてないわ。存外貴方も普通の男の子だったのね、と」

「サラツとモノローグ読まんでくださいよ。どうか失礼ですね、僕は終始普通の男の子ですが」

「普通の男の子は死を覚悟して戦うなんてできないわよ、自覚なさい」

グウの音も出ない反論をどうもありがとう、畜生これが悪友共だつたらその頭はつってやるのに。

「……んで、そんな非凡だと思つてるらしい僕のどこが普通に見えたんです？」

「もう、そんな拗ねた顔しないの。貴方にもバカを一緒にやれる友達がいたってことよ。それって貴方の言う、ありきたりだけど大切なことなんじゃない?」

「……………まア、はい」

「コトがコトだけに素直に喜べないけど、なんだか安心したの。それだけ」

安心できる要素があつたんだろうか……? でも部長が妙に生暖かい笑顔を見せるもんだからとりあえず納得はするけど。

「さ、あまりダラダラもしていられないし、イツセーは松田さんと元浜さんと連絡を取ってちようだい。今もソレ、鳴っているでしょう?」

促されてスマホを見ると、確かに慌てたような文面が通知欄に並んでいる。……つまり連中は記憶を持ち越したのだろう。その場になくともタイムリープが起これば記憶は引き継ぐ。イツセー把握した。

『すまん、ドジった』

『やっぱお前か!!』

『どうしてくれる、せつかくホームページも完成したのに』

『いやほんとごめん。幽霊がいることバレそうだったから咄嗟に対応しちまった』

『バレるとまずいのかよ?』

『ループするやつ増やしていいのかよ』

『あー……それはまずいな』

『ちよつとその辺の対策も考えないとな』

『そこも含めてヤツと相談しようと思う。とりあえず学校では話すのはやめて放課後社
交場で集合な。事態が事態だしバイトも休むわ』

『OK』

『OK』

と、とりあえず出たとこ勝負でメッセージを飛ばし、コレでいいか？ と部長に目線
を送る。

「ええ、それでいいと思うわ。では私たちは先に口止めをしなくちゃね」

「口止め？ 何を」

ポケつと考え無しにその意味を問うと、部長は呆れたようにこう言った。

「貴方が昨日、ついうっかり口にした悪魔って単語についてよ」

「あつ」

本当、うっかりですみません……。



『まあそんなこつたるーとは思ったけどさ』

また外でこつそり見られたらかなわねえと、ちよいちよいと誘導して我が家にご招待した幽霊くん。軽い説明と身の上話をしたら返ってきた反応がコレである。なんか薄くねえ？

『そりやおめえ、俺自身がこんな愉快なことになってんだから悪魔も天使もいるだろうよ。知らんけど』

「思考放棄してない？ 大丈夫？」

『大丈夫なワケあるかい、がははは！』

「だよねえ、あははは」

「揃って現実逃避しないでちょうだい。時間も押ししてるのよ？」

部長の鶴の一声で再起動。まあふざけ合っただけだしそこまで深刻じゃないすぐに意識を切り替える。

「……ともかく、迂闊なことをしてごめんなさいね」

『いやいや、慣れてっから気にしねえっすよ！ それに女が謝ったなら、それを許すのが男の甲斐性ってモンでさ！』

幽霊の超男前なセリフに部長は安心して息をつき、好きのする笑顔を浮かべた。交渉に使う営業用の笑顔じゃない辺り多分こりや素だな。うっわあ、見てると心持ってか

れそうになるよ。

「とか聞きましたよ上司様？　人が惚れるようなカツコイイ男ってこういう奴のことを言うんですよ、考え直しません？」

「……………」

「待つてください、何も言っていないじゃないですか。だから滅びの魔力しまってください。びーくるびーくる」

さつきもサラッとモノローグ読まれたし、多分読心系のなんかが仕込まれてんなりや。愛されてますわねイツセーくん！……………震えが止まらねえよ。

『それで、お姉さんはその……………イツセーの彼女か何かで？』

「まあそんなところね」

「待ちねえ上司様。誤解を招くようなことを言うんじゃないですよ」

『いやお前、誤解も何も夫婦漫才やってるようにはか……………』

心の距離も狭まったしやり取りが近いのは認めるけどそういうこと言うの止めてよ！　ほら、部長が悪い意味でニッコリスマイル！

「イツセー、真実は周囲の目が照らすものよ」

「現状一人しかいねえしコイツ正しいけど一応節穴だし真実じゃねえし」

「じゃあ一人一人聞いて周りましょう？　きっと面白い答えを貰えると思うわ」

「やめときましよう、僕が圧倒的に不利です」

『うーんこの』

酷く誤解が深まった気がする……いや普通に考えておかしいのは僕の方なのだが。両想いで、告白みたいなきもしてて、なんかもう屈した方が………いかん、早まるな兵藤一誠。部長が僕の事情に付き合うことになっていいのか。

「さて、大まかな情報共有は済んだわね」

これ以上は踏み込めないと判断したのか、パン！ と手を叩いて自ら軌道修正をする部長。

「そしてあなた達の基本方針としては、あなたの生前を調べることで成仏してもらおうということ。そうよね？」

『はい』

「その上で、私の見解を述べさせて貰うのだけど……」

そう言つて何かを続けようとして、しかし言いづらそうに部長は口籠らせた。

「…部長？」

「えつと、あなた。本当に記憶は無いのよね？」

『ええ、無いっすね。覚えてることといや、女子の趣味ぐらいのモンでさ』

「一瞬ケツ好き男子の噂も集めようとは思ったけどさ。流石に死者の尊厳的にそんな惨

いことできないんで触れなかったんですが」

そして黙り込む部長。どうしたんだろう、何かマジモンのヤバいことでも起きてるの
だろうか？

「……………正直、松田くんや元浜くんが関わるのは良くても、イツセーと私が首を突っ込
んでいいのか悩むわね。少しデリケートな問題になつてみたい」

『てえ言いますと？』

「我々が『悪魔』なのが問題ね。…………遠回りしてごめんなさい、今度こそ私の見解を述べ
させて貰うわね」

「『ゴクリ…………』」

そして放たれたのは、想定外の言葉だった。まるで、前からのボールを警戒してたら
頭上からペンチが落ちてくるような。そんな驚き。

「言いつらいのだけど…………多分あなたが幽霊になつて…………いえ、『身体を失った』のは、
悪魔の契約が絡んでいる可能性が高いわ。記憶が奪われてることも含めてね」



部長がまず疑問に思ったのは、この幽霊くんが『物を食べた』という点だったらしい。僕もおかしいよなって思ったので目の付け所は間違ってたなかつたみたい。

「基本的に、幽霊が現世に存在を維持するために食事は必要ないの。お供えの文化がある日本でなら無くはないのだけど、それは食べると言うより供えられた物に宿った何かを吸収してる、位のものよ。必要無いものを取り込む機能は普通の霊体には備わっていないわ。まずこの時点で異端極まりつてところかしら？」

『ま、まあ確かに』

「一つ質問するのだけど。あなた、何もせずにループしたことがあるんじゃないかしら？」

『……………言われてみれば。というか大体のループがそんなんつすわ』

そう聞いて部長は、ただの想像だけれどと前置きして続ける。

「ループの条件は成仏……………ではなくて、あなたが存在しなくなるってことなのだと思うの。そしてあなたは自分を維持するために食べ物を取取る必要がある。そうね、大体人間が何も飲み食いしないで生きられるのが3日間程だったかしら。ループは3日程度を周期だったのではなくて？」

『へえ、だいたいそんな感じですよ。……………そうか、なんかだるい時にループしてたのそういうことか』

「いや気が付けよ。というか教えてくれよ」

『必要なことだと思わんだろうが。……いやまあループの周期を教えてなかったのは素直にすまんと思うが』

まあ部長も言ってる通り想像での話なのだが。でもかなり信憑性のある想像だ。

「つまりあなたは現在進行形で『生きている』。霊体を維持するために物理的な食事が消費されているとは思えないから、その食べた物の行先が気になるところね」

「でもそれって全く手掛かり無いじゃないですか。もしや部長ってそういう力の流れるなモノも追えるタイプのデビルだったりします?」

「できなくはないけれど、見た感じ私でも判別できないわね。残念だわ」

じゃあダメじゃん、とはならない。少なくとも僕らだけでは到底辿り着けなかったであろう観点から助言を貰えたのは本当にありがたい話だ。やつぱ専門家には素直に頼るべきだわな!

「それに全く手掛かりが無いわけでもないの。悪魔の契約が絡んでる可能性があるとして私は言ったけれど、それはどうしてか分かるかしら?」

「それは、こんな趣味の悪い状況を作るような性格の悪いヤツは悪魔ぐらいしかいないからってことでは?」

「うーん……なくはないけれど、感覚的な話で説得力を強く持たせるには一つ足りない

わね」

「そらそうだ、と納得する。多分世界に溢れる神器の中にはこういうこともできる物もあるかもしれないし、教会勢力や墮天使勢力、他の神話勢力にもそういうことができる力があるかもしれない。」

「ええ、身体を失わせるだけならどこだって可能性だけはあるそうよね。ただ……時間进行操作となると話は変わってくるわ」

「と言いますと?」

「私の魔力が『滅び』の属性を持っているように、『時間』の属性の魔力も存在しているのよ。……持つてるところを持つてるところだから、明言は避けておくけれど」

「特に聖なる気配の残滓も無く、なんなら魔力の残滓を感じ取れるので、部長はそこからほぼ間違はなく悪魔が絡んでると見ているようだ。」

「……もしや部長、そっちの方面であたってくれたり、とか?」

「何言ってるの当たり前じゃない。これは私の仕事よ。首を突っ込むのは他所の悪魔の仕事の邪魔になるかもしれないけれど、調べるだけなら無罪よ」

「部長、好き! 愛してます!」

「知ってるわ、でも何度だって言って頂戴。やる気出るから」

「今なら抱きついてキスしても……あ、ダメだなそのまま喰われるわ。」

「ともあれあなた達は継続して彼の出自を調べてもらっていいかしら？　ご丁寧に記憶が消されている以上、こつちでも何らかの情報操作がされている可能性が高いわ」

「了解っす！」

「私はそうね……まず、『身体を代価にした悪魔契約』『身体を消すことを願った悪魔契約』の2つで調べてみるわ」

『俺そんなことしねえと思うんだけどなあ……うーむ』

「記憶が無い以上、申し訳ないけれどその発言の信憑性は皆無ね」

そりやそうだとガツクリ肩を落とす幽霊を見て、思わず肩ポン……のフリだけする。触れねえし。

「元氣出せよ。僕だつて叶えたい願いのために命賭けたことあるし、良くあるつて」

『余計傷付いたわ』

「あるえー!?!」

……ンまあともかく、なんだか解決に向けて大きく一步前進したみたいだ。よっしや、気合い入れてくぜ！

その8

「と、言うわけで今日の店長業務は小猫に頼むわね」

「……頑張ります」

「いやいやいやいやいや、話が数段飛んできますよオーナー」

月曜日（3回目）にあたる今日の放課後。僕が独自に動くってことを共有するために急遽オカ研緊急集会。僕と部長が野暮用で出掛けないといけなくなつた旨を周知する。その関係で契約業務の仕事の引き継ぎなどを指示していた最中に、急に爆弾が投げ込まれた。マジで何言つてんのさこの上司。というか小猫ちゃんもむん！ って気合い入れてる場合じゃないと思うの。

「というか僕がいなくても店は普通に回りますよ。というか2号店3号店の準備に向けて立山サンと中村サンに店長業務の講習やったじゃないですか！ 監視する必要なんて無いくらい彼ら優秀ですよ、僕なんかと違って！」

「……とある事に自虐する癖辞めないと、次は褒め殺しにするわよ」

「斬新な脅し文句ですねエ!？」

それされると吐きそうになるのでマジ勘弁。自分に胸を張れるようになったとて、平

凡であるスタンスは変えないつもりなのである。

「とはいえ実際にその通り、彼らがいれば何事もなく営業できるでしょうね。……問題は、我々悪魔の目が無くなるということよ」

「ああ、成程」

つまり小猫チャンは用心棒ということか。実際腕つぶしは立つし、成程納得の人選である。

「あとはちよつとしたデータ収集ね。イツセー、貴方の成績……というより、九頭龍亭の事業が私達グレモリー眷属の中で一二を争う成績になつてるのよ」

「……わぁーお」

朱乃サン達先輩方ともう肩を並べるような事業になつてるの。すげえなラーメン。

「将来的に九頭龍亭をフランチャイズチェーンとして悪魔相手に売る商品にしたい、ということとは伝えていたと思うのだけど。思いの外順調だから話を少し進めて、実際に未経験でも操業ができるかどうかのテストつてところかしら？」

多分これからしばらく誰かが研修で店長をする機会が増えるわ、などと続けるもんだから背筋が冷えてくる。話が大きくなつて着いていけないのに、おもつくそ僕ちゃん当事者なんだよなア！

「……となると、最初の1日でできることなんて限りがありますし、マニュアルに不自然

なところが無いかを見てもらう、辺りですかね」

「イツセーがそう思うならそうなのだと思うわ。少なくとも九頭龍亭の実際の営業に関しては貴方の方が詳しいでしょう？」

「はい、そこは確かに」

1日目から新人を麺場、焼き場を任すのはあの憎き元店長だけで十分だ。現場OJTはある程度事前知識を頭に入れてからじゃねえと効率悪いつてのにあの野郎……………！（再燃する怒り）

「……………少し残念」

「残念がるところじゃねーですよ後輩殿。なんでそんなにやる気に満ちてるんだ」

「……………常連さん程じゃないけれど、結構行つてたので九頭龍亭の裏側にとっても興味がありません。感無量、です」

つつてもキミ、ソフトクリームぐらいしか食べてなかつたジャン……………お節介で賄い麺出してからは麺も食べるようになったけど。先行投資大成功。

「ンまあ、ありがたいけどサ。慣れてるヒトじゃ気が付けないことも、外から来たヒトなら気付くこともザラだし。気負わず適当によろしくね、ホントにマニュアル読み込んだりちよつと店の中確認する位でいいから」

「はい、任されました」

シユツシユツ！ とシャドーボクシングをするが、それは間違いなくウチの店では活きない動きだぞ……大丈夫かな？ 大丈夫か……。

「ところで、イツセー先輩の用事というのは？ 部長も関係のありそうな話みたいですけど」

そう言われると答ええないワケにはいかない。事前に擦り合わせた方便が、僕の口から吐き出された。

「……………九頭龍亭2号店の候補地巡りだよ」

もう僕、普通を名乗れないかもしれない。強くそう思った。



「てなわけで、ここが候補地……というかウチの部長殿が私的に買った牛井屋の跡地だよ」

「そんなところ一般人連れてくるんじゃないやねえよビビるわ!!」

「変な顔で見られてたぞ……そうだよな、学生服の3人組が跡地に入っっていつてるもんな……」

『(あのネーサン本当にとんでもないんだな……)』

吐いた言葉を嘘にも出来ねえ、てなワケで部長が抑えてる場所からまだ建屋が残ってるヤツを1つピック。そこを今後の話し合い等で使おうってことで2人と幽霊1人ご招待、というわけである。隣町かつ川の堤防に近くで幽霊くんも来やすい立地だ。中もキツチンはともかくテーブル等の内装がそのまんま残ってるのでちつとりリフォームすればぼほそのままで店やれるな。まあ詳しいことは丸投げするとしてよ。

「というかお前、グレモリー先輩に話したのかよ」

「大丈夫なのか？ その……色々と」

「いいんじゃない？ ループしなければ（大嘘）。学園祭用の展示物増やせるってウツキウキだったし」

まあ、表向きはそういうことである。一応オカルト研究部としてもちゃんと研究というテイで色々調べてますよ風はしてるみたいで、今回の件も可能であればネタの1つとしてプールしておきたいし、嘘では無い。無い……んだが、なんか恋人陣営で人狼してる気分になってくるな。ループに巻き込まないために部長にも嘘つかせてるし本当に良くない流れである。

んで、席についてこれからの方針を話し合おうとするが……

「とりあえず、ループに合わせて消えた写真はさつき撮ったからこっちで印刷までやってもらうけどよ。毎回これするのダルくないか？」

「徒勞に終わるのが一番ツライ……」

「ループ先に諸々持ち込めねえし、そこに関しちやお手上げだわなあ……」

結局これに尽きる。なるべくループしない様に立ち回り、一刻も早く名前を割るというのが目標だ。名前さえ割ってしまえばループ毎に調べる準備をする手間が無くなるからな。

『そればかりは俺自身でもなんともし難いな……極力人目の付かないところで息を潜めようとは思うが……』

「それがどこまで持つか……」

「……なんか思い出せることはないのか？ 的を絞れば多少効率的になると思うんだが」

『すまん、さっぱりだ……』

揃って頭を抱える3人を見て、まずいな……と思い始めてきた。僕もそうだが、終わりが見えず同じ時間をやり直ししていると気も滅入るといふものだ。2回目までは楽しめるも、3回あれば億劫にもなってくる。これが何度も続けば………こういう表現はキライだが、『心が腐る』様になるのだろう。

この2人をファンタジーな事情に巻き込んだ判断事態は、まあ放置しててもこんな状況になっただろうって想像ができるんで間違っちゃないと思うが、それでも思うところ

はある。嫌なら抜けてもいいぞ、という準備だけはしておかないといけないかもしれない。

「……まつ、そもそも揭示物作っただけで情報入るのはこれからって話だったしな。せめてその様子だけ確認して悩もうぜ」

そんな陰鬱な空気を振り切って、松田が明るい声でそう言った。その声に若干救われた僕達の表情から、少し陰りが取れた。

「だな。とりあえず幽霊くんにはここでヒソヒソしてもらって、なんか作業する時はここ使おう。電気は適当に使っていいってよ」

「じゃあ俺はここにパソコン持ってくる。……ビラの印刷はコンビニでするしかないか。ネット回線は？」

「流石にないねえ……」

「分かった、デザリングで対応する」

『俺になんかできることはあるか？ 俺のことなのに本当に役立たずで……』

幽霊くんにそう言われて、でもどうしようもなくね……？ と首を捻ったところで思いつく。早朝、部長の見解ではコイツは霊体だけでまだ生きているとのことだっただけではないか。つまり記憶が無いのは、生前の記憶を思い出せないというよりは、記憶障害という線も無くはない。悪魔との契約で記憶も奪われてるってパターンなら何とも言

えんが……。

「……ふむ。君、ストレスに感じてることはないかい？」

『ストレスう？』

「うん。幽霊にそれが当てはまるかは分からないんだけど、記憶障害って線も追った方がいい気がしてね」

そう言っただけで目配せすると、今朝の部長の発言を思い出したらしい。得心がいったような顔をして……そしてすぐ眉の間にシワが寄った。

『それがなんでストレスだったんだ？』

「まだ若いから老化とか衰えから来る記憶の障害とは思わない。んで、素人のうろ覚えなんだけど、記憶障害ってストレスで発生することもあるんだと。ほら、あまりにもシヨックな出来事から自分を守る為に忘れてしまっただけのことではない？」

「あー……なんかそれ聞いたことあんな」

「調べたら、確かにそれっぽい記事もあったぞ」

そう言っただけで元浜がスマホを、その記事を表示させて机の上に置いた。……ふむふむ、大きくは外れてなさそうだ。

『んアー……そもそもその心当たりもねえんだが……。ストレスって、今のストレスもあんなのかね？』

「分からない。けれど精神的に安定した状態ってのは大事かもしれない。なんで遠慮無く今感じてることを言ってみて欲しい、切に」

『うーむ……一番感じてるストレスが、気が狂いそうになるほどループしてるっつーことだからどうしようもねえつつうか……』

「「ああー……」」

思わず同意の声があつた。3回程度で根をあげそうな僕らならとくに狂ってる程のストレスを感じてるに違いない。

『……だからその、この状況は結構救われてるんだよ。ループはしてるが、こうやって変化がある。それが今の俺にとって、死ぬ程ありがたい』

あらためてありがとうよ、と言われて僕らは言葉を無くした。そりやそうもなるでしよ？ 軽い気持ちで首を突っ込んだことで、分からないなりに盛大に感謝されちゃってんだから。こんな重い『ありがとう』に、一体どう言葉を返せばいいってんだ、畜生。(……ああ。これ、ブーメランか)

あの日の夜、僕にクソみたいな独白と感謝を伝えられた部長もこんな気分だったのかもしれない。まさに因果応報、上に向かって吐いた唾が自分に掛かる見事なオチだった。笑えないけれど。



なりふり構ってられない、ということ。死者の尊厳を踏みにじるような『尻フェチ』という文言が行方不明者捜索掲示板やピラに追加され、ついでにストレスの軽減になるかもとゲーム機の類を持ち込む。気分は秘密基地を作ってる小学生だ。久しぶりに大乱闘的なゲームをやって逆に僕はストレス溜めたがね。復帰狙ってメテオするとか人の心がねえなアイツらア……!!

『あまり順調とは言えないわね……』

「ですねえ……八方塞がりというかなんというか……。手当り次第に倍加を譲渡した力メラで撮って貰ったりとかしてますけど」

そしてその日の夜、自室で自分のノートパソコンとにらめっこしながら部長との電話。今日はこんな感じの進捗でしたよー、と報告したが声音が芳しくない。多分こつちがとうよりは、部長の方があまり良い結果にならなかったのだと思う。

『こちらも、予想通り何も見つからなかったわ』

「何事もそう簡単に上手くはいかな……え、予想通りだったんですか？」

何それ僕ちゃん聞いてないんだけれど。

『人間と上手いことやっついでいこうという時勢に逆らってるもの。人間の命を対価に願

を叶えるなんて、本人が納得してたとしても角が立つわ。だから少なくとも記録には残していないのは察していたの』

「じゃあなんの為に……」

『記録から何かを消したら、僅かでもその痕跡が残るものよ。私が確認したかったのはソレ』

「ははあ、成程……」

しかし、どうも声の調子から確認したかった痕跡は見つからなかった模様。

『そうなのよ……まあ見つからなくて良かった、とも思ってるのよ。もしあの家がこんなことに関わってたのなら……スキャンダル、という言葉では済まなかったでしょうから』

「じゃあ、あんまり遠慮せず動いちゃってもいいことが分かった、ということですね?」
『それだけじゃないわ。見当をつけるためにそのまま他の契約業務の記録も見るに決まってるじゃない。貴方と違って1つの目標に向かって突進するしかない猪武者じゃないのよ私は』

「サラツと凄く貶されましたね僕」

『褒めてもいるわ、覚悟を決めた貴方の目的遂行能力は大したものよ。忌々しい程に』
「その節は本当に申し訳なかったのでいじめるのやめてくださいよ」

随分と根に持たれてるようで何よりですわよ本当に！ 全部僕が悪いんだけどね！

しかしともあれ、『あまり順調ではない』と言っていたところから察するに、そちらの方もあまり芳しい結果ではなかったと思うんだけど……それともややこしい情報でも掴んだのかな？

『……………全くと言っている程、無かったのよ』

「んえ？」

『……一ヶ月の駒王町並びにその近辺での契約の記録に、命を代価にするような願いの記録も、消した痕跡も、何一つ無かったのよ』

「……………マジですか」

それって、どういうことなんでしょう？

『彼から漂っていた魔力の残滓から、間違いなく悪魔か、あまり考えられないけれど墮天使が関わっていることは間違いないわ。そして墮天使に関してはレイナーレの一件からそう時間も経ってないから、駒王町近辺で何かをするというのも考えづらい。9割9分悪魔の仕業と考えていいわ。その上で記録に残っていないということは……………この件は現在進行形で契約を履行している最中である可能性が高い』

えーと、とりあえず現状は理解できた。そうなる……………今、どうということが起こってるんだろう？ パニックになって頭が回らなくなっている。

「で、でもおかしいじゃないですか！ それだと僕らはその悪魔契約の邪魔をしていることになる、だったら妨害なりなんなりがある筈でしょう!？」

『その妨害がこの状況タイムリープなのだと思うけれど………：貴方の考えていることを当てるわ。あまりにも手緩すぎる、でしよう?』

「はい、あの幽霊に近付けさせない為ならもつと方法がある筈。これではまるで僕らが巻き込まれてくれた方が都合がいいみたいだ……」

ああもう、ワケが分からない。一体全体、どういうこつた……? お互いに言葉が出ず、沈黙だけが耳を貫く。部長も部長で、この状況が掴めずにいるんだらう。

『……一度、分かっている情報と推測でできる情報を纏めましょう』

沈黙を破った部長の提案。そして部長は箇条書きにするように簡潔に今の状況を纏めていった。

『まず、あの幽霊には魔力の残滓が漂っていた。ほぼ間違いなく悪魔が関わっていると見ていい』

『次にあの幽霊の正体について、自然に飲み食いをしてる点で少なくともただの霊体ではないわ。恐らく、生きたまま霊体になってると見ていいわ』

『後はタイムリープした状況、貴方が聖水を掛けた時と私が滅びの魔力をぶつけた時。あと何もせずに3日間が過ぎた時。あの幽霊が死んだ時にタイムリープしてるのは今

朝も言った通りね』

『最後にただの推測ではあるけれど……彼のこの状況は、現在進行形で契約を履行している最中であること。本来余所者が手を出すなど警告をされてもおかしくない状況で、妨害らしい妨害がタイムリープしかない』

そこまで言つて、部長は続けてこう言つた。

『私が思うに、恐らくこの契約を担当している悪魔は時間稼ぎをしているように見えるわ。契約が履行できなくなつた段階でリセットボタンでも押しているみたい。……あの家の関係者なのか、あるいはそういう神器を持つているのか』

「……………僕らがタイムリープに巻き込まれただけで何も妨害らしい妨害を受けていないのは、その方が履行できる可能性が高まるから」

『そう考えるしかないわね。推測に想像を重ねているから正しいかどうかは分からないけれど』

そうなることやはりアイツの記憶を取り戻すか、正体を割り出すかしか思いつかない。それもちやんと飲み食いしてもらつて生命維持して貰つた上で。

『あと、間違いない彼が死ぬことでタイムリープするというのは重要よ。彼が死ぬ事と、契約が履行できない事はイコールと見て良さそうだわ』

そう言われて、僕は1つ閃いた。もしかしたら、もしかしたらだけど……

「……………部長、ヤツが口にした飲食物は何処に行つてると思います?」
『イツセー…………?』

「ヤツが食べた物が、他の誰かの命を維持するのに使われてる可能性は、無いでしょうか?」

その9

〔火曜日（ループ3）〕

『駒王町とその周辺の病院をあたってみるわ。冥界でできることはもう殆ど無いし』

という言葉と共に部長は人間界へと帰還。持ちうるコネで魔力を漂わせてる人間を探すとのこと。

そして僕らの方は僕らの方で、まさかの進展があった。登校と同時に半ば連行される形で屋上に連れていかれ、朗報を聞かされた。

「ヒットしたア!?!」

「おう、今朝確認したらコメントが複数付いてたんだ」

「これで1歩前身だな!」

元浜から突き付けられたスマホの画面には、成程確かに隣町の高校に通ってる男子高校生じゃないか? という旨のコメントが6件も付いていた。1つ2つ付いてくれたら儲けもの位に思っていたのだ、コイツは有り難い。

「でも肝心の名前の方は……」

「苗字が出てるだけだな。まあそこはどうしようもない」

「一日無断欠席してただけっばいから俺ら怪しまれてんだよな。行方不明って言うには短過ぎるから、仕方ねえっっちゃ仕方ねえ」

なんならアイツが学校サボって心靈写真で遊んでるんじゃねえかって思われてすらいるな。いやあながち間違いじゃねえから反論し難いところ。

しかしコレはとても貴重な情報だ。高校と苗字は特定できたし、ループの起点だけじゃなくてアイツがいなくなったタイミングも月曜日かその前辺りなのが分かったのだから。

「まあでもこれを手掛かりに聞き込みをやっていけば……いけるぞ、間違いなく！」

「放課後、速攻でアイツに会いに行つてやらないとな！」

「うん！ いやぁホント、思ったより早く反応があつて良かったよ……」

しかし、結構くつきり写つてるとは言え、よく誰か分かるもんだな……半透明だし分かりづらくない？ いやでもコメント見るに……

「尻フェチだから割り出せた、のか……」

「ああ、相当気合い入った紳士だったに違いない」

「趣味こそ合わなかったが、周知される程に自分を貫いたあの男を、俺は心の底から尊敬する」

「それはどうかと思うよ僕、切に」

死者の尊厳云々悩んでたけど、そんな必要も無かったみたいだ。気にした僕が馬鹿みたいだ。……………いやこのエロバカ共と猥談できてた時点で察するべきだったか？

「お前もムツツリなだけで同じ穴の貉だと思っただけだな」

「おっぱいの暗黒面に堕ちたオッパイスキーめ……………」

「やめろやなんだおっぱいの暗黒面って。ちよつと面白くて笑っちゃまうじゃねえか」

あと社会適性があることをムツツリ言うのやめろ。一般人全員ムツツリってことになるじゃねえか。……………間違っただけかもだけど。

「でもさ、これでアイツの名前が分かって、記憶も取り戻せたとしてさ。そつから先、どうやって成仏させたらいいんだ？」

「んえ？」

そんな松田からの想定外の疑問に、思わず変な声が出た。少し困惑していると得心がいったように元浜も続けた。

「あーそうだよな。記憶はもしかしたら俺たちでも取り戻せるかもしれない。だがコレが例えば恨みを晴らすとかだったらどうしようも無いし……………悪いことだと分かっても、同情して止められんかもしれん」

いやいやそもそも死んでない……………と言いかけて、口を噤んだ。そうだ、死んでない云々は悪魔の事情が絡むから言えてないんだつた。

「いやいや、アイツのこと思い出してみるよ。確かにタイムリープで心は弱ってたけど、そんなことしそうなタマか？ 大丈夫、なんとかなるって」

そう心にもないことを口にする。「だよな！」と明るく返す2人の顔を見て、ああ僕は人として腐ってきてるかもしれないと感じてしまった。人じゃなくて悪魔だけど、そこは心の持ちようとして。

せめてどうなっても自分ができる範囲でどうにかしよう、と心に決めてふと気がつく。アイツは間違いなく悪魔と契約を交わし、願いを叶えてもらおうとしている。今は多分、アイツの契約とぶつかり合うことは起こっていないけれど……

(もしその願いが、叶えてはいけない願いだったとしたら、僕はどうすればいいんだろう……)

もしかしたら、その願いを踏み躪らないといけないかもしれない。そういう状況に陥れば、僕は躊躇もせずそうするに決まってる。……躊躇なく他人を殺せる心構えができる様になってきた辺りで気がついてはいたけれど、本当に人としてダメになったのかもしれない。

悪魔になんてならなければ……なんて言葉が口を出そうになって、首を振った。後悔はしてないのだからそれでいいじゃないか。

2人が機嫌良く話すのに合わせて愛想笑いを浮かべ、しかし僕は心にドンドンと何か

が澀んでいくのを感じた。



「イツセイさん、少しお願いしたいことがあるんですけど……大丈夫ですか？」

「えーつとーん……ちよつと待つてくれ」

放課後、それじゃあ早速報告に行くか……と2人とアイコンタクトをしたら、意を決した様子のアーシアに呼び止められた。なにやら大事な用っぽそうだけど、これどうする……？ と視線を投げる。

(野郎と美少女なら圧倒的後者だろ)

(お前らアイツ泣くぞ)

この間僅かコンマ一秒である。付き合いの長さがなせる技だねえ。ともかく、報告自体は奴らだけでもできるとのことなので例の居抜き物件の鍵を投げて寄越した。

(あんま変なことすんなよ、部長に迷惑かかったら)

(了解了解、心配すんなって)

(ぶっちゃけあとは俺らだけでどうにかなりそうだしな)

そう目でやり取りしてスタコラサッサと馬鹿2人は教室を出る。普段なら運動部の

女子更衣室にかじり付きに行くところを脇目も振らず教室を後にするので周りも何故か不審そうだ。なんなら奴らに対して唯一邪険にしない女の子であるアーシアとの接触のチャンスも投げ捨てるので余計にそう思うのだろう。『どういうこと……?』つて視線が突き刺さって酷く居心地が悪い。なんて説明したもんか……。

「……………んー。詳細は言えないけど、法と倫理に触れることはしてないよ、安心して欲しい」

言葉に困ってそう言うと、渋々といった感じで皆の視線が散っていく。多分納得はしてないんだろうけど、お目付け的な僕が言うからそうなんだろうってな様子だ。まあ僕も僕が関わってなかったら欠片も信じないけどな。奴らの素行が悪いせいだから自業自得だザマアミロ。

さて、とりあえず部長にも奴らに鍵を渡したことは言うとして、だ。

「というわけで予定は空けたよ。お願いって何かな?」

「その……大したことでは無いんですけど……」

非常に言いづらそうに口をモゴモゴさせるので、ここでは話せないのかもしれないと判断。じゃあ部室に行こうか、と口にする直前にアーシアは驚くべきことを言い放った。

「きよ、教会のお掃除を手伝って欲しいんですっ!」

「……………What's
??????」



「誤解を招くような言い方でごめんなさい……………」

「いやほんとそうだよ……………心臓が口から出るところだったぜ」

アーシアに限って裏切りはねえだろ、とは思ったが。流石に教会の掃除を手伝って欲しいなんて言われたら、流石のイツセー君も度肝を抜かれるというものだ。何とか心を落ち着かせ、飛び出るように校門をくぐり抜けていつもの公園で事情を聞くと、ここ最近……………という言い方は語弊があるな。昨日、『月曜日』の朝にアーシアがやったことと言うのが墮天使達が根城にしていたらしい廃教会の清掃だったのだとか。

「本当は良くないって再三部長には言われたんですけど、汚いまま放置されてるのがなんだか忍びなくて……………」

「うーん、気持ちには分らないでもないけれど」

なお部長は『交渉材料の1つにはなるかしら?』ということでアーシアに教会の掃除……………というか維持管理をOKしたのだとか。ふむ、教会勢力との交渉で使える……………のか? 悪魔に神の家を綺麗にされるとか噴飯モノだと思っうんですが。

「名目上、墮天使様達がなにかの企みに使った可能性がある為、その調査の一環で……と
いうことにするらしいです」

「ああ……………」

例の1件は僕もアーシアも無関係ではない。だからなのかアーシアの顔は若干曇つたし、僕も似たり寄つたりな顔をしてるだろう。奴さんのせいで死んだしな、僕様。

「もちろん、不埒なことは厳禁だとは思いますが。力こそ弱まってるとはいえ教会は神の家。常に天使様に見られている、ぐらゐの認識で」

「了解了解。まあ種族単位で言うとな僕達悪魔にとつて天使は敵だけど、個人的にはそこまで嫌う相手でもないし、誠実に作業するとも」

しかし、そうなると僕の出番 is 何処？ という話になる。言っちゃなんだがアーシアだつて悪魔だ、多少の瓦礫程度なら屁でもないし……タツパの問題か？

「いえ、高さの問題でもありません。この間ようやくと背中人間やめてるの翼で空を飛べるようになったんですよ！」

ほら見てください！とはしゃいで飛びそうになるアーシアを必死に抑える。ほら待ちねえアーシアさん、人払いしないうちにそんなことするんじゃないやありません。ほらあそこ、遊具で遊んでる小学生がなんだなんだとこつち見てるから。

「あ、ごめんなさい。イツセイさんに教えたくてつい……」

「気持ちにはわかるよ、うん」

それはそれとして、僕より先に行つててビックリなんだけど。まだ僕背中の翼満足に使えないよ、ねえ。コレが才能つてヤツ？　　そういう魔力関連もアーシアはテキパキ出来たもんね……自分が凡人つてこと再認識できて嬉しいけど、ちよつとやり切れない気持ちになつてくるよ。

「いやそうなつてくるとマジで僕が手伝えることつて……？」

「そのう……イツセーさんの危機察知能力をお借りしたいな、と」

「……警鐘のことか。なんかやばげなことでもあるんかい？」

瞬時に意識を第六感に集中させるが、しかしいつもの様にリンゴン鳴つてはいない。特に危険は無さそうだが……。

「名目上は調査ということなんですけれど、本当に調査しなければならぬ物もあるんです。本来あの廃教会では、私の神器を抜き取る儀式の準備をしてたんです」

「……あー、確かそうだったね」

聞くところによると、墮天使陣営は神器の研究がかなり進んでいるらしく、その副産物として神器をあれこれする装置も結構あるんだとか。儀式、とアーシアは言ったが、実際はそういう装置を使つての手術みたいなものだそう。

「……万が一それがあつたら、確かに放置していると危ないね。抜き取つたら死ぬんだろ

う?」

「はい。それに抜かれた神器が悪用されないとも限りません。……私の方でも確認したのですが、特にそれらしい物はありませんでした。でもイツセーさんの警鐘なら見えな
い物も確認できるかも、と思つて」

「よし任された。僕も無関係じゃないし、全力で手伝うよ」

まあそんな大事なものの、遺してるとは思わねえけどな、なんて思考は口に出さず。せつかく頼られたのだから全力で付き合おう! と意気込んで廃教会に向かおうとするが……肝心の頼つてきたアーシアが、とつても困つた顔をしている。

「えつと……アーシア?」

「……ごめんなさいイツセーさん。手伝つて欲しいのも嘘じゃないんですが、今日お願いしたいことは別であつて」

「??」

いや本当にどうしたんだらう。なんか僕の存在がすげえ困らせてる? どうする、消えようか? ……なーんて思考した瞬間に遠くの方から圧が飛んできた。いやもうな
んでもありませんねあの方。

「あうう……松田さんと元浜さんになんと言えば……」

「待て待て待て待て。あの馬鹿共になんか言われたんかい」

「あつ、いやその、これは内緒でっ!」

叩かずともボロがボロ出てくるアーシアを見て、通りでなんかアイツらがつついて来なかつたな、と納得した。それがアーシアのお願いとどう繋がってるのかは謎だが。

「その……イツセーさんの元気がない、とお二人が教えてくれて」

「お、おう」

「詳しい事情は教えてくれなかったのですが、イツセーさんがお二人に対して、何か負い目を感じてるのではないか、と心配していたみたいなんです」

「……………うん」

「それで、放課後イツセーさんを連れ出して、どうにか元気付けて上げて欲しい、と頼まれたんです…………」

「……………あんにやろう」

ドエロコンビの癖に、一丁前に気イ効かせやがって。クソ、若干涙腺緩んだじゃねえか。

「確かに、昨日からイツセーさんの様子が少しおかしいとは思ってたんです。ずっと意識を張り詰めてるような気がして。部長に聞いても『まだ大丈夫』としか教えてくれなくて、少しモヤモヤしていたらお二人から話があつて…………」

「あー……………本っ当にごめん。ちよつと諸事情あつて自分に対して落ち込んでてさ」
いやでもそつか、意外と隠せてるつもりだけどそうでも無いのか……………イツセーくん
ちよつと反省。

「辛い時に周りに相談しないことを反省してくださいっ！　いつイツセーさんがフラリ
と何処かに消えてしまうか、みんな気が感じやないんですから！」

「そつちはごめん、次から気を付けるって言いきれないわ」

「もうっ、全くもう！」

プンスカ怒り始めたアーシアを見て、思わずクスリと笑つてしまう。誰かに心配されてるうちは、まだ行き着く果てまでは行つてない様な気がして少し楽になった。まあ気がするだけだが。

「んー、それじゃあアーシアさん、イツセーくんは元気が出たのでお礼に掃除手伝うよ。
今ならなんだつてできそうだよ」

「本当に元気出たんですか……………？　イツセーさん平気で嘘つきますし……………」

「嘘じゃないヨ、普段も隠し事がメインだからそこまで嘘ついてないヨ」

「普通に嘘つくよりタチが悪くないですかソレ……………」

そんなことを言い合いながら、僕は公園を後にする。何が必要かな、こうすればいいかな、なんてちよつと未来のことを話すのは……………うん、ちよつと気分が良かった。タ

イムループしてるだけに、余計にね。

あ、ヤバそうななブツは何もありませんでしたとき。

その10

【水曜日（ループ3）】

「では、そろそろ答え合わせにしましょうか」

日付の変わった頃に突如魔方陣を光らせて現れた部長が開口一番そんなことを言った。いやあの貴女、一応下宿してるってことになってんですから普通に玄関から入れればいいのに……鍵持ってるじゃないですか。

「生存確認よ。さっきアーシアから一緒に教会の掃除をしたって連絡があつてね」
「あ、いっけね。連絡してませんでしたねそっちは」

「アハー……等とおどけてみせるが、わざと報告しなかったことは見抜かれてるらしい。まさかアーシアが僕のことまで報告しちゃうとは、不覚。」

「……まあいいわ。何も無かったみたいだし」

「ええ、ちよいと息苦しかった位で。物騒なモンも何もありませんでした。ところで、答え合わせというのは……」

そう訊ねると良くぞ聴いてくれた！　と言わんばかりに破顔した部長が、どこからか紙の挟まったクリアファイルを取り出した。……いや今本当に何処からソレ取り出し

た？ どう見ても虚空からなんか出てきたよーな……？

「この程度、乙女の嗜みよ」

「んな嗜みがあつてたまりますか。大方魔力でアレコレしたんでしようけど」

あと表情から思つてること読み取るの本当にやめて欲しい。隠し事できなくなるじゃん。そもそも隠し事するなつて話だが、そこはそれ。

「隠し事云々の件はおいおい詰めさせて貰うとして……引つ張るものでもないし、早速説明をするわね。まず、あの幽霊の彼の名前は『日下部景太』。隣の高校の2年生ね」
「あいつ下の名前景太つて言うんすか。つっても苗字教えて1日も経たずによく分かりましたね」

朝の段階でメッセージ飛ばしてだからマジで急転直下の展開だ。部長が優秀……と
いうよりはヤマ張つてたところが当たつたみたいなのがする。

「あなたが自分で言つたんでしょ……彼が食べた物が別の人間を維持するのに使われてるんじゃないかって」

「……………あー、なんか言つたよな気がします」

「なんで昨日のことを覚えてないのよイッセー」

いや本当にすみません。頭の出来がそれほどよろしくないんですよ、だからノータリ
ンって自称してるんですけどね？

「あ、てことは病院に辺りをつけて見事大当たりってことか。僕のラッキーパンチにも程がないですか?」

「……………まあいいわ。それがどこまで本音で話してるか分からないし」

「疑い過ぎじゃないですかねエ!? いいですか、嘘つくのだけって頭が必要なんですよ!」

「ええ、悪魔ですもの知ってるわ。そしてそんな悪魔を出し抜いて自殺しようとした馬鹿な子が目の前にいるのだけど」

「この話はやめにしましょう、どう考えても僕が口でタコ殴りにされる未来しか見えな
い」

ちえつ。嘘じゃないんだけどな……………多分。

「ともかく、先日の貴方のラッキーパンチ(仮)に一理あると思つたから、近辺の病院を洗いざらい調べることにしたの。彼の食べた物が……………というより彼の今の惨状が誰かの生命を維持する為の必要経費ならば、恐らくその人物は生死の境をさまよつてるような重病人、ないし重傷者だと推測したわ」

「そこに、やつの苗字が合わさること……………」

「ええ、日下部イネさん……………彼の祖母に辿り着いたというわけ。詳しいことはこの中に」

そう言つて手渡されたのは……………多分カルテつてやつだよな。細かく読もうとするとう頭痛くなるのでパスしたいところなんだけど……………」

「……ぎっくり纏めると、少なくとも刃渡り60cmはありそうな刃物で腹をぶった斬られたつてことですかコレ」

「ええ、何とか生命活動は続いているけれど、何故まだ生きているのかが分からないとも、ね。若ければここから持ち直すこともあるでしょうが、御歳80歳の人間だと……」

まあ何故首の皮一枚繋がってるのかは、多分ヤツが関わってるんだらうけど……ん？「待ってください、躊躇い傷が無いつてことは他人がやったつて扱いになつてるんすよね。これ結構な大事件ですよ、報道とかあつて然るべきじゃないですか。しかも使われているのは結構なサイズの刃物で……」

「ええ、何故か周知されてないわ。報道以前に警察が捜査をしていなければならぬ様な事件ね。……日下部くんに契約を持ち掛けた悪魔側か、それとも日下部イネさんを襲撃した側かはわからないけれど、認識阻害その他諸々を掛けて秘匿ないし証拠隠滅を計っているのでしょうか」

自分から秘匿つてどういうこつちやねん……と思わないでもないけど、まあそういうもんか？とは思つた。使われた凶器に関しても、裏側の人間なら持つててもおかしくないサイズ感な気がしてきた。実際オカ研のイケメン殿が魔剣をぼこじやか生み出せる神器持つてるしな。

「誰に襲撃されたかは……推測は立つけれど今回の問題の大筋からは逸れてしまうし、

今は置いておくわ。ともかく、彼は祖母の命を救うための願いを何処かの悪魔にしたというところでほぼ間違いないわね」

「まあ……世を夢んで死んだ、とかは無さげだったから色々ようやく腑に落ちましたけれど」

で、一つまた疑問が生まれるわけですが……

「実際、死んだ人間を生き返らせる願いつて可能なんですか？」

「ほぼ無理よ。まず死んだ本人を蘇らせようとした場合、魂が天国と地獄、あるいは現世を彷徨ってるかで難易度が変わるわ」

「まず天国なら……」

「不可能ね。地獄に送られた魂の場合でも管轄とかの問題で限りなく不可能に近い場合が多いわ。現世を彷徨う魂なら、探す手間あるけれど確保自体は難しくないかもしれないわね」

もつとも、磨耗したり混ざったりして本人と呼べるモノかは分からないけれど。という補足説明にゾツとする。分かっちゃいたけどこの世は結構シビアな世界だ。

「で、運良く魂が確保できたとして、次にその魂が復活を希望するか否かでまた変わってくるわ。まあ、確保できるような魂が死んだままを良しとすることはほぼ無いでしょうから、ここはスルーね」

「ちなみに当人が拒否をすれば？」

「復活の成功率が9割程落ちるわ」

「1割は成功するんだ……と思つてしまった。今まで分の悪い賭けをし続けてきた弊害かもしれない。」

「そしてここまで何の妨害もなく準備が整つて、いざ復活の願いを叶えるところまで来たとしましょう。その時直面する問題が願いの代価よ」

「……ああ、ここが1番無理ゲーだったりします？」

「ええ。復活させたい人間の価値をそこそこ上回る人間を代価に捧げて何とか可能というレベルね。上回つてなければいけないのは、そこに至るまでの対価の分よ」

「他所から人間を攫つてきた場合は？」

「悪魔も表社会や天界勢力から不必要に目をつけられたくないから、攫つてきた他所の人間を生贄にとというのは今は御法度。絶対に認めないでしょうね」

「当人が命を削るか、そもそも死ぬ位でようやくと成り立つと……うわあ、クソゲー」
「死者復活の願いをクソゲー扱いするんじゃないの」

でもじゃあ、素材を用意した場合はどうなるんだろう？ とある錬金術漫画に出てきた水35L、炭素20kg、アンモニア4L、石灰1.5kg、リン800g、塩分250g、硝石100g、硫黄80g、フッ素7.5g、鉄5g、ケイ素3g、少量の1

5の元素……っていう有名な台詞がある。アレで実際にちゃんとした人間ができるかはともかく、ちゃんと配合とか揃えたらいけなくは無さそうだな。

「まず前提として、悪魔側に錬金術と人体について知識、もしくは下僕か協力者に錬金術士が必要になるわね」

「お、なんかいけそうな予感」

「その上で、確保してる魂から読み取れる情報だけで、寸分の違いもない肉体を錬成して、降霊術を行えば成功するでしょうね。もし例え0.001%でも狂いがあれば魂は消滅するわ」

「コツチもクソゲーだったか……」

「できる悪魔がいらないわけではないから、さつきよりは見込みはあるわ。その悪魔は地獄でも上澄みの中の上澄みにいるだけで」

「つまり基本的に契約を取りに行く下級中級悪魔では無理と」

「じゃあ神器ならどうだろう？　と問いかけてやめた。多分そういう神器は無いか、神滅具にあるって話で終わりそうだな。

「じゃあ死体の現物があれば？」

「死んだ直後なら難しくないでしょうね。現に貴方がそういう復活の仕方をしたわ」

「あ、僕の転生の仕方も言われてみれば蘇生って言って差し支えなかったんだって」

そう考えると、なんか僕ちゃん悪の救世主って感じしない？　しないか、そうか……。こういうふざけた思考してる時につっこんでくれる相方がいなくて寂しい。

「とうかよく淀みなく説明できますね。もしかしてよくある質問で纏められてたりします？」

「似たようなものよ、実際定番の願いに關しては質問されたら答えられるように下僕に對して説明しておかないといけないもの。………：貴方への教育が滞ってるのは素直に申し訳ないと思うのだけど」

まあ僕はその分ラーメン屋で働いてるワケですからね……：いずれちゃんとやるってことぞ。

「じゃあ話を戻しまして。今回のヤツのケースは、死体の現物があつたケースにあたるんでしょうか？　なんか代価として自分の身体売っぱらってるようにも見えるし」

「おそらくは否、難しくないと申つただけで簡単というわけではないもの。代価も自分の命を擲つてどうかというレベル。……：こう言つてはなんだけれど、ごく一般的な高校生彼の魂が残つてる時点でそれは無いと思うの」

「あまりいい気分はしませんが納得です」

……：
となると……：どういふことなんでしょう？

死者蘇生というわけじゃないのならば

「まだ息は残っていた……?」

「ということでしようね。死の淵にいる人間を、ギリギリ現世に押し留めるだけなら下級悪魔でもできるでしょう。それが生きてる人間と命を共有させるといふ外法を用いたのなら余計に」

「成程成程……っていうか、命を共有させる外法???」

「なんぞそれ? となったが、詳細はともかくそれがヤツが霊体で彷徨ってる原因となったものだろう。命を共有する、かあ。」

「簡単に言うと、1つの身体に2つの魂が乗っかってる状態にしたということよ。厳密には違うけれどね。ともあれここで、貴方のラッキーパーンチ(仮)の話に繋がってくるわ」

「……ああ! ヤツが食ってた食事は、ヤツと日下部イネさんが共有してる命、身体を維持する為に使われてるってことですか!」

「ええ、そこまでは間違いないわ。お手柄よイツセー」

「しっかし……また複雑なことになってやがんな……。回復させるにしてももうちよつとなんかやりようあるだろう。」

「……多分この契約に乗り出した悪魔は性根のところはともかく、とても彼に対して親身になってると思われるわ。恐らく彼が差し出せる対価では、彼の祖母を復活させるこ

とは出来なかった。もしくは悪魔本人が彼の祖母を回復させることが出来なかった。だから半ば犯罪の様なことに手を出して、何か打てる手を探している、のだと思うわ。バレたら減給……程度ではすまない所業よ」

「危ない橋を渡つてでも、なんとかヤツの願いを叶えてやりたかった、ということですか」

「そして彼らは運のいいことに、どうにかできる私達を巻き込めたわ」

あり？ どうにかできるんですかこの状況、というか助ける流れですか？ 僕の心情的にはすぐおくありがたい話ですけど。

「ええ、せつかくですもの。他所の悪魔に恩を売るのも悪くないわ。………とはいえない」

そこで区切つて、部長は表情に影を落とす。何か問題があるのだろうか？

「そうね、貴方も心の準備ぐらいはしておかないといけないわ。時として、割り切ることも大事だということね」

「心の準備つて、そんな大袈裟な……」

嫌な予感がして、つついとおどけて返す。しかし部長はいつものように呆れて窘めるのではなく、痛ましいものを見るような視線を向けてきた。………なんか、本当に、まずいかもしれん。

「……まずは日下部くんに話をしましょう。その後で彼に訊ねないといけないわ」

「自分の存在を犠牲に、日下部イネさんを生き長らえさせることはできるのか、と」

「……その後の記憶は、ちよつと無い。ただ、ガツンと頭を強く殴られた様な衝撃だけが、ジンジンと響いていた。」

その11

【ループ3↓4】

「イツセー、目を覚まして、イツセー！」

「っ!？」

急な大声で飛び跳ねるように起床。声からして部長だと思われるが、とまだ焦点の合っていない目を声の方向に向ける。

「何かありましたか、またループ？」

「ええ、でも今回は毛色が違うわ。イツセー、直前のことを思い出せる？」

「直前のことと言いますと……」

真相解明、ヤツの名前は日下部景太。願いの大凡の形、死んだor死の淵にいる祖母、日下部イネさんの蘇生。現状、自分の命ないし身体を祖母と共有してヤツだけ幽霊っぽい何かになっている。ループ条件、ヤツかイネさんが死んだ時に巻き戻る。

以上の事柄を共有した上で、部長の覚悟を問う言葉に頭をガツンと殴られたような衝撃と共に意識が……

「ええ。私がイツセーに酷なことを訊ねた辺りで、頭痛と共に意識が薄れていった。最後の記憶もそんな感じよ」

「おかしいっスね……今までは意識が渦みたいなものに呑み込まれる様な感覚で。それに」

ここで僕は自分の服装を見る。部長は駒王学園の制服。僕は寝間着で使ってる赤いジャージ。記憶の最後に着ていたソレで間違いないのだが、コレがおかしい。だって僕らの知る「月曜日」ならば、部長が僕を抱き枕にして寝てたはずなのだ。それも一糸まとわぬモザイク必須な有様で。

「……………無理矢理ループさせられた?」

「ええ。恐らくは釘を刺すためだと思うわ。直前の会話から推測するに」

『『日下部景太を殺すな』、ですか』

「ということでしょう。最ツ悪ね……一気に事の難易度が上がった気がするわ」

頭を抱える部長に、そろそろもなるわなと思いつつ。僕は申し訳ないけれど、内心で心底ホツとしていた。だってそりやそうだろう。自分が死ぬ覚悟を決めるのと他人を死なせる覚悟を決めさせるのでは話が違う。余程の下衆外道でも無い限り躊躇ってしまふし、なんかもう仲良くなってきたあの明るい幽霊を死なすのはこっちの心が死にかねん。ダブスタ乙ってヤツだ。いや違うか。

「でも最悪って程じゃないでしょう。そりや要求値がバカ程上がったってことにはなるし、部長への負担が増えたってことにはなりませんけど」

「……問題はそこじゃないわ、悪魔のルールの問題よ」

「と言いますと」

「悪魔とは人間の願いを叶え、その後には魂を貰う存在。現代では魂のやり取りの代わりに物品等で肩代わりするのが主流になっただけで、本来はそういう生物よ。それは勿論把握しているわよね？」

それはもちろん。一番最初の座学で教わったことだし。悪魔は人間の欲を満たすが、必ずその欲に見合った代価は戴くし、嫌でも徴収せねばならない。そういう生物、そういうルールだ。

「それを踏まえた上で、先に話した通り死者復活の願いは恐ろしく難易度が高く、手間も掛かるのも覚えているわよね」

「はい。その分代価も凄まじくて、ヒト1人生贄に捧げて何とか……」

何とか……あれ、ちよつと待て。願いが成立した瞬間、ヤツは死ぬ？ 代価は他

所から持って来れないし。

「ええ。仮にイネさんを何とか治療して、彼の身体を用意しても、契約が成立した瞬間に代償として命を持っていかれるでしょうね。そしてそうなる、このことに納得できない

い悪魔がループを起こす」

「待ってくださいよ、どうしようもなく詰んでるじゃないですか!」

一体コイツはどんな無理難題だ? まだかくや姫の無茶振りの方が可能性がある気がしてくる。事の深刻さがようやく理解できてしまって、頭がクラクラしてきた。

「取れる道は2つ、1つは契約の不履行よ」

「願いを叶えるという前提を覆すことですか……日下部の問題を第三者が解決して、願いそのものを無かったことにする」

「ええ。しかもそのことを誰にも話してはいけないわ。本来他の悪魔の契約に外から手を出すのは御法度もいいところ。よしんば許されても認知されたら通常の契約として処理しないとイケなくなるわ。……私のツテを使えばもしかしたら、と思ったのだけけど、どうしてもお兄様にはバレてしまうでしょうね」

「……流石に、魔王様に目を瞑って貰うことはできませんよね」

いくらあの方が妹に激甘だとしても、悪魔の存在意義を揺るがすような不祥事を見逃すワケにはいかないだろう。よしんば見逃したとしてもそのせいで責任取って辞職とかなりかねんし部長としても絶対サーゼクス様に頼む選択肢は取らないだろう。そしてそうなれば絶対に日下部は助からない、ループをされてしまうってことだ。

「もう1つは、件の悪魔にループを止めさせること。恐らく、殺そうとした時点でループ

されるだろうから、諦めるまで待ち続けるしかないわ」

「……………それ、は」

それは、何一つ救われない結末、という事ではないか。ヤツを犠牲にしてイネさんを救うよりも、よっぽど救いのない終わりじゃあないか。ここまでやってきて、それはあんまりな最期じゃないか。流石にそれは、

「貴方がそれを呑み込めないことは、短い付き合いの中でも分かるわ。そうじゃなかったら、今頃私はライザーと結婚していたでしょうしね」

「……………ええ、そんな惨いことは」

「だから、貴方がこれからも僅かな可能性に賭けて彼を救おうとすると言うのなら、私は止めはしない。なんならループの条件に抵触しない範囲で協力だって惜しまないわ」

「部長……………」

「けれど、けれども。忘れないで頂戴、兵藤一誠。貴方が諦めないせいで自分を壊すようなことになれば、私は貴方を無理矢理にでも止めるわ。日下部くん達のこととは気の毒だとは思いますが、それはイツセーや眷属達より優先することじゃないもの。もうあんな思いはたくさんなのよ」

……………相当に譲歩をされてる、と感じた。多分、ここ最近の僕が精神的に弱ってることも分かかって、本当なら何がなんでもここで止めてしまいたいと思ってる筈だ。

じゃなければ、僕の目を覗き込む青い双眸が、こんなに潤んで揺れてる筈がないんだ。

それでも、協力を惜しまないと言ってくれた。どれだけありがたいことか。

「……………ありがとうございます、部長」

僕には、蚊の鳴くような声で感謝の言葉を絞り出すのが精一杯だった。



どうすればいい、どうすればいい？ もう学校に行く時間なのにベッドの上で布団にくるまって、延々と思考し続けている。ループに気がついたっぽい馬鹿共のメッセージもスルーして、ただただ心が鬱屈するような作業に没頭してる。

割ともう現状が詰み切ってるのは部長との話で分かっている。それでも何かできることは無いかと、頭の中がぐるぐるしてる。色々考えても、日下部だけが助からない方法しか思いつかない。本当にダメなんだ、どうすることもできない。

……なんだか凄くムカついてきた。このループの下手人であろう悪魔は、ループはするクセにそれ以外のことは全部丸投げだ。本当にふざけてる。なんで僕や友人や部長が巻き込まれにやならんのだ。ある意味でこの悪魔の我儘に日下部も巻き込まれてるワケだしアイツも被害者だ。

日頃の行いが良いとはお世辞にも言えん。馬鹿共はどエロ小僧で成人雑誌を学校に持ち込むような馬鹿だし、僕も部長も大手を振って日の下を歩けない神に背を向けた生物だ。それにしたってこんな、心を殺すようなことに巻き込まれて良いはずがない。ああクソ、イライラする!!

「……落ち着け兵藤一誠。今足りないものは何だ?」

怒りで少しはマシになりはした。が、代わりに逸る気持ちを宥める為に、自分に言い聞かせるように独り言を口にする。

「知識が足りない」

「伝が足りない」

「力が足りない」

「全貌が見えない」

「意図が分からない」

幾つか口に出す。確かに足りないもので、重要な要素だ。……だが、今一つしつくり来ない。もつとその前に、必要な物があるはずだ。

前提として、それらを借り受けることはできる。部長も力にはなってくれと言ってくれたし、保留にしている魔王様からのお礼の件もあるしね。でもそうできる前提に僕は居ない。何故なら、悪魔のルールを破る行動だからだ。人間から徴収されるべき対価

を無かったことにしようとしているのだから。ということとは、何より足りてない物は……

『大義名分』だ」

そうだ、大手を振って行動する為の大義名分が僕には無いのだ。そしてそれを得るには何が必要か。つまり悪魔の仕事だ。

悪魔の仕事は、人間の欲を満たすこと。誰かが願えば、悪魔はその願いを叶える為に全力を尽くせる。持てる繋がりを行使できる。誰かの願いとぶつかることがあるかもしれないが、それはそれ。僕自身の領分で悪魔のルールを破らない範疇ならば、あの魔王様のお礼も躊躇なく使えるってモンだ。

今、日下部景太を助けたいと願う人間がいるとするならば、ソイツは、ソイツらは……

「……………もう、友達ではいられないかもしれない、か」

だが、これなら覚悟は決められる。決められた。誰かが損なう様子をまざまざと見せられるよりも、自分が削れる方が幾らかマシだ。自分の大事なところが削られずに済むならば、僕は。

「……………よっしゃ。腹ア決まった」

僕は放置していたスマホを手に、震える手でメッセージを打った。

『大事な話がある、学校サボれるか?』

さあ、前提をひっくり返しに行こう。



「……てなワケで、僕は悪魔なんだよ」

バサツと翼を拡げ、なるべく目の前の2人を刺激しないように、柔らかな笑顔を心掛けて、軽い調子でそう告げた。

場所は例の公園、何かといつも大事な話はここでしてるからか、無意識にここに来るようにメツセージを飛ばしていた。

「……………」

眼前の2人……松田と元浜は、空いた口が塞がらないようで、呆然と悪魔ほくを、その証である黒い翼を見ていた。

「……手の込んだイタズラ、じゃないよな。流石に」

「そりゃあね」

「……ホンモノなのか、これ」

「あんま触らんでくれ、くすぐりたいんだそれ」

ちよつとした硬直が解けた後、おっかなびつくりといった様子で、僕に真偽のほどを

確認する。……………やはりと言うべきか、少し怯えのようなモノが見て取れる。覚悟はしてきたが、ちよつとツライものがある。

「……………いつからだ？」

「えっ？」

なすがままにされてると、松田から急にそんなことを訊ねられた。想定してない質問だったから、上擦った声が口から飛び出た。

「当てるやろう、5月ぐらいだな？」

「いやだから何が……………」

今度は元浜から、よく分からないけど何かを推測された。いやだから何さ？

「いつから悪魔になったんだ、って話だ」

「んで、多分それは5月ぐらいからだろ？　ってことだ」

「いやまあ、確かにそのぐらいだけど」

「やつぱりな……………」

やつと意図が見えて、そして納得した。2人が結構目敏いのはつい先日のことから想像ができた。付き合いもそれなりだ、僕の変化は見て取るように分かっていたんだろ。う。

「なんかおかしいな、とは思ってたんだ。趣味に合わないことばつかしてやがるなって

よ。前のイツセーなら死んでもキラキラ人種ばつかりのオカルト研究部なんか入らなかつただろ、あの手この手尽くして」

「お前だつて人間だ。……いや人間じゃなかつたけど、その時はそう思っていたから、調子の悪い時期だつてあるのかもしれない、と思つていた。だが、それも長く続けば怪しみもする」

「だから色々腑に落ちたんだよ、この間の腕のことも合わせて」

「相当気を病んでたんだな、イツセー」

「病んでるなんて、そんな………いや否定はできねえな」

まあたしかに。相当ハートは軋んでたと思う。部長のお陰で緩和はしたけれど、ずつとしこりを抱えて生活してたことは否めない。間違はなく、心が病んでいただろう。

「まあタネが分かればなんてこたあない。やることも変わらねえつてこつた」

「腫れ物扱うみたいで張り合いも無かつたし、何より気色悪かつたからな」

「……まあ、うん。対応が変わらないのは願つたり叶つたりだけど、もうちよつとこう、なんかないの？」

気のいいヤツらだ、僕が悪魔であることを打ち明けてもそう変なことをされるとは思つてなかつたけれど。でもあつげらかんとした様子には、逆に面食らつてしまうというもので。

「いやだつてお前元から相当悪魔だつたら」

「言い方ア!! もう、ちよつと、こう……手心を、さ……」

……まるで、そんなことは関係ないと言わんばかりにそんなことを言われて、堪えようと思つた涙が、溢れて止まらない。気安く返そうと思つても、どうしても言葉が詰まつて、うまく話せない。

「お前ら、お前らホント、さア……! なんで、なんで……! ちくしょう、なんで僕は泣かされてんだよ、ちくしょう……!」

涙で潤んで、視界が見えない。けれど多分、2人は『仕方ないヤツだな』つて笑つて、それで黙っていた。それが何よりも……僕にとっては、何よりも嬉しかった。



「……で? 本題そこじゃねえだろ」

泣き止んで、何とか僕のメンタルが持ち直したところで、松田が切り出してきた。そうだ、本題はこんなお涙頂戴案件なんかでは無いんだ。

「かくかくしかじかで、まあとりあえず僕が大手を振つてアイツを助けようと思つたら、大義名分が必要なんだよ。横紙破りにも作法があるつて話だ」

「悪魔との契約か……厄介な話だな」

実際に非日常に身を置いてしまったからか、元浜の呟きは非常に重い実感を伴って響く。気持ちはマジですげえ分かる。今からでも僕の人生修正できない？ ダメ？
ダメかあ……。

「でもよ、それって俺らに何か関係あるのか？ もう人間の範疇じゃどうしようもないところまで来てるだろこの件」

「うん、だからお前らに事件解決の為に何かしてもらうってことはない。危険だしね。お願いしたいのは、僕の背中を押してもらおうこと、だ」

「それと大義名分の何が関係が……」

まあ、分からないだろう。悪魔な僕ならともかく、人間の2人じゃね。

「本当なら、僕の根底を揺るがすような秘密、悪魔である事実を押し付けて、それを対価として成立させるつもりだった。けれど多分、それはさつきを以て無価値なモノになった。じゃあ別のものが必要だ」

「……………いやいや、おい。まさか」

「願ってくれ、日下部景太を助けてくれと願ってくれ。その願いの対価に、僕への変わり

ぬ友情を」

「僕の生命にも勝るその対価を以て、僕はこの事件を全て終わらせる」

その12

というわけで、僕は正義名分を手に入れた。正式に、悪魔の取引として2人の願いを叶えることとなった。どんな手でも使えるってワケで。

「というわけでライザー氏、絶対アンタんとコの領地に九頭龍亭の店舗絶対作るから、フェニックスの涙を融通してくれないツスカね？」

『いきなり無茶苦茶言いやがるなこの下級悪魔』

僕の知る限り、最強のヒールアイテムと言えばフェニックスの涙だ。その販売元はご存知ライザー氏の実家、フェニックス家である。

金はないけど取引の材料はあるし、頼まにや損損ってことで早速通話したらこのザマである。そりやそうか。

『第一リアスの所の僧侶が回復系の神器を持つてただろう。確か『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』だったか？ 大概の怪我はそれで治るのにフェニックスの涙が欲しい理由はなんだ？』

「大概の怪我じゃないからですよ。ご老人が刃物でバツサリ斬られて意識不明の重体。アーシアの神器は傷は治せても生命力まで補填する効果は無いし、それならフェニックスの涙の方が確実かなって」

『だからって俺に頼むのは厚顔無恥にも程がないか?』

「まあ通れば儲けももってだけで流石に無理かなとは思ってますが」

アハハー! と笑ってやれば、呆れたような溜息が電話口から漏れてきた。そんなマリアナ海溝よりも深い息を漏らすことないでしょうに、失礼しちゃうぜ。

『お前、いつもそうなのか……?』

「いつもって何が」

『そりゃあ、その……いや、何でもねえ。聞くと頭が痛くなりそうだ。ともかく、流石にそれだけの交渉材料でくれてやれる程安いもんじゃないぞ』

「デスヨネー。まあ本当に言ってみただけです。お忙しいところ、本当にありがとうございます。それでは」

『待て待て待て。流石に詳しいことが気になり過ぎるからちやんと説明はしろ。電話に出てやったんだからそのぐらいいはしてもいいだろ』

「ンまあ、いいですけど」

大っぴらには話せない内容ではあるが、もう隠さなくても良くなったのでループのことはぼかしつつ事件のあらましを伝える。

『……その、なんだ。行動力と決断力のある馬鹿程怖いものはないな』

「死ぬ程疲れたような声出さないでくださいよ、僕が何したって言うんですか」

『いやお前俺を殺しただろうが。どうせ似たような覚悟の決め方してこんな無法なことやったんだろう？ 正気じゃない』

「悪魔に転生した時から正気なんか無いも同然なんでね！」

『威張るなボケカス』

これ以上なく罵倒されてるう……いやまあ残当か？ こうまで言われることじゃねえとも思わないでもないケド。

『……あんまり聞きたくないが、俺から貰えない場合はどう考えていた？』

「部長にお金借りて買うつもりでした。多分あのヒト僕を縛るためなら喜んで貸してくれると思うんで」

『倫理観何処に置いてきたんだよ。ヒト様のことをとやかく言いたくはないが、爛れ過ぎた関係はそれはそれで問題だぞ』

「えへへ」

『なあ、笑う要素あったか??』

無いけど。でもこういう反応しといた方が、考えるの面倒臭くなつて貰える確率がらないかな、とは思ったが。あらヤダイツセー君たら腹黒く。元から？ そうですか……。

『というかそもそも、その内容ならフェニックスの涙だけあったところで解決しないだ

ろう。そこは何かアテがあるのか？」

「ええ。錬金術か何かを勉強するか、最悪凄腕の錬金術師を探してお願いするか、とかその程度ですが」

あとはまあ、魔王様からのお礼も使えるし。ライザー氏は当事者だからそのことについてにはちよつと言えないけど。

ともあれこうなると一気に視界が拓けて、無理ゲー感も薄くなつたというものだ。無理を押し通すにしてもやりようはあるからね。

『……………条件がある』

「九頭龍亭の件ですか？」

『違う。そんなもの、今のお前がパイプを持つてる相手が限られてる以上、冥界で何かするならどうせ俺の方に話が来る。どうせ待つてるだけでも成立するのにそれを対価として受け取るには割に合わん。お前もそう考えていたからダメ元として聞いてみただけ、だろう？』

「ええ。現状僕には何の価値もありませんならね」

『だが、俺はお前の将来性に関して、買うに値すると思ってる』

「将来性エ？」

そんなもの、クソ凡人の僕の何処にあるってんだい。

『イツセー。お前はどのような悪魔がこの冥界で出世すると思う?』

「ん? そりゃあ、べらぼうに強いとか、政治力に長けてるとかじゃないんですか?」

『そんなもの手段の1つでしかない。過程の話ではなく、本質的な要素だ』

「は、はあ……?」

話が見えないので、先を促すように相槌を打つ。すると顔も見えていないのに悪い顔をしてるような、そんな喜悦に満ちた声音が耳に入り込んできた。

『他者の心、欲を掌握できるヤツが、この世界では成り上がるんだよ。強さも、政治力もその手段の1つでしかない。『コイツは、俺の欲を満たしてくれる』と感じさせるヤツが、冥界の上の方で犇めきあってるんだ』

「……………」

『その相手が悪魔だろうと人間だろうと、他の何であろうと関係ない。何となく話が見えてきたか?』

「いや……僕は、そんな」

『惚けるなよ。それともソレもそういう才能か?』ともあれ、お前には『コイツならやってくれる』と感じさせる何かがある。でなければ、あの紅髪の滅殺姫がお前に特別入れ込むことは無かっただろうし、あの魔王がお前に便宜を図ることも無かった。それにレイヴェルも……おっと、今のは聞かなかったことにしてくれ』

「いやワザとだろソレエ!? さらつと爆弾落としてるんじゃないよ種まきクソ焼き鳥
!!」

『ハツハツハ! ともかく、なんだかんだあの時のお前の覚悟を見たヤツらは、大なり小なりお前に目を焼かれてるんだ。良いことじゃあないか、お前は悪魔として必ず大成する。俺にはその確信がある』

なんか背筋が冷えてくる。おかしい、僕はダメ元でライザー氏に通話しただけなのに、恐ろしい事実を聞かされてる気分になつてくる。否定しようにも、陳列された事実がそれを許してくれない。

『取引だ、兵藤一誠。俺はお前の将来性をもって、フェニックスの涙をくれてやる。その代わりに……そうだな、100年以内に必ず上級悪魔になれ。必ず、コレに釣り合う甘い汁を俺に吸わせるんだ。この約定を違えることは絶対に許さないからな』

「う、うえええ………」

やっぱりコイツも立派な悪魔だ、そう強く感じた。



……………目的のブツは直ぐに届いた。メッセージアプリで送られてきた画像が、フェ

したら、まだマジかもしれない。こちとらクソ童貞よ？ 憤死しちゃう」

『……………おう、そうだな』

言いたいことがあるなら聞くぞコラー。さつきも聞こえちやいけなかった爆弾発言聞いたような気がするしなー。

「それに僕はあのヒト以外とどうこうなつたら自分を許せないし、当のあのヒトも許さないでしょ。なのでこの話は終了。で、さつきも言った通り僕の出した案通りにできた感じ?。」

『ああ、ある程度の雛形だけだがな。完全に完成させるには足りないものが多過ぎる。お前自身の力もそうだが、それぞれのモチーフ……大罪の器とでもしておこうか。それに詰める何かもだ。お陰で貴様から受け取った『骨』も、半分程度しか使っていない』

「マジで? エコでいいじゃん」

そう言つて笑うと、遅れてドライグも笑い出す。な、なんだよう。ちよつと不気味だぞお前。

『お前の何処が環境にやさしいものか。まさかとは思つたが、貴様は俺や貴様自身が思う以上に、強欲であつたようだぞ?』

「強欲つて……………それつてまさか!?!」

言い方に思うところはあれど、でもそれどころじゃない。強欲の部分を強調して言つ

たのならば、それつまり！

『ああ、貴様の強欲の器は既に満たされた様だ。喜べ相棒、間違いなくその手にはお前の好きな可能性とやらが握られてるぞ』

これは喜ばずにはいられない。さっきの話を聞いたあとだと魔王様のお礼券を使うの躊躇つてたところなんだわ！ 使う時は使うけど。

『とはいえ、先に練習はしておくことだな。ぶっつけ本番が上手くいく試しは殆どない。気の遠くなるような修練は、得意だろう？』

「もっちゃんー！」

いやはや、どうにも僕は神様には見捨てられてても悪魔やドラゴンには見捨てられてなかつたらしい。まあ、それがいいことか悪いことかは置いてね？



『まずは、実物の仕上がりを見た方がいいな。名前は どうする？』

「え、だから『ナインヘッズ・パラレ——』」

『ダサイ。いやそちらでは無い』

ダ、ダサイって言った!! 結構気にしてるんだぞコッチは!!

『この改造は禁手バランス・ブレイカーではない。その情報を流用はしているが、本質は全くの別物。あちらが世の理を捻じ曲げて起こる現象なのに対して、こちらはお前の性能に合わせただけの……まあ、神器の機能の延長線にあるものだ。禁手、としておくには名前負けが過ぎる』

「大事なのかそれ」

『名前には力が籠るものだ。その手の知識は頭にあるのだろうか?』

むむむ、それは確かに。名は体を表すともよく言われるよね。

『戦術的にはハツタリにも使えそうだろうな。禁手とも違う何かを使われたと感じたら、良からぬ想像もされよう。俺の趣味には合わないが、相棒はそういうのが好みだろう』

「分かってんじゃん。……いや、悪いね。姑息なの嫌いだろ、多分」

『もう諦めた……というのは違うか。お前が自分の尊厳を投げ捨て、その様な手段に出るのならば苦言を呈しただろう。しかし、お前はお前のプライドを守るためにそういう手段に打って出るのだろうか? ならば俺が口を出していいことではない。竜の傲慢さにケチを付けるのは、逆鱗を逆撫でするのと同義だ。肝に銘じておけ』

「……………うん」

コイツが、僕を認めたことは何となく分かってる。じゃなきゃ僕を延命させようとは

思わなかっただろう。……二天龍とかいうドラゴンの頂点みたいなヤツから、お前もドラゴンだと認めて貰えるのは、少しクるものがある。嬉しいとも違うけど、良い気分なのは確かだ。

「じゃあ今、ソレっぽく名前を考えた。『最善手』インヴェンションというのはどうかな？」

『Invention……発明品？ いや違うな、捏造か』

「そ。その場しのぎのでっち上げ、今できるぼつと出の最善手。『赤龍帝の籠手』を僕に合わせた故の急造品って感じ」

『お前にしては悪くないセンスだ』

「でしょ？」

んでまあ、その『最善手を打つ』ことを『最適化』インベントとでもしておきやいだろ。

『ではお披露目といこう。籠手を構えて唱えるがいい』

「おっけー。……すー、はー」

息を整え、久しぶりに左腕に『決殺の手』を装備する。普通に唱えてもいけるんだらうけど、折角だから神器を発現させた時と状況を揃えてみよう。

……今、僕が想像できる最強の物。もう流石に、あの腐れ墮天使のことを最強だとは思えないので別の物。……最強、とはちつと違うけれども。ライザー氏と相打ちに持ち込めた自分は、想像がしやすい。コレでいこう。

……『何があろうと、絶対に』、『僕と一緒に、死んでくれよ』。よし！

『イベント最適化』

『Promotion: Powered Frame!!』

神器が叫んだと思つたら、腐るように、溶融するように爛れ落ち、消えた。けれど感覚的に分かる……今、自分の中に十二カがある。でも、なんというか、説明し難いんだけど……元あつた物が熱を持つてるような……？

『意外と感覚が鋭いな。確かにちよつとした外法を使った故、その弊害だろう』
「……………待つて、嫌な予感がする。というか警鐘も凄くガンガン鳴つてる」

さつき神器はなんて叫んだ？ プロモーション、ワードフレーム……………プロモーション、プロモーション『昇格』？

『察しがいいじゃあないか相棒。体内にあるお前を悪魔足らしめるピース。悪魔の駒をそれぞれ改造し、それぞれの大罪の器兼装甲板となるようにした。お前はこれで、これから普通のプロモーションは使えなくなるだろうな』

「サラツと重大発表するなよ!？」

え、え？ 普通の僕が普通の悪魔から外れた存在になつてる？ 何それアイデンティクライシス？ というか部長にも怒られそうな案件だしたら……???

『単純にお前の性能が足りなかつたのだ。であれば、あるところから引つ張り出す他あ

るまい?』

「……もしやお前、骨全部使い切らなかつたのは悪魔の駒を素材にしたからだな?」

『そういうことだ』

ムカつく! コイツ絶対ドヤ顔してるだろ!! ……………いや、僕も無茶な注文したから仕方ないっちゃ仕方ないんだが。でももうちよつとこう、なんかあるだろ、なあ!?

『だが、その分性能は申し分ないだろう。普通にプロモーションを使うよりは強いだろうことは保証する』

「そこア疑っちゃいねえよ。なんせ最強のドラゴンと悪魔の結び付きなんて弱くなる要素がないんだから。なんなら僕本体が足枷まである。なはは」

ともあれ、僕の中の変化の理由が分かったし、正体も分かったのでそれを取り出すように念じてみる。

すると目の前に、まるで絵の具が白地のキャンパスに滲み出るように、ソレは現れた。赤く、黒い、まるで血が酸化した様なおぞましい色をした、薄い板だった。

「……………これ、僕の中の悪魔の駒そのもの?」

『ソレを出すことも出来なくはないが、全ての装甲板を破壊された時お前は死ぬぞ。今取り出したのは、改造した駒から装甲板の機能だけを取り出した分体のようなものだ』

「へえ…………」

とりあえず、出現させた板を操作してみる。飛ばす、落とす、浮かせて固定、その上に乗る、乗った上で移動、落下。流石に無茶があった。

「思いの外自由が効くね……これは凄い、色々悪いことができそう」

『喜んでるところ悪いが、まだまだ機能はあるぞ。それに、相棒に今必要な機能はそれではあるまい』

「まあね。でも時間は腐るほどあるから、悪い意味で」

では籠手の本来の機能、倍加を試す。いつものように『Boost!!』の掛け声と共に僕の全身に力が漲る。ついでに装甲板が、赤熱したように赤くなつた。明らかに倍加してますよ、という見た目は騙すのには向かないけど分かりやすくもいい。ついでに部分倍加や譲渡も試してみるが、問題ない。以前と同じような感覚で倍加を使える。

『今のお前では身体が持たないが、複数の装甲板を出せばその回数の倍加なら一瞬で行うことができる。2枚なら2回分、つまり4倍。3枚なら3回分、つまり8倍』

「……装甲板は9枚で間違いない？ だったら最大で512倍の、」

使えると思つたらすぐさまやってみたくなるといふのがヒトの性。念じて直ぐに装甲板を4枚表出させ、その辺の石に向かって倍加と譲渡を敢行。

「よっし譲渡」『あっおい馬鹿！』

『Ignition Boost!!』

『Transfer!!』

前とは違って、自分の中に倍加を溜めずともそのまま倍加を譲渡できてしまい、そしてそれはそのまま路傍の石にヒットして……………『ツパン!』というちよつとしてはいけない音と同時に塵もなく消えた。

「すんげえ、コレ上手く使えたら相手破裂させられるよ」

『大馬鹿野郎か貴様は! 一歩間違えたらお前が汚い肉袋になってたのだぞ!』

「ごめん、つい。やるなよと言われたようなもんだからついやっちゃった☆」

まあいけるという感覚があったから試したワケだが。倍加の機能というか何かが外側にあるから、多分自分を經由しなくてもいけそうな気がしたんだよね。あと一応今の僕が4回の倍加までなら耐えられるからそこも考慮はしてるよ、うん。

「で、あとは装甲板を装甲そのものにする機能、と」

出した4枚の装甲板を、右腕、左腕、右脚、左脚にそれぞれ纏わせるイメージで、貼り付ける。すると装甲板は溶けるようにそれぞれに纏わりつき…………『決殺の手』と似た意匠の籠手や脛あてに変化した。

「これは9枚使えばフルプレートメイルになるの?」

『ああ、そのはずだ。ちなみに重さは感じるか? 装備者には重さが掛からない様になっっているのだが』

「……ほんとだ、全然重さを感じない。動きやすいね、これ！」

いつもと同じ感覚で、パンチにキックができる。走ってもガシャガシャするだけで負担にならない。すごい、使いやすい！」

「それと、装甲板の重ねがけ……」

今度は右腕以外の3か所から装甲を外し、右腕だけに4枚の装甲板を集中させる。すると、流石に4倍の厚みが出るわけじゃないが、よりゴツく刺々しい意匠の装甲に進化した。

『練度とイメージ力が上がれば、武器腕の様なことも可能だろう。今はより頑丈にするだけで精一杯だが』

「コレでも十分だよ。殴るだけで鈍器として通用しそうだし。………さて、」

そして僕は装甲板を1枚を残して消し、残った1枚を手を取った。

「本題だ。既に強欲の能力ができてる。だよね？」

『いや違う。強欲に因んだ力を発現させる準備ができていただけだ。コレをお前がどういう風に形作るかは知らないが』

「そう、良かった。今なら望んだように力を組み替えられるワケだ」

『だが、本当にいいのか？ 貴重な枠を、たかがニンゲン1人を救うために使うのは』

「……まあ、大きな視点で見れば。本当に勿体ないことをしてるとは思うんだけどね」

思うんだけど、そうしないと僕が死ぬのだ。身体じゃなくて心が。

「僕さあ、今まで自分の為に誰かを手伝ったり、助けたりしてきたよね。それは、自分に對して胸を張れる様になった今でも変わらないと思うんだ」

『ふむ』

「……………僕さ、誰かの普通あたりまえが損なわれるのが、相当キツイみたいなの。見てられない。

これがぶつ殺されても文句言えない様なヤツなら全然平気なだけだ。他人の普通あたりまえを奪うようなヤツは特に」

『……………』

日常とは、当たり前とは僕個人で完結するものじゃあない。周りもそんな穏やかな平穩にあつて、初めて『あたりまえ』だ。少なくとも、僕はそう考えている。

「自分の中身を増やすために、というのも嘘じゃあなかったけどさ。僕が周りを手伝ったり助けたりすることでしようとしたのは、そもそもそうしたかったからなんだよ、多分ね。自分のことなのに、ちよつとよく分からないよね」

『それは、お前自身を削つてでもそうしたいことなのか？』

「うん。自分が削れるより、平穩な風景が損なわれる方が嫌だ。非日常あくむの中で、僕は生きていたくない」

……………本当は、無理だつて分かつてる。僕自身が頑張ったところでどうにもならな

いいことはあるし、そもそも僕自身が非日常の権化みたいな生物に生まれ変わってしまった。……アレからずっと、僕は息が詰まるような悪夢の中で生き続けている。

「だから、さ。僕の思う日常の象徴みたいな2人にさ、変わらず接してもらえて、僕は凄く嬉しかった。でも、そんな2人も今、ループなんていう非日常に叩き落とされてる。こんな悪夢は、僕は絶対に許せない、許しちやいけない、生きていけない。だから、僕はやるよ。どんな愚行でも、生きるためなら許されるんだ。カルネアデスの板が許される世の中なんだ、それと較べたら悪夢を多少愉快にするぐらい、幾分マシな理由だろうか？」

『……………ああ、ならば止めはしない。兵藤一誠、我が相棒よ。その欲の赴くままに、力を欲するがいい』

そうして僕は、強く、強く。ある力を念じたのだった。

その13

〔月曜日（ループ9）〕

あれからのこと。ループの件はあっさりライザー氏にバレた。僕が話してしまったせいであのヒトもループに巻き込まれてしまったっていう。

『お前ホント……頭のネジが3本ぐらい飛んでるんじゃないのか？』

と罵倒されたのが遠い昔に思える。

……ループをここまで重ねてしまったのは、僕の『強欲』を使いこなすため。使い方は単純だったのだが、条件や仕様、出来ることと出来ないことを調べるのに非常に時間が掛かってしまった。そのせいで僕の左腕が無くなったり、僕が死んでループするとうことも起きたりで少し大変だった。部長には内緒である、言ったら拉致監禁されかねん。………バレてないよね？　なんか日に日におつかない笑顔が上手くなってる様な気がするけどバレてないよね？

ま、まあそんな修行パートのことなんてどうでもいいんだ。重要なのはヤツの身体を何とかする方法と、その材料が手の中にあるという事実だけ。

「しっかしお前、本当にファンタジーの住人になっちまったんだな……」

「あの左腕も進化してるし……少し羨ましい」

「あんまそういうこと言うもんじゃねえぞー。死なれたら誰が約束守ってくれんだよ」

まあ雑談の話題程度に羨ましがられるのはいつか、となった放課後の屋上。2人にはとりあえず今日で片をつける話をしたので、最終報告という形だ。

「で、ここ最近僕はヤツに会ってないけれど、様子はどうよ?」

「名前を教えても特に記憶が戻りそうな気配はなかったな。しつくりは来てみたいだけだよ」

「それよりはお前がコソコソと何かしてることを不安がってたぞ。死にそうになってないか? だとさ」

「うーんの確」

「アイツも自分の死以外でループしてなんかやってんな? とは思ったんだろう。そりやすまんかったって話だ。」

「これで、何事もなく終わってくれるといいけどなあ。流星に月曜日に飽きてきたぜ」

「3限の数Ⅱ小テスト、もう満点しか取れてない……」

「あー、2人とも満点取っててびっくりされてたねえ」

「逆になんでお前は取れないんだよ、毎回ピツタリ平均点じゃねえか」

「アレだけ執拗にやっててそれなら、逆にすごいまである」

「なんでなんだろうねえ……僕も流石に見飽きたなーと思ってもなーんかケアレスミスしてんの。最早呪いだって、なはは」

「笑い事じゃないと思う」

なんて言って真面目な顔して黙り込んで、誰からともなく吹き出して笑うんだから世話がない。やはり男子高校生、箸が転がるだけで笑えるオトシゴロなのだ。

「……なあ、イツセー。解決した俺達は、どうなるんだ？」

落ち着いたところで、松田が神妙な顔をして僕に訊ねてきた。……おそらくは、全てが解決した後の、2人の記憶の話だ。

「……わかんない。ループの条件は読めたけど、どんな方法でループさせてるかは分からないから。事件の解決自体には必要な情報じゃないから気にしなかつたけど」

「じゃあ、もしかしたら『今の』俺達がイツセーに話すのは、最後かもしれないんだな」
「うん……」

そうとは決まってるじゃないけれど、流石に終わりが見えるとしんみりもしてくる。特に僕達は、ちょっと洒落にならない秘密を共有したばかりだ。今の2人、あともしかしたら今の僕もいなくなってしまうかもしれない。へ々な今生の別れよりもクるものがある。

「ま、だからって足踏みするのも違えて話だ、ダチ公」

「忘れてたら、ちゃんとまた説明しろよ。引き続き病まれても困るからな」

「……ああ、約束する。ちゃんと、皆で『明日』を迎えよう」

3人で、拳をぶつけ合う。儀式、と言うには軽いものだけど、こういうものでいいのだ。

また背中を押して貰った僕は、2人を背に屋上を後にしようとする。でも、やっぱりほんの少し名残惜しくなって1度振り返って、言った。

「2人とも、『明日』の僕をよろしく！」

「おうとも、頑張れよイツセー！」



「よっ、おひさー」

『……来たのか、お前』

2人を通じてそれとなく伝言していたからか、誰もいないはずの社交場に1人、幽霊がいた。名を日下部景太、厄介な悪魔に目をつけた悲しき人間である、と。

時刻は22時。流石にみんなが寝てる、という訳ではないが、そろそろ明日との境界線が見えてくる頃だ、人の気配も無く街灯の光がただただ暗い橋の下を……いや、僕らの足を少しだけ照らしている。

『……なんか、無茶苦茶やってたらしいじゃねえか』

「まあね、ループ重ねまくって悪かったよ。……ああ言わんでいい、如何にも心配してま
す的な顔はずっとされてて食傷気味だ。自暴自棄にもなつてなけりや死ぬつもりもな
い。答えが出たからやる気出して頑張つてただけだ。全ては皆と『明日』を迎える為に、
だ。気にすることはない」

『……………まあ、いいけどよ』

さて、解答編はやった。理屈は分からないけれど、どういう意図でこのループが起
こっていたかは分かった。分からないのは、その発端だ。それを今、僕は明かすべきだ
と感じた。

「日下部、お前記憶は何処まで戻ってる？」

『いや、聞いたかもしれないがまったく戻ってない』

「そうか。日下部、お前記憶は何処まで戻ってる？」

『なにこれ新手の宿屋のNPCか？』

「うーむ、じゃあマジで戻ってないのか。本当に？」

『しつこい、なんでばあちゃんが意識不明の重体になつてるのかもサツパリだ』

「その説明、部長にしてもらったんか？」

『あ、』

戻ってたか。どっちかなあとカマかけたら自爆してやんの、ウケる。……いや、ウケないか。

「あの2人にはお前の名前しか教えてなかったからそのことを知ってるはずがないんだよな、記憶が戻ってる場合を除いて。第一、僕の安否を不安がってるのも少し引つかかった。まるで死ぬ危険性があるって知ってるみたいじゃない？ ……何時、の想像は着くけど追求はしないよ、僕も確証があつたわけじゃない。記憶が戻ってなかったら対応がちよつと変わるだけの話だから」

『……………名前を聞いたときだよ。どっちかって言うど苗字の方。それで、芋づる式に』
「そうか」

何を理由にソレを隠そうとしたかは……………まあ、無粋だから想像するのもやめようか。ヒトのこたあ言えないですものね。

「経緯を聞いてもいいか？ 無理だったら別に大丈夫。ただ、日下部イネさん殺害未遂の犯行に使われただろう刃渡りの長い刀剣類の存在が気になってね。そんな骨董品を現実世界で大真面目に使う連中なんて、どう考えても裏の世界の住人だろうから」

『……………俺も、分らない。ただ、謝ろうと思つてばあちゃん家に行ったら、ばあちゃんが血の海に沈んでた』

そこからは、ヤツの独白。

祖母と喧嘩をしたのだと日下部は言った。

『いや、喧嘩というのも違う。俺が痲癩を起こしただけだ。ばあちゃんは困った顔してただけで……多分、悲しんでただけだ。俺がなんでキレてたかは遠い昔のせいでもう思いつけない、多分クソ程どうでもいいことだったんだろう』

『だから割合直ぐに頭が冷えたんだろうな。日曜日にはあちゃん家に行ったんだ、謝ろうと思って。そしたら、そうなつてた』

『わけがわかんなくて、取り乱して、でもばあちゃんの息はまだあったから、救急車を呼ぼうとしたんだ。そしたら、チラシが目に入った』

「……あなたの願い、叶えますとか書いてたんじゃないか？ 魔方陣みたいな絵が描いてあつて」

『悪魔だから分かるか。ばあちゃんの傍に、そんなのが落ちてたんだよ。……後で聞いたけどよ、ばあちゃんはそれを使おうとしてたみたいなんだ。多分、俺と仲直りするために』

悪魔召喚のチラシは、欲を抱える人の下に投函され、もしくは配られる。………まあ、そういうことだろうな。

『使いたくなる何かがあつたんだろう、俺はケータイをその場に落として端つこが血で濡れたチラシを手を取ったんだ。そしたら、まるで絵に描いたようなシルクハットの紳

士って感じのおっさんが現れたんだ』

『コレはホンモノだつて分かった瞬間、俺は頭を地面に叩きつけてた。……藁にも縋る思いだった。ばあちゃんを助けてくれって何度も』

『おっさんの悪魔は言つた、常套の手段ではばあちゃんを助けることができないって。命を擲つ覚悟を問われた。……やけっぱちって恐ろしいよな、俺は二つ返事で頷いてたよ』

『そこで一瞬、その悪魔の姿がブレたのが印象深かった。そしたらそのチラシのことと、ばあちゃんが使おうとしていたことを教えてくれたんだ。理由は分からないけれど、あの悪魔も俺と同じ答えに辿り着いたんだと思う』

『悪魔は、俺が命を投げ出せばばあちゃんは助けられるって言つた。でもそれでは意味が無いとも。……あの悪魔は、ばあちゃんが自殺するか、良くて心が壊れることを恐れていた。……まあそりやそうだよな、仲直りしようとした孫が死んでましたなんて、それも自分を助けるためにとか、相当精神に負担掛かるのは俺でも想像できる』

『——だから、ヤツの提案に乗つた』

『このループか』

『ああ。もしかしたら俺は死んでしまいかもしれないけど、2人とも死なないで済む可能性があるって。下手したら死ぬよりツライ目にあうかもと言われた。でも俺は乗っ

かった。そしたら………あとはご存知の通りだな』

「……………」

経緯、というか動機は分かった。いつだったか鬱々しかけて下手人を呪おうと思ったが……いや悪魔の方は今でも呪いたい気分ではいっばいだけど、まあ掌返し位はしてもいいか、となった。

『延命工作しかできないと悪魔は言った。自分にできることはそれだけだつてな。まあそれだけでも……0%が0・01%になるだけだったとしても、乗っかる理由には十分過ぎた。……俺は、何としてもばあちゃんに謝つて、仲直りしたいんだ。お前は、馬鹿だなんて笑うか?』

「笑えねえよ馬鹿野郎、ここにるのがほほもう答えみたいなものでしょうが」

『……………だよな、ありがとよ』

しかし、そうなると分からないことが……

『ああ、分かっている。ばあちゃんを殺しかけた下手人に心当たりがあるって、悪魔が言っていたんだよ。お前がなんかやばいことしてると聞いて、もしかしたらソレか……?』
と思つてよ』

「……………マジで?」

『まあ今の反応でソレじゃないってのは分かかって一安心だけだよ。はぐれエクソシス

トって見立てだった』

はぐれエクソシスト……部長とアーシアから聞いた覚えがあるぞ。道を外れてしまつて教会から叩き出されたエクソシスト、だいたい墮天使勢力に身を寄せるのだとか。

……いや待てよ？ もしかして、

「……ごめん、責任の一端は僕にあるかもしれない」

『あん？』

「つい最近まで、駒王町の廃教会を根城にしてた墮天使とその一派がいた。その元締めは墮天使をぶつ殺したんだ。どのくらいの規模の組織だったのかは分からないんだけど……もしかしたら、そこにいたはぐれか墮天使がそっちに向かったのかもしれない」

族滅、というのは違うけれど。でも敵の組織を徹底的に掃討して被害を増やさないようにするべきだったと思う。それができなかったのは……僕がぶつつけ本番で元力ノ墮天使を殺したからだ。……マジで、責任の一端は僕にあるじゃあねえか、クソ。

『……いや、それはお前が悪いわけじゃねえだろ。唐突なことにその後のことまで気を配れつてのが無理な話だ。それを言うなら、俺だって癩癩起こさなきゃあちゃんが悪魔に目をつけられることも無かつたんだ。気にするのは勝手だけどよ、変に責任と

か言い出したらぶっ飛ばすからな』

「……ん、了解」

とはいえ、気合いが入る理由が追加されたというもので。もう一度気合いを入れ直す。

「……っし！ じゃあちよつとしたおさらいも兼ねて、お前が件の悪魔と交わした契約、その願いを教えてください」

『俺が交わしたのは、ばあちゃんを治して仲直りしたいという願いだ』

「おっけ。僕らが今からやろうとしているのは、日下部景太が悪魔と交わした契約の不履行、日下部イネさんを治す為……というよりギリギリ現世に留まらせる為に徴収されたお前の身体を取り戻し、日下部イネさんを完全に治療すること。契約の外にいる僕らから日下部イネさんを完全に治すことで、件の悪魔が契約を履行できない状況を作り、お前から対価を徴収させない状況にする。対外的な問題は、僕も契約業務の範囲で動いているので問題ない。OK?」

『ああ、問題ない。……頼む、イッサー。ばあちゃんを助けてくれ』

よし来た。僕はスマホを取り出して既に準備をしているだろう部長に連絡を取る。ワンコールもしない内に電話は繋がった。

『はい、連絡待ってたわ。状況は?』

「契約の内容的にシビアなタイムミング調整は必要無いです。日下部がイネさんに謝罪を述べるまでは完遂されません」

『分かったわ。ではこちらの方でフェニックスの涙は使用しておくわね。その後はしばらくの間、イネさんの容態を診る、でいいのね?』

「ええ、ありがとうございます部長。よろしくお願いします」

『気にすることはないわ。……落ち着いて、しっかりやれば大丈夫よイツセー。相当訓練をしたのでしょ?』

「はい、僕は僕のやるべき事を成します」

『よろしい、吉報を期待するわ』

通話が切れる。後は、僕がきつちり日下部の生命を用意することだけだ。

「本来ならば。無くなつた生命を復活させるなんて相当な知識と技術、政治力が必要だ。だけど、お前達は『同じ』生命を共有している。だからこれで通じる。何度も自分で試した。覚悟を決めろ日下部景太、あの世に別れを告げる時だ」

一呼吸、そして神器を構える。

「……最適化!」

『Promotion: Powered Frame!!』

溶け落ちていく左腕の籠手、それを握り潰す様に掴むと、それがノート大の板へと変

わっっていく。

『九頭龍パワードフレームNo.9の積層装甲』、僕に可能性を掴ませてくれ……!」

『Frame No. 3: Greed!』

二度と言わない、二度と言いたくない。僕はどつちを選ぶなんて言わない。

『欲ネバリーセイ・ワンモアと犠牲と取捨宣託』

『Greed: Create Imitation!!』

板が赤黒い光を発して、そして——

その14

僕は今、例の公園のベンチに座っている。『今』がいつかは分からない。辺りは暗く、街灯と月だけが僕を照らしているだけだ。……とはいえ、恐らく上手くいったんだろうなという感覚があった。何処かに感じていた『僕の骨』の残りが無い。ちゃんとリソースとして使えたようだ。

「隣、よろしいか?」

「ええ、どうぞ」

後ろから声を掛けられる、落ち着いた男性の声だ。その気配が隣に腰掛けるのを感じながらも、僕は前だけを見ていた。

「まずは感謝と御礼を。類まれなるお人好しの悪魔、無理を徹す恐るべき策士、兵藤一誠君。君のお陰で私は最後の願いを叶えることができました。本当にありがとう」

「そりやどうも。僕は我欲に従っただけだ、アンタが投げっ放しでムカついてたこともあったけど」

「だが私が迂闊に彼の願いを叶えていれば、彼は死んでいた。それは理解をしてくれ」「理解と納得は別物だと思いませんか?」

「違くないね」

声に笑いを滲ませやがって、なんとイイ性格をしたジジイだろうか。怒りを通り越して最早呆れてくる。……………なんか全部片付いたんだなと思うと、どつと疲れてきた。しばらく何もしたくない。

ふ……………と溜息をついて空の月を眺めると、沈黙が嫌になったのか、隣の気配が話し掛けてきた。

「……………何も聞かないのか?」

「聞いてどうしろと? 僕に必要だったのはこのループを解消するための情報と、納得できる状況だけで、アンタがどんな理由で日下部に加担したのか、どの様な方法で以てループ現象を引き起こしたのかは知りたくない。興味はあるけど知りたくないんだ。少なくともこれ以上心労を重ねたくねえんだよこっちは」

以前部長に聞いたことがある。悪魔は魔力を使って自分の姿を好きなように変えられるって。……………コイツの容姿は初老の男性らしい。一般的な感性からして若い姿の方が好まれるだろうにそれをしないのは、『その姿に並々ならぬ思い入れがある』か、『若い姿を維持できない程魔力が衰えてる』か、だ。政治的な理由でも考えたけれど、こんな無法をかますヤツがマトモな活動してるわけがない。結論、どっちにしたってろくでもない理由が後ろに控えてるってことだ。これ以上悪夢の種を増やされて背負う真

似は勘弁なんだ。

「だから僕の中では、アンタは『呆れるほどお人好しで心底無責任な悪魔』でいいんだ。それ以上の存在にしないでくれ。ついでに、二度と関わらないでくれると助かる」

「ふむ、成程。条件がある、無理矢理吞ませるが」

「……何？」

無理矢理吞ませるとは随分と穏やかでない発言だなと思つていると、隣からの圧が薄れていく。

「そもそも私はこれ以上君と関われない、関わりたくてもね。だから1つ……そうだな、君に報酬を。得られたものが友情だけというのも悪くは無いが、願ひには対価が必要だ」

「原則をブツチしようとしたアンタが言えたことかよ……」

「ルールを完全に守つている悪魔なんて存在しないさ。私も、君もね」

ことり、と音が1つ。若干の諦めと共に視線を横に向ければ、そこにあつたのはくすんだ真鍮の色をした、古い懐中時計があつた。蓋が開いてるソイツは、全く動きがない。

『それは私が使つていた神器だ。上手く使うといい』

「……そんなポンポン渡すもんじゃないだろう」

『なに、君ならば似たように使つてくれると思つての判断だ。……さらばだ、兵藤一誠』

君。悪魔として、君が幸せになれるよう祈ってるよ』

……心配が消えた。

全く、悪魔が誰に祈るってんだ。悪魔神でもいるのか？ それとも………まあ、そんなことはどっちでもいい。

「ひつでえモン背負わされたなあ、クソツタレ」

諦めと共にソレを手取る。見た目や質量以上の重みが左手を襲う。精神的になのか、それ以外のモノかは分からないけれど。

「お疲れ様、良い夢見ろよ」

パチリ、と蓋を閉じる。時はまた刻み始めたのだった。

【ループ10.】



というわけで今回の顛末^{オチ}……正確にはあの後の話。

結局関わった皆んな、記憶を引き継いでちゃんとした次の日を迎えることとなった。僕の青臭い不安は一体何処に持っていけばいいのか分からなくなったのは言うまでもない。実際あんの馬鹿共にイジられたしな!!

「冷静に考えて、ちよつとくさくなかったか昨日のお前」

『明日の僕によろしく』……ぶふっ」

「笑うんじゃねえよ!!」

ただまあ、心配してたことが無くなったのは事実なワケなので、なんだかんだ言いつつ僕らの心持ちは晴れやかなのであった。

………イジられたといえば、新技? の名前に関しても弄られた。こっちは馬鹿共じゃなくてドライグにだが。

『九頭龍の積層装甲』……ドライグが『ナインヘッズ・パラレルプレート』はダサイ等と言うもんだからじゃあこんなんどうよ? と提示した新しい名前。マシになるどころか悪化してる等と暴言を吐かれた。

『ルビは日本人で言うところのフリガナのことだろう? そこに英文字を入れるのは……流石の俺でも擁護できんぞ。終わってるな、相棒』

……お前ホントいつか覚えとけよマジで。そういうのがかっこいい、と言ってやりたかったけど実際このセンスがイタイ系なのは何処かで理解してるので反論ができねえ。……いいもんいいもん、これからも変な名前を付けていつて『赤龍帝』のサジェスト汚染してやるぜ、お前も道連れだザマアミロ!

『そういえば、アレなセンス繋がりだと墮天使に1人、方向性は違うがお前と似たり寄り

たりなのがいいたな。良かったじゃないか相棒、いつか会った時傷を舐め合うといい」
「舐め合いができる関係なのか……?」

どうやらドライグの頭の中では僕とその墮天使がよろしくやつてる様子が簡単に想像できるらしい。どんな変人なんだろうその墮天使。悪魔と仲良くできる墮天使って時点で眉唾にも程がある、と思っただった。

イジられた繋がりだと、今回の件でライザー氏が部長をイジったらしい。詳細は教えてくれなかったが、普段ならガンガン舌戦に応じる部長が何も言わずに顔を赤くしてプルプルしてたのだとか。何それちよつと見てみたい……なんてふざけたことを考えた
ら、

「イツセーが将来のことを約束してくれるなら幾らでも見せてあげるけれど?」
等と言うもんだから慌てて思考を無にしたよね。隙を見せたら思いの丈を全力でぶつけてくるノーガード戦法、本当にやめて欲しい。

しかし、口もかなり立つ我々のボスをやり込める手腕は是非とも聞いておきたい、とライザー氏に連絡を取ると、詳細は部長の名誉の為に話してくれなかったけれど、

『弱味を作ることが肝要なのさ。使い古された常套手段だろう?』

「変なネタでゆするとかしたらまたぶつ殺すけどその辺どうなん?」

『いきなり純度100%の殺意を向けるなよビビるだろうが。あの後稀に手が震えるん

だぞマジで。つーかお前はお前で上司が頭を下げなきやいけない状況に持っていくのをやめろ。これをネタに骨までしゃぶられることだつてありえたんだからな」

「……後でちゃんと部長に謝っておきます」

『そうしとけ、つたく』

それはそれとして部長がライザー氏に借りを作った形になったので何も言い返せなかつたんだそう。フェニックスの涙の件でも、ループに巻き込んだ件でも無いと言われて、『じゃあ何で借りを作ったんだ?』となったが、ライザー氏は笑うだけで何も教えちゃくれなかつたのだ。気のいいあんちゃんなのに本当にコイツ悪魔だよ。今回すげえ助けられたから感謝しかないけど。

フェニックス繋がりでいくと、フェニックスの涙を使った日下部イネさんは、見事に完治した。それはもう完治し過ぎたらしくて……

「若返ったア!？」

「ええ、それはもう見事に。私の目算で24歳相当の肉体年齢でしょうね。……私も初めて知つただけだけど、老化にも効くのねフェニックスの涙」

「え、いやその……どう説明するんですか!？ 不自然過ぎませんかそれエ!？」

「……とりあえず、細胞を若返らせる特殊な治療をしたということに通したわ。治験も兼ねていたということにして、無理矢理暗示をかけてなんとか……つてところよ」

これ、思いつきり僕のせいだよなあ。日下部からも苦情が来たけど、この部分は甘んじて受け止めるしかないよなあ。安易に便利アイテムに頼るんじゃないかなと思ったと思わずにはいられない。

「でも1つ発見があったわ。薄めて使っても軽い病気や怪我ならすぐに治ること分かったのよ。もちろん、ただ水で薄めてもそんなことは無かったのだけだ」

「えーと、RPG的な回復薬は冥界には存在してなかったんですか？」

「もちろん無くはなかったのだけど、少々値が張ったのよね。その点、フェニックスの涙は………詳細はちよつと言えないけれど、通常販売されてる1本分で1万本分は薄めたものを使えるみたいね。そこそこ加工するから1/10000の値段というわけにはいかないけれど、楽しそうな仕事の匂いがあるでしょう？」

過去にそんな試みが無かったか？と問われたらそんなことは無く、でもその尽くが失敗してきたそうだが、今回日下部イネさんに使った時に気になる反応があったらしく、それを部長なりに纏めてフェニックス家の方に報告。そしてあっちの方で実験してみたら………ということだ。なんでも、人間の毛がキーアイテムなのだそう。……今まで気が付かれなかったのは、フェニックスの涙を人間に使うなんてトンチキな出来事が存在しなかったからなんだろうなあ。

「まあ確かに面白そうなのシノギの匂いですけど、色々大丈夫なんですソレ？ 医者

事を奪いかねなかったり、利権とか諸々」

「そこはたくさんの家と医師会、あとは冥界にいる錬金術師や薬師などをたくさん抱き込んでやっていけば大きく問題は噴出しないわ。仕事を奪うシロモノにせず、仕事と金儲けを両立するツールとして扱っていくの」

「さっすがー……。そうなるかとは人間の毛髪を回収する仕組みが欲しいですね。契約業務で奪ってやってもいいですが……。ここはド定番の1000円カットの理髪店でしようね。あとはよく効く育毛剤の開発も」

転んでもタダでは起きぬと言わんばかりに金儲けの話になる辺り、やっぱりこのヒトはやり手の経営者よなあと思ったのだった。

イネさん繋がり、最後に日下部の話。問題なく身体を取り戻して日常生活に戻れたそうなの。

「結局お前、あの時何をやったんだ？」

「命の複製をした」

「……………なんて??？」

命の複製をした、2度は言わない。

僕の新しい力、『強欲』の能力は『欲と犠牲と取捨宣託』。予想通り名前についてドラ

イグには文句を言われたけど取り敢えず置いておいて。コイツは僕の魔力を用いて複

製を作る能力なのだ。……まあ僕の貧弱魔力だけでは到底足りなかったもので、今回命の複製を作るにあたってはドライグが残してくれた『僕の骨』の残り半分を全部リソースに注ぎ込んだのだった。訓練初期の頃は身体の半分を持ってかれたりして死にかけてたり死んだりして大変だったよ本当に。

「例の悪魔がお前とイネさんの命を共有させたのが功を奏したんだろうな。その外法によつて概念的にも物理的にも同じ命になったから、複製してもお前が使う命としてちゃんと適合してくれたってことで」

「要はiPS細胞で臓器を作る的なのウルトラ上位互換をやったのか」

「そゆことー」

これから先無理に禁手を使ったり、無理な強化をする必要はない。既に最善手を持って余してるのだから、さらなる強化の前に今ある手札を強くしていくフェーズにあるってことなので。だからストックされても僕の骨は無用の長物で倉庫の肥やし。だったら有効活用してやらないとねってことで使っちゃったという話。そもそもが今の身体を強くするために置換した、言い方は悪いけど産業廃棄物みたいなものだから惜しくもなるともないのだ。

「お前がいいならそれでいいけどよ。……なんにせよ、本当に助かったよ。ありがとう、どうやって感謝を示しても足りねえくらいだ」

「やめろやめろ、むず痒くなる。もし気にするならウチのラーメン屋の売上に貢献してくれっつんだ」

「おう、任せとけ！」

そんなこんなでこの傍迷惑なループ、繰り返す悪夢を徘徊する話はおしまい。めでたしめでたし。

……………とはならない、ならないのだ。

「日下部イネさんに事情聴取をしたところ……犯人は白髪で赤い目をした、カソツク姿の少年だったそうよ」

そう、もしかしたら僕たちにとってはこっちが本題。悪魔の敵、墮天使並びにその勢力に属するはぐれエクソシストの存在だ。

「この特徴を持ったはぐれエクソシストは悪魔の間でもとても有名。……………『フリード・セルゼン』、殺戮を愉しみ過ぎたが故に教会を追放された。悪魔のみならず、悪魔に関わった人間の殺戮も起こすため、こちらでも非公式に賞金首になつてはぐれエクソ

シストよ」

「コイツが……」

渡された資料。そこに記されている経歴、推定殺害人数、簡単な性格のプロファイル。素面で直視するにはあまりにも残虐行為に、非公式に掛けられたまあまあな賞金の額。

「イツセー、聞かせて頂戴。どうしてコレを知りたいと思つたの?」

「殺すためです」

ハツキリと、殺意を滲ませて僕は吐き捨てた。

「もちろん、積極的に自分から殺しに行く真似はしません。でもこの手のヤツとは必ず何処かで当たります。……………他人事じゃない。僕は僕の我儘でアイツらを悪魔ほくを連ませました。僕のせいでアイツらが死ぬなんて、そんなことは耐えられません」

「……………イツセー」

「まあ、それで別の問題が起きるならやめとこう、と思える程度には理性は働いていますよ。だからまた死に急いでみたいな顔をするのはやめてください。勝手なこととして部長の立場が悪くなるのは申し訳ないですから」

……………と、今回の反省も踏まえて部長には言つたが、どこまで信じて貰えるか。本心からの言葉だと胸を張って言える。しかし客観視してる僕が、僕の発言を何処か信じていない。遭遇するようなことになれば、僕は恐怖から凶行に走る可能性を捨てきれない。

そんな、少し後味の悪い不安を残しつつ、僕らは日常へと帰って行くのであった。



「はいはいこちらフリード・セルゼンくん。ただいま開店休業中のござーい。ピーという発信音の後に……あ、今そういうの要らね？」

「でもこつちもそれなりに虫の居所が悪いんだぜ旦那、つまらない要件なら即！ 切るんでそこんとンシクヨロ」

「……………へえ、エクスカリバー、統合。それも糞悪魔の根城で」

「——最っ高にファンキーじゃねえか、乗ったぜバルパーの旦那」



Next CHAPTER3:トラストユー・フォーエバー

To be continued.

CHAPTER 3 : トラストユー・フォーエバー

その1

—— 少し、昔の記憶。

『どうしたの、なにかやんでる?』

『……うん』

私は迷っていた。前は上手く言葉に出来なかったけれど、今なら分かる。信仰に迷いがあった。ただ漠然と、両親から教えられ、書物で深めていく尊き教えに対して、言葉にできない不安があった。

『信じたいひとがいるの。でも、ほんとうに信じていいのか、私には分からなくて』

『うーん……なんというか、めずらしいね』

父や母に相談するのは気が引けて、その時の私のイチバンの友達、隣の家の幼なじみに相談した。そうとは分からないように、曖昧に。

『その人は、どういう人なの?』

『とてもすごいひとなの。きせき? でまよえる人を見ちびく、そんなひと。どんなことなんにも立ち向かう、まるでヒーローみたいなの』

『すげー、まじもんじゃん。そんなの信じるしかない?』

『でも、じつさいにはいないの』

『アニメ?』

『ちがうよ。……お父さんとお母さんがよくお話をしてくれるの。2人は本当にいるみたいにお話してくれるけど』

『うーん……』

思い出してみても、あの時覚えた違和感に納得がいった。そうだ、ありもしないモノを私は信じていることができなかったのだ。戦隊ヒーローが実際には存在しないことに気が付くように、仮面を被ったヒーローが悪党をやっつけてくれないことに気が付くように。

だってそうだ、あの時私は見たのだ。父さんのとても悲しいような怒ったような、一言では表せない壮絶な貌を。もし本当に主がおわすならば、父さんはあんな顔をしない筈なんだ。だから私は、無意識に信じていることができなかったのだ。

『僕さ、思うんだよね』

『なにを?』

『まず自分を信じなくちゃダメだって』

『自分、を?』

『そうそう。どんなことでも自分を信じなきや始まらないよ。ほら、やったことないことでも【自分ならできる!】って思ってやってみるでしょ?』

『……うん』

『だれかを信じるってさ、そうしてからじゃないとできないって僕は思うよ』

今にして思えば、これは彼なりの悟りだったのだろうか? それを聞いてみるには、ちよつと時間が開きすぎてしまつたけれど。

それでも、私は忘れない。あの日の彼の言葉を、絶対的に。

『だいじょうぶだよ、イリナちゃんはすげーヤツなんだから。そんなイリナちゃんが信じた人なら、ぜつたいに信じてだいじょうぶ!』

私の中に通つた、揺るがぬ信仰。それを形作つてくれた彼の言葉を、私は死ぬその時まで忘れないだろう。



「いらつしやいませー! 空いてるお席へどうぞー!」

「いらつしやいませー!」

本日のイツセー店長、順調快調絶好調! デイナータイムの本当によく混む時間で

も、このとおり見事な動きでお客様を捌いていくう！ ハイテンション過ぎて背中からナノマシンが噴き出しそう！ 文明終わらせちゃう？ ねえ終わらせちゃう???

『やろうと思えばできることを思いつくもんじやないぞ。それとも本気で世界征服狙ってみるか?』

ロボアニメからとったセリフだよわかんないかなあ!?! と頭の中で響く相棒の声にツツコミを入れつつ、お客様から食券を預かる。お、新メニューの汁なし麺だな？ 追加してから本当に飛ぶように売れんねえコレ！

「汁なし硬め脂増し！」
「はい、中太入れます！」

汁なし麺の何がいいって、スープを使わないことだよ。専用のかえしを別で作るのが手間だけど、閉店間にスープの残量が足りなくて売り切れ対応しなくて済むのがいい。オキヤクサマはともかく、楽しみに来てくれたお客様に『申し訳ありません、売り切れてしまいました……』と頭を下げるのは意外とメンタルにくる。まああまりにも汁なし麺が売れ過ぎて今度はスープが結構な量余り始めてるんだけど。売上予測が上手くいかなくなってるのはちよつと問題かも。頼れる経営担当の平野サンに相談しないとね。

『その平野とやらは新店舗の関係で忙しいのではなかったか?』

そうだった。現在僕が（お飾り）店長として働いてるこの九頭龍亭、なんと2号店並びに3号店を出すことが正式に決定したのだ！ いえーいばちばち！ 割と攻めた戦略じゃない？ と思つたけど、部長と平野サンが『いける』と言つたのでいけるのでしよう、いずれはそういうのも勉強しないとイケないなあ。

んで、新店舗を出すにあつて部長が平野サンと一緒に呼んできた立山サンと、元から九頭龍亭にいた大ベテランの中村サンがそれぞれの店長として抜擢。何人かのバイトさん達を連れて此処1号店から旅立つてしまつたのだった。喜ばしいことだけど、寂しいものがあるねえ……。

まあそんなことなので、平野サン含めて新店舗立ち上げ組は、何故か僕の作つたマニュアルを広げながら開店準備をしているのだとか。……忙しいよね、それなら平野サンじゃなくて部長に相談した方がいいかも。

「麺あがりまーすー！」

「お願ひしますー！」

そんな思考を巡らせながらも染み付いた作業が身体を動かす！ 少し大きめのラーメンどんぶりに汁なし用のかえし、背脂を入れてそこに新人バイトの大和田サンが茹で上がった中太麺を投入。トングで麺を返して絡ませたあと、僕がすかさず焼き野菜並びにトッピングのサイコロチャーシューやコーン、粉チーズを載せていき、最後に生卵を

てっぺんにON！ 完成、汁なし麺一丁上がり！

「高山サン、15番さん卓に提供！ 汁なし麺硬め脂増し！」

「はいー！」

うーんパーフェクト。ありがたいことにバイトの募集も結構あって人手不足とは無縁！ 新店舗が開店したらそっちに一部は人が流れてしまっただろうけど今のところ売上も上々！ 僕のラーメン屋店長道は中々順風満帆だった！

「お客様ご来店です、いらっしやいませー！」

「いらっしやいませー！」



「では店長、お先失礼します。お疲れ様でした！」

「お疲れ様です、気を付けて帰ってね！」

閉店後の作業も終わり、時間は日付を跨ぐ間際。バイトさん達も全員あがって店には僕だけ。まあ店長業務と言うやつ。売上計算や券売機のお金を回収等々を済ませ、バックヤードでパソコンと向かい合う。まあ単純にシフト表を作っただけなんだけどね。スプレッドシートを作ってくれたヤツは神、ハッキリ分かんだけだ。

それはそれとして、僕がシフト表を印刷して紙で配るのが当たり前だと思ってるからそうしてるけど、実際どうしたものか。昨今タイムカードですら社員番号を入力して時間を打刻、ネットで管理する時代なのに前時代的なままでいいんだらうか？

「そういうアプリを導入する？ あーでもガラケー使いがいるから厳しいものがあるなあ」

『社用の端末を配布するのはダメなのか？ そういうのもあるのだらう？』

「ありっちゃありだけど、結構値が張るんだぜ？」

法人契約で、かつ月1G程度の通信量のヤツならそこまで値段がしないことも分かってるけど、端末がなあ。売上は順調とはいえ、まだ個人のお店に毛が生えた様な規模の九頭龍亭。それならバイトさんや社員の給料底上げした方が良くね？ となるわけで。

「いっそのこと部長に新規事業頼んでみる？ ケータイ業界に殴り込んでもらってそこから融通してもらおう的な」

『あの女もそこまで万能かつ手が広いわけではないだろう。あちらもこちらでフェニックスの涙の件で方々に出向してる今、ヤツもそんな余裕は無いだろう』

「流石に与太話だよ、無理なもんは無理なのは分かってる」

でも僕が頼んだらやってくれそうな危うさがあるよなああのヒト。いつかとんでもないヒモ男引つ掛けそうで僕は今から不安ですよ……。

『……………まだ逃げれる気にいるのかお前。率直に阿呆では?』

「脳内ぐらい自由な想像してもいいじゃん。逃げはしないけど」

まあ何かの間違いで目が覚めてくれないかなあ、とは思わないでもないけれど。でも部長が僕のことを好きだと言って思ってくれてるうちは、僕もそれを疑わずに信じて、その上であのヒトの役に立とうと思う。心労すごく掛けるから、最低限働きで返していかないよね!

「というかドライグ、最近よく仕事中也話しかけてくれるから感覚麻痺してただけだ。お前的に僕がラーメン屋やつてるのはどうなん?」

『別にどうも思わん。いや、名前に龍を冠した店で、お前は赤龍帝だ。業界のトップを取るぐらいは当然してもらいたい?』

「変な方向で変なプライド発揮してんなあ…………」

あんま言いたくないけど、ドライグがおかしな方向で僕に毒されてる。そんな風に感じてしまった。

『あと何故かは分からんが、お前がラーメン屋を経営することは白いのとの戦いで活かせるかもしれん。自分自身でも血迷ったか?』
と思ってるのだが、そんな予感がしてならない』

「ははは! 納得の一杯を提供して、白龍皇を負かすって?」

そんな平和な決着だといいな、と思った。……………そんなことは、決してありえないけれど。それこそ、想像するのは自由だろう？



まあそんな感じで。僕は学校に仕事にと精を出していたんだけど、

「イツセー、貴方働き過ぎよ」

「……………えっ？」

なんか色んな心のつかえが取れて、もう我世の春っ！ って感じで生きてたのがダメだったらしい。部長からストップが言い渡された。

「驚くことじゃないわよおバカ。最近週何回九頭龍亭に顔を出してるの？」

「えー……………あー……………週7ですねぇ……………」

「睡眠時間は？」

「えーと……………1日3時間……………ぐらい？」

「前にも言ったわよねえ……………ブラック勤務をさせるつもりはない、と」

青筋浮かべてキレル部長を、僕は初めて見た。何やってもしょうがないわね……………と許してくれた優しい部長は何処。いや今怒ってくれてるのも優しいからなんだけど。

「イツセー、おバカなイツセー。今1号店は人手が足りているのよね?」

「……はい」

「貴方は仕事に対して手を抜いてはいない。つまり新人教育もしっかりと終わって、ちゃんと戦力になってるのよね?」

「……はい」

「特に溜まっていたり火急の仕事があるわけではないのよね?」

「……はい」

「貴方が顔を出さなくても、張さんが店長代行を務められるのは、勿論把握してるわよね?」

「……はい」

「それなのにどうして貴方は毎日出勤して、睡眠時間もこんなに削っているのかしら?」

あはは、どうしてなんでしようねえ。なんか喜ばれるとつい頑張っちゃうっていうか……。つべー、部長本当の本当に怒ってるわ。1個も茶化す要素が無くて頭上げられねえ。

「で、でも部長だって最近とてもお忙しそうで……」

「それでも最低限5時間の睡眠は取っているわ。………仕事一筋の旦那を待つ嫁の気分って、こういうものなのかしらね?」

「ほんつつつとうに申し訳ありませんでしたア!!! なんでもするんで許してください!!!」

迂闊なことを言った！ 自覚はある！ でも今此処でこのカードを切らないと陽の光が当たらないところで暮らす未来が見えかけた！ いやそういうのも悪くないかも……？ と思いかけたけど、せめてお付き合いは健全な方がいいじゃん！ アブノーマル、ダメ絶対!!

「なんでも、本当に？」

「本当に、誓って！」

とはいえ後悔はするんだろうなあ、諦めの境地で沙汰を待った。僕が羞恥で悶える程度で許してくれるなら安い買い物だと、本気で思っていた。

………まさか、まさかこの時、別の意味で後悔するなんて知らずに。僕は呑気に構えていたのだ。

嗚呼本当、僕の人生は波瀾万丈にも程がある。

その2

「どっこにしまつてあつたかしら……あつたあつた、コレよコレ！」

迂闊なことを言つた昨日の自分を絞め殺したい。そんな気持ちで僕は我が家のリビングにいる。

結局部長は大した要求をしてこなかった。幾つか僕らの間でルールを決めた程度だ。

まず、九頭龍亭への出勤は週3回、多くても週5回。部長の私情も大いに入つてるとは思うが、それ抜きにしても僕の下僕悪魔としての教育が遅れてるので、その為の時間を設けたいとのことだった。一応自習はしてるんだけどね、それで睡眠時間が削られるのは違うでしょつてことみたい。もちろんお店の緊急事態に対しては僕が出動することになるからそれは除外。そんなことは滅多に起こりえないだろうけどね。

次に、寢床を不必要に変えないことを約束させられた。これは私情丸出しである。よく部長は僕の布団に潜り込んで来るけど、その度に僕は抜け出して床だったりで適当に寝てる。それを許さないための約束だ。……このヒトマジで僕の理性を狩り取るつもりらしい、泣きそう。

最後に、翌日……つまり今日のことだが。旧校舎の清掃と定期メンテをするから今日

の表の部活を兵藤家でやりたい、という話。僕は構わないけど、それは自分の一存では決められないので母さんと相談してください、ということでも勿論通った。母さんがそういう楽しそうなことを見逃すはずもなく、つてヤツだ。

1番やばいのは寢床固定の件だと思ってたんだ、本当に。それぐらいなら僕の理性を512倍して耐え切れればいいとマジで思ってたし、使った。一瞬悟りの境地が見えたよね。こんなことに使われるとはドライブも思っちゃいなかっただろう。

『アレはアレで訓練になるからな。つくづくお前は異端だなど思いもしたが。過去の使い手の中には毎晩女を取つかえ引つ変えしていたヤツもいたぞ』

そんなヤツは敵である、少なくともこっちは儒教の考えが根付いた日本人、そんな複数人と破廉恥なことをするなんて有り得ません。……………悪魔の常識で考えろつて言われると何も言えないけど。

ともかく、まあどんな誘惑をされようが耐え切る自信があつたので、僕は迂闊にも『なんでもしませんが』と言ったわけだ。部長は結構押せ押せだけどマグロ相手にどうこうつてタイプでも無いだろうしね。部長もぐぬぬとなったことだろう、ざまあみろ。

だが！ だがしかし！ 僕は自分の敵が身内にいたなんて思いもしなかつたのだ、具體的には母さん！

あろうことかマイマザー、リビングに集まったグレモリー眷属一同に向かって「ウチ

のアルバムを見ていかない？」等と言いやがったのだ！ なして!？」

「待って、ねえ待って母上。僕は見られたくない、見られたくないんですがそれ」
「お義母さま、是非お願いしますわ」

やっぱ乗つかるよなあ僕の上司イ!! しかも昨日の夜のことを根に持つてんのか
びつくりする程満面スマイル! ごく稀に器を小さくするのやめませんかねえ!？」

五分ほどの舌戦、敗北、そして無慈悲にも拗げられる兵藤家のアルバム。僕は、あまりに無力だった……っ! 決め手はお母様の「ウチに女の子がたくさん来たらアルバムを見せてみたかったの」という一撃。おまつ……ソレは反則でしょう!! とフリーズしてる間にあれよあれよとこんなことに。勝ち誇った表情の部長が憎らしい。

というわけで女性陣達が我が家のアルバムを見てワイキヤイしてるエリアからこつそりと離れ、隅っこで学校の宿題をする僕。大丈夫、心を透明にすれば耐えられないことは無い。今までも、これからも……。

『あのイツセーにも可愛い時代があったのね……』

『あらあら、こつちのイツセーくんはまさにザ・虫取り少年ですわ』

『……どうしてこの子がイツセー先輩に』

『し、失礼ですよ小猫ちゃん……』

いや、心透明にしなくても大丈夫そうだな。別な意味で泣けてくるけど。遠回しに皆

様が僕に対して心がスレてるって言ってませんか？

「…でエ、なんでお前はこつち来てるワケ？」

「いやあ、見られたくないものがある気持ちには分からないでもないからね」

「武士ならぬ騎士の情けってか？」

ありがたいやら情けないやら、悲痛そうな僕と向かい合う形でグレモリー眷属のイケメン枠、木場祐斗クン。グラスに入ったオレンジジュース飲むだけでもサマになるなどの男。

「でもなんというか、意外だね。あんまり昔のことを聞かれたり見られても動じないって印象が勝手にあったよ」

「んあー…：…それでも無いよ。まだ高校生の時分なのに若気の至りなんざ幾らでもある」

例えばアルバム関連だと、そうだな……………

「多分、笑顔の写真が少ない」

「それは、昔は笑えなかつたという話なのかい？」

「うんにゃ。写真撮るって分かつたら笑顔は作れるよ。でもそれ以外の部分はほとんど笑ってないと思う」

まあその辺に繋がる話は部長とはしたし、もう一度語るとかダルいのでしないが。

まあ無愛想なクソガキだったろうねと思う次第。

「今でも厨二一つつか悪化して高二病も併発してるけど、昔はもつと顕著だったからね。自分が特別くじやなくて自分はゴミカスつて方向で。だから昔の写真とか見ると黒歴史を思い出しちゃつて吐きそうになる。……何かがあつたわけじゃないのにねえ」

「……………」

「…………ん？ あ、すまんすまん。こんな空気にしたいわけじゃなかった。軽く受け止めてよ、今本当に充実してるからさ」

なははー！ と笑い飛ばしても、なんだか微妙な笑顔になつてるあたり失敗したな、と思つてしまう。どうすつか、こんなになるなら辱めに耐えてた方がいくらかマシだったかもしれん。

仕方ねえ、比較的マシだろう時期のアルバムを女性陣の所から拝借する。

「あ、それまだ見てないのだけど」

「いいじゃないですか、僕にも思い出に浸らせて下さいよ」

飛んでくるブーイングを軽くないなして祐斗クンの前でご開帳。まあ予想通りといった感じで、悪い顔で笑うクソガキがまあたくさん。

「これは？」

「小学校低学年の頃だな。お隣の大バカ野郎……いや、女子に野郎は違うな。まあバカ

とアホで連ンで大暴れしてた時期だよ。ほら、結構生傷多いだろ?」

いやあ本当にあの頃の僕もアホだったよなあ。お隣のガキ大将に連れられていじめっ子成敗って本当にアホかと。高学年や中学生まで出張って来た時はマズイかもとか思ったけど、なんだかんだで大立ち回りの末に完勝。向こうの親御さんの言い掛かりも証拠写真や証拠品で赤っ恥かせて撃退。あんまりにもやっつてることがアレなのでお隣さん共々親から拳骨落とされるなんて日常茶飯事であった。だいたい実力行使担当がお隣さん、裏工作を僕がやっつたので『さんぼー』なんて呼ばれてた記憶もある。この時からロクでもねえな思い返すと。

「……高校入ってからそういう荒事をしてたって言っつてなかつたっけ?」

「記憶にございませぬそんなこと」

ジト目で睨まれても何も出ないですことよ? それに『さんぼー』だから主に暴れたのは僕じゃありません。実際大まかな喧嘩スタイル確立したのは高校生になつてからののは嘘じゃないしね。

「そもそもドブカス共と同じ舞台上に立つ時点で負けなんだよ、僕つてば弱っちいし。殴り合う前に終わらせないと」

「なかなか聞き馴染みの無いレベルの暴言が君の口から出てきて凄く驚いてるよ僕は」

「イジメなんてするヤツはそんな扱いでいいよ、更生は期待するけど性根が僕と同レベ

ルだから無理ゲーだし」

「自虐のレベルも恐ろしいね!？」

よしいいぞ、いい感じに陰鬱な感じが空気から取れてきたな。いやあ、他人振り回すの楽しいよね!

「……でも、確かにこの頃は笑顔の写真が多いね。とても楽しそうに見えるよ」

「実際その通りだったし。……バカだなんだって言うけど、僕にとつてこの子はヒーローみたいなものだったんだ。そんなヒーローが僕のことを必要とか言うんだぜ? 自己肯定感ギューインギューイン上がるよ」

「あはは……イツセー君は普段からもっと自己肯定感上げた方がいいと思うけどね」

そんな感じで、結局宿題ほっぽり出して思い出の補足なんかをして談笑してたら、祐斗クンの動きが止まった。

「……………これ、は?」

「ん? あー……そっか。お隣さんクリスマスチャンだったんだ」

その視線の先にあつたのは、お隣さんの家で撮った写真だ。聖書らしきものも、十字架もあつたり宗教色が強い。……そうだよなあ、クリスマスチャンなんだよなああの子も。元氣してるかなアとか言つたこともあつたけど、多分次会つたら殺し合う関係だよな。まあその時は容赦無く殺すが。仮にあの子がエクソシストとかなら……………まあろく

なことにはなつてないだろう。暴力面と正義感をより強化した僕の上位互換みたいなヤツだし。

「そうか……じゃあコレはやはり。イツセー君、コレに見覚えは？」

彼は同じ写真に写っていた大人の男性（恐らくお隣のお父さん）、正確にはその男性が佩いている西洋剣を指さしていた。………声の調子がおかしい。さつきまでにこやかに話してたトーンから急転直下。殺意すら感じ取れそうな負の感情の発露に、僕は彼の顔を注視する。ジロジロ見てるのにも気が付かない程に、その目は指さした西洋剣に釘付けた。

「……分かんね、儀礼用のなんかだとは思うけど。剣振り回してた記憶はあんまり無いよ」

「そう……。だけど、コレは間違いない」

今、記憶とピントがあった。僕はこの顔を見たことがある。それは彼の顔ではないけれど、僕は鏡に向かってそれを見たことがある。現代日本では、あまり目にしてはいけない類の、その感情の名前は。

「これは聖剣だよ」

復讐………そう呼ぶに足る顔の歪みと、鳴り出した警鐘が僕の心をザワつかせた。

これはちよつと、マズイかもしれない。



部活が終わり、部長とアーシアを除いた皆が帰って行った後、僕はひっそりと自室で頭を抱えた。

「ループの次は聖剣かよ……!」

『イベントには事欠かないよう何よりだ』

「ぶっ殺すぞクソトカゲ」

『やれるものならやってみろノータリン』

殺意を滲ませて罵倒し合うが、ただただ虚しい。そりやドラゴンの性質でそういうモノを引き寄せる、つまりドライグが僕の中にいるせいなのだが、ヤツは性質を付け加えてるだけであって、結局それって僕自身のせいな気がしてくる。まあだからコイツも煽ってくるんだろうが。

『実際お前が望んだせいでその性質が強まるところはあるやもしれん。強くなりた
いと思ってるだろう?』

「……………まあ、そだな」

『つまりその願いのせいでお前を強くする為の試練が寄ってきているわけだ。実際、何

かある度に順当に手札を、戦力を拡充させていつているわけだからな』

「じゃあ僕ちやんずつとこのまま？」

『これ以上強くならなくてもいいと思えば、あるいは』

人それを、無理ゲーと呼ぶ。ひでえ話だ。今の僕なら下を見てもキリがないかもしれないが、上は上でキリがない。単純にバケモノが多過ぎる。弱点を突けたからライザー氏を倒せたけど、実力そのものは天と地の差があり、そんなライザー氏も冥界ではそこそこ強い止まりだ。あとそんな組織が墮天使陣営の『神の子を見張る者』に教会勢力、あとは聖書グループで括られた我々以外にも他の神話体系があり……ダメだ、プチツと潰される未来しか見えない!!

「そもそもなんで契約業務が主体の悪魔に腕っ節が必要なんだよ……誰だよレーティンゲーム作った大バカ野郎は……」

『魔王アジユカ・ベルゼブだ』

「平麵の常連さんかア……」

そう、平麵の常連さんの正体は魔王様だったのだ……。真実を知った時愕然としたよね。

『どうも、店長。いつものやつで……どうしたんだいその顔？ ……ああ、その様子だとサーゼクスから聞いたのか』

『如何にも、俺は魔王アジユカ・ベルゼブブだ。まあ急に改まった態度になられても調子が狂うから常連客と同じ扱いでいい。……どうしたんだいまた固まって。魔王であることは知らなかった？ ……サーゼクスめ、あえて黙っていたな』

『ご馳走様、今日も美味かった。店長、悪魔になってしまったのは予想外だったが、それでも変わらずこの店を切り盛りしてくれることを嬉しく思うよ。今日は1分ほど煮込みが足りなかったと見えるが。新人教育も大事にね』

……とのやり取りで判明した。サーゼクス様の時も思ったけどフランクかつ態度が軽くて意識が飛びそうになった。軽い調子で明かす内容じゃねえんだよ。煮込みの甘さを指摘してくる辺りはいつもの平麺さんで逆にホツとしたが。このヒトが悪魔の駒だのレーティングゲームだの、今の悪魔社会を支える発明を数多く排出してきた魔王だったのか……。

「つかお前、気が付いてただろ。お前もあえて何も言わなかったな？」

『魔王だとは気が付いてなかったぞ、嘘偽りなく。あの男、かなりの隠蔽を重ねてはいたから相当な実力を持つ悪魔だとは思ってたが……』

「……万能だな平麺さん」

魔王も常連になる九頭龍亭、一体あそこに何があるんだろうなあ……？ 一介の転生悪魔が店長やっていいお店じゃなくなってきた気がするよ……。

……話が逸れすぎた。ともあれまずは、部長に『聖剣と木場祐斗』の関係について聞く必要がある。ある……ンだが、これを素直に聞いていいものなのか。コレを聞く、つまり厄介事の構図だ。これでなにか問題が起こって部長の責任とかなったそれは困る。つい最近ライザー氏にも怒られたばかりだし。かと言って何も伝えずのんびんだらりと過ごすのも……ぐぬぬぬ。

「つーか地雷がそんな所に埋まつてるなんて分かるかよ……恨むぞイリナちゃん……！」

「へえ、地雷って何のことかしら？」

「そりゃあお隣さんの家に飾ってあった、推定聖剣のことです、が。……あつ」

自室の扉に目を向ける。そこにはとてもニツコリと可愛い笑顔を見せてくれる部長の姿が。

「はいイッサー。まずはその聖剣の話について聞かせてくれるかしら？」

「……………はい」

……まあ、なし崩し的に祐斗クンについても聴けそうだからいっか、と僕は開き直ることにした。

その3

「……大まかな事情は分かったわ」

隠す理由も無くなったので洗いざらいゲロった。元々のお隣さんがクリスチャン一家だったこと、お隣さんと撮った写真の中に推定聖剣が写ったこと、そこから祐斗クンの様子がおかしくなったこと、警鐘が鳴ったこと。そうしたら部長も頭を抱え始めた、だよね。

「1個1個も中々の問題だけど、ソレとセットで貴方の警鐘が鳴ったのはまずいわね……出来る限りの準備が必要ということでしょう?」

「おそらくは。しかも鳴り方が生命の危機的なアレです。ちよつとヤバいかもです」

直ぐに起こる、という感じでは無かったのだが、逆に言うともうでも無いのに鳴ったということだ、恐怖以外の何物でもない。

「というわけで教えて欲しいんです。木場祐斗と聖剣の関係。所以が分かれば何か手伝ってやれたり……暴走せずに軌道修正することだって可能でしょう?」

「止めるという考えは?」

「無いです。だって怨恨の類でしょう? 復讐はそりや、完遂してもらわないと」

部長だつて立場が許せばそうするでしょう？ と追加すると、諦めたように肩を落とした。やっただぜ。

「まあでも部長の立場を脅かす真似もしたくはないので、やはりまずは背景を知りたい。勝手に話せないというなら僕が直接じんも……聞き出しますが」

「仮にも同じ眷属相手に尋問とか言わないの、全く……」

そう言つて部長は一呼吸置いて語り始めた。

「昔、教会勢力の間で『聖剣計画』なるプロジェクトが立ち上がったの。聖剣を作る計画ではなく、聖剣を扱える人間を養成する計画よ。祐斗はその計画に参加していたの」

「……………なんかもう、色々察しましたけど続きお願いします」

妄想力だけは優れてるマイブレインが答えを大まかに弾き出したことを恨みたい。気分が鬱々してくるわ。

「前提として、聖剣を扱える人間は数十年に1人現れるかどうか、というものよ。聖剣そのものについては、以前勉強会で少し触れたわね？」

「ええ、出自はともかく悪魔に対しての最強の兵器。神の域に到達した刀工、魔術師、錬金術師が創り上げる聖なる力のこもった武器。有名なものだ『エクスカリバー』『デユランダール』『天叢雲剣』。……そりゃ誰でも使えるものじゃないとは思ってましたが、そんな少ないんですね」

「ええ。そして教会側も聖剣をただのお飾りにするつもりは無かったみたい。それはそうよね、儀礼用でもない限り、武器なんて使って初めてそこに意味が生まれるのだから。だから使い手を沢山作ろうとしたのね」

それで、その聖剣を使える人間を増やすために聖剣計画が発足した、と。

「聖剣計画では、主にエクスカリバーに適合できる人間を養成しようとしたらしいわ。……いえ、アレを養成と言っているのかしら？ 体のいい実験台、モルモットとなつていたと言つても過言じゃないわね」

珍しく、憎々しげに顔を歪めて部長はそう吐き捨てる。祐斗くん本人から聞かされたのか、それとも部長が彼と出会った時やその後の惨状から分かったことなのか。まあ、まともな扱いはされてなかったのだろう。

「最終的に研究が一定の成果を得たのか、それとも全く成果を得られなかったのかは定かではないけれど、祐斗達被験者は不良品として処分されることとなつたわ」

「……彼は、唯一の生き残り、と」

「ええ」

確かにそれは、復讐をするに足る強烈な出自だった。……むしろ、あの程度の感情の発露で済んでるのがおかしいくらいだ。救いが無さすぎる。

「私があの子を生き返らせようとした時、死の淵にいなながらも、死んでいった仲間達に復

讐を誓っていたわ。私はそれを悲しいと感じて……せめてあの子のこれからが幸せなものであるように、そう思つて接してきたわ。復讐に生きることを否定なんてできないけれど、それだけに生きるなんて……悲しいじゃない」

「……………全くです」

そうして部長は、彼に新しい名前と新しい命、そして共に生きる仲間を与え……表面上は穏やかに生活を送れてきた、ということ。でも例の写真が切つ掛けでこのザマだ。これはちよつと申し訳なくなつてくる。

「……………すみません、もうちよつと危険予知しておけばよかったです」

「不可抗力なのでしょう？　だつたら謝らないでちょうだい。あんまりにも謝り癖がついてると他の悪魔に食い物にされるわよ」

「……………うつつ」

「それに、こちらでも全く準備をしていないというわけでもないのよ。まだ時期尚早だと思つていただけ、今こそあの子の背中を押してあげるべきなのかもしれないわね」

そう言つて部長は虚空から資料を取り出した。……………これは聖剣、しかもエクスカ

リバーについての資料!?　読み進めると、なんだこれは!?　7本!?　エクスカリバーが

!?　7本!?

「リアスせんせー！　エクスカリバーが面白分裂7本分裂剣になつてんですけど!？」

「ええ、先の大戦の時にエクスカリバーば粉々になつたらしいのよ」

先の大戦っていうと……………ドライグ???

『知らん、管轄外だ。……と言つてやれば良かったのだが。確かに余波で破壊した記憶はあるな。敢えて』

あえて!?! 聖剣の頂点みたいな武器を、余波で!?

『俺の名前と、出自から察しろ。妙なところで鈍いな貴様』

えー……………と。ドライグはブリテンの……あー。成程、アーサー王以外が使つてる

エクスカリバーが気に食わなかつた的なアレだな? コイツ……コイツ本当……!!

「下手人、というか犯人は僕の相棒らしいです……………」

「……今明かされる歴史の新事実ね。聞かなかつたことにしていいかしら?」

「はい、僕もそうします」

顔を見合せて神妙な顔で頷く。本当に僕の相棒ろくなことしてない。ついでに些か強すぎやしないか? 生物としてのスケールが違い過ぎる……。

「ともかく、エクスカリバーは破壊され、その破片からコアを作り出し、それを元に7本の剣が鍛造されたわ。それがそこにある7本のエクスカリバー」

えーと、どれどれ……『破壊の聖剣』『擬態の聖剣』『天閃の聖剣』

『夢幻の聖剣』『透明の聖剣』『祝福の聖剣』『支配の聖剣』……効果も色々、

行方も色々……色々???

「あの、行方不明なのが4本もあるんですけど」

「いい着眼点ね」

ふふん、と勝気に笑って部長は資料から3枚の紙を抜き取る。「天閃」と『夢幻』と『透明』のエクスカリバーの資料だ。

「支配の聖剣だけ、どうしても行方が掴めなかったのだけど、この3本だけは行方を追えたわ。つい先日『神の子を見張る者』が教会から奪ったみたいよ」

「……………えーと、それヤバめの大事件では？」

「教会側からすれば失態どころじゃないスキャンダルよ。でも大事なのはそこじゃないわ」

「……………んーと」

資料によると『支配の聖剣』以外は元々教会側……正教会やらカトリックやらプロテスタントやらよく分からんが、とりあえずそっち側で確保していたと。つまり正当な所有権はヤツら様にある。んで、墮天使側が内3本を奪った、大した盗人だな。つまり正当な所有権は無いので……

「……………教会と墮天使の問題に悪魔が介入する、という問題はあるけれど、それ以外は僕達がつぶつ壊しにいつても政治的には問題無い？」

「細かく見ていけば他にも問題はあられるけれど、無視できる、または相殺できる程度ね」
「相殺?」

「貴方が殺した墮天使の件よ。アレは『神の子を見張る者』側の監督不行届、つまり向こう側の落ち度よ。これを使わない手は無いわ。手放して喜ばないけれど、お手柄よイツセー」

「えへへ……」

つまり、つまりだ! 彼の復讐をするタイミングは今しかない、ということだ!

「これが天の采配なのか、魔の采配なのか。それとも違う何かの思惑なのかは分からないけれど、またと無いチャンスよ」

この情報をそのまま祐斗に伝えるわけにはいかないけどね、と少し困った表情をしつつも、部長は彼のバックアップを全力でやるつもりだ。

「っし! 分かりました、僕にできることはありませんか!？」

「ええ。昨日のお願いを一部取り下げることになるけれど、頼みたいことがあるわ」

そして部長は僕に耳打ちをし……ええ、

「……マジっすか?」

「マジもマジ、大マジよ。流星に今から動くわけにはいかない以上、万全の状態を整える必要があるわ。しかも敵は7分割されたものとはいえ、3本のエクスカリバー。無策で

向かわせないためにも、ね？」

「いやまあ、部長がやれつて言うなら僕に否はないですが……………」

あまり言いたくないけど、奇策の使い方が若干僕に似てきてる。悪影響を与えてしまったか？ と不安になるのだった。



「というわけですまん、馬鹿共。僕はしばらく九頭龍亭に掛かりつきりになる。それと夜はしっかりと鍵を掛けて引きこもるように」

「また何か事件かよ……………」

「言うな、自覚はある……………」

翌日の昼休み、屋上にて。久しぶりの休みだうえーい、ということと馬鹿共と遊ぶ約束をしていたのだけど、部長とのお願いでそうもいかなかったからそれを反故すること。まあ危ないことになるかもしれないから、申し訳ないけど渡りに船感はある。

「日下部の野郎には？」

「今さつきメッセ飛ばした。あいつにもまたかつて言われた」

「そりや言いたくもなる。…………お前、死なないよな？」

「阿呆、まだ死ぬんわ。色々やりたいたいこと残してるからな、死ぬに死ぬん」

悪魔に転生してからようやつと、ようやつと現世で未練が生まれてきたところだ、此処で死ぬのは勿体なさすぎる。

「ま、だから適度に楽しみに待っててくれや。面白い話があつたら冗談交じりに聞かせてやる」

「あ、そういうのいいから可愛い女の子の話とか頼まあ」

「結局ミルさんの友達もミルさんの同族ばかりだったからな。ミルキー面白いけど」

「きつちり布教されてやがる……」

でもミルキーオルタナティブ面白いからね、しかたないね。

「じゃあ具足を身にまとった……多分武田信玄モチーフだから確か……赤糸威二枚胴具足? よく分からんけど武将スタイルでキメキメの外国人留学生スーザンの話とかになるな……」

「キワモノもキワモノじゃねえか!! いや問題は中身だ……」

「美少女だったのか!?! どうなんだ!?!」

「いや、素顔見れてないし西洋甲冑を纏った堀井サンとラブラブしてるし」

「男付きかよおおお!!」

「西洋甲冑男ですら女の子と付き合えるのに、なんで俺たちは……っ!」

「変態だからじゃね？」

僕のキビシー監視のお陰で決定的なこととはしてない、具体的には覗きとか。でも普通に教室で男のバイブルおっぴろげたり猥談するから変態のレッテルは貼られてんだよな。馬鹿だなあコイツら。

「そういえばイツセーも片腕に籠手つけてたよな……？」

「時代は甲冑系……？」

「嫌だよ僕は、そんな駒王戦国時代みたいな絵面」

ついでに言うなら僕も全身装甲でできるようになった側なので、そのことを言ったらマジでコイツら甲冑を纏ってくるかもしれない。黙っておこう。

「せめて見てて楽しいのにしようや。デビハンの装備みたいな」

「仮にも悪魔が悪魔とか龍とか殺すゲームを話題に出すなよ」

「ファンタジー度薄くて萎える……」

「現実なんてそんなもんだよ」

でも漆黒龍の忍者っぽい装備とかカッコいいし、デビハンの装備は色々好きなんだよなあ。

「麒麟装備（女子）！」

「漆黒龍装備（女子）！」

「歪みねえなお前ら」

「見てる分には愉快だが、まあこの分だと女の子とあれやこれやは遠そうだねえ。

「ま、そんなわけで暫くは動けねえのでよろしく。では僕は部活に行ってくる」

「もつとちゃんとした女子の話を仕入れてこいよな！」

「できればタツパが小さいと尚良！」

「へいへい……」

さてと、臨時会議に出席しますかねつと。



2人と別れて旧校舎に向かう途中。ちよつとだけ警鐘が鳴った。なんとというか……厄介事でも死の危機でもない初めての鳴り方で困惑。最早警鐘じゃなくてお知らせベ
ルじゃん。

「なんだと思う、コレ」

『分からん。そもそも俺にはその警鐘とやらは聴こえないからな』

「感覚を共有するということよりは、感じたものを共有してるのか。だから僕が聴いた時の反応は分かるけど、つてこと？」

『大まかにはな』

どうしたもんかなあ、参加せずに帰りたいなあ。でも今日は参加しろって言われたしなあ。何か鳴ったってことは何か起こるってことでしょ？ 今もう別の案件抱えてるからこれ以上仕事したくないよ……。

『シャキツとしろ、ふにやふにやるな。隠蔽しているとは言え、お前は赤龍帝なのだぞ。自覚を持って自覚を』

「うう……相棒がスパルタ……」

まあそもそも逃げる選択肢も無く、べらぼうに強い気配も無いし、多分悪魔の気配もかしないし、陰鬱な気分になりながら僕は足を進め、部室の戸を開いた。

「遅くなりました……っておお？」

何かある、何かあると思っていたがオカ研部以外に、生徒会長と……お、これはこれは！

「匙クンじゃーん！ え、超久々、というか駒王学園だったんだいがいー！」

「げっ、兵藤……」

「げっ、とはなんだ、げとは。昔共闘した仲じやんかよ仲良くしようぜ〜」

「うるせえ近寄るなこの悪魔の赤パーカー！ 共闘というかあの時はお前がひたすら悪魔だっただけじゃねえか!!」

「悪魔ですが？」

「生物的な意味じゃなくて性根の話だこの悪魔！」

やだ辛辣、聞きまして奥様？ と部活の仲間に視線をやると、テンションがカス状態の祐斗クン含めて全員から視線を逸らされた。解せぬ。

「でも元氣してたんだ、良かったよ。あの後報復とか無かったか心配だったんだ」

「報復も何も、お前がきつちりカタに嵌めたんだろ。全員他所に行っちゃったよ」

「捕虜の扱いは深窓の姫の如く扱うか、ゴミカスの如く扱って根絶やしにするかの2択だぜ匙クン」

「別にお前戦争屋じゃ無いだろ……無いよな？ 仮にそうだったとしたら納得もいくんだが」

軽快に僕と会話を交わす彼は匙クン。下の名前は知らん。中学に成り立ての時、不良に絡まれていたのを割り込んで一緒にぶっ飛ばしたっきりの仲である、つまるところ良くは知らない相手だ。なんでだよ。

「というかそつちの方は覚えてくれてたみたいじゃないか、声ぐらい掛けてくれよ悲しいなあ」

「やだよ俺があの時どれだけトラウマになったか知らねえだろお前。赤パーカーの噂が流れてくる度、この学園でお前の名前が聞こえてくる度、ひっそりと、ひっそりと息を

潜めることになった俺の気持ち分かるか!？」

「ぶーぶー、お前には何もしてないのにい」

「(い)ほん」

「あつ」

部長と生徒会長の咳払いが聞こえてきたのでとりあえずお口チャック。改めて見ろが、このお方も観賞用レベルの伶俐な美人って感じよな。

生徒会長、支取蒼那先輩。キツそうな見た目で男性人気よりも女性人気があったと記憶してる。真面目そうな見た目に違わず優等生、眼鏡の似合うバリキヤリって感じでカッコいいよなあ。

………待つて欲しい。ここには悪魔の気配しかないんだけど。

「部長、ねえ部長。今ここにいる全員、悪魔の気配しかないんですけど………」

「あ？ お前知らなかったの？ ……いや、知ってたらさつきみたいにダル絡みしてくるか。今の今まで気が付かないのもどうかと思うけどよ」

「サジ、私達は表の生活以外ではお互いに干渉しないことになってるのだから仕方ないのよ。それに彼は悪魔になって日が浅いわ。気が付かなくても当然よ」

そう言つて彼女は僕の方を向く。なんかすごく『ジツ……』って感じで見つめられて息が詰まりそう。……僕なんかやっちゃったっけ？ 高校に入つてからは足のつく様なや

らかしはしてない、よね？ 大丈夫よね？

「初めまして、兵藤一誠くん。噂や活躍は耳にしているわ。支取蒼那は表の名前、本名はソーナ・シトリーと言います。以後、お見知り置きを」

「ッ！ これはとんだ失礼を」

思わず頭を下げてしまうが、でも仕方のないことだ。だってシトリー家と言ったら、お家断絶してない悪魔の家で、かつ魔王セラフォル・レヴィアタン様を排出した家じゃないか！ つい先日魔王様とエンカウントしたから優先的に教えてもらったのもあつて記憶に新し過ぎた。

「大丈夫、そんなに畏まらないでください。此処では一生徒会長として接してください」
「は、はあ……」

つべえ、息が詰まるってレベルじゃねえぞ。というかこの学園なんなの、土地は部長が治めてて生徒会長が魔王の一家？ ズブズブにも程がある。というか大丈夫なの、どういう関係？ と困ったので匙クンに視線を投げてみる。するとやつは困ったように顔を歪めつつも説明をしてくれた。

「この学校は実質グレモリー様が支配してるが、それは裏の話。表ではシトリー家が担当してる。つまり昼夜で役割分担してるんだ」

「ふむふむ……ああ、てことはつまり生徒会役員って全員悪魔？」

「そういうことだ。普段お前が無法やらかしてられるのも会長や俺含めたシトリー眷属が日中頑張ってるからだ。ちったあ感謝しろ」

「いや、それは普通に感謝感激雨あられだよマジで……」

……で、だ。何故このタイミングで生徒会長、シトリー様がオカ研部に？

「球技大会の件で少し話をしないといけなくなつたのよ。それでついでだから、新人悪魔達の紹介をということになつたの」

ああ成程、アーシアは先に来てたから紹介自体は済んでたのか。それで球技大会件とはなんぞや？

「イツセーさん、イツセーさん、朝のホームルームで先生が言つてたじゃないですか」

「朝のホームルームで？ えーと……」

同じクラスのアーシアに言われて今朝のことを思い出す。確か……クラス対抗、部対抗で球技大会をすとかなんとか。ああ、その球技大会のことね。

なんとか記憶の海から目当ての物を取り出してると、生徒会長が今度は部長に向かつてガンつけていた。いや単純に視線向けてるだけでも知らんけど、圧がね。

「先に簡単な話の内容は聞いていたけれど……どういふつもりかしら、リアス？」

「どうもこうも、先に伝えた通りよ。他の一般生徒達の為に、公平を期すため私たちオカルト研究部の球技大会、部活動対抗の部は参加を辞退するわ。その代わりと言つてはな

んだけれど、球技大会の運営の手伝いをどうか？ という話よ」

「すげえ、もつともらしいこと言ってるけど実の所『球技大会に割く時間が無いから辞退したい』ってことだ。生徒会長はそのこと知らないだろうけど、部長の性格からしてこういうイベント事に参加しないの不自然に見えるんだらうな。というか結構距離感が親しい感じだな。幼なじみかなんかだらうかこの2人。」

「……腹を割って話しましょう、リアス。それとも此処では話せない内容かしら？」
「……あの生徒会長、なんで僕をチラツと見たんです？ 僕なんにもやってない。なんにもやってないです。」

「まあ、らしくないことはしてる自覚はあるけれど。そんな嘔吐きを見るような目を向けることはないじゃない、ソーナ。……気になる情報があったから、夜の監視に力を入れない。その程度よ」

「そう言っただけで部長はいつもの如く虚空より資料を取り出して、それを生徒会長に手渡した。すると会長の顔がみるみると険しくなっていく……。」

「コレの信憑性は？」

「6割ね、魔王様には既に報告済みよ」

「……本来なら学校に通うのすら時間が惜しくなるような話ね」

「でもそれを外に悟らせるわけにもいかないわ。だから可能な限り日常を送っているよ」

うに誤認させる」

「……分かりました、オカルト研究部からの提案を受け入れます。此方から人員の手配は必要かしら」

「それも含めて話を詰めましょう。万全な態勢で望まないとダメだわ」

い、一体何の話だろう。多分昨日の夜の話関連ではあると思うんだけど……。

「では、顔合わせ自体は解散ね。放課後も一旦此処に集まってちょうだい。詳細はその時話すわ。ではソーナ、朱乃、いきましようか」

そう言つて部長は朱乃サンと生徒会長を連れて部室を出て行ってしまった。……えーと、どうすればいいのやら。

「とりあえず、よろしく?」

「……よろしくしたくねえけど、よろしく」

いやはやしかし、悪魔つてのはどこにでもいるものなのだねえ……。

その4

「というわけで、新しくこの店で働くことになりました木場クンと匙クンです、皆さんよろしく願いますね」

「「よろしく願います！」」

「よ、よろしく願います……？」

「よろしく願います……。いやなんでこうなつてんだ？」

「じゃあ今から僕達は事務所の方で研修行うので、何かあつたら呼んでくださいね、すぐ対応しますから」

「というわけで九頭龍亭1号店に仲間が2人も増えましたーぱちぱち。……少しだけ経緯をおさらいしようか。」



元々僕が部長にお願いされていたのは、祐斗クンを研修という名目で九頭龍亭に待機させたいということだった。僕は彼のお目付け役として、表向きは店長業務に当たって

くれということだ。

『あなたの裁量で、説明する範囲は任せるわ。必要なら全部話したっていい。その辺の見極めは得意でしょう?』

『そりゃまあ、顔色伺うのは得意ですが』

なんでこんな奇策を打つことになったか。1つは単純に、仕事を沢山与えて色々考える余裕を奪おうって話。まあこれは上手くいけばいいな、位でハナから成功するとは思ってない。そこまで部長も僕も彼の復讐心を舐めてはいないのだ。

もう1つは、通常の契約業務に支障をきたしかねないから。僕は『でもあのなんでもソツなくこなす優等生イケメンだぞ……?』と思ってたんだけど、部長は眷属のことをよく見ているようだ。今日の彼は結構目も当てられない感じで上の空だった。この状態で契約業務に就かせたら彼自身の悪魔としてのキャリアに傷が付くかも、ということとで特殊な形態を取ってる僕の悪魔としての仕事の手伝いをさせるとのことだった。まあ元から何回かはグレモリー眷属で研修してもらったから、それが早まっただけってことなただけだ。

最後に……まあこれが1番重要なんだが、僕の役目がお目付け役とあるように有事の際は彼を無力化してくれということだ。朱乃サン辺りなら問題なく止められるそうなのだが、互いに無傷という訳には行かない。その点、僕は無傷で相手を昏倒させる裏技

があるから、それ故の抜擢ということだ。

……んで、匙クンまで一緒に来たのは僕も謎、というか生徒会長から貸し出された人員の1人ということらしい。夜間警備にも何名か手伝いを寄越して貰えたらしい。代わりに表の部活で生徒会の仕事をいくらか肩代わりする、という形で等価交換みたい。てなわけで本当に申し訳ないね、急な話で戸惑ったでしょ。最悪匙クンは働かずにここで時間潰すでもいいからさ」

「いや、そういうわけにもいかないだろ。会長の命令で来てるわけだから、ここでちゃんと仕事しなきゃ会長の顔に泥を塗ることになる。……それに、ちゃんと給金出るしな」

「おん、そこは任せてよ。時給1500円ね」

「飲食店のバイトにしても破格の時給だな……ちよつとありがてえ。儲かってんのか？」

「じゃなきゃ高校生が店長やるの許してくれないよウチのボス。仕事に関してはあのヒト結構シビアだもん。あー、ラーメンも勤務4時間につき1杯は賄いで出せる。そののサーバーのスポドリはどんだけ飲んでもOK、熱中症対策だ。細かいお店のルールは纏めたのがその棚に置いてあるから適当に読んでおくれ。どっちにしろ初日から2人をお客様の前には出せないからね」

「分かった。………どんなアレかと思っただけど、ちゃんとした店なんだな」

「4月まではブラックだったよこも、ウチのボスのお陰だ」
「へえ〜」

そう言つて匙クンは事務所に置いてあるデスクの1つに陣取り、僕が頼んだとおり店のルールを纏めたファイルを手にとって読み始めてくれた。

……さて、今からが本題だ。僕は部長に教わつた簡単な遮音結界を魔力を使って僕と祐斗クンの周りに張る。これも言わば振動を操る技なので、水分子の振動を制御できるようにした僕には割と直ぐに身に着けることができた応用技だった。

「じゃ、ちよつと個人面談をしますわね〜」

「……これはキミの差し金かい？」

「半分間違ひ。昨日様子がおかしそうだから部長に報告はした。警鐘も鳴つたしね」

「……………」

神器の詳細は伝えてないけれど、警鐘の話については余すことなく眷属の仲間たちには言つてある。だからどういふ理由で鳴つたのか分からない、といった感じだ。

「遠くない先で、厄介事が起こるって感じの鳴り方だった。多分、聖剣絡みだろう。……ごめん、僕は部長からキミの過去について無理矢理聞き出した。あまり聞かれたくないことだったろ」

「……いや、いつか行動に移したとき、隠し切れることじゃないからね。それで、暴走をさ

せない為にこんなことを？」

「2割正解。でも我らがボスは、キミの復讐をバックアップするつもりの様だぞ」
「…………えっ？」

心底意外だったのか、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔、のまさにお手本と言った感じで、口がポカんと空いた間抜け顔を晒した彼を見て、『どこまで話したもんか』と悩む。

「詳細は教えてもらってないけど、教会側からエクスカリバーが盗まれたらしい」

「ツ!!」

「落ち着け、そして座れ。…………無理もないってことは察するけどな」

ガツと立ち上がった彼を制止。向こうもなんとか理性を総動員してくれたのか、なんとか座ってくれたが、目も据わっている。怖いから本当に勘弁して欲しい。

「放課後集まって説明あったろ、駒王町に神の子を見張る者の手のものが侵入した形跡があるって。あれは7割嘘なんだってよ」

「…………でも、嘘なら部長や生徒会長は動かない」

「イエス。奴ら様の行先の候補に駒王町が最有力候補に入ってる、という予測だ。そして、エクスカリバーを盗んだのは、」

「神の子を見張る者…………。成程、それで僕の監視をするってことなのかな？ 僕が我を忘れて行動した時に対処する為に」

「3割正解。……言ったら、我らがボスはキミの復讐をバックアップするつもりだつて」
そう言つて、僕は自分の通学カバンから資料を……部長から預かったエクスカリバーのソレから見せてもいいものを纏めた束を引つ掴み、向き合つた陰鬱な面の男に超越す。

「これ、は……」

「監視目的なのもあるが、実の所拘束時間が契約内容次第で大きく変わる通常業務をさせない為なのが主題だ。監視網に引つかかつた時にお前に直ぐに出てもらえる様に、かつお前の経歴になるべく傷をつけない様に仕事を調整するとなると、ここで研修というのが1番都合が良かったのさ。データ取りで研修はしてもらいたいけど、いなくても仕事は問題なく回るからな」

「……………」

「お前、本当に愛されてるよ。あのヒトはお前に幸せに生きて欲しかつたみたいだけど、それでもお前の生き方を否定していたわけじゃなかった。こうして虎視眈々と、合法的にお前が本懐を成し遂げる機会を狙つてたんだよ。見返りもクソもない、なんならかなり危ない橋を渡つてる。これが愛じゃなけりやなんだつてんだつて話さ」

彼の目に戸惑いが宿る。多分、自分の胸に去来した感情を上手く整理できないんだ。何となく察するものがある。自分は恵まれているとか、それに近いことを考えてるだろ

うと思う。

「僕もその手の感情に理解はあるし、なんならこの手で復讐を完遂した身だ。それで前回の復讐を手伝わないは筋が通らねえ、全力でサポートしてやる。……だが、それでお前があつたヒトを窮地に追い込むことになってみる。必ず僕はお前を殺す。そしたら晴れて犯罪者だ、後腐れない様に僕も死ぬ。どうだ、やる気は出たろ？」

だから、だから今こいつに必要なのは罰してくれる誰かだ。その戸惑いをぶつ壊す、幸せになつてはいけない自分を罰する誰かだ。どーせサバイバーズギルト発症してんだ、その治し方を僕は知らないが、優しい言葉をかけるだけでなんとかならないことは知っている。部長にその役目は向かないだろう、他の面子もそうだ。コイツの中にいる自分の心が作つた誰かでもない。中々自分で自分を許すことはできないから、それだと延々と自分を責め続けるだけだ。やるべきは、多分僕だ。故があれば殺すだろうと確信ができるだろう、僕がやるべきだ。幸い理由なんていくらでもある。……若干損な役回りだけど、それで彼が前に進めるなら、それでもいい。

とても長く感じる沈黙の10秒の末、彼の方からそれを破つた。

「……殺害予告をして、それでやる気が出たかつて、普通聞かかな？」

困つたように、それでも今日初めて、彼は笑顔を浮かべた。

「いいじゃんか、励まし方は人それぞれだ。最近身に着けた、僕なりの個性つてヤツよ」

「初めて会った時から、イツセーくんは個性に溢れてたけどね」

「うーん、そいつはちよつと目が節穴じゃねえかな」

「ナハハ！ と笑うと肩をちよんちよんとつつかれる。なんだよ、今ちよつぴり感動的なシーンなんだが！」

「おい、おいお前ら………エクスカリバーって、神の子を見張る者って何の話だよ……？」

「あつ」

『途中から遮音結界解除されてたぞ、迂闊なヤツめ』

も、もしかして僕ちゃん、やっちった……？



僕の良くないところは1つのことにしか集中できない点だ。つまりどういふことかかって言うのと祐斗クンとの話に集中し過ぎて遮音結界の維持が疎かになっちゃったらしい。馬鹿なのかな？

というわけで隠すわけにもいかず、彼に了承を取って全部ゲロった。洗いざらいゲロった。部長に匙クンには話しちゃいけないとか言われてないのでゲロった。

結果どうなったか……

「うううう……」

匙クンが泣いた、あまりに悲惨な話に大号泣した。というか当事者から話してもらっただけあって新情報と細かな感情の補足も入って話を先に聞いてた僕も目から鱗と涙が溢れた程だ。

「お前、本当に辛い過去を送ってきたんだな……ちくしょう、我がことのように泣けてきやがる……!」

「あーあー泣くなどは言わんがシャツで顔を拭うな。おら、ウエスで顔拭け」

「すまねえ……助かる……!」

それにしても、結構涙脆いというか熱血というか……ちよつとしか付き合いがなかったけど、それでもなんか意外な一面というか。

一頻りおんおんと泣いて落ち着いたヤツは、真っ赤な目を擦りつつ口を開いた。

「そういう話なら協力してやりてえ。やりてえ……んだが、会長がなんて言うか。多少の折檻で済めばいいんだが……」

「生徒会長はやっぱり厳しい感じ?」

「そりゃあもう。もちろん理不尽なこととはしないが、明らかにルールを破るようなことをすれば……」

顔を青くし、身震い。そ、そうか。なんか思い出させたくないこと聞いて悪かったよ、うん。

「とりあえず、部長がどの程度生徒会長に話をしたか分からないから確認は取つといた方がいいと思う。流石に堕天使や聖剣相手に突撃しろとは僕の勝手な判断では言えんよ、実際僕は堕天使に殺されて転生したしな」

そう言うともまるで信じられないものを見たかのようにヤツがこつちを見てくる。なんだよう、どういう解釈で受け取ればいいんだソレは。

「いや、お前死ねたんだなって」

「不死身のバケモノとでも思ってたんかいテメエ」

「いやいや冗談だ、9割ぐらい。で、その堕天使は……」

「喉喰いちぎって殺した、完膚無きまでに」

「ああうん、それでこそだよな……逆に安心したわ」

逆に安心するってなんで、と思わないでもないがそれは置いておいて。……いやあ、元カノ堕天使をちゃんと殺しておいて良かったよ。じやなきや夢に出てきて魔されてそう。ふあつ〇ゆー。

「そういや、僕は部長から九頭龍亭の手伝いで匙クンが来るって聞いただけで詳しいこととは聞いてないんだけど」

「駒王町に他勢力からの侵入者の形跡があったから警戒態勢に移行するって聞いたんだよ。それで俺はお前に協力しろって言われてここに来ることになったんだ」

にやるほどねえ。不確定な情報が多いから確実なことは言えんわな。………あつ、やっぱ話したのまずかったかもしんねえなこりや。

「……祐斗クン、これ話しちゃまずかったかな?」

「うーん……かなりまずいと思うよ」

「匙クンごめん、聞かなかったことにしてくんね?」

「できるかアホオ!! この、このやり場の無い感情をどこにぶつけなければいいんだよ!」

「敵が来たらそいつらにぶつけよう! 大丈夫、部長の予測では9割駒王町に来るってよー!」

「ちくしょう分かったよその時はやってやる! でも兵藤、お前本当に覚えとけよ!

絶対何かで復讐すつからな!!」

うがア! とキレル匙クンに本当にごめん、と心の中で謝る。賄いラーメンはちよつと豪華にしてやろう。

「ところで結局、僕達はどこで何をすればいいんだい? 初日から店に立たせるようなことはしないと断っていただけ」

「あー、それね。ちよつと待ってて」

そう言つて僕はまたもカバンから一つの紙の束を取り出す。僕が今制作中の、九頭龍亭のマニユアル：店長編だ。

「祐斗クンは聞いてるかもだけど、ウチの部長は『人間相手に契約を取りやすくする仕組み』を商材として売ろうと考えてるんだよ。ターゲットは契約業務が振るわない元転生悪魔の上級悪魔とかに対して。九頭龍亭はその実験で運営してるところがある」

「リアス部長、そんなこと考えてるんだな」

「そ。んで、そうなると重要なのはこういう店舗経営が初めてでもちゃんと運営できるマニユアルってかなり重要だと思ふんだよね」

そう言つてマニユアルを2人に見せる。作りかけだったそれを突貫工事で作ったものだ、あまり人に見せられたものじゃあないが、コレが一応の本題なので見せない訳もないかない。

「完璧なマニユアルつてのはこの世に存在しないと思うけど、それを商品として売り出す以上、それに近いものを作る必要がある。つまり……」

「未経験の俺たちでも、問題なく店舗運営ができるマニユアルが仕上がってるかどうかを、実際にやってみせたいってことか」

「うん、データ取りつてそういうことなんよ」

ウチの時給が高いのも、その実験手当が含まれてるところがある。将来への投資だ。

まあ、儲けはちゃんと出してますが？ だいたい経営担当の平野サンのお陰なんだケド。あのヒトを切った前の会社は相当人材に余裕があったに違いない（ド皮肉）。

「かなり大きなプロジェクトに関わってるんだね、このお店……」

「そうなんだよ、結構荷が重いんだよ。なんで僕が店長やってんだらうね……」

「だいたい部長の罨だが。できる女社長だけど無茶振りは酷いよね。」

「まあだからって2人にそれ見てぶつつけ本番でやれってんじゃないので、それを見て何となくできそうかどうかを判断してもらいたいのと、実際に厨房に立ってもらってラーメンの提供をちよつとだけでいいからやつて欲しいって感じよ。校外学習でやる職業体験の延長線的なアレで」

「おう、そういうことなら任せとけ！」

「うん、じゃあイツセー店長。よろしくお願いします」

ま、本題は聖剣を盗んだ墮天使の件なんだけど。でもことが起こるまでは心穏やかに過ごしたっていいじゃない。そんな風に思う僕なのであった。

その5

「一日二日で収穫なんてそうそう、とは思ってたけど、こうも何も無いとなア……」

などと僕の口から愚痴が響く緊急態勢から3日後の九頭龍亭。今は自分一人しかないから良いけど、祐斗くん辺りの前では死んでも言っちゃダメだろうね。

とはいえ箸にも棒にもかからないのは何か違うでしょうと。部長の謎情報網にも追加情報引つかかかってないのがなあ。……敵にも手練がいるんだろうか？

『その線もあるが、それ以上に少数で行動しているか、だ』

「ああ、人員が少ない方が情報の漏れは少ないもんね」

となると、前に駒王町で活動してた堕天使グループみたいに神の子を見張る者から認知されていない活動ってこともあるのかな。その上で教会からエクスカリバーを盗める実力……ううむ、これは危ない香りがしてきましたね。

『くくつ、願ってもない状況なのではないか？ 都合良く強い敵がまたやってくるぞ。これを取り越えれば、お前はまた1つ強くなれる』

「阿呆抜かせクソトカゲ、平和に過ごしたいから強くなりたいのにこんな本末転倒なことがあるかよ」

『クソトカゲ言うなぶち殺すぞノータリン』

相棒との殺気のぶつけ合いも張り合いがない。なんだかんだ気心知れてきた辺りで罵倒も本音じゃないってバレてくるものだから仕方ないといえそうなのかもね。厄介な同居龍にんだよ全く。溜息をつきながら、僕は『強欲』の装甲板を取り出す。使い慣れ過ぎたせいでこのぐらいなら最適化しなくても効果を使えるようになってしまったよ。

にしても本当、この『強欲』本当に便利だよ。魔力さえ潤沢ならなんでも物を2倍にできるんだから。賄い飯もこのとおり、どんぶりも含めて物理的に2倍。食べ盛りの高校生には神のような能力だ、まさに悪魔的！

『その力を小さな欲を満たすためだけにしか使わないところが、ある意味相棒らしいが』
「猫に小判、豚に真珠、兵藤一誠にチート能力。宝の持ち腐れにも程があらアな。魔力が少ないのもあって大それたことできないものもあるけど。この間の命の複製なんかはもうできないだろうしね」

『偽装を解けば自身の魔力を延々と増やしていけるが？』
「……………言われてみれば確かに」

でもそれはかなり未来の話だろうなあと思いつつながら麵をすすする。今日もいい出来だ、多分5秒程度背脂の炊きが甘いと脳内の平麵さんが言ってるが。

「そもそもなんでこんな能力が生まれたんだろ。概念的に合ってたのかな。籠手も力を

10秒毎に2倍にしていく効果だし」

『あとは悪魔側の概念にも近い。対価を得て、物を与える。皮肉なものだな、やってることとは施しを与えるどこぞの神と大差ないぞ』

「やめろお前、多方面を敵に回すぞ」

いや、回した結果がこのザマか。ざまあwww

『だがそれも一興かもしれない。相棒、お前神を目指してみるか？ 才能あると思うぞ』

「平穩無事とは言い難い末路迎えそうでいやーやーでーすーう。誰かが作った平和を維持して、それを享受するニートみたいな生活したいのー」

尚働くつもりはある模様。ニートとは一体。

「さしあたってはまだ解放されてない残りの大罪&虚飾を使えるようにすることだな。とりあえず『強欲』が発現した経緯を聞くに、僕に合ったモノは解放が早そうだったことは分かったケド」

『今のところ虚飾と傲慢は早く仕上がりそうだ。逆に怠惰と嫉妬、色欲は全く進んでないな。松田と元浜辺りに指南してもらったらどうだ？』

「やだよ、そのせいで『色欲』が透視能力とスカウター能力になったらどうするんだ。使いたい所無いぞ」

『案外服が弾ける能力になったりしてな』

服が弾ける……なんだろう、理由は全く分からないのに使ってる図が思い浮かぶのは何故だろう？ 寒気がしてきた。

「そ、それはともかくだよ。虚飾が早そうってんなら話が早い。実は考えてることがあるんだよ」

『ほう、頭の中で詳しいイメージはできるか？』

「ちよつと待つてね……」

想像する僕の考える『虚飾』の能力。僕の出した装甲板を誰かに纏わせる力。ついでに大罪の能力と倍加の能力も付与した状態で。

『大罪の力と倍加の機能は本体の装甲板を使わなければ難しそうだが……それなら意外と簡単に形にできそうだぞ。1日、といったところだ』

「わあお。流石だね相棒」

『しかし何に使うのだ……ああいや分かった、今イメージが届いた。聖なる力への耐性を味方につけたいのだな』

「そゆこと」

僕が心臓とそれに繋がる血管、あと骨を総とつかえしたせいで身体は徐々に人型ドラゴンのそれへと変わってしまってしまっている。ちよつと力の加減ができないとか、悪魔の翼が鱗がついてきてきてなんだかドラゴン仕様になったりとか、結構不具合が出てきてる

んだけど、完全な悪魔から外れたことでメリットも沢山あった。身体そのものが強くなっていったこともそうだが、今回の話に関係あるのは『聖なるものへの耐性』だ。

「聖水なら飲んでも舌が痺れるくらい、清めの塩も舐めると気持ち悪いだけ、十字切つても聖書を読んでも軽くデコピンされた程度。……凄いねドラゴン、耐性が素晴らしいよ」

『その分竜殺しドラゴンスレイヤーに対しては弱くなるがな。お前が今一番気を付けるべきはアスカロンだろう』

「ああ、聖ジョージがドラゴン退治に使った聖剣……」

流石に聖剣と竜殺しのダブルパンチは耐えられそうもない……というのは置いといて。

「装甲板も多少は悪魔属性入ってるけどさ、駒のシステム使ったから。でも主成分はドラゴン、というか籠手由来のものでしょ？ 実際聖水ぶっ掛けても陽の光を当ててもなんもなかったし」

『ああそうだ。お前の目論見通り、たかが聖剣の放つ気如きで装甲板が溶けることは無い。無論、それを扱う剣士が手練ならば、聖剣関係なく技量で裂かれることもあるだろうが』

「だよな。とはいえ気休め程度にはなるんじゃないかと思って」

「魔力を少し込めて、『強欲』の力を使う。すると新しい強欲の板が机の上にバタリ、と現れた。」

「こんな感じで量産のアテはあるからさ、それができると本当に助かるのよ」

それに、相手に無理矢理装着させてあれやこれやとゲスイことも……ケヒヒヒヒ。

『……全く、後者の方が本題な気がしてくるな。だがまあ良いだろう。自分を騙すことに定評のある我が愚かな相棒よ、その見栄に見合った虚飾を作りあげておこうではないか』

「おーう、頼まア！」

そうしてドライグが神器の深層へと意識を落としていく。多分前と同じで『決殺の手』ベースの機能しか使えなくなるんだろうが、前と違って今なら『最善手』もあるし、あと1日だけだし、安心感は段違いファンキガイだ。

「さて、ご馳走様でした」

2杯分のラーメンを平らげ、手を合わせる。土日以外は中々開店から張り付くなんてできないけれど、これなら問題無いよねって感じの仕上がりである。僕が店長でも何とかなるもんだなあ……。

「……おい兵藤、休憩中悪いがちよつといいか？」

「はいはい何さ匙クン」

どんぶりを食洗機のところ持ってくか、といったタイミングで店内の方から匙クンがひよこつと顔を出してきた。……なんか、凄い微妙な顔をしてるけどどうしたんだらう？

「小猫ちゃんが店に来てるんだが……これどうしたらいい？」

「あー………事務所呼んでもらえる？ あとごめん、休憩ちよつと遅くなりそうだね」

「まあその位はいいけど……」

18時を回ろうか、というタイミングであの子が来るのは珍しい。食券を買ってたら店員サン達が席に通すだろうから、とりあえず事務所の方に通して貰うことにした。一体何があったんだらう？



「……様子を見に来ました」

「ああ、そういう……」

折角来たんだしソフトクリームでもどお？ と言ったら丁重に断られ、切り出された本題がコレだ。意外、と言っては失礼かもしれないが、結構見てるのな……。

「……先輩達が2人で話している時、急に祐斗先輩の様子がおかしくなって。そしたら次の日からイツセー先輩も臨戦態勢みたいな顔になっていて。極めつけは部長から警

備の強化をされると言われたら、流石に誰でも怪しいと感じます。先輩達、結構顔に出るから」

「もちつと表情筋を鍛えるようにするよ」

「……しないでください。大丈夫じゃない時は、ちゃんと大丈夫じゃないって言わないとダメです」

悲しそうな顔で言われると、その……困る。無表情がデフォルトの小猫チャンがするから、つてのもそうだが、変に茶化していい類の感情じゃあないからな。前それで失敗してるし。

「んー……小猫チャンは祐斗クンの事情は知ってるということでもいいのかな」

「……はい。あと、どうして様子がおかしくなったのかも、部長から話を聞きました」
てことは、だいたい全て情報の共有はされている、と。部長の右腕にあたる朱乃サンは全てを把握してるだろうし、アーシアも元関係者つてことでちよつとした聴取も兼ねて話を通っているだろう。なんかすっげえ申し訳ねえ、祐斗クンのことは知ってただろうけど、今回ザワザワと僕らが動き出した件に関して多分小猫チャンだけ蚊帳の外だったかもしれない。

「……それは、良くはないけどいいんです。確かに仲間が苦しんでいる時に力になれないことは悲しい、です。誰にだって言いづらいことはあります。でも、何も知らないう

ちに、取り返しのつかないことになったらと思うと、とても悲しいです」

……それは経験談から来る様な、重みを伴った言葉だった。この眼前の小動物を彷彿とさせる少女にも、なにかさういつた過去があるんだろうと、確信するに十分な何かがある。その喉から発せられていた。

「……………悪いね、暗躍はクセなんだ」

「……………やめてくださいそんなクセ。普通の高校生が身に付けていいものじゃないです」
「わーつてるよ、最近それでも相談する癖をつけようとしてるんだコレでも」

実際はそんなことも無いのだけど。でも運命共同体の相棒ドラッグには話をするようになって、そこに嘘は無い。だからちゃんと本当のこととして目の前の後輩を安心させる嘘をつける。……………嫌になるね、ホント。

「でもまあ、祐人くんだけちよつと怪しいけど、誰も死のうと思つて動いてるわけじゃないから安心してよ」

「……………一番心配なの、先輩なんです。死ぬつもりが無いのは信じますが、いざ誰かが死にそうになったら、嬉々として庇いにいくでしょうか？」

「うーん反論できない！」

肉壁になれるのなら本望だ……………！　と思わないでもないからね。僕みたいな凡人と仲間の誰かなら、絶対仲間の誰か生かした方がいいし。

「でも多分しない方がいいんだらうなあ……具体的に我々の上司」

「……どんなことになるかは、火を見るより明らか、です」

間違いなく同じ末路を思い描いて、揃って微妙な顔になる僕ら。やっぱ愛が深過ぎるのも考えものかもしれんね。

「………で、本題は？ まあ大凡の見当はついてるけど。ホールなら今手が足りてないから猫の手も借りたいぐらいで」

「……話が早くても助かります。私も、先輩達の力になってみせますから」

むん！ と力こぶを作る後輩に、腕力が必要な仕事はほぼ無いんだけどな……とひっそりと思う、僕なのであった。



「此処が駒王町か」

「ええ、魔王の妹であるリアス・グレモリーが根城にしてる町。……私の出身地よ」

「あー……その、なんだ。悪い場所では、ないな。うん」

「濁さなくても良いわよ、ゼノヴィア。いい思い出も辛い思い出もある、それでも私にとつて大切な良いところではあるけれど。今重要なのは、此処が悪魔の根城で、墮天使

「コカビエルが此処で事を起こし、戦争をしようとしてる事だけ」

「……そうか、助かるよ」

「でも良いところなのは本当よ？ この任務が終わったら、此処に赴任とかできないかしら？」

「それは難しいだろう。何故なら我々は……」

「言ってみただけよ。願望を口にするぐらいは許されてもいいでしょう？ でもなければこんな依頼、やってられないわよ。こんな、死んでこいみたいな話」

「イリナ」

「……わーってるわよ。死んでも惜しくない、信仰の為に死ねるのなら。この言葉に嘘は無いわ。もうちよつと頭使えとは思っているけれどね。全く、今になって『さんぽ』の有難みに気付くとは」

「……イツセーくん、元気にしてるかな？」

その6

「ンじゃあ今日もお疲れ様でしたー。遅くまで本当にありがとうね！」

『『お疲れ様でした！』』

時刻は日付を跨いだ頃、普通のアルバイトさん達には帰ってもらい……………

「じゃあ悪巧みの時間と洒落こもうか」

「お前が悪巧みとか言うとシャレにならないからやめろ」

「犯罪の片棒を担がされそうで少し怖いよね」

「お前ら、終いにや僕は泣くぞ」

悪魔かよオノレらは……悪魔だったか。じゃあ仕方ないか。何を企んでるのかを察してる小猫ちゃんだけが苦笑するに留めてるのが唯一の救いだ。

「単純にアレだよ、本格的な深夜徘徊のお誘いってヤツだ。何のために夜の拘束時間を減らしたんだか分からないだろうってこった」

「そうならそうと最初からそう言え」

「あんな感じで言った方がいい感じに肩の力も抜けると思ったんだよ。……………お前のことを言ってるんだぞ優男、殺気しまえしまえ」

「……………ああ、分かつてるよ」

『深夜徘徊』、と言ったところで察しが着いたらしい我らが騎士、やはり恨みは根深いのかアレだけ言っても殺伐とする模様。仕方の無いことだけだね。

「ただ、大義名分が無けりや僕ら3人はともかく、匙クンは上司殿に折檻を食らうかもしれない」

「巻き込む前提かよ……………」

「でも今更蚊帳の外は嫌だろ？」

「それはそうだが……………」

てなワケで、と小猫チャンに目配せする。すると彼女は業務用の冷蔵庫から袋を取り出してきてくれた。中身は、アンパンとパック牛乳である。

「なんだこの刑事の張り込みセット、それも沢山」

「さつき小猫チャンに買い出しに行つてもらつてた。差し入れをしに……………という名目なら怒られんだろ？ 怒られるのは情報を開示しなかつた僕、というテイでいこう」

まあ行動を起こした初日からぶち当たるとも思わねえけれども。しかし樂觀するには僕の中身がなあ……………。

「……………裏は無い、よな？ そこは信用していいんだよな？」

「流石に怒るぞテメエ。僕は逃げも隠れもするし嘘もつくが、自分のやった悪行を擦り

「付けることも、それで恩を着せることもしねえよ」

「いや違え、そこは疑っちゃねーよ。底抜けのお人好しなのは重々承知してる。けどお前が俺たちをダシにして、1人で事を起こすことはほんの少し疑ってる」

「そつちもそつちで怒りたいけどねエ!? 花を持たせる位の配慮はできる男だが!」

匙クンからの評価が本当にボロクソで笑える、いや笑えねえや泣けてくる。おらそこ、納得したように揃って頷くんじゃあない!

「全く……いやまあ僕アドラゴン系神器持つてるから普通よりは厄介事に巻き込まれやすくなるとは考えてるけどさ。流石に3日やそこから何かが起こる程じゃあないだろ」

「え、??」

喉が裏返ったようなダミ声が匙クンの口から漏れてその他全員が視線を向ける。ビックリする程青ざめてるし……何より警鐘が鳴り始めた。これは、もしや……

「……単刀直入に。お前、もしかしてドラゴン系神器を持ってたり?」

「……する。『黒い龍脈』アフソーブション・ラインつつーヤツ」

「……………」

いたたまれなくなつたのか、ヤツは右手を突き出した。するとそこにはデフォルメされたような黒いトカゲの頭みたいなのが着いていた。

「……やったな祐斗クン、多分今日何か起こるぞ」

「……それ、喜んでいいことかな？」

「……なんかすまん」

ズーンと頭が重力に負け始める男子共、ご多分にもれず僕の視界も下の方に下がってくる。

空気を変えたのは小猫チャン。クラッカーにも負けない音量で手を叩いたことで、仲良く肩を跳ねさせて視界が上を向いた。

「…悪いことばかりではありません、少なくとも心構えができる。それに確定というわけではない。そうでしょう、イツセー先輩？」

「それはまあ……勿論。すぐにどうこうって感じの警鐘の鳴り方じゃなかった。まあコレも百発百中というわけじゃあないし、完璧にアテにしているものじゃないけど」

「なんだよその警鐘ってのは」

「後で説明する。ざっくり言うとな第六感」

「把握した」

なんにせよ、僕たちのやることは何ひとつとして変わらない。浮いた時間を使ってやりたいことをやるだけだ。ドライブが戻ってきてからが良かったけど、いつでも万全な状態で戦えるわけでもなし。

……仕方ない、腹ア括るか。

「じゃあ、差し入れしに行こっか」

気合を入れて領き合う。さあ、良からぬことを始めよう。



「……………おかしい、覚悟をキメてフラグも建てたのに。何事もなく差し入れが終わるそうなんだが」

「何も無いならいいじゃねえか。…………いや、巻き込まれたくないとかじゃなくてよ」

本っ当に何も起こらずに監視組に張り込みセットの差し入れがほぼ終わってしまった。あとは部長に渡すのみというところ。ココ最近立て続けにイベント開催中だったから疑心暗鬼になりそうだ…………。

「それに喜んでいいのか悲しんでいいのかやら、だよ。こんだけのフラグ力積み立てておいて何も無いつてことは、部長の読みが外れたってことだ。…………僕は短いけど、僕より付き合い長い2人的にどう？ あのヒトこういう読みを外すタイプ？」

「どうだろう…………根回しが異様に上手いこと以外は、そういう手腕が振るわれる機会って無かったからね」

「…………(コクコク)」

そうか、そうなのか……。待ってももしかして僕が眷属になつてからかなり面倒なことになつてないかあのヒト。

「……んー、やっぱどつかで死んだ方がいいか？ 白いヤツと一緒に溶鉱炉に沈んでいくシーン再現した方が良くない？」

「やめてね、本当にやめてね。絶対タダじや済まないから」

「次そんなこと言ったら、報告します」

「分かった、分かったから！ なんかあつたらその後一生陽の光を拝めなくなりそうで嫌なんだよー」

「お前、何したんだ……？」

「目の前で告白してほぼ自殺」

「タチの悪いヤンデレ製造機じゃねえか!!」

「うるせえ!! なんもかんも僕を復活させた悪魔の科学力が悪い!!」

あとは僕の中のクソトカゲが何より悪い。なんで僕に可能性を見たかなアイツ、目が腐つてんじゃないの？

「んんっ。まあともかく、杞憂ならいいんだが別の問題が噴出しちゃうな。あのヒト的にも満を持してつて感じだったし何も無いってエことは無いとは思うんだけど……」

そこで少し僕は考えてみる。もし僕が墮天使陣営側、しかも今回事を起こしたメン

バーだとして。どういった理屈で、どういった方法で次のアクションを起こすか。

「そもそもだ、聖剣を使って大それたことができるか？」

「と言うと？」

「これから復讐の為に聖剣を壊そうとするお前には申し訳ないことを言うんだけど……
剣は所詮剣だ、個人兵装であり、それで大それたことをしようにも限界があるように思
う」

「……………それは、確かに」

いや、凄い剣なのは分かる。人伝に聞いてさえ凄いと思えないのだから、それは
もう凄まじい聖剣だったのだろう。だが……それも所詮壊れる程度の剣だ（壊したのが
クソトカゲなのは置いといて）。神が持っていたインフレ性能甚だしい刀剣類とは比べ
るべくもない、特にインド神話に出てくるようなの。

「聖剣が欲しかっただけじゃねえの？ 神の子を見張る者は研究者が多いって話だろ、
じゃあ聖剣の研究しようと思つたつて不思議じゃねえだろ。あと単純に悪魔達オレに対し
ては使える武器だしよ」

「その為だけに教会勢力に喧嘩を売るような真似するか？ 下手したら戦争だぞ」

そう、下手したら戦争……………戦争？

「……………教会勢力への挑発、聖剣、警鐘、駒王町、魔王の血縁が2人」

そして今回、事を起こしたのは恐らくレイナーレ達の様な少数グループだと部長が予測していた。つまり、つまり、だ……。

「……溝を作つて戦争の火種を作る、こと？」

「まあその辺が妥当かしらね？ だつて今回の下手人のコカビエルつて、神の子を見張る者の中ではタカ派で有名なもの」

「へえ、そうなんだ。詳しいね」

「敵のことはちゃんと調べるに決まつてるじゃない、それがウチから聖剣奪つたともなれば余計にね」

「それもそつかー……」

……横を見る、そこには白い外套を纏つた栗毛のツインテール女子がいた。いや、この表現は正確ではない。僕らにとっての明確な敵がそこにいる！

「皆離れろ!!」

「「ツ!!」」

離れ、少女を囲むように各々が戦闘態勢を取る。その中心には、僕と……

「……随分と急な里帰りじゃあないか、死んだかと思つてたぜ」

「あらまあ、随分酷いご挨拶ですこと。人の心でも落とされたのかしら？」

このやり取りで祐斗くんは眼前の人物が誰か見当が着いたらしい。静かに、しかし殺

気を深めて僕らを観察し始める。

「おいおい、付き合いはそれなりに長かったのにそれは無いだろ？　そもそも人の心なんてあると思つてなかつたクセに」

「まあその通りと言えはその通りだけど……自分で言つて悲しくならない？　自虐癖は相変わらず？」

「そういうそつちは随分とやさぐれたみたいじゃないか。皮肉を口にするなんて、イノシシ同然だった君らしくないじゃないか」

「どうも私なりの配慮が気に入らなかつたみたいね。じゃあ直接的に言つてもいいの？」

視線は鋭く僕を射抜く。……会話内容を聞かれていたこと以上に、多分もうバレてるみたい。

「まさかとは思つたけれど、幼なじみが悪魔なんか成り下がってるなんて……これは悪夢か何かかしら？」

「奇遇だね、僕もそう思う。だが、成り下がるといふ表現はいただけじゃないな。これでも生活充実してるンだけ？」

「意外、本当に楽しくやつてるのね。幼なじみが幸せそうでは何より」

「アツハツハツハツハツ！」

心にもないことを、と口にはできない。それは多分違うからだ。僕の幸せを、素直に喜んではいない。僕も彼女との再会が嬉しくない、と言えば嘘になる。

だが、まあ、しかし。どれだけ僕らの背景に色んなものが積まれていても、コレは敵だ。恐らくそれは向こうも同じ認識なので……………

「じゃあ殺すか」

そうなる行き着く答えは同じ、何の感慨も無く僕は左腕に籠手を纏わせ、腕力2倍と共に殴りかかっていた。

ガキンッ！ と金属質な音が鳴る。僕の籠手を火花を散らしながら受け止めるそれは、見ただけで背筋が凍る気配を纏っていた。恐らくこれは……………聖剣！

「ッ！ 最適化！」
インベント

『Promotion:Powered Frame!!』

これは死ぬ、という生存本能から反射的に最適化、籠手が溶け出すと同時に装甲板を4枚、聖剣との間に析出させて無理矢理相手を弾く。僕が大きく仰け反つたのに対して、相手は差程驚いた様子もなく体勢を整えていた。くそ、分かっちゃいたが僕より数段上だなチクショウ！

「装填：4！」

『Ignition Boost!!』

『Explosion!!』

細かい調整をやつてる隙は無い、装甲板4枚で全身を強化。思考も加速したお陰で、よろけた僕の首を飛ばそうと聖剣を横薙ぎにしようとする相手の姿が捉えられた。先に析出させた4枚とは別に、3枚の装甲板を首元に展開し、なんとか防御。恐ろしく殺意が高い……!

だがやられっぱなしではいられない。強化し底上げた身体能力にものを言わせ、地面を踏み砕く勢いで踏ん張り、後ろに倒れ掛けていた身体を前のめりに持つていく。

「ッ!」

必殺の一太刀だったのだろう、剣が弾かれ今度こそ大きく仰け反ったが故に彼女に隙ができる。体勢を整えられる前に、右腕を突き出して顔を掴む。アイアンクロード。

「くたばれッ!」

そしてそのまま力任せに地面へと叩き付けるために、全力で押し倒す。上手く決まった大外刈りのようなものだ、この一撃から逃れられま……ガッ!?

「……っ!?!」『Burst』

「女子の頭を掴むなんてデリカシーになってないわよ!」

白く弾ける視界、カチ上げられた頭。どんな柔らかさだったんだ……ほぼ押し倒されている形から顎を蹴るなんて! 無理な体勢だったからダメージはそれ程だが、力を緩

めてしまうには十分だ。星が飛んでピヨってる間にまんまと抜け出されてしまう。……だが、ヤツに外野まで気を配る余裕は無くなったはずだ！

「優男オ！」

「言われずとも！」

視界が回復するかしないかのタイミングで、我が意を得たりと祐斗クンがヤツに斬りかかっていた。

「大丈夫ですか先輩!？」

「僕はいいい、みんなに報告して周囲警戒しろ！ この状況で教会の戦士が1人なわけが無い！」

頭と視界が揺れて、2人の剣士の戦闘シーンをマトモに追うことが出来ない。こんな僕を介抱してる暇があったらととと連絡回して袋叩きの構図を作り、不意打ちの可能性を消すことが重要だ。

「物騒ね、もうちよつと話し合うとかないのかしら!？」

「教会の戦士が聖剣持つて襲つてきた癖に、何を今更！」

通常の僕の目では置いきれない二人の剣戟の応酬の末に鏢迫り合い。それでも相手はどこか余裕げな表情で祐斗クンと口撃しあっていた。おう、もつと言ってくれ優男。

「いやまあ!？」 彼を殺すなら今かなって思って動いたのは悪かったけれど！ 一応停戦

協定結びに来たつもりなのよ私！」

「どの口が……！」

……まずい、ラーメン屋セラピーでなんとか持ち直してきた優男から冷静さが剥がれてきている。このままだと暴走しかねん。多分彼女は嘘をついてないだろうし、ここでどつちかが死んだらそれが原因で聖書の戦争パート2が始まってしまいかねない。

仕方ない、ここは自分諸共3人仲良く昏倒してもらうしかないだろう。

「セツト、『循環する——」

「そこまでよ」

凜とした声が、殺伐としたこの場に響く。声の主は聞き間違うはずもない、我らが上司殿。揺れる視界に痛む頭を抑えながら声の方向を見ると、そこにはリアス部長の姿と、襲ってきた彼女とお揃いの白い外套を来た青髪の少女がいた。何故か2人とも困ったように頭を抑えていたが。

ともあれ2人の登場で一応剣は収め合ったようで、安心と共に緊張の糸が途切れた。道路なのもお構い無しに大の字になって横になる。……痛さには耐性が着いたと思っていたけれど、思いの外ダメージを受けている。この感覚は土手つ腹に光の槍を突き刺された時と似ている。聖剣以外にもそういう効果があったんだらう、ブーツか何かに。

「……亜種の『トウワイス・クリテイナル龍』の手』、ね。普通気取りにはお似合いの、いい神器じゃない」

「……そりやどーも」

僕の顔を覗き込み、手を差し出す彼女。目から殺意は消えてないけれど、少なくとも今ここで僕を始末するつもりは無いらしい。どうしたもんかと思いつつも、出された手を掴んで身体を起こす。

「久しぶり、イツセー君。元気してた？」

「今まさに絶賛大不調だよイリナちゃん」

アルバムを見た時からまともな再会になるとは思わなかったけれど、まさかこんなことになるとはね……。僕の人生、そろそろ修正入りませんかね？

その7

「……で、弁明は？」

「コレが悪かったんです」

ゴチン！ とゲンコツの音が響く此処は、オカルト研究部の部室。僕とイリナちゃんは仲良くゲンコツを落とされていた。

「いやだって普通に敵だし、放っておくと駒王町内で変なシンパ増やしそうだしでロクなことになりませんもん、妙な人徳あるせいで。大丈夫、一発だけなら誤射です」

「この悪辣外道魔人が悪魔になったんだもの、それはもう血も涙も心も無い策で私達を罠に嵌めるのが目に見えてるわ。バレなきやいけると思ったのよ、事故事故」

ゴチン!! と先程より強いゲンコツが落ちた。……痛い。

「……………はあ。本当にごめんなさいねゼノヴィアさん、私の狂犬が迷惑を掛けて」

「……………悪魔に謝られるとはなんともむず痒いが、ここはお互い様というヤツだろう。イリナみたいなのももう一人いるとは思わなかったが」

「失礼な、一緒にされると困る」

「最早狙ってるでしょう(だろう)!!」

狙ってはない、狙ってはないのだ。互いが互いにどつかで全責任を擦り付けられないかなって思ってるだけで。全く、久々に会った友人にする所業か？

「んんッ！」

咳払いをしたのは祐斗クン。それを見て流石にふざけるのはここまでか、と態度を改める。

場が納められたあの後、連行される形で僕らは此処へ連れてこられることに。一部の人員を除いて皆は引き続き警戒態勢へ。そして一部の人員というのが……まあ関係者と言って差し支えない祐斗クンと、元教会関係者のアーシアだった。元聖女を連れてきていいものか？ 精神的にも命の危険的にも、と思ったのだが。

『着いてくると言ってる聞かなかつたのよ。……実際にしてくれるのは助かるわ、我々の中で一番教会の事情に詳しいでしょうから』

『ええ、お役に立てるかは分かりませんが頑張ります！』

ふんす！ と鼻息を鳴らす彼女を見て、頑固だなあと内心頭を抱えた。心情的な面を抜きにするなら彼女の存在で相手方の失点を誘えるかも、と考えてしまう自分が本当に嫌いだ。

『ちなみに補佐の朱乃サンがいないのは？』

『ソーナと一緒に冥界に飛んでもらっているわ。流石に事が事だけに報告は必要だか

ら』

『……なるほど、部長は土地の管理者として離れる訳にはいかず、代わりに生徒会長と部長の名代を務められる朱乃サンに行ってもらった、と』

朱乃サンがいればもうちよい優位に停戦交渉できると思ったのに……と先程のやり取りを思い出しながらゲンナリする。本来ならこの場合、部長の副官は祐斗クンが務めるべきなのだが。今の彼にまともな交渉を、それも聖剣を携えた教会の戦士相手にやるわけがなく。そうなるとお鉢が回ってくるのは僕の方に……。いや本当、ふざける場合じゃあなかつたな。いや、口にした言葉はふざけてるわけでもなんでもないので。

「……失礼しました、申し訳ありません教会の戦士殿」

「本当よ、失礼しちゃうわ」

「イリナ！」

青髪の緑メツシユ女子に頭を下げたつもりだったのだが、イリナちゃんが茶々を入れてまた怒られている。………苦勞してそうだなあメツシユさん（仮）、とても同情するよ。

「……わーってるわよゼノヴィア。でも雰囲気を和ませるぐらいしてもいいじゃない、特にその優男の。今にも私達に対して斬りかかってきそうじゃない」

「敵意はあるが実際に手は出してない、それが全てだ。第一、停戦協定を持ちかけよう」と提案したのはイリナ、お前の方だぞ」

「ええ、その通り。あわよくば失言狙いで討滅する為にね。だからこういう風に振る舞うとも言ったじゃない。……待つて怒らないで、その拳を下げて。ね？ 相手にイツセー君いるからもうその方向性じゃ無理つてことであけすけに喋つてるだけだから!!」

それがどこまで本当なのやら。ただ優男から殺気は完全に抜けずともある程度毒気は抜かれたようで、少しばかり話しやすい雰囲気にはなった。

「というか、イツセー君もそれがわかつてたから茶番に付き合ってくれたんでしよう？ どーして途中で止めるのさ」

「……一応この状況だと僕はこの話し合いに於いてのNo. 2なんだよ、引き際見極めただけだ」

「ああ、昔と同じで『さんぼー』つてわけね。黒幕根性が染み付いちやつてるのかしら？」

はっ、よく言うぜ……と思いつながら口にはしない。戯けるやり方がまるで僕のソレだ。大方、昔の僕のやり口を順当に発展させていったのだろう。部長も怪訝な顔でこつちを見てきたから、同じ考えではあるらしい。

「……それだけじゃあなさそうだけれど、まあいいわ。改めて、話し合いの席に着いてくれたことを感謝するわ。私はイリナ、今回の件で派遣されてきた……あー、所属につい

てはごめんさい、ちよつと話せないわ」

「同じく、ゼノヴィア。……既にそちらは事情を把握しているようだが、我々は盗まれた3本の聖剣の回収、もしくは破壊を命じられてこの地にやってきた」

「ご挨拶ありがとう、リアス・グレモリーよ」

「兵藤一誠です、よろしく」

握手は交わさず、テーブルを挟んで席に着く。和やかに見えてもそれは表面だけの話、不倶戴天の敵同士だ。見えない火花が視線のぶつかり合う先で散っていることだろう。

「私から質問があるわ。コカビエルが主導して盗んだ、というのは確かかしら？」

そういえばイリナちゃんが会話に混ぜてきた時にそんなことを言っていた。コカビエルは『神の子を見張る者』のタカ派だと。そしてその狙いは戦争を起こす辺りが妥当とも。

「事実だ。そして此処……駒王町に持ち込もうとしていることも、だ」

「……狙いは戦争かしらね」

「おそろくは」

部屋の空気が陰鬱なソレになる。イリナちゃんが先に和ませようとしていたのも分かる。遠回しに『お前らは人質にされている』と言われたようなものだからだ。

たかが悪魔を数人殺しただけで戦争になるとは僕には思えない。だが、その中に魔王の血縁ともなれば話は別だ。レヴィアタン様は分からないが……部長が殺されたらルシファー様は間違いなく戦争に打って出るだろう。

「まどろっこしいことは苦手なので単刀直入に言う。今回の件に、あなた方悪魔は首を突っ込まないで頂きたい」

「それは無理な相談ね、我々の土地で起こる問題を管理者が何も手を打たないというのはありえない。……まさかとは思うけれど、私が墮天使に与するとも思っているのかしら?」

「ほぼありえない……けれど可能性はゼロじゃない、というのが私たちの上の判断ね。ああ、貴女の女王が今隣にいないのはそういうことかしら?」

挑発するようにイリナちゃんと言う。部長はアーシアにいれてもらった紅茶に口を付けた。……これは、多分相当怒っている。気を鎮めるために液体に口をつけるのは普通の人ならよく見るけれど、部長のは初めて見た。少なくともライザー氏が来た時でさえそんなことはなかったんだから。

「……所属が言えないというのも納得ね。相当いい耳をしているみたい」

「うん、やっぱりそれなりに頭が回るのは確かみたい。でも聖剣の情報を探る為に色んな伝を使ったのは失敗ね、グレモリー。お陰で興味があります、ってアリアリと分かっ

ちやう。私達の上司が1番警戒してたのは、実はそこだったり?」

動けば痕跡が残る、とはいつかの部長の弁だ。それを部長がしてやられてしまった様だ。……祐斗クンのためだ、ある程度は危ない橋を渡る必要だったのだろう。それを僕は失敗とは思わないが……気になるのはそれよりも、部長に対しての揺さぶりであろう。朱乃サンに対しての言及だ。前に墮天使関連でなんとも言えない表情をしていたこともあるし、もしかして朱乃サンは……。いや、今考えることじゃないか。空気を持つてかれる前に差し込む必要がある。

「どうせドアインザフェイス狙ってんだろ、本当の狙いを話せよ。単刀直入が聞いて呆れる」

「そうであれば理想、というのに間違いは無いのでね。そちらの面子など、こっちは知ったことではないのだから。……もつとも、頭を下げてでも協力を取り付けたいのは君達の方だろうか」

「分かってないなアゼノヴィア女史。ある程度こちらで辺りを付けて、動いても問題ない状況を整えて臨戦態勢入ってんだ。教会の戦士が介入してきたところでそれは大きく変わらん。なんならケチつけて叩き出したっていい。今此処で君らが話し合いの席に着けてるのは我々の上司の温情だ。そっちからしたら反吐が出るだろうが、その時点である程度の誠意を信じて貰いたいモンだ」

「我々を追い出せるだけの実力が、そちらにはあると?」

「戦いは数だ、圧倒的な個人戦力でもなけりや数が多い方が勝つんだよ。例え悪魔キラーの聖剣があつたつてな。僕には君ら2人が、そんな大層な強さをしてるとは思えん」

「……貴様」

にわかには殺気立つゼノヴィア女史。でも実際現時点では警鐘が鳴つてないわけだからな。あわや一触即発、それを制したのはイリナちゃんだった。

「まあ実際4対1で劣勢になり掛けてたから否定の仕様がないわ。ごめんゼノヴィア、素直に私のミスよ」

「……………」

「底を見せてはいないけれど、それはあちらさんも同じこと。情けないことを言うように悪いけれど、私と貴女でイツセー君を含めた十数人の悪魔を相手取るのは難しいと思う」

……困つたな、相手に倣つて僕も挑発しようとしたが、イリナちゃんが強敵過ぎる。手の内がバレてる以上に、油断がないのが困る。

「ごめんネ、ゼノヴィアつたらちよつと脳筋なの。血の気が多くて困っちゃう」

「真つ先に僕を殺そうとしたヤツのセリフじゃないと思うけど」

「あはは、それはその通り。でもそれはそれとして、戦士に対して力量を疑う発言はするものじゃないわよイツセー君。私もそれなりにカチンと来るから」

「そいつは悪かったよ。……でエ？ 代替案も考えては来てるんだろう？」

「それはその通りだけど……先にそちらの考えを聞かせて欲しいかな」

そう聞かれて、此処はこっちの要望を言っておくべきだと判断して僕は部長の方を向く。ちゃんと息も整った部長も同じ判断をしたらしい、彼女は部屋の隅でじつとしている祐斗クンに視線を向けた。

「祐斗、構わないかしら」

「……はい」

「ー」

ある程度暈して話すものだと思っていたが、祐斗クンに許可を取ったということは、もしや……………

「そこにいる私の騎士、木場祐斗は『聖剣計画』の生き残りよ」

「………何？」

「あちゃあ………そう来るかあ」



「……凡その事情は分かった。噂に優る、大した眷属愛だな」

「そうなるうちよおおつと事情が変わつちやうわね。どうしたものかな……？」

掻い摘んでだが、だいたい事情を部長はぶちまけた。精神的に揺さぶりを掛けることもあつたのだが、誠実に対応することを選んだのだろう。まあ変に取り繕つて墮天使と共謀してる、なーんて不名誉なことは思われたくないだろうから正しい判断だと思う。敵のマトは少ない方が楽で確実だからね。

「そつちのプランがオシヤカになったのは何となく察したけど、元々はこつちに何させるつもりだったのさ？」

「あー………うん、もう言っちゃっていいかも。聖剣奪取が目的じゃなかったら、回収してくれることを前提で聖剣の破壊を許可をしようと思つていたの。共闘するのは勢力間の問題でありえないケド、潰し合つて貰う分には全然ウェルカムだから」

「まあそんなこつたらうとは思つたけどさ、ビッグネームが出てきた割に2人しか送り込めなかつた時点で察するものはあるよ」

どーしても教会側は2人しか……いやもつといるかもしれないが、それでもたくさん的人员は送れなかつたらしい。それがどんな事情によるものかは分からないが。だから協力ではなく、潰し合つてもらおうという解釈で今回のコカビエル一味を削ってもらい

たいんだろう。じゃあ最初から首突つ込むなどか言うもんじゃない……と思うが、ポーズは一応必要だし仕方の無いことか。

「じゃあ、何が問題なのかしら？　恐らく、我々とそちらの利害はある程度一致している筈よ」

「……………イリナ」

「言うしかないわ、こころも誠意を見せられたら。というか私達に死んでこいしたんだからアイツらも胃が痛くなって貰わないと困るわザマアミロ！」

「イリナ……………」

不意に警鐘が鳴り始める。非常に厄介なことを聞かされる確信がある。僕が警鐘を聞いたことを察した部長は、胃を痛そうにしつつも表情を引き締めた。

「……………まず、そのの彼に聞きたい。キミの復讐の対象は、本当に聖剣ということでもいいのだろうか？」

「……………何が言いたい？」

「詳しい経緯を聞かずとも察することはできる。あの事件は教会側でも最大級に嫌悪された、忌まわしい黒歴史だ」

「よく言う。僕らの犠牲の上で成り立ったであろう君達に何を言われても、心には響かないよ」

「どういふことだ……？」　と思つてピンと来た。イリナちゃんは聖劍使いだった。そして多分ゼノヴィア女史も聖劍使いなのだろう。そして聖劍計画は聖劍使いを育成するプロジェクトであり……。

思い至つて2人の顔を見ると、揃つて苦虫を噛み潰したような顔をしていた。ピンゴ、か。

「ああ、だろうな。私もそう思う。だが今から私が言う言葉を、君は心して聞くべきだ。聖劍への……否、『聖劍計画』への復讐を果たそうと考えているのなら」

「……………」

『聖劍計画』の実態が明るみに出た時、我々は計画の責任者に対して異端の烙印を押しした。その男の名はバルパー・ガリレイ、別名『皆殺しの大司教』。今回の聖劍強奪事件の首謀者、コカビエルに与する者の内の、1人だ」

「バルパー……ガリレイ……………」

「これは……まずいことになつたかもしれん。」

その8

コイツはまずいことになった。祐斗クンの復讐対象が、7本に分裂した聖剣エクスカリバーという種あやふやなものだったからそういう前提で動いていたけれど、明確な復讐対象がいるんなら話は変わってくる。

……………が、

「イリナちゃん質問」

「えっと、私に聞いちやう？ ゼノヴィアじゃなくて？」

「うん、だって多分イリナちゃんが所属を明かせないのってそういうことだと思うから。結構情報握ってるでしょ？」

「……ちよつと喋りすぎたわね。まあいいわ、バレたところでしつぽ切りに合う下っ端だし。で、何かな？」

「そのバルパー・ガリレイなる人物は、ぶつ殺しても大丈夫そうな人間？」

「これこそまさに単刀直入。それさえ分かればうちの闇堕ち騎士の身の振り方も変わってくるというもの。」

「75%、墮天使の出ず声明文次第」

「半々じゃないのは？」

「方々に恨みを買ってるかつ、コカビエル一味は『神の子を見張る者』から離脱状態と言つても過言ではないから」

そこに結構な額の賞金首よと付け加えられて首を捻る。その条件だと9割ぶつ殺しても良さそうなんだが。一応悪魔と墮天使は、冥界の権利で争つてはいるが、一応はハト派の連中だと僕は聞いている。つまり異端であり、こういう場合だと真つ先に切られてもおかしくないと思う。

「うん、だいたいその通り。けれどこういう連中に限つて……あまりこういうことを言いたくはないのだけど、天才なのよ」

「うげえ……もしかして、2人の仕事にバルパー・ガレイの身柄を、とかもある感じ？」

「直属の上司には言われてはいない。……が、それを暗に仄めかすようなことを、別の人間に言われたな」

「正直切つて捨てたい話だけれど、ソイツが結構なタヌキでね……」

なるほど、悪魔にバルパーなるヤツを奪われると少し具合が悪いわけだ。まあさつき死んでこいしたんだしって言つてたから、上手くいけばめっけもんぐらいの話か……まあ、政争の話か、なんだろうね。

「言つてはなんだが、私たち2人は少々敵を作り過ぎていてね。イリナに関しては察して貰えると思うのだが、別の理由で私もそれなりには疎まれている」

「だからまあ、歴戦の墮天使一味相手にしてこい……なーんてふざけた命令が下ったわけだけど。万が一生きて帰って来られると困るから、その時の為の保険つてワケ。本当、嫌んなつちやう」

「じゃあ殺してもいいわけだ」

「話聞いてたイツセー君???」

おう、勿論聞いてたとも。隣の部長も同じことを考えてたみたいで、とても綺麗な笑みを浮かべていた。

「要は僕らが此処での話を聞かなかったことにして、君らが接触する前にこつちがバルパー・ガリレイを殺せばゲームセットだろ。流石に先に接触してしまえばその事を報告せざるを得ないけど、既に死んでりや何もできない。でしよう?」

「それはそうだけど、じゃあそつちが墮天使陣営の人間を殺して、それが戦争の火種になればどうするの?」

「暴走した連中が、悪魔の根城に、悪魔に対して強力な兵器を持って潜入してる。十分向こう側が有責だろ。後こつちは墮天使側に対して1つ、貸しを作ってるからね。だから墮天使の持ち物になった聖剣をぶつ壊してもいいと思つたワケだが」

「ああ、そういうカラクリだったワケ？　じゃあいいかもねソレで」
交渉成立である。

「でもいいの？　君ら個々人にとつてはウインウインだけど、組織としては違うでしょうっ。」

「良くはないが悪くもない……一応墮天使と悪魔の潰し合いの延長線にある取り決めと言えなくもないからな」

「身柄持つて帰ったら帰つたで異端者の烙印押されかねないし、そつちで厄ネタ処理してくれるなら万々歳よ。それに、そつちの彼のことを思うとね」

「……正直、教会の戦士に復讐を許可されたところで遺憾にも程があるけれどね」

「だが君は領くしかあるまい」

「……………」

あーもうバチバチすんなって……。一応お前の思う方向に話が纏まりそうなんだからさ。……んまあ、教会側も同罪だつて思う気持ちは分かるけれどさ。

「ではこういうことでいいのね。我々はお互いに不干渉、但し悪魔側が聖剣を破壊した場合はその核を教会側に引き渡す」

「ええ、正直助かるわグレモリー。いやー、一時はどうなることかと思つたけれど、これなら無事に生きて帰れそうじゃない？」

「私が裏切る、とは考えないのかしら？」

「貴女が？ 私達を？ ハッ、それは無いでしょう！」

あんまりすんなりと信頼するものだから、不審に思つて聞いたのだろう。そんな部長の問に対する返答は、心底おかしいと言わんばかりの笑い声だった。

「逆に聞くけれど、貴女自分を客観的に見て裏切ると思う？ この状況で！ 貴女達一族程、情とプライドで雁字搦めにされた悪魔を、私は知らないわ」

「ま、それは同感だな。貴女ならば穏便に話が済むと踏んで行動したわけだからな。我々だって相手は選ぶ。……だからこそ、そんな悪魔の下僕であるその君を殺そうとしたイリナの正気を疑つたワケだが」

「今のやり取りでそれなりに性格の悪さは確認できたでしょ？ 不可抗力よ」

「それとコレとは話が別だ！」

「あはは……」

昔の相棒は僕だったけれど、今の相棒はゼノヴィア女史なのだろう。ソレの相手は大変だろう……と若干菩薩の気分になつて眺めていたら……何故か警鐘が。それも自分の隣から、だ。

「……………そうね、それに関してはおききたいと思つていたのよ」

底冷えした怒りの発露に、やっべえとなつたのは言うまでもない。忘れてたワケでも

なく、なんなら現在進行形でそういう話をしていたが、このヒトは眷属に対する愛が深い。そして僕に関しては別のアレコレがあるワケだから、普通にイリナちゃんに対してブチ切れてもおかしくなかったのだ。話が纏まるまでは我慢していたのは部長なりの理性だったんだろう。

「その件はお互い様だから、そのことでどうこうするつもりは無い。けれど答えて欲しいわ。どうしてウチのイツセーを殺そうとしたのか」

「さつきも言ったでしょ？ 危険だから」

「……………それ、理由の1割位でしょ？」

「ここは流石に部長を援護しといた方がいい、と思つて理由の内訳を推測してぶつけろ。案の定困つた顔をされた。

「うーん…………ちよつと私の心のデリケートな部分なの。有耶無耶にできない？」

「してもいいけれど、私はその程度と捉えるわ」

「……………はあ。イツセー君、だいぶ毒したのね」

「これ僕のせいかな？」

「そりやそうでしょ」

どうしたもんかなと悩む様を見て、この時ばかりはざまあとは思えない。…………僕が悪魔になったことでもかなり葛藤してるのは分かっていたからね。

「……ただの介錯よ」

「介錯？ 悪魔になったことが不憫でならない、と？」

「まさか。その男はちゃんと、今は幸せだと抜かしやがったから。だけど、人間だったころの兵藤一誠にとつては違う」

「……それは、そうだろうな。多分否定できない。なんなら今も悩んではいる部分だ。それでもなければ今頃生きてはいないわけだが、人間として死にたかつた気持ちは無い、と言いつつたら嘘になる。」

「少なくとも私は、その男が自分から悪魔になるような人間ではなかったと確信している。悪魔のような性根だったけれど、それでも根幹も根幹のところはドの付くお人好しの善人で、普通であることを尊ぶ人間だった。どんな事情があつて転生したかは分からないけれど、そんなこと私の知つたことじゃあない」

「……………」

「少なくとも、私の中で『人間・兵藤一誠』は死んだ。私の幼なじみは死んだのよ。なりたくもなかっただろう異常に成り果て、人間として死ぬことすら許されずに死んだ。だから今の私ができる、せめてもの手向けとして介錯しようとした、それだけの話。……………独りよがりなのは分かつてるけれど」

「……………そう」

……だろうな、とは思ってたけれど。だから遠慮されても困るなってんで本気で応戦したワケだが。多少の申し訳なきは感じていた、多少だが。思うところがあるだけで後悔は無いし、やっぱりそれは、本人も言っていたけれど独りよがりな行動だ。

「……ハマして死んだのは悪かったよ。墮天使に殺された」

「だと思った。……うん、図らずも墮天使と共謀する可能性が減ったし、結果オーライね」

「オーライかなあコレ……」



「そちらの女悪魔さんは、アーシア・アルジェント氏で間違いないのかしら？」

もう僕の仕事は終わったな、と席を外して隅で控えていたアーシアの隣に移動したら、着いてきたらしいイリナちゃんから声を掛けられてしまった。

「……ンで来るんだよ」

「そつちと同じよ、纏まった以上引つ掻き回しても損するだけね。一応リーダーはあつちな」

この暴力装置の前にアーシアを晒すのはどうかと思ったので、庇うように前に立つ。

必要になったら急に行動を起こすから油断ならねえんだよ、このかつての相棒は。

「イツセーさん、私は大丈夫ですから」

「……………はア」

ちよつとした睨み合いの末、その均衡を破つたのはアーシアだった。ちよつと不服そうな声音だったのは、心が折れるかもと無駄な気をつかつた僕への叱責か。

「はい、間違いなくあなたの知っているアーシア・アルジェントで間違いありません」

「やっぱり。消息が此処で途絶えてたから、『神の子を見張る者』に行つたか、死んだのかと思つてたの。お会いできて光栄だわ」

「皮肉か？ ドの付く皮肉か？」

そう茶々を入れると、心外だと言わんばかりにプリプリと怒り出した。

「失礼ね、私は彼女を高く評価してるわ。悪魔を癒してしまったことに關しては運が悪かつたと思うけれど、それだつてアルジェント氏が誰に対しても分け隔てなく癒しの力を使つてきた証拠だもの」

「それは……………そんな大したことではないです。そうすることが正しいのだと思つたからやつてきただけで」

「いえ、大したことよ。貴女も知つてたでしょ？ 自分が裏でどんな風に扱われていたか。その上で追放されるその時まで自分を貫いたのだもの。他の誰がそう言わなくて

も、私は貴女のことは『聖女』と呼ぶに足る人間だつたと思つてる」
「……………恐縮です」

『だつた』、と言うのが悲しいところ。……………半分、僕のせいで悪魔にしてしまった所があるから余計に。

「……………あー、その。イリナちゃん。彼女は半ば僕が、」

「バカね、そんなぐらゐ想像もつくわよ。イツセー君と同じで、彼女だつて何も無く自分から悪魔になるような性根だとはこれっぽっちも思つちやいないわ。……………どーも信仰も抜け切つてはいないみたいだしね」

「……………捨て切れないだけです。ずつと、それが正しいと信じてきたものですから。例え悪魔になつた今でも、それを曲げることはできません」

「……………意外と根性もあるわね。まあ、いいんじゃないかしら？」

「現役信徒的にいいのかよ」

「欠片も良くはないに決まつてるでしょ。でも、前例がいるからね」

前例、と聞いて足りない頭を回すが、そんなことあつたつけ？ そんなヤツがいたら部長辺りが例外事例として教えてくれるようなものだけど…………

「それはもしかして、必要悪のマスティマ様のことでしょうか？」

「マスティマ？」

「流石、博識ね。ざっくり説明すると、信仰心や善性を試すために信徒に対して悪魔のよ
うな誘惑をする、神に許された悪魔とも言うべき方よ。……先の大戦で亡くなったと聞
くわ」

それはまた……成程必要悪と言うに相応しいヤツだな。

「それに神の子の信徒にだって、裏切ったりした方々がいるもの。だからまあ、大つぴら
には口にしなないけれど、信徒の悪魔堕ちに関して私はそこまで深刻に考えてはないわ。
ある種の試練なのかもしれないし。第2第3のマスティマ様になれるのか、あるいは本
当に性根まで腐り落ちるのか。まあ大概は後者でしょうけどネ」

「その……イリナさんは、かなり奇特な考え方をするのですね」

「異端者って言わない辺り僅かな善性を感じるけど、結構ズバズバ言うわねアルジエン
ト氏……」

まあ実際変わり者だからね。だからお互いコツチを見るのはやめなさい。毒してな
い、毒してないから。

「それであの……このことが明るみになると、そのう……」

「呆れた、この期に及んで他の人の心配？ ちよつとイツセー君、この子底抜けに善人
じゃない。どうやって悪魔堕ちさせたのよ」

「流れが分からねえよ、底抜けに善人なのはその通りだと思っただけだよ。……僕が死に

かけた時に、僕のことを癒しても大丈夫な立場になることを選んでしまっただけだ。いや本当にこれは僕が悪い」

「それは違いますイッセーさん。私は、悪魔であるのに『それでも』と私を助けてくれた貴方のように、」

「あー……………順調に脳みそ焼いてんなこの男」

大方グレモリーにもそんな感じの挙動がましましたのでしよう？　とイリナちゃんは呆れた顔。否定したいけど状況が許してくれない。

「いい、イッセー君。アルジエント氏は自分が悪魔だと知られたら、故郷の教会が異端者の集まりとして処断されてしまうことを恐れてるのよ。誰一人彼女に手を差し伸べなかった人達をね」

「……………ええ？」

そいつはちよつと…………度を越したお人好しにも程がないだろうか？　僕なら僕を裏切ったヤツはどんな手を使ってでもド心底に叩き落としてやるけれど。

「善人なんかじゃありません。…………心に余裕ができたから、だけです。私はもう独りではありませんから」

「ま、そういうことにおいてあげる。なんにせよ私の方もこのことはちゃんとした報告には上げられない。貴女の危惧した最悪の事態を絶対に起こさないことを、私の信

仰心に誓って約束するわ」

「ありがとうございますー！」

悪魔と約束していいんだろうか？ ……いいんだろなあ。僕もそれなりに無法者と呼ばれるけど、僕に言わせりゃこつちの方がガチモンの無法者だ。最低限のルール以外で拘束できないと見ていい。逆になんでイリナちゃんが教会から追放されてないのかが不思議な位だ。

しかし、アーシアの顔を見て、イリナちゃんみたいなのがいてもいいか、と思いついた。彼女が救われた表情をしているのなら、それが全てだ。……やつば変わらない、イリナちゃんは今でも『すげーやつ』だった。



「ところでイツセー君は、なんではぐれになってないの？」

「それ聞くべきこと？ というか僕のことをどんなだと思ってるのさ」

「んー……だつて、イツセー君ならどつかで自分から死ぬか、逃げるかぐらいはしそうだもの。悪魔なんていう非常識とは死んでも関わりたくないでしょうから」

「僕に対しての理解度がヤバくない？」

「何年相棒してたと思ってるのよ」

ゆーて小学生までの話だけだな……と思つて少し頭を回す。適当にでつち上げてもいいが……部長の言葉を借りるなら、その程度と捉えられそうだ。それはちよつと困る。

「一言で言うなら、救われたから」

そう言つて反応を伺い、それに合わせて言葉を続けようとしたら、少し警鐘が鳴つた。慌ててイリナちゃんの顔を見ると、まるで信じられないようなものを見たと言つて表現するしかない、虚無の如き驚き顔だった。

「——えっ」

それは、イリナちゃんにとってはとても衝撃的な一言だったのだろう。……僕と長く一緒に過ごして、多分僕の根幹あつた悩みも臍気ながら知つていたはずだ。だから余計に驚いたのかもしれない。

「命を救われたから……じゃないのよね？」

「うん。心が折れてどうしようもなくなつたときに、もう大丈夫だと言つて、手を握つてくれただけだ。……それでも僕にとっては、間違ひなく救いだつたんだよ、イリナちゃん」

「そんな……だつて、え？ どうして……」

「君は結構買ひ被ってるけどね、それなりに心は弱いんだよ僕は、心だつて普通に折れるよ」

「嘘、でしょ？　だつてイツセー君だよ？　どれだけ悪い大人に囲まれても、悪い笑顔を絶やさなかつた……」

……ちよつと予想外、だ。ここまで狼狽えられるとは思つていなかった。警鐘が鳴つた時点で、オブラートに包むぐらいはした方が良かったか？　と考へて、心の中で首を振つた。多分、ここで逃したら、この先永遠とこの心情を吐露する機会は訪れなかつただろうと判断する。

「その、ね。イリナちゃん、」

「イリナ、細かい話が纏まつた。そろそろお暇するでしょう」

言葉が続けようとすると、タイミンク悪く話し合いが終わつたゼノヴィア女史がイリナちゃんに声を掛けてしまった。

「っ！　そ、そうね、いつまでもいるとご迷惑なものね！　ありがどうねグレモリー、お互い生きてこの件が終われるといいわね」

「あ、おいイリナ!?!」

逃げるように、という言葉がピッタリと合うぐらいに、そそくさとイリナちゃんは部屋から出ていった。……出ていってしまった。

「お前、イリナに何かしたのか？」

「……分からない、イリナちゃんの質問に答えただけ。でも、イリナちゃんにとっては相当シヨックだったみたい」

僕も……多分ゼノヴィア女史も、動揺したイリナちゃんを見たことがなかったんだろう。困惑した顔でお互いを見つめてしまう。

「ごめん、ゼノヴィア女史。僕が言うことでは無いけど、イリナちゃんのことをお願いね。結構危なっかしいんだ」

「愚問だな、悪魔に言われるまでもない。それでは失礼する」

そして部室には、悪魔だけが残った。

「分からない………なんでだ………？」

イリナちゃんがシヨックを受けた理由がわからず、僕は部長に手を引かれるまで呆然と、その場に立ち尽くしていた。

幕間

「……ここにいたか」

「ん？ ……ああ、ゼノヴィア。ごめん、ちよつと……いやかなり取り乱しちゃった」
「後学のために聞いておきたいんだが、構わないか？」

「わお、ド直球。でもそれがあなたのいい所よね。というか後学のためにとって……何にこれが活かせるのさ？」

「それは……うん？ そうだな、分からない」

「……アンタって本当に、いや私は可愛いと思うわよ、うん」

「相当バカにしているな？ 誰もがお前のような機転の良さを備えているわけではないのだが。それに何に活かせるかも分からないこと程大事だったりするだろう？」

「それも……そうね。はア……なんでこんな失恋みたいなセンチなことになってるのや
らっ？」

「……好きだったのか？」

「恋愛の意味で言うなら、まさか！ って言うしかないわ。なんて言うのかな……近

過ぎて無理つて感じ。どっかの小説から引用するなら、還暦越えて互いに独り身だったら籍を入れるか、ぐらいの距離感よ」

「少々喻えが具体的かつ独特過ぎないか？」

「ふふつ、そうね。実際甘い感じの話じゃないから。でも幾ら言葉を尽くしても、なんだか負け惜しみみたいになつちやうから困るわね……」

「……………」

「人としての話なら……好きとか、もうそんな次元には無かったかもしれない。ある種の信仰心すらあったと思う」

「あの男に対して、か？」

「うん。そんな凄いヤツには見えなかった？」

「その……まあ、なんだ……」

「いいわよ、濁さなくて。実際の所はともかく、あの男は割と存在が悪性なもの」

「悪意に満ち溢れてる、ということか？」

「んー、違うかな。自分の選択、手段が、傍から見れば悪意に満ち溢れてるように捉えられるというところは理解してるけど、本人は悪意なんてこれっぽっちも無いわ。ただ、そうしたいからそうするだけね」

「余計悪くないか、それは」

「うん、本当にね。ただ、彼にとってそーゆーのが必要な場面ってのが、だいたい誰かの為なのよ。……殆どの場合で、アレは自分の為に悪辣さを振り撒いたりはしなかった。偽悪的とも違う、偽ってなんかないから。必要悪とも違う、それが必要だと思ってるから。それでも彼はいつも、正しい事のために悪いことをしてきた」

「……………」

「例えばあの男、いじめられっ子を助ける為に、クラスの教師から校長を総とつかえさせて、加害者達の一家がこの町に居られないように追い込んだのよ。あの時は私も手伝ったけれど、まあ酷いものだったわ。村八分という言葉が日本にはあるけれど、それが郊外とはいえ都市部で起こるなんて……今考えると相当ね。イツセー君は巧みに、周りの子供と大人の恐怖心と正義感を煽って、敵を社会的に殺して回ったのよ」

「…………それは、過剰防衛というヤツだろう」

「防衛ですらないわ、当事者じゃないから。……今でも覚えてるわ。寄ってたかって大人達に詰め寄られて、それでも厭らしく嗤う彼の姿を。一歩間違えたらタコ殴りにされて、死ぬかもしれない状況で……彼、なんて言ったと思う？」

「こんなことに意味は無い、とかか？」

「顔は覚えました、よ」

「……………」

「ぶん殴られることまで折り込み済みで、でも実力行使をしたら今より酷いことをする、と脅したのよ。心が強いなんてものじゃないわ、クソ度胸にも程がある。それが小学生の男子なんだから、未恐ろしいってレベルじゃないわ。別件で実際に殴られてたけど……その相手は死ぬより酷い目にあつたとだけ言っておくわ」

「本当に、元々は人間だったのか？」

「恐ろしいことに、人間だったのよ」

「……分からない。自分の為に悪行に手を染めないのは信じよう。正しいことのために悪を成すのも理解しよう。褒められた人間ではないが、それでも認めざるを得ない人間なものも分かる。だが、お前が信仰に足る、と表現する理由が分からない」

「……………イツセー君は、何でもできる超人というわけではないわ、むしろ凡人と言つて
らる」

「……………」

「普通に考えてみて。ただの小学生が、町全体を巻き込んだ敵の社会的抹殺を敢行できると思つて？」

「だが、やったのだろうか？」

「ええ、やったわ。何がなんでもやったのよ。彼は自分の能力の低さを諦める理由にはしなかつた。人の心を揺らす言葉もなかつた、人を動かせるコネもなかつた、そもそも

どうすればそういうことが可能になるのかという頭もなかった。それでも、彼にはいいめられつ子が泣いてる現状をそのままにするという選択肢はなかったのよ」

「……………」

「私は、何も出来ない自分が悔しくて泣いてる彼を見たわ。何度も慰めたこともある。でも彼は悔しさをそのままにはしなかった。いえ、自分の心なんて無視すらしていた。いじめられつ子の件だけじゃない。彼は自分の思う正しさの為に、何度も才能の壁にぶつかりながら、それでも、それでもと戦い続けていたのよ。……………やり口は、お世辞にも良い方法とは言えなかったケド」

「凄まじい、な」

「本当にそうよね。だからね、昔相談したことがあったのよ。当時はそうとは分からなかったけれど、今なら分かる。私は信仰に迷っていた。本当に、この教えを信じて良いのかと、迷っていたのよ」

「お前が、か？ イリナが、迷っていたのか？」

「ええ。私だって人間だもの、それに幼い頃の話よ？ ……その時の私にとって、ありもしないものは信じられなかったのよ。実際それで誰が救われたわけでもなかった。当時、ずっと父さんが怒ったような悲しいような顔をしていてね。本当に主がおわすなら、なんで敬虔な信徒であるお父さんが、ずっと悲しいような顔をしてるんだって」

「……………」

「……その頃の私にとって、もし救世主というものがあるのなら、それは主でも、テレビの中に出てくるヒーローでもない。イツセー君だったのよ。どんな困難にも立ち向かって、悪なるモノを打ち倒し、必ず誰かを笑顔にする。だから、イツセー君なら何かが分かるんじゃないかって、内容は暈しながら聞いたのよ」

「彼は、なんと？」

「まず自分を信じなきゃ、だつてさ」

「自分を信じる、か」

「うん。まず自分を信じて、それからじゃないと他人なんて信じられないって言ったのよ。でもね、それで腑に落ちる程子供って複雑じゃないのよね。それだけなら、多分私はこうなつてなかつた」

「……………」

「……イツセー君が、私のことを『すげーやつ』、と言つてくれた。……信じてくれたのよ。暴れることしかできない迷っていた私のことを、私にとつての救世主が……信じてくれたのよ。そんな私が信じてみたい相手なら、それは信じるに足る存在だ、つて」

「……………」

「……今にして思うとね、イツセー君も自分を信じたかつたのだと思うわ。迷っていた

ことはなくても、ずっと嘆いていたから。……自分が普通なのに、普通じゃないことに、ずっと苦悩していた。私もそのことを頭のどこかで分かっていたけれど、イツセー君は凄いやツだから、それでも自分を信じて頑張ってるんだって思ってた。……思ってたのよ」

「……違っていたのか？」

「ううん、多分大きくは違わない。……それでも、心が折れる程度には弱かったみたい。諦めることをしなかつた彼でも、諦めることがあつたみたい。それが私にとつて、かなりシヨックだった。幻想が崩れると言うよりは、気がつけなかつた自分に対して、かしら？」

「……………」

「……だからね。シヨックは受けたけれど、ちよつと安心しちやつた。イツセー君が救われたって聞いて、悪魔になってしまったけど、現役信徒としては失格かもしれないけれど、安心しちやつた。私がイツセー君に救われたように、誰かがイツセー君を救ってくれたんだって。……………それが悪魔なのがちよつと、いやかなりムカついてるけれど」

「イリナ……………」

「でもね、だから殺すわ」

「前後が嘯み合つてないぞ? ……それがお前なりの手向けなのは分かるが」

「独り善がりにも程があるケドね。でもいつまでも彷徨わせておくのも目覚めが悪いわ。正しさを……いえ、普通であることを何よりも望んでいたイツセー君の末路として、悪魔であることは何よりも悲劇的よ。それで誰に恨まれたって関係無いわ。私情だらけだけど、私情なく始末できるのは私だけだと思ふもの。矛盾してるけれどね」

「……………だが、今はやめておけ。この状況下でグレモリーを敵に回すのはまずい」

「それもそうね、オマケにイツセー君本人も敵に回すとろくなことがないわ。…………ふつ、とはいえゼノヴィア。私達は運がいいかもしれないわ?」

「何がだ?」

「少なくとも、コカビエルの敵にイツセー君がいる。彼は間違はなくコカビエルのやろうとすることを許さないし、それをなんとしてでも止めるに違いない。例え何もかもが足りなくても、コカビエルが普通正じゃなくく限り絶対」

「あまり悪魔をアテにするのはどうかと思うがな……………。だがまあ、『イリナの幼なじみ』を信じると言うなら、あるいは」

「うん、ありがとうねゼノヴィア。私は、貴女のこと信じてるわ」

その9

「イツセー、イツセー？」

「……………あ、部長？」

何とか部長に手を引かれ、家に帰ってきてからも起こったことが衝撃的過ぎて、僕は茫然自失だった。……だって、あのイリナちゃんが。厳しい不良に囲まれても、自分の気持ちを曲げずに立ち向かったイリナちゃんが、あんな風に狼狽えるなんて思っていなかったのだ。晴天の霹靂、とはまさにこの事である。信じられなくて、何も手がつかなくて、ただベッドに座ってぼーっとしていた。……………明日も早いというのに、既に時計は3時だ。明日どころかも今日の話である。

……様子がおかしいのを部長は心配していたようで、多分こうして声を掛けてくれたのだらう。でもなんだか、自分でもレスポンスが遅いように感じる。

「すみません、部長。ちよつと調子が出ないみたいで」

「例の彼女のこと？」

「はい。……僕は彼女が、あんな風にならぬという所を見たことがありませんでした。今まで見せてこなかった、と言われたらその通りですが、それでも僕にはその姿を見せ

たことがなかったんですよ。あの女、見栄っ張りとは違うんですけど、仲のいい相手には弱ってる姿というのを見せたがらないタチです。まあまあガキ大将気質なんですよ」

「ヤケに素直に話すわね。貴方にしては珍しく」

「あはは……そうですね。多分普段ならのらりくらりと躲してます」

ちゃんと理性が働いてたら、多分部長にここまで話してない。嫉妬の原因作って墓穴掘るのが嫌だから。……でもそのことを口にしてから気がつくあたり、相当にメンタルにダメージを負ってる気がする。

だから問われるままに、僕はイリナちゃんとの馴れ初めや、どんなことをしたか、やらかしたか、暴れたか、そして遊んだか。僕が覚えてる限り、大体のことを話した。

「本当にイツセーは、あの子のことが好きだったのね」

「……………好き、という表現は正しくないと思います。恐らく、信奉という言葉が正確だと思います。イリナちゃんは僕にとつてのヒーローでした。自分の言ったことは曲げないし、猪突猛進で自分の正しいと思ったことを為す、迷惑で暴力的でぶっ飛んでるけど、最後にはちゃんとみんなを笑顔にする、そんなヒーローでした」

「まるで貴方の様じゃない。ヒーローみたいでもないけれど、自分のことはなかなか曲げず、視野狭窄で」

「それは……多分イリナちゃん我真似ですね。僕の様、じゃなくて僕がイリナちゃんの様、というのが正しいと思います。……僕はヒーローにはなれないけれど、彼女みたいに誰かを助けることができれば、と何度思ったことか」

そんな彼女の暴走をコントロール……はできなかったか。暴れる先を調整するのが僕の役目だったわけだが。イリナちゃんはそれで僕のことをすげーやつと言ってくれたが、僕の助力がどこまで必要だったものか分かったものではない。

「多少僕の噂が流れる程度には頑張った自覚はありますけれど、それでも僕は卑怯者だ。顔も隠さず、逃げも隠れもしないというのはできなかつた。その為の力と、多分勇気が足りてませんでした。今はともかく、僕は自分のことが死ぬほど嫌いでしたから、自分のことを信じられなかつたんです。……彼女は違う。どんな時でも前に立ち、どんな時でも逃げも隠れもせず。それでいて、自分が何とかする、なんとかできると心の底から信じていた。僕も、周りも、そんなイリナちゃんをカッコいいと思ってたんです」

「……………」

「そんな彼女が、まるで信じたものに裏切られたみたいな顔をするなんて、思わなかつたんです。まるで自分の根幹を揺るがされたような、迷子の子供のようなザマを晒すなんて思わなかつた。……………分からない、僕の何がそうさせたのが、本当に分からない」

「悪魔になつたことがショック……………」という風にも見えなかつたわね」

「ええ、なんなら介錯する気満々でしたからね」

多分そうなるだろうなって思ってたし、それでこそだとも思ってた。……元氣そうな姿と、変わらない無法さで安心だっただけ。だからこそ分らないのだ、本当にどうしてなんだろう……。

「……案外、貴方と同じ理由かもしれないわよ?」

「えっ?」

同じ理由、同じ理由? 思わず脳内で何度も反芻するが……する、が。そんな馬鹿な、とは切って捨てられなかった。

「話の前後から察するに、彼女は貴方の心が折れるなんてこれっぽっちも思ってみなかつたのではないかしら?」

「……まあ文脈を辿ればそうでしょうが。でも僕、あの女の前でみつともなく泣いたことだつて両手の指じゃ数え切れませんよ」

「泣いたからと言って、心が弱いと、心が折れたと必ずしも思われるわけじゃないでしょう? ……私は貴方の心が、それ程強くは無いことを知っている。けれど立ち直りが早いのも知っているわ」

「……………」

……実際、どうだったかなと思ひ出す。自分の不出来さに悔しくて、泣いて、へこた

れそうになったことしか思い出せない。あまりいい思い出でもないし。

「そして立ち直りが早いのは……いえ、立ち直りが早いように見えるのは、心が強い様に見えるのは。貴方が自分の心を置き去りにしてるからじゃないかしら？」

「と言いますと」

「自分が苦しいからって、自分がしたいことを投げ出すタチじゃないでしょう、イツセー。それでもなければ、ライザーとの一騎討ちに説明がつかないわ」

「あ……………」

そうだ、そういえば戦う前に僕はアーシアに言った。恐怖を感じないことよりも、恐怖を乗り越えようとするの方が何倍もカッコいいことだ、と。……………無意識に僕は、恐怖を感じないようにしていた、か。あの時だけじゃなくて、今までずっと。

「それでも、イツセーが頑張ってきたことに変わりはないのだと思うけれど。その認識のズレがあつたのには違いないはず」

「……………そう、ですか」

まあガキの時分の認識だ、思い出補正だつて多分にある。……………僕が今感じてることと、同じこと、か。

「……………幻滅されちゃったかなあ」

「お婆か。貴方、あの教会の戦士に対して幻滅したの？」

「……………まさか、そんなことは絶対に」

「では、それが答えよ。事實は違っても、積み重ねたモノの重みは決して変わらないのだから」

「……………リアスさん」

「あ、待つて。急に名前で呼ぶのはやめてちょうだい。食べたくなくなるから」

「一気に台無しですね!？」

「ふふふっ」

感極まってしまった僕の純情ハートを返して欲しい。……………いや、分かっている。僕の調子を取り戻させる為にワザと道化になってくれただけだ。本当に、僕には勿体ない良いヒトだ。

「それはそれとして、かなり妬けるわね…………」

「部長の知らない僕を知っているとかいいう話ですか？ それとも男と女のアレ的な話ですか？ 後者ならあの女はほぼ論外ですよ。客観的にアレが魅力的な美少女なのは否定しませんけど、むしろ美少女だから論外です」

「……………貴方は、全く。というか、ほぼってことは可能性があるってことよね？」

「ええ。その……………なんですかね。還暦越えてもお互い独り身だったら籍入れるか、ぐらゐの距離感です。あ、人間の感覚で想像してくださいね。悪魔だと60歳はまだまだ若

いでしょから」

「……それはそれで美味しい立ち位置じゃないかしら？」

割と部長も欲張りだなあ……と苦笑する。気持ちは……まあ、分からないでもないのでも言わない。なんだかんだ、こういう相棒ポジションって憧れがあるよね。……イリナちゃんという相棒は、僕にとつての密かな誇りだった。彼女の方もそうであつたら、とても嬉しい。

「……また顔合わせする機会は、ありますかね？」

「間違いなくあるでしょう。少なくともエクスカリバーを破壊したら、その核を引き渡す先は彼女達になるんだから」

「まあ、そうなんですが。………まずいですね、祐斗くんには頑張ってもらわないと、出番が無くなるかもしれません」

不安になってそう言うと、部長は首を傾げた。

「……そんなに強そうには見えなかったけれど」

「ええ、多分爆発的に強いとか、そういうことはないと思います。でもアレは僕の知る限り負けたことがなかった」

「人間の範疇の話、ではないということ？」

「ええ。どんなときも、アレは勝てる状況になるまで粘り、細い勝ち筋を見つけてそれを

通します。それだけの忍耐力と、運があります」

「運」

「はい、運です」

運、というのは馬鹿にできないものだ。いや本当に。僕が必死こいて蜘蛛糸の如き僅かな可能性を手繰り寄せてる側で、何の気なしにラツキーパンチを繰り出してたことが何度もあった。1度目なら偶然、2度目なら幸運、3度目以降は……それはもう必然というヤツだ。少なくともあの女にはそういう偏りがある。

「そもそも、考えて見てください。普通に考えて、小学生の女兒がたくさんの不良相手に戦って、勝てるわけないんですよ。小学生じゃないですからね、高校生ですからね？」

「でも、それを彼女はやったのでしょ？」

「ええ、やったんですよ、やっちゃったんですよ。……いえ、全員イリナちゃんのしたワケじゃあないんですが、相手を瓦解させたのは間違いなくイリナちゃんの一手です。……不良の鉄パイプフルスイングを避けようとしてしゃがんで、その後何が起こったと思います？」

「その鉄パイプが不良に当たった、とかかしら？」

「半分正解です。……滑り込むようにしゃがんだ結果、不良の股下に潜り込んでしまいまして。勢いよく立ち上がったなら、その……」

「……………」

「あまりの痛さに不良は悶絶、すっぱ抜けた鉄パイプが別の不良の……に当たってそっちも悶絶。その様子を見たあの女のこれ以上ない笑顔は、多分死ぬまで忘れられないでしょうね」

その後僕を含めたクソガキ集団にどんな指示を出したかは言うまでもなく、お巡りさんがやってくるまで本当に酷い追いかけっこが繰り広げられて……。思い出したくない、あの後こつてり叱られたからなあ。

「なので、イリナちゃんにとって都合のいい展開が起こることを想定しておいた方がいいです。下手したらコカビエルだって倒せるかもしれません。強烈な運と、祐斗クンと張り合える剣技……もしかしたら、って思いませんか？」

「あまりこう……教会の戦士を評価するのはどうかと思うけれど……。まあ、イツセーの幼なじみだものね。それを考慮して動いた方がいいかもしれないというのは理解したわ」

「うつつ、すみませんがよろしくお願います」

よし、なんだかんだ調子が戻ってきたぜ。だがやる気満々のところだけ寝なきやいけないんだよな。……もう4時だ、2時間寝れるかどうか。

「……遅くまで本当にありがとうございます、リアスさん」

「大事なヒトが悩んでるもの、いくらでも相談に乗ってあげる。でも、何も無しなのは芸が無いし……」

そう言つて部長は立ち上がり僕の額に一つ、口付けを………口付けをオ!?

「ぶ、部長!?!」

「今日はこれだけで十分。ねえイツセー、貴方は自分をヒーローではないと評したけれど、私にとつては違うわ。……あの日のことを思い出すと今でも胸を締め付けられるけれど。それでもあの日の貴方は、私にとつて最高にカッコいいヒーローだった。そのことは忘れないでね?」

「……………はい」

「それじゃあおやすみなさい。状況は大きく動いたわ、ちゃんと休んで次に備えましょう」

ぶしゆう、と湯気を吐いて僕が倒れたことは言うまでもない。やっぱ顔の良い女はダメだね、こつちのハートが持たない。

その10

『それで、どうするんだ?』

「……寝起きで開口一番ソレか?」

あんまり頭が働いてない時に声を掛けるのはやめて欲しい、と思う。思うが、コイツはそーゆーのお構い無しだろうな。

「とりあえず……表にでてきたってことはできたの、虚飾。言つてた時間より早いけど」
『今回はイメージがしっかりしていた故、更にな。で、どうするのだ?』

「どうするって、そりやおメー……」

どうすればいいんだろうな、コレ。ぶっちゃけ事態は僕の手を離れてる。そもそも僕の手つていうか誰かの思惑に乗ってただけなんだけど、話が思いの外壮大になり過ぎて僕の手には負えない状況になってるってこと。

「だからできることと言えば、祐斗クンのサポートをして、部長と生徒会長が殺されないように死力を尽くすのが、リアス・グレモリー陣営としてはベストだと思う」

『戦争が勃発するだろうことに關しては?』

「まだワンアウトどころかツーストライク程度だと僕は思うんだよね。結構お粗末だ

よ、仮に戦争目的だとしたら」

『ほう？』

僕は墮天使コカビエルのことを何も知らない。人類に天文学を齎したらしい墮天使であることしか知らない。あとは墮天使の中では珍しいタカ派……戦争に乗り気であるというぐらいだ。

「……仮に、仮にだよ。僕がコカビエルだったとして戦争を起こすとしたら、まず『神の子を見張る者』内で味方を作る。長い時間を掛けて、味方を作ってクーデターを起こす。ドライグ、墮天使の総督であるアザゼルはどんなヤツなの？」

『そこまで詳しくはないが……あくまで俺の所感でいいか？』

「もちろん」

『アレは研究者だ。必要なら戦うことを厭わないが、基本的には引き籠って自分の研究に没頭するタイプだろう。戦うことが嫌いと言うよりは、戦いに時間を取られることで趣味の時間が奪われることを嫌うタイプと言えよう。アザゼルに限らず、ヤツらは大なり小なり学者の側面がある』

「なるほどなあ。……恐らく、コカビエルも同じことを考えて実行に移したけれど、無理だったんだと思う。確信が持てた」

『で、あろうな』

だから恐らく大層な脳筋というわけでは無いのだろう、コカビエルも。少数でコトを起こしたとしても、ただのテロとして鎮圧されるだろうことに気が付かないワケがない。僕ですら思い至るということは、即ちそういうことなのだから。

「コカビエルの狙いは、ヤツ自身で責任を取り切れない事態にまですることにあると思ってる。聖剣を盗んだ理由は……火種になればいいな、程度なのと。あとは……悪魔に天使側を攻撃する余地を与えるため、かな。でもこれはオマケもオマケ。本命は、部長と生徒会長を始末することにある」

『その心は?』

「聞くまでもないだろう……お前絶対僕よりも頭がいいんだから」

まあ大体理由は分かる。僕を戦いの場に連れ出したい、適応させたいのだろう。何も戦うのは戦場で暴れるだけじゃない。策を練るのも戦争の内、僕にできる範囲のことをさせて少しずつ適応させていきたいんだろう。目を付けられたが運の尽き、か……。

「部長や生徒会長が殺されたら、それはもう墮天使の幹部1人では負えない外交問題になるだろう。あの2人は現魔王の身内だ、仮に表向き関係ないことにしていたとしても明確な侵略行為。あれこれ理由付けて報復するだろう。2人の始末に聖剣を使えれば御の字、教会側の監督責任を問うてここぞとばかりに追求すれば、ただでさえ深い溝が……つて感じで」

『お前の言い分ならば、コカビエルは順調に事を運んでいる様ではないか。で、あるのに決定打にはまだ程遠い？』

「おん。……まあ多分奴さんも理解してるとは思うんだけどねエ」

結局、殺せなきや意味が無い。そして部長と生徒会長が冥界に引っ込んでしまえば、それでおじやんになる程度の、本当にお粗末な策なんだよ。部長と生徒会長の両方がプライドに雁字搦めになった脳みそお花畑悪魔でもないと成り立たないのよ、マジで。

「それで言う」と部長はそのケがあるからそれを期待してたんだとは思うんだけど……多分これに関しては僕のフラインプレーだな、良い意味で臆病になったんだと思う。……悪い意味でも」

まあ今はそれがいい方向に働いてるから悪い側面は見て見ぬフリをするとして、だ。「既にこの話は冥界に持ち込まれてる。持ち込まれてる以上、どう転んでも……仮に部長か生徒会長のどっちかが殺されてもドンパチをする戦争にはならんだろう。これで連中が駒王町に侵入したらその時点で墮天使陣営にお問い合わせができる。多分天使陣営も便乗するだろう。そうなったら、戦争を基本的にはしたくない墮天使陣営はコカビエルを切るしかない。そしてコカビエルを切ってしまうば、仮に決定打に成りうる事が起きてても責任逃れがある程度はできる。ただのテロとして処理できる……いや、せざるを得なくなる」

『コカビエルを処理して、終わりにするしかない……ということだな?』

「うん、それ以上のことをすれば戦争になるのが分かるだろうからね」

だから僕は思う、絶対に何か見落としている。

「それが僕の知識不足か、察しの悪さから来るものかは分からないけれど、間違いなく何かを見落としている。部長と生徒会長さえ殺されなければ大丈夫な筈んだけど、そんなお粗末な策で墮天使の幹部が行動を起こすか? ……もし何かあるとしたら、コカビエルが現状を我慢できない程の相当な戦闘狂で無敵のヒトになってるか、起爆すると戦争するしかない様な爆弾情報を握ってるか……あとは、天使、悪魔両陣営のタカ派と繋がってる可能性、か。でもそれぐらいしか思いつかない」

だから、もう僕には状況はどうにかすることはできない。もうここまですべてと上の連中の判断になってくるだろう。……いや、打てる最終手段はあるけれど、それを使うには状況が把握し切れていないし、そこまで切羽詰まっている様には思えない。警鐘もそんな鳴り方してないしね。

「だからやつぱり、最初に戻ってくる。僕がやることは、木場祐斗の復讐への助力と、魔王の妹2人を死力を尽くして守ること。やることが単純明快で楽だね」

『お前がそう考えるなら、それでいい』

「含みのある言い方だな、おい」

『そこまで他意は無い。……が、次お前が死ねば、それはそれで火種になりそうだな、とは思ったが』

「……………うわあ」

流石に無いよね……と思つたけれど、僕が死んだら部長も方法はともかく後追いしちゃうだし、そうなると多分あのお兄さま魔王も動くだろうことを考えると……………うええ、僕自身が爆弾になることとか想定したらんよ。間違いないでそれで大きく事が動くとは思わないけど、低くない確率だろうし……。

「……………うーん、いやまあサラサラ死ぬつもりはないんだけど、いざと言う時自分がどうするかなんて火を見るよりも明らかだからなあ」

『少し気になったのだが』

ここでドライブが、本当に気になってることがある、と言つた感じで質問してきた。今までののは単なる意見の擦り合わせだったけれど、本当に気になることがあつたんだらう。

『墮天使コカビエルは、聖書の時代から生きている。言わば歴戦の戦士だ。断言してやろう、お前やリアス・グレモリー眷属、あの教会の戦士達では逆立ちしても敵うまい』
「んなモン既に承知だが……」

『だが、お前はコカビエルのやろうとしてることに頭を悩ませていても、コカビエル本人

の攻略に関しては差程考えていないだろうか？ なんなら余裕すら感じる。それは何故だ？』

「ンあー……コレ言ってもいいモンかね？」

ドライグから誰かにバレル、ということとは考えづらいし、まあいいか。

「間違いなくお前の考えている通り、コカビエルと戦うのは無理がある。多分瞬殺レベルですらある」

『……それで？』

「だけど、殺すのはまた別の話だろう？ コカビエルが歴戦の戦士であればある程、僕は簡単に殺せる自信がある。詳しいイメージは……まあこんな感じで」

『……ううむ』

僕がやろうとしていることを、正確に頭の中で思い浮かべる。ドライグはそれを読み取ったのだろう、渋い感じで唸っている。

「できそうもない？」

『……否、可能だ。恐らくお前の想像通りの現象を引き起こすだろう』

「そ、なら良かったよ」

『だが相棒、これは些か……』

「尊厳を踏み躪るようなやり方だつて？ 当たり前だ、僕はこの墮天使の幹部の尊厳を

踏み躪って、粉々にして……それで死んでもらいたいんだよ」

そもその話……僕は今、とても怒っている。心底、腸が煮えくり返る程に怒っているのだ。

「……分かつてる、分かつてるんだ。避けられない戦いだつてある。どこまで行つても戦争は政治的行為の1つでしかない。でも、コカビエルという墮天使はそれを敢えて起こそうとしている。……手段が、目的になっている。それが僕には許せない」

『……………』

「しかもムカつくことに……恐らく小競り合い程度に収まったとしても、ヤツはある程度の鬱憤が晴れるに違いない。万が一魔王様が出てくることになれば、それはもうヤツは気持ちのいい死闘に身を投じるだろう。どう転んでもヤツにとっては楽しい楽しい戦争だ。……多分、それで誰が死んだつてお構い無しだろうぜ」

自分勝手であることを咎めることは、僕にはできない。だがそうであるならば、誰が自分勝手にコカビエルの尊厳を踏み躪つたつて文句は言えないだろうよ。

「楽しい戦争なんて絶対にさせてなるものか。色々理由はあるけれど、何より僕がムカつく。それじゃあ納得できないか？」

『……………いや、文句は言うまい。以前にも俺はお前に言った。お前の傲慢さにケチは付けない、と』

「助かる」

ま、文句言われようが何しようが止めたりなんかしないが。正しさという免罪符があれば、人間は何処までも悪辣になるということを身をもって体験してもらわないと。いや……そっか、僕は悪魔だな。じゃあ理由無く悪辣でもいいか、わははは。

『……………酷く同情しようコカビエル、運悪く眠れる竜を叩き起こすとはな』



「と、言うわけで今日僕学校休みます」

「何がというわけで、なのか分からないのだけど??」

あり? 部長にこの後の予定を形だけでも報告しようと思ったけど伝わってない? 盗聴か思考を盗み見てると思ってたけどそんなことはなかったか。

「貴方、私をなんだと……というかそういうのがお好みならそうしてあげましょうか?」

「ストーリーカー、ヤンデレその他諸々は美人以上に観賞用だということをお伝えしておき

ます。ともあれ普段相当心を読まれてると思つてたんですけれど、僕つてそんなに分かりやすいんですか？」

「顔には出ないけれど、仕草が分かりやすいわね。普段は話す時色々ジェスチャーを交えているけれど、隠し事がある時はそういうのが全くなくなるもの」

「普段からジェスチャー我慢しますね」

「するんじゃないわよおばか」

コツン、と軽く頭を小突かれる。いやでも将来的にそういうの必要だと僕は思うんだよ。いや分かっているよ、部長相手には隠し事しないでつていう話でしょ？ でも一応僕、首を縦に振らないつていう勝負の途中だしなあ……。あ、それとこれとは話が違いますか、そうですか。

「えつと、ドライブに頼んでいた新しい能力ができたので、それを効率的に使うために駒王町全体に装甲板を撒いてきます。悪く言えば不法投棄ですね」

「敢えて悪く言う必要あつたかしら……」

それはともかく、部長にも新しい能力『虚飾』の概要を説明する。

「……………成程、確かに先にセットしておくことで効果が十二分に活かされるのは分かつたわ。私の方で許可は出す。出す……けれど、休んでまですることかしら。例えばほら、私達や生徒会の皆に頼んで各所に配置していく方が効率的でしょう？」

「それはその通りなんです、遅くとも夜になるじゃないですか。昨日の今日で何かが起こる、なんて思いたくないですけど……一応教会の戦士がいますからね、何時敵になるか分かったもんじゃないので昼間のうちにやっておこうかと。流石にあの2人も一般人の前で剣を出すわけにはいかないでしょから」

名付けて『一般人ガード』、字面だけなら最悪である。中身も大差ないが、僕は向こうの善性を確信してるからね。

「うーん……そういうことなら分かったけれど……ああ失敗したわね、貴方には早めに使い魔を見つけてあげるべきだったわ」

「使い魔？ ……あー、普段はチラシ配り担当してくれてるあの」

「と言うよりは、簡単な雑用、雑務を肩代わりしてくれる魔物ね。チラシ配りはそのうちの1つよ」

ああ、話は見えたぞ。同じノリで僕の使い魔にチラシ配りならぬ装甲板不法投棄をできるようにしておけば良かったってことだな。

「まあ無いものねだりしても仕方がないですし、いい感じに自分でやってきます。落とされた場所は報告した方がいいですか？」

「ええ、間違つてこちら側が回収しちゃうと意味が無くなってしまふし、一応お願いするわ」

「うっす」

とはいえ、学校を休むつてのに学校内や学校近辺で細工をするわけにもいかないのだから……

「……学校の方はお願いしていいですか？」

「そのぐらいなら構わないわ。モノはあるのかしら？」

「僕の部屋のクローゼットの中に100枚程、九頭龍亭の裏倉庫に200枚程、ですわね。部屋にも置いとときや良かったツスね……」

そう言うのと、ちよつと曖昧な顔で笑う部長。すげえ、このヒトが愛想笑いしてるところ初めて見た。

「……やっぱ色がダメですか」

「嫌いじゃないけれど、ちよつと……」

まあぶつちやけると酸化しかけの血の色だからな、装甲板。如何にもな呪いのアイテムっぽさがあつて、1枚ならオカルト研究部っぽさがある。何枚も何十枚もとなると……うん、ダメだね。

「一応甲冑型には加工できますが」

「部屋に配置する分はそれでもいいかもしれないわね、お願いできるかしらっ？」

「では、先に9枚ほど複製します」

『強欲』の装甲板と新たに生まれた『虚飾』の装甲板を取り出す。何となく虚飾の方はキラキラと輝いてるように見えるが……まあ色で台無しだわな。

とりあえず強欲の能力で虚飾の装甲板を9枚まで複製。ゴソツと魔力が持っていない、まるで酔ったような感覚になる。感覚だと許容限界の1/4は消えたな。

「うう……あとはこれを装甲として変化して」

どろり、と液状化。その後、析出するように9枚の板がプレートメイルの各部位へと変化。ゴロゴロと、部屋の床に転がった。

「……意外と重いよね」

「あり、そうですか？」

装甲板は前に持つてもらったことがあるけれど、そっちは重さなんてあつてないようなものだったらしい。けれど装甲にしてしまえば、それに足る重さは生まれるみたいだった。僕は自分で装備してしまうとその重さを感じなくなるので、今初めて知ったよ。

「一応今は僕のサイズに合わせたのにしか加工できませんけど、1度皆に装備さえしてもらったら、そのサイズのはいつでも加工できるようになります」

「……やはり学校休むのやめて部屋に集まらない？ 一応全員分のサイズ調整はしていただいた方がいいかもしれないわよ」

「あー……」

「ばら撒きさえしておけば直ぐに装備させることはできるけれど、その場に僕がいるなら直接板を生成して装備させた方が色々ロスが少なさそう。……いや、そもそも味方に装備させるのは重さの観点からどうなんだ？ 緊急時にはかまだけど、重くて動きづらいつて可能性無くはないし。それにコレ重いつてことは……」

「……僕の思うように改造できるまでは難しいかと思つてたんですけど、現時点では拘束具としての運用に振り切つた方が有用かもしれませぬ。実は重ねがけに関しては把握してる限りだと上限がないみたいで」

「いきなり話が飛んだわね……。ちなみに何枚まで試したのかしら？」

「ざつと50枚です。厚さは9倍からは増えなくなつたので、ゴテゴテさせて拘束するのは難しいですが……」

「これの、50倍……」

色々悪いことを思い付いたのか、目が怪しく光り口の端が吊り上がる部長。この悪巧みしている時の顔が嫌いではなかったりする。

「でもイツセーがその場にいないと使えないのよね？」

「流石に。僕が視認なりなんなりで認識してる板じゃないと装備できないことは確認済みです」

「まあいいわ、そこは追追考えましょう。きつと素敵なことができるから」

「本当かなア……。んんっ、ともかくそれならやつぱりすぐにでもばら撒いた方がいいですね」

「結局そうなるのね……。うーん」

部長はまた難しい顔で思案し始める。……うーん、なんか気を使われている？

「部長、部長。僕のことなら大丈夫ですよ、なんなら今やる気が有り余ってますから！無遅刻無欠席は途絶えませんが、ンなもん屁でもないので」

「屁でもない、なんて言うんじゃないの。……いえね、こつちの不手際もあるから悩んでいただけよ。本当ならいの一番に使い魔の手配をしてあげるべきだったのに」

まあそーはゆーてもイベント目白押しかつラーメン屋からしばらく離れられない生態してましたから無理もねーですよ、とは思うのだが。

「ただ無理はしないでね、日中はただでさえ我々の力が落ちるのだから」

「ええ、勿論です。では！」

さてさて……。久々に赤パーカーだけで街に繰り出しますかねつと。

その11

「全く……やっつてることが不審者そのものじゃねえか」

「仕方ないよそれは、イツセー君がやるつて言つたんだから」

「そうだけどきア……」

現在僕は、フードまでしたパーカースタイルで駒王町を徘徊、良さげな所に板を埋めるor仕込む作業を行っている。こんな不審者スタイル、普通なら直ぐに警察に通報案件なのだが、ここで忘れがちな悪魔の特性が生きてくる。そう、悪魔に叶えて欲しい欲を持つ人間にしか存在を認知されないという特性だ。これを全開かつ倍加4回分を以て、僕は誰にも視認されることなく日中の街中を徘徊できているというワケだ。

まあ流石に板は見えなくするなんて出来なかつたから、教えてもらった魔力の使い方、人避けをするぐらいしかできない。公園、道路、廃工場……その他諸々エトセトラ。人が良く触る場所には隠せないのです、それも考慮するとえらい大変な作業だ。正直自分でやるなんて言わなければよかつたと思つてる。

……………でエ、

「なーんでてめえが着いてきてんだ優男、今の今まで気が付かんかつたぞ」

「気が付いてて気が付かないフリをしてるのかと思ったよ。僕も部長に頼んだだけさ」
「……お互いの監視ってか？」

「だと思おうよ」

まあ、話自体はコイツから振ったとは思うんだがな。あのヒトが自分から学校休ませるようなことをするわけがない。するとしても合宿ン時みたいに根回ししてからだろうし。

「作業の概要は？」

「大まかには。本当なら手分けして……と言いたいところだけど、君はそれを許してくれないだろう？」

「そりや導火線に火がついた爆弾を放置とか有り得ねえし」

「あはは……酷い言い様だね」

「酷いと思うなら目ン玉ギラギラさせんな。殺意しまえ殺意」

はア、仕方あるまい。コイツにも倍加のお裾分けしておくか。

「ほれ、倍加」

『Ignition Boost』

『Transferrer』

「ん？」

なんで倍加の譲渡をしたのかが分かっていないようだ。……いやまあこいつの目からは不審者スタイルの僕が不法投棄してる様にしか見えないか。

「僕はパンピーだぞ、悪いことしてる自覚がある時はコソコソとする。具体的には悪魔の種族特性の強化だ」

「ああ、そういうことだったんだね」

「今4回分の倍加を譲渡した。君程面が良くてオーラがあってもそうしとけばバレんだろ」

「イツセー君の神器、本当に便利だね……。まるで……」

そう言いかけて、ヤツは口を閉じた。

「……………まるで、赤龍帝のような」

「んあー……噂話の類として聞いたことがあるケド、似てるっちゃ似てるな。というか実在してんのかよ、アレ。まあ神滅具^{ロンギヌス}全般に言えるが」

……つぶねエ。結構答えに迫ってきたなコイツ。今明かすわけにはいかない。どこかでばらす必要はあるが、少なくとも今ではない。

「……神滅具は実在するよ。記録の上でも確かにその爪痕がある」

「うええ……マジか」

「僕も全部が全部存在してるとは思わないけれど……『赤龍帝の籠手』と

『デイベイン・デイベイング白龍皇の翼』は確実に存在している。何故ならその所有者同士がほぼ確実に殺し合
い……その余波で周囲に影響を与えているから。表の歴史に出てきたことだつてある
のは有名な話だね」

「あるの!?!」

「……? そんなに驚くことかな」

厄ネタ度が増す情報に思わず叫んでしまい、訝しげに顔を見られる。

「いやだつて……もつとこうファンタジーはファンタジー界限で収まつてるものだと思
うじゃん……。世の偉人や有名人が自覚無自覚問わず神器所有者が多いつてのは聞い
てたケド、それにしたつてじゃん。神滅具なんて一般社会に出回つちやいけない類の存
在だろ……」

「気持ちに分かるけれどね」

いや本当に一般社会に出回つちやいけない存在だろ……聞いてるのか傍迷惑滅茶強
クソトカゲ???

『クソトカゲ言うなブチ殺すぞノータリン』

ノータリン言うなブチ殺すぞ。まあ……つたく、コレが僕と運命共同体じゃなかったら
マジで相容れない生物だっただろう。グッジョブ聖書の神、アーメン。

「痛ッ」

「……?」

「いやなんか急に一過性の頭痛が」

祈るとダメなのかよ、初めて知ったぜ……。あつ、よくアーシアがあうあう言つて頭押さえてたのコレかア!

それによくよく考えたらドライグと白い龍殺したはいいけど封印して世に放流したのは本当にダメだからやっぱダメだね。ファツオン聖書の神、悪魔崇拜万歳。まあ僕自身が悪魔ですが。

「痛アーツ!」

「今度は何?」

「いや分かんねえ……分かんねえよ……新手のス○ンド使いかア?」

今のは多分天罰が下ったのだろう、神の器ちっちなオイ。

「それにしても……お前結構詳しいんだな」

「ドラゴンについて、少し調べたことがあつてね」

「そりやなんでまた?」

「イツセー君は身をもって体験してるじゃないか。ドラゴンは色んなものを引き寄せ
る」

「……それは」

言わんとしてゐることは分かった。……………藁にもすがる思い、というヤツだろう。

「こういう言い方はどうかと思うけれど……………僕は君に本当に感謝をしている。君の
トウワイス・クリティカル
龍」

の『手』が特別性だったのか、それとも封じられたドラゴンが強力だったのかは分からないけれど。腐つて、忘却の彼方に消えてしまふかもしれないなかつた僕の運命を、もう一度動かしてくれた。僕に復讐の機会を与えてくれた。今だつてこうして、君には欠片も得ることがないのに協力だつてしてくれるし、背中だつて押ししてくれた。……………感謝しても、しきれないよ」

「……………今僕が協力してゐることはともかく、それ以外のことはたまたまじゃねえか」

「本当にそう言い切れるかい？ 墮天使の一団が此処に来たことも、フェニックス家の三男と戦うことになつたことも。そして今回の一件も。君が僕達の仲間になるまで、これらと同列で語れるような出来事なんて起きなかつたんだから」

「……………。感謝するのはいいけど、頼むから部長に何かあるようなことはするなよ。僕だつてお前のこと殺したくはないしな」

ぶつきらばうに吐き捨ててやると困つたように笑いやがる。なんだよ……………安心したように笑うんじゃねえよ。

「イツセー君は本当に、優しさがひねくれてるね」

「他人に良く思われたいだけの八方美人だぞ、優しいなんて言うんじゃねえよ」

「うん、本当にそういうところだよ」

「ぬぐう……」

「あーもーゾワゾワすんなあ！ 自己評価との乖離が酷くてマジでさぶいぼが立つ！

「つーかそれなら神様の方拜んどけよ、龍神だの悪魔神だのがいるんならだけどさア
……………ん？」

「イツセー君、調子悪いなら帰った方が……」

「いや今度は違う、警鐘が鳴った」

「ツ!!」

殺意全開で臨戦態勢になる祐斗クンをどうどうと抑え、そして首を捻る。

「なんかこう……今まで聴いたことの無い、妙な鳴り方だった。危険を報せるでもなく、
命の危険を報せるでもなく……。自己主張？」

「うーん……？」

「なんなんだろう、この言い表せない感じ。いつもと様子が違うことを、『危機では無い』と安心すればいいのか、『挙動が違って不安』と嘆けばいいのか。

「コレは僕なりの考察なんだけれど……イツセー君はいわゆる、『占い師』の1種ではないか、と思ってたんだ」

「占い師イ？ なんていう眉唾……………でもないか、この環境じゃ」

「うん、こつちの世界だと結構ポピュラーな職業でね。彼らは『大いなる知識』に接続して、各々の方法で出力してる……というのが現代占い学での通説になってるよ」

「大いなる知識……アカシックレコード的な？」

「まさにそれ。人によつては表現は違うけれど」

ふむふむふむ……。しかし僕がそんな占い師と同じつてのは違うんじゃないのか？ なんとというかこう、第六感的な未来予知だと思ふんだよな。

「占いも未来予知なんだよイツセイ君。夢でお告げを聴いたり、水晶に浮かぶヴィジョンを読み取ったり、無作為に選んだタロットカードで運勢を解釈したり。第六感で先のことを感じるのだからそうなんじゃないかな？」

「ああ……そう言われると」

そうなるとううむ……。僕は天然物の占い師的サムシングなのか。そこんどこどーなのドライブ。

『知らん、管轄外だ。……と言いたいが、心当たりはある。今のお前は知らない方がいいだろうか』

うげえ……。なんか後から知らん設定生えてくんなあ……。そもそも話、僕が普通つてのを返上した方がいいかもしれない。何やらせても平均なところとか、中身にクソ神器が入っていたことも含めて割と出生に謎が多いよな。

「だから何、というわけじゃないんだけど。今一度自分のルーツを確認しておいた方がいいってことなんじゃないかな？」

「……ひと段落したら、占いを趣味にしてみるのも手か？」

「あはは、失礼かもだけど結構似合いそうだね」

そんな暇はねーぞと、警鐘はリンリンと鳴っているが、少しぐらい夢を見た方がいいじゃない。人の夢と書いて『夢い』とはよく言ったものだ。いや僕は人じゃねーけどな。

そんな雑談を挟んだり、昼休憩に九頭龍亭に寄ったりしながら、気がつけば大体の箇所への設置は終わっていた。残すところは……

「あー、ここはぐれ悪魔がいた廃工場じゃないか」

「アーシアさんが眷属になった直後の時のかい？」

「そうそう。ここで僕の神器が只者じゃないことに気がついたワケなんだが……」

警鐘は……一応ある。チリチリと首の産毛を燃やされてるような、その程度の話だ。それでも警鐘は警鐘だ。

スマホを見る、時刻は19時を回っていて夕方と夜の境目……まさに逢魔が時と言った空模様だ。

「隠蔽強化、1個削るぞ」

「分かった」

その言葉に甘えて、僕は両腕と両脚に装甲を2枚ずつ重ねて装備する。身体への強化も全体4回付与と大盤振る舞いだ。

「……………」

場数踏んできただけあって、隣の優男も息を潜めつつ魔剣を生み出して構えた。夜とは僕達悪魔だけの時間ではなく……墮天使の時間でもある。理屈はともかく、部長たちの網に引つ掛からずにそこにいたって何もおかしくは無いんだから。

「……………」

目線で合図を取って、もう本来の役目を果たしてない錆びたハンガードアを蹴破る算段。この手の連携は、ライザー氏とのレーティングゲームに備えた訓練合宿で練習済み。基本的には比較的タフな僕の方が先に突入して意識を集中させ、祐斗くんが不意を突くカタチ。

3……………2……………1……………今！

「……………」

本来軽くはないはずの鉄のドアも、経年劣化と悪魔の身体能力(×1.6)にかかれれば紙屑同然。タツクルで吹き飛んだドアの先には誰もいない。それがいい事か、悪い事かはともかく。

「……………イツセー君」

「いない……だけど人のいた痕跡がある。この間のはぐれ悪魔との戦闘で付いた損傷の
ところ。埃がうつすらついているところと無いところがある」

「教会の戦士達の可能性は？」

「無くはないが可能性は薄い、一応の寢床で部長がそれとなく廃教会のこと伝えてたか
らな。寢床にするならそつちだし、警邏するにしてもあそこからここまでは遠い。着い
て1日2日でここまで足は伸びることはちと考えづらい」

警鐘が軽く作動してたから、僕らにまるきり害のないヤツがいた、という線は消えて
いる。それが誰なのかは分からないし教えてくれないが。……………仮に占いだつっ
んならそこまで教えてくれたっていいだろうに。

「流石にコレは報告だな、仮に墮天使一味だったら死人が出かねん。廃屋を重点的に警
邏&監視、あとは悪魔召喚を控えてもらう方向で」

「……ねえイツセー君」

「どした？」

どんな風に手を打って行こうかと考えていると、祐斗クンが声をかけてきた。

「この間、君が巻き込まれた事件。それに使われた神器ってまだ持つてるのかい？」

「ああ、持つてるが」

ゴソゴソと懐に手を入れて、古びた懐中時計を取り出す。これがどんな名前なのか、

どの形態なのかは分からないが効果は分かっている。蓋を開き、巻き戻したい時間まで時計の竜頭を回すだけだ。回すだけ……とは言ったが、遡れば遡る程に精神力を使うし、竜頭は無限に重くなる。……あの悪魔本当に命削ってたんだなど、背負わされた重荷に背筋が震える。

「それじゃあ此処に来る直前辺りまで時間を巻き戻してみよう」

「いや、それなら一日ぐらい巻き戻そうぜ。今日の作業は徒労に終わるけど、ここにいた下手人を抑えられるだろ」

「それだと君に負担が掛かるし、例えここにいた誰かを抑えられたとしても、末端の可能性が高い。それならば……此処を罫として使う方が有効活用できる。……じゃないかな？」

「じゃないかな、つてオメー……………」

その後、優男から優男らしからぬアイデアを聴いてゲンナリしつつも同意。早速実行に移った。

いやほんと、誰だよ性格までイケメンをここまで外道にしたの。……僕か、僕だよなあ。

その12

「僕らの拠点から離れ、目立たず、それでいて根城にするにはもってこいの場所。恐らく連中はここに必ず戻ってくる。……そう言いたいんだな優男」

「うん。それでも足止めぐらいにしかならないと思うけれど……ついでに警報機みたいなものを付けておけば現場に急行できる」

現状一番困っているのは敵の姿が見えないということだ。遭遇すれば戦えるけど、遭遇できないやどうもできん。急に暗殺されても困るし、そう考えるとこいつの提案は理解も納得もできる策だった。だが、しかし……

「……ブツが無いよ、悲しいことに。僕の板がそういう風に加工できればいいんだけど、現状鎧のパーツにしかできないから。やっぱそれやるにしても結構時間巻き戻さないとダメだよ」

「いいや、畏ならある。ここにね」

そう言っただけの手の中には異様な雰囲気を持つトラバサミが急に出てきた。……いや待て、今の出し方から察するに。

「『魔剣創造』でやったの!? え、そんなことできたんだ!？」

「フェニックス戦で罨を扱ったのと、君の神器の使い方から着想を得て練習してみたんだ。真つ向から戦う騎士ならこんなもの必要ないけれど……僕は悪魔だからね」

「面白いことするなあ……」

「しっかし板を出してあれこれ始めたの先週とかそんな話ぞ？ そんな短期間で何とかなるものか？ ……才能か、才能ってやつか。けっ、ツラも良くて中身も良くて才能もあるとか。暗い過去も合わさって、これもう漫画か何かの人気キャラだろ。問題はここが現実ってことだが。」

「とはいえ流石に罨でも何でも作れるという訳ではないようだ。あくまで『魔剣創造』は様々な属性の魔剣を生み出す神器。その概念から飛び出たものは使えないらしい。」

「刃を持った武器、切る機能を持ったものならば、解釈を発展させて魔剣として想像できる。今回トラバサミは例として出しただけで使わないけど………例えば、これならば」

「……………！ ワイヤーか」

「今度生成したのは、束になっていなければ視認することすら難しかったであろう銀色線だ。解釈が自由過ぎるが……なるほど確かに、敵を切る装備ではあるのだ。」

「今度お前に刀〇読ませてやりてえよ……」

「名前だけは聞いたことがあるけれど、どんな物語なんだい？」

「狂った刀工の作った、刀と言っていいのかわかん物も含めた12本の刀を回収する、生きた刀剣と策士の刀狩りだよ。アレが刀扱いになるなら魔剣創造で作れるかもしれないなあ」

まあ実際は無理だろうが。というか仮にそんなことできたら困るが。言うだけ、やってみるだけならタダである。

「ただ罫というならこの魔剣特有の気配は宜しくないな。刃の見えない暗殺特化の属性持たせた魔剣として作れたりしないか？」

「作れはする……けれど、設置ができれば意味が無いと思うよ」

「生成の仕方を考えろ。お前、足元から剣を生やすとかやってたろ？ それと同じ要領でできるんじゃないか？」

「……」

人によつて神器の熟練度の上がり方は違うけれど、僕と彼の話から考えると神器というものは結構使い手に合わせて成長してくれるものらしい。形はあつたり無かつたりするけれど、あくまで人の才能の延長線にあるものなのだろう。だからそれを磨くことが……成長させることができるみたいだ。

「でも……かなり無茶を言うね。足元から剣を突き出せるようになったのだから、結構訓練したんだよ？」

「ンなもん分かつてる。でも方向性は同じだからそんな時と同じだけ時間かかるわけじゃあないだろ」

それに、と言って時計をチラつかせる。それだけで祐斗くんは察したようだ、困ったような笑みを浮かべる。まあそもそも巻き戻すことを提案してきたのこイツだからな！

「幸い、『時間』なら沢山あらア。出来ねえとは言わせねえぞ優男」

「あはは……そうだね」

さアて、悪巧みの時間だ。腕がなるぞう！



「そんなわけで、廃工場をちよつとしたトラップハウスにしてきた」

「お前つて本当さあ……」

「失礼な、提案してきたあの優男だぞ」

廃工場での作業を終えて、今度は僕自身が仕事するためにもう一度九頭龍亭へ。時間も時間なので既に小猫チャンと匙クンはシフトに入つて仕事をしていた。

「とはいえ、そう簡単に嵌つてくれるもんなのか？ 敵は手練の幹部堕天使、コカビエル

「だろ？」

「うん、だからワイヤー切れたら分かるようにはしてきた。メインは位置特定だからね、運良く傷付いてくれたらめっけもん程度だ」

ちなみにワイヤーが切れたら分かるように……というのは、僕の悪魔用端末を複製して置いてきたってだけなんだがね。壊れて通信が途絶したら部長の方で確認できるってスポンポ。トラップハウスにしてきたことも含めて部長には連絡済みだからな、何かあればすぐに動けるようにしないと。

しかし今日だけで魔力をかなり消費した、すっからかんの空っ穴だ。板の倍加を魔力の自然回復に全ツツパしてるとはいえ、僕は凡俗下級悪魔。512倍したところだから知れてる。

「……なんかお前らの話聞いてると、自分の神器をちゃんと使いこなせてる自信が無くなってくるな」

「ブツについてちゃんと知らないからなんとも言えんけど。実際どんな神器なのさ？」

「えーつと……その……」

『黒い龍脈』な。一応、このトカゲみたいなのから黒いラインを飛ばして拘束したり、力を吸い取ることができる」

「はえー……すっごい便利。いいな、そういうの欲しかったよ」

「……嫌味か?」

本当に心の底から欲しいと思ってたのになんでこんなジト目で睨まれるんだろうか。匙クン的には僕の亜種龍の手（ということにしてる）の方が欲しかったってことか?

「嫌味じゃねえよ、どつちかって言うて僕の性格的にそういうのの方が合ってたんだよ。今僕の『決トウワイス・クリティカル・ブレイカー殺スの手』が妙なことでできるのだから、僕に合わせて改造と訓練重ねてきたからで、最初はただの自分の好きな箇所を2倍にするだけのしよぼ神器だったんだ。僕の地力が高いならまだしも、搦手にも使えねえ左腕パーツなんてあつてないようなモンだったの」

実際は『赤龍帝の籠手ブーステッド・ギア』なわけだが。厄ネタの宝庫かつ普通に使えば僕なら持て余すこと間違いないトンデモジェットエンジンなわけだが。猫に小判、豚に真珠、兵藤一誠ロンギヌスに神滅具である。

「じゃあお前ならどう使うんだよコレ。羨ましがるぐらいなら使い方もパツと出てくるだろ」

そう言われて少し頭を捻る。そして確かにパツと出てくるもので、

「まず、その神器で吸えるのは力だけなのか?」

「……あん?」

「力を吸い取るためだけのストローか、本当に? 実際の龍脈っていや、力の通るライン

なのは分かるけどさ。でも色々試してみるのも手だぜ。それに吸い取る力だって種類があるだろ。大雑把な括りとしての力なのか、筋力なのか、精神力、魔力、その他諸々。ちゃんと全部試したか？」

「いや……………考えてもみなかった」

「それに、トカゲの口から出てくる『舌』なのも気になる。ソレの本質は……………食べることなんじゃないか？」

「……………」

呆けた様に感心されても困るんだが。でも僕の出した疑問は、使い方を模索する材料にはなりそうだ。

「それにもしそういういった使い方ができなかつたとしても、訓練をすればできるようになるかもしれないし、そうでなくとも悪い使い方はできそうだ。龍脈っていうからには、生物相手じゃなくても……………それこそ地面からだって力を吸えそうだしな。あとはそのラインとやらを切つて、それをなにかに使えたりしないかとか……………まあ思いつくことは幾らでもあらアな」

「良くもまあポンポンと出てくるな……………凡人とか言いながら、実は頭良いだろお前」
「単にオタクなだけだよ。意外に馬鹿にできないぞ、僕らもファンタジーの住人になっちまったんだからな」

まあ性格も出ると思うし……僕の場合は持つてる手札で何とかしようという思考を常にしてるから、そっち方面には適性があるのかもしれないが。足りないから頑張るんだろうな、人間つてのは。僕は悪魔だけど。

「……なんかこう、見せつけられた気になってくるな」

「でも必要に駆られてだからね、こんなモン必要になんかなって欲しくなかったよ僕は」
しかし、アイデアだけ出してハイおしまい、というのは芸がない。朱乃サンが僕に紅茶を淹れさせる……正確には水の温度調節をする訓練をさせたように。

僕なら吸った力を味方に送ったりしてみるとか、自分の不調を相手に押し付けるとかするが……流石にそれを真つ直ぐな匙クンに強要するのは違うし……。

「そのラインつて結構丈夫？」

「ん？ ああ、かなり丈夫だ。少なくとも人間3人ぐらい吊つて全然余裕だったからよ。

俺の身体が持たねえが」

「伸びる速度はどのぐらい？」

「測ったことねえから分かんねえ。けど俺の目じゃ追い切れなかったな」

「ラインは細くしたり太くしたりできる？」

「………おい、なんか物騒なこと考えてねえか？」

「じゃあ聞くけど僕みたいな外道戦術、やりたいと思う？」

「……………」

ま、それが答えだわな。

「選択肢を増やすために、吸えるものを調べたり増やしたりはした方がいいと思うけど。それとは別に今からでも上手くやればラインで相手を刺突したり、ロケットパンチみたいなことができるんじゃないか？ 腕の延長線みたいな感じで」

「……………」ずっとラーメン食ってたらこんな発想できるようになるのか？」

「別にラーメンばっか食ってねえわ、毎日食うもんじゃねえよウチのラーメン。太るわ」
「仮にも店長がんなこと言うんじゃないか？」

でも……………ありがとうよ、なーんてそっぽ向いて言うもんだから、コイツ素直じゃねえなってニヤニヤした。意外と男のツンデレも需要があるもんだな、見てて面白いし。



「さーてさて、やって参りました悪魔の根城！ フリードくんが戻ってきましたよー悪魔共ー！」

「うるさいぞフリード。潜入しに来ている自覚はあるのか？」

「自覚ウ？ そんなもん知らねーですよつと。俺たちは悪魔をたくさん殺せるっていう

から乗ったただけで、聖剣だのなんだのはそこまでキョーミねーんだよ。殺しやすくなるなら幾らでも欲しいけどな！」

「……………」

「あら？ あらあらあら？ ピキつちやった？ ピキつちやったツスカ？ 短気は損気ですぜえバルパーのじいさんよオ」

「……………否、貴様の性根が終わっているのは分かっていた。私の……………私達の計画を邪魔しなければそれでいい」

「ハッ、性根が終わってるのはお互い様だろうが。先に言っておくが……………俺はテメエみたいなのも大っ嫌いだ。憎んでいると言ってもいい。老害の終わった夢に付き合わされること程面倒なことにはねえ。悪魔の根城でやるんじゃないやなかったら、今此処に俺はいねえ」

「……………」

「だがま、この聖剣分程度には働いてやんよ。リベンジ……………つてーのも違うが、一応前の上司をここの悪魔に殺されてるんでね。別にどーってことないタダの糞ビッチだったか、口実にはちようどいい」

「……………この悪魔……………リアス・グレモリーか？」

「いんや？ 愉快なこと……………『龍の手』を持っただけの下級悪魔に殺られたそーだ。そ

れも転生したばつかりの。あつはつは、惨めつたらありやしねえ！」

「笑い事ではないぞ。……本当に、やれるのだな？」

「やれる、じゃなくて殺るんだよ。俺は悪魔を殺す。くたばつて地獄に墮ちるその時
で、俺は悪魔を殺し続ける」

「じゃなけりや、俺はセンセに顔向けができねえよ」

その13

「……………ただの与太話として聞いて欲しいんだけど」

僕は目の前の、パソコンと格闘している友人に声を掛けた。

「んア…………？」

彼は気怠げそうに身体をこちらに向けた。……若干態度が悪いように見えるが、それが僕と話すのが面倒臭いからではなく、慣れない作業のせいで疲弊しているからだということを知っている。……実際、彼は悪魔になってから慣れないことばかりしていると言っていた。

『みんな忘れがちだけどねえ、僕は凡人なんだわ。そこまで大した奴じゃねえのよ。どうして全身焼けたりラーメン屋の経営してたりするんだ……………僕の人生設計おかしくねえか？』

どの口が…………と言いかけたけれど、彼の人生が歪んだことと、今彼がやっていることが普通とはかけ離れていることは事実なので口を噤んだ。その割には手馴れているというか……………覚悟が決まり過ぎていようにも思えるけど。

「なんでエ、ボーっとして。ま、考えが纏まる前に話題を振るってのも良くあることだとは思うがな」

「いや、ごめん。イツセー君に聞いていい内容かどうか考えてしまつて」

普通を装つただけの、普通じゃない彼に聞いて納得できる答えが返つてくるのか……と悩んでしまつて、そして頭を振つた。そもそも話、僕も普通とは言い難い。それに……納得が欲しいわけでもなかった。ただ、この変わった友人ならどうするのだろうかという、気の迷いが生まれただけだった。

「ンまあいいけどサ。で、その与太話つてのを聞かせてもらおうじゃないの」

「……仮に僕のような出自だったとして、君ならどうしていたのかな、つて」

「聖剣計画の主導者ぶつ殺す。あとは計画への出資者とか指示出したヤツとかをどうするかを考えて、そこにケリが着いたら後は終いだな。エクスカリバー自体は放置。道具恨んだところで不毛過ぎる」

「……えらくバツサリ言い切るね」

適当に答えたわけでは無いのは分かる。適当でちやらんぼらん風を装っているだけで彼は基本的に真剣で自分のこと以外に対しては真摯だ。けれど、エクスカリバーに対する僕の執着を簡単に『不毛』と言いつられると、流石に苛立ちが顔を出す。

「怒るな怒るな、気持ちちは分かる。『坊主憎けりや袈裟まで憎い』とはまさにこの為の言

葉だろうし。でも結局、お前の復讐の大元はエクスカリバーというより計画の主導者にあるわけだろ？　そこを見誤ると目的を見失うじゃん」

「目的？」

「そらアもう、『何のために復讐するか』以外にあるわけないだろ」

「何の、ために……」

何のために復讐するのか、と考えると。どうしても『殺された同志達の無念を晴らすため』と『エクスカリバーへの憎悪』となる。そうだ、同志達が復讐を望むのならば僕は……

「復讐は虚しいだけ、なんて言葉は嘘っぱちだ。何処かのハゲが言ってたけれど、これ以上に分身の尊厳を回復する手段も無いし……何よりそうしないと精神的に先に進めない。でもね、虚しいという点は時に真実でもある。復讐の理由を死んだヤツに託してるのならば、特に」

「っ！」

見透かされた、と思った。気付けば疲れが覆っていた彼の顔はいつの間にか、罪を量る裁判官の如く冷淡なソレとなっていた。

「復讐とは区切りを付けることだ、と僕は思う。自分の人生に、心情に、因縁に。だのにそれで終わりの無い苦行になっちまえばそれは復讐とは呼べないと思う。先の無い先

へ彷徨うソイツは最早亡霊と言って差し支えない、死んだも同然だ。……………分かってるんだろ、木場祐斗？ 死んだお前の同志が、本当の意味でお前に語り掛けてくれることは無いことを」

分かってている……………本当は分かっている。そんなことは、分かっている。もしかしたら、彼らは復讐を望んでいないかもしれない。……………エクスカリバーのことなんてどうでもいいかもしれない。……………それでも、

「……………それでも僕には、彼らのあつたかもしれない無念を無かつたことには出来ない……………」

「自分の無念を誰かのせいにするんじゃない」

そんな僕の感情の発露は、あらゆる欺瞞を許さないとばかりに切り捨てられた。

「エクスカリバーが憎いのはお前だ。聖剣計画が、教会が、バルパー・ガリレイが憎いのはお前だ。復讐したいのもお前だ。お前の同志達がそれらを憎んでいて欲しいのも、お前だ。……………誰よりも無念だったのは、同志を殺され、独りになつたお前だ。悔しいのは、今を生きてるお前だろ。そこを歪ませるんじゃない」

けれど、厳しい口調とは裏腹に。それは、赦しの言葉だった。……………僕が感じている、生きていくことへの罪悪感に対する、赦しだった。……………酷いなあ。本当に全部かつた上で、そんなことを言うなんて。

「……別にね、こゝうは言つたところで死者に理由を託すのは悪いことじゃないとは思ふんだけど。それで君が生きた屍になるのは違ふだろ、君にとつても……亡くなつた君の同志にとつてもね。もしもかつて居た誰かに理由を託すなら、それは願ひのソレであるべきだよ」

「願ひ……?」

「うん。……友人を亡くしたことの無い僕が言つと、とてもチープに聞こえるかも知れどさ。あるかも知らない無念を晴らす為に復讐するんじやなくて、先に逝つた誰かを安心させたいと願つて復讐する。そういうのは、至極真つ当な理由の託し方だと思わない?」

本当にチープに聴こえて仕方がない。だつて間違ひなく、彼は僕に生きていて欲しいだけだ。それらしく理由を付けて、生きることには後ろ向きな僕を踏みとどまらせたかっただけだ。

それでも。否、だからこそ。投げやりだつた僕を思い留まらせるに十分だつた。……僕が、彼らに生きていて欲しかつたと思うだけ、余計に。

「だからさ、祐斗クン。君は自分のために頑張るんだ。それが何より、君のかつての仲間のためになるはずだ」

「……」

目を閉じる。そしてかつてを想起する。……………辛く、悲しい出来事もあったけれど。思い出の中の彼らは、確かに笑っていた。



キュピピピーン！ ……と脳裏に音が響いた。

「……………やっとか」

新人類のアレかよ、となんか自己主張の激しくなってきた警鐘に頭を抱える。僕が接続してる大いなる知識さん、ちよつと愉快にも程がない？

だが音の愉快さと反比例してその中身は真面目な内容そのもの。閉店して2時間ぐらい待機してて良かったよ、ホント。

「注目、警鐘鳴った」

「！！！！」

バックヤードの休憩スペースで、各々のやり方で集中力を高めている悪魔ズにその声を掛けると、流石に緊張感が場を支配する。

「……………ん？ いや待てよ、グレモリー先輩から連絡が無いじゃないか」

「所詮簡易報知器未満のカラクリだよ、畏だつて解除されてる可能性は高いわけだし」

視線を向けると祐斗くんも軽く頷く。ゆーて罨について勉強始めたのこの間のレーディングゲームんときからだしね、粗の一つや二つは余裕であらあな。

「というわけで、この日の為に準備してたコレが役に立つわけだな。ホレ」

そう言つて僕は一見チープに見える端末を各々に渡す。赤、青、黄、緑の4色のそれに、ちやちい画面、輪っかの付いた紐……………そう、これは、

「……………キッズケータイ？」

「小猫ちゃん大正解。部長にうっかり社用ケータイがあると便利かもつて話したら色々貰っちゃつて」

ちようど『働き過ぎ』とお叱りを受けた時に考えてた話で、その時は『部長もフェニックスの涙の件で忙しいからなあ』と思つていたのだが、ついうっかりその話をしてしまい、トントン拍子で……………

『九頭龍亭の業務連絡で使うなら、冥界で流通してる物の方が都合がいいかもしれないわ。色々トコネも使えるし』

そして渡されたのがカタログである。好きなものを選び、ということなのだろう。常に部長がお嬢様なことは意識してたけど、こともなげに金持ちムーヴされると……………すげえ気後れする。

「それでキッズケータイ、なのかい？」

「うん。いやコレは改造品なんだが。別件……丁度今みたいな事態で使うには丁度いいかな、と。本来の目的とは逸れてるんだが」

見た目こそキツズケータイで、機能の方もそう大差は無いのだが、壊れたり紐を引つ張ると互いの端末と部長、支取会長に緊急通報を送り場所を表示するように改造してもらったのだ。

「この手のことはてんで分からないんだけど、コレも伝があつたのか部長がなんかしてくれたんだよなあ」

「最早なんでもアリだな……」

「……………」

匙クンと神妙な顔で頷き合つてると、何故か微妙な顔をするグレモリー眷属先輩組。心当たりがあるのだろうか？

「多分……そういうことだよな？」

「……………」

まあその事は置いておこう、正直今みたいにダラダラと話す時間も惜しいワケだし。

「というわけで、コレを持って各々行動だ。廃教会、廃工場、学校、悪魔達の寮……先にこれらを確認して先輩方と合流。そして何らかのトラブル、もしくは下手人がいれば

……」

と言つて手に取つた赤い端末を揺らす。若干一名鳴らしそうもないのがあるが、まあソイツは派手に戦いながら壊してくれるだろうからモーマンタイ（問題アリ）。

「じゃあ諸君、死ぬなよ！」

「お前がな」

激励のつもりで言つたのに総ツツコミである……酷いイ……。



「……で、廃教会担当の僕なんだけど」

ある意味で勝手知つたる……だったんだけど、既に瓦礫の山と化していた。どういふこつちやねん。

ここを拠点にしてた教会組のことが脳裏を過ぎり、目覚めが悪くなるので適当に瓦礫を退かしたり簡単な探査魔力を飛ばしてみるが血も反応もない。……とりあえず何もなさそうで良かった。

「せつかく掃除したんだけど……どうしたもんかな」

アーシアと2人で結構頑張つて掃除したもんだから、地味イに思うところがあるんだ

けど。まあそれは置いてくとして、だ。

ざり……と足音らしき音が耳を打つ。流石の僕だって分かる、犯人は現場に戻ってくるって定番は。

「なあ、どうしたもんかな？　僕さア、それなりにビビりのつもりがあるんだけど、今そんなに怖くはないんだよね」

「はあー？　そんなもんコッチは知ったことねえな！　っーかなんだなんだ？　教会を掃除する悪魔あ？　そんなチンミヨーなヤツがいるとは思わなかったZ E ☆」

「うーん、意外といるかもしれないねえ。僕ともう1人いたしなア」

「けーっ！　きもつ、キモチワルイっ！　クズの悪魔のクセに、善行とか意識してんじやねえよ」

殺気、それと共に斬りかかられる。……………警鐘は鳴ってない。その得物から底無し
の嫌な気配はするけれど、その程度。

「……………っ！」

『Boost!!』

1回で充分、脚力に全てを回し袈裟斬りをギリギリでかわす。目の前を刃物が過ぎる瞬間は流石に肝が冷えたが。だからこそ冷静に、大きく隙のできた身体に脚力の乗った一撃を、

「甘え甘え！」

「っ!？」

振り上げられる剣、大きく仰け反って何とかわすが……。どんな体勢から攻撃してんだ、気持ち悪っ!

一先ず距離を取る。早撃ち勝負の前のような緊張感。きっかけがあればすぐにでも殺し合いが始まる空気が、場を支配する。

「……………」教会の戦士は皆そうなのかよ? 挙動が人外じみてる」

「人外からのお墨付きなんぞ、嬉しくもなんともないっての。つかあんなところ辞めたし、温すぎるんだよアイツらは」

「ま、だろいな。……………調べたぞ、お前のことは。殺戮に酔った堕ちた神父。フリード・セルゼン」

眼前の白髪の男は、喜悦と憎しみの混ざった奇妙な表情をしながら口の端を吊り上げた。

「ピンポンピンポン大正解〜! そういうてめえは……俺の元・上司を殺した『龍の手』の転生悪魔くんじゃあ、ありませんか〜?」

「人違いじゃないかな、まだ人間は殺してないんだよ。多分、お前が1人目だ」

「わあお大胆! 熱烈なラヴコール!? いいねえ気が合うねえ! 俺も……………お前み

たいなのを殺したくて仕方がねえんだよッ!!」

破裂した様な空気の音。さっきの殺気は三味線でも弾きながら出してたのか。段違いの速度と、的確に首を横薙ぎにしようと、5mはあつた距離が一気に詰められる。

「っ、」

あ、こりやダメだ間に合わん。と思つたけれど、しかして警鐘は鳴つてない。ああ、こりや僕の明確な弱点かもしれないなあ。警鐘が鳴つてないと危機感を出せなくなつてしまつている。道具に頼り過ぎた結果の末路に近い。

が、タダで死ぬつもりも、毛頭ないのだ。

「ねッッッ!!」

薄皮一枚、首にチリチリと焼ける感覚を覚えたタイミングで、それは起動した。

僕の血液を使った、魔力による水分操作。如何に龍の心臓と成り果ていても耐えられない、超高音と膨張!!

……………そして僕は、左の胸から赤より赤い熱を放出しながら、意識が飛んだ。

その14

その14

「起きなさいこの馬鹿」

「……………ぶふあ!？」

意識を取り戻すと、目の前に幼なじみ（仇敵）が居たでござる。濡れそうになって目が覚めた辺り、定番を水を掛けるやつをやった模様。容赦ねエなこの女。

「容赦してどーすんのよ、そんな余裕無いでしょ。つーかなんで胸元だけそんなボロボロなのよ」

「心臓爆発させた」

「分かりきってたケド、ほんつつつとうに馬鹿ね」

差し出された手を掴み、身体を起こす。夏に差し掛かり、多少蒸し暑くなってきたとはいえ……流石に布がないとスースーする。

『この愚か者め……！ 示し合わせていなければ、今頃貴様は死んでいただぞ……！』

そして立ち上がったと同時に相棒の小言が飛んでくる。ごめんてドライグ、でもちゃんと示し合わせてたんだからいいでしょ？ ……と胸元を擦る。

やったことは単純だ、気を失っている間にドライブグに神器の主導権を投げ、『強欲』で心臓他諸々を複製して貰っただけだ。足りない魔力も倍加すればなんとでも、ということである。いつかテセウスの船になりそうで怖いね！

「ま、ある意味で作戦通りっちゃあ作戦通りか。これで死んだ風を装っておけば、僕の存在そのものが奇襲になる。運良く助けてくれてありがたいよ」

「そりやどーも。で、情報交換といかない？」

「もちろん」

そう言つて周りを見渡す。……パツと見、普通の一軒家。生活感の無さから、ちよつとした別荘みを感じる。

「とりあえず……ここは？」

「お父さんが残してたセーフハウス。万が一、この街で何かあつた時に私達教会勢力が拠点にできるように抑えてたところ、らしいわ」

「悪魔が支配してる街で上手くやったなア……」

まあ昔教会があつたのは間違いないし、その時からのものなのだろうけど。

「で、ゼノヴィア女子は？」

「今外を警戒中。知つてると思うけど、あの廃教会に襲撃されちゃつてね。まあバレるとまづいココの囿のつもりだったから想定内なだけけど、こつちもバレないワケじゃ

ないからネ」

「大丈夫なんかよ一人で。なんか奥の手がありそうな気配はしてたけど、警鐘的に」

「相変わらず便利ねソレ。お察しの通り、本気を出したゼノヴィアは中々強いわよ。まあでも直に戻ってくるわ、イツセー君の目が覚めたって連絡したし」

「さよか……」

……んで、一番気になるのは、だ。

「どーして助けたの？」

「イツセー君に死なれると困るから？　一応身の潔白は証明できるけど、グレモリーと揉めたくないもの。びつくりしたわ、瓦礫と血の海の中で沈んでたのよ 안타」

「死んでそうだった？」

「思いつきり」

じゃあ成功だな、と内心だけでほくそ笑む。

きつと盛大に死んだ演技をしたことで、僕の存在はヤツらの意識から外さざるを得ないだろう。一応部長だけにはそうするかもと伝えてあるし、向こうは向こうで部長の方が上手いことやってくれるだろう。頼んだ時の冷たいようなハイライトが消えたような目は死んでも忘れないことでしょう。………ことが済んだら3日間位はなすがままにされよう、貞操以外。

「じゃあ今度はこつちから質問ね。遭遇したのは？」

「はぐれ神父のフリード・セルゼン、斬られ心地的に聖剣を持つてた」

「その聖剣つて……こんな感じのヤツ？」

そう言つてイリナちゃん右手首を僕に見せてくる。……ミサンガみたいに紐が巻きついてるだけ、だと思つたら、急に紐が形状を変化させて……つて、

「うわっ!？」

首元に向かつて伸びるように紐が剣の形を取り、慌てて避ける。……コイツ、このタイミングでも僕のタマ狙つてやがる。部長と揉めたくないとは一体なんだつたのか。

「ちっ、死ねば良かったのに」

「ひでえ女郎だ……。まあそんなことすりやまた自爆するだけだが」

「そーゆーとこだぞお前ー」

まあ、それはそれとして。じっくりと眼前の聖剣を眺める。……言つちやなんだが、フリード・セルゼンが持つてた聖剣よりも若干チープな気が。

「これね、エクスカリバー・ミニッツ擬態の聖剣なのよ」

「……………これが!？ エクスカリバー!？」

オイオイオイオイ……………コレが現物かよエクスカリバー……………夢がぶち壊された気分だよ。ついでに祐斗くんが余計に不憫だよ……………

「……その反応だと、これよりも強そうな聖剣を持つていたということではないかな？」

「う、うん。なんかすげえ立派そうなの……」

「やっぱりか……やっぱりかア……！」

思いつきり頭を抱えるイリナちゃんを見て、とうとう警鐘が鳴り始める。ご丁寧に緊急アラームみたいなソレだ。

「……恐らく、恐らくだけれど。フリード・セルゼンの持つている聖剣はエクスカリバー……なんてものじゃあない」

「まあソレは想像つくけども。だってエクスカリバーは七本分裂面白聖剣なんだもん、つまり本来の1/7の性能ってこつたる？ たとえヤツが持つてる聖剣が本来のエクスカリバーより劣るものであっても、完品なら、そりや分裂剣より強いに決まって、」

「それどころじゃないんだってば!!」

がす！ と頭にチョップを入れられる……痛い。

「フリード・セルゼンの出自、経歴からして、教会から離反してでも欲しいなんて聖剣はただ一つ！ 悪魔側では知らないでしょうけどねえ、あの男は昔、手練の聖剣使いの弟子だったのよ！」

「お、おう。その聖剣使いが持つてた聖剣ってことなんだろう？」

「そしてその聖剣はエクスカリバーの兄弟剣……数ある中で、最も頑健と呼ばれる刃こ

ぼれ知らず！ 聖劍ガラティンよ！
な、なんですと!?



外回りを終えたゼノヴィア女史が部屋に入ってきたので、今の情報をおさらいしつつ作戦会議をすることになった。いやこれ僕いる？ 一刻も早くここを出ていきたいんですけどそれは。

「今それどころじゃないのよ……あーもう、アテが外れたにも程がある……いー」

「それって、ゼノヴィア女史の奥の手と関係があるのか？ ……察するに、彼女の佩いてるソレとは別の聖剣があると見てるんだけど」

「……………イリナ？」

「もう今となつちやバラした方がいいわよ、ちよつとばかり相性が悪過ぎるからアイデアの1つでも貰いたいところよ」

着いたテーブルに突っ伏し、半ば投げやりエカスカガハーデストラクシヨンに彼女は言うが……。

「……………現物を見せる訳にはいかないのだが。私が今使っている破壊の聖剣とは別に、もう一つ強力な聖剣を持っている。銘をデユランダル……聖剣デユランダル。破壊

力、斬れ味という観点では最強の聖剣だ」

「……………ああー、そりゃ疎まれるワケだ。ウチの優男からの話だと、基本的に聖剣つてのは個人の才能で持てるかどうか決まってるんだろ？」

そしてイリナちゃんが突っ伏してるワケも分かった。刃こぼれのしない……つまり矛盾という盾のガラティンに、矛のデュランダルというわけだ。

「私もそれなりに腕が立つ自信がある。……が、相手もかつて教会の天才剣士と呼ばれた男。負けはしないだろうが……」

「勝ちが狙えるかは不透明。そして、君らはコカビエル以外の取り巻きは最悪力押しでどうにかなると考えていたから、そこそこ致命的な状況ということだ」

「もしかしたらあの男も参加してるかも、とは予測してたけどガラティンは想定外よオ……というかなんで行方不明のガラティンをバルパーが確保してたのよ本つつ当にろくな事しねえなアイツう!!」

ダン! と台パンされました……まあ想定外なんて日常茶飯事だぜ元相棒。予想外を楽しむのも人生を楽しむコツだ。

「他人事だと思ってるんでしょー薄情者!!! 一体どれだけ恩があるか忘れちゃいないでしょうねえ!!」

「一度死んだしチャラでは？」

「ムキーツ!!」

……とはいえ、この2人にとつての想定外は僕にとつての想定外でもある。ある程度彼女達の勝ち筋に乗っかることも考えていたわけだから。

というわけで、提案タイムだ。

「……実は、フリード・セルゼンにはマーキングを済ませてある。余程入念に、余程丹念に洗淨しないと取れないマーキングだ。まあ、僕の血なだけで」

私情ではあるが。僕はあのフリード・セルゼンなる輩を殺したい。アレは放っておくと僕の大事な人達を殺す類の存在だ。………僕が、堕天使にされたようなことをして気分になって嫌になるが。人間って、そういうダブスタをやるものだろう。僕は悪魔だが。

「血を爆薬代わりにでもしたのかしら?」

「大方そんなところ。ちよつとした裏ワザで血に魔力をたっぷり練り込んであったから、今でも僕の魔力を漂わせてるんじゃないかな」

練り込んだというか、ドラゴンハートのお陰で心臓が動くだけで魔力が込められていくというか。魔力炉……と言うよりは魔力の自然回復が早くなったのと、骨で作った血と併せて貯蔵上限が増える機能の増設という感じで落ち着いた。心臓を強制稼働させりゃ話は別なんだけれどね。まあそんなわけで、僕の魔力の貯蔵庫も兼ねてる血は、そ

れはもう赤が赫になるくらい魔力がくつついており。聖水ぶっ掛けただけでは浄化もできないという副次効果を生み出すに至った。基本的に僕の魔力技は対象にくっつけた魔力から起動するので、滅多なことではマーキングを消せないというシナジーが生まれた。やっただぜ。

そしてマーキングさえしておけば、あとは煮るなり焼くなり……なんだけど、警鐘がそうは上手くいかないと言っている。少なくとも、『循環する苦痛』で落ちる類の相手では無さそう。そもそもエクソシストのカソック、何かしらの防御能力が備わっていると見た方がいいか。

「だからまあ………アレは僕が殺すよ。そしたら君らの計画的には問題ないんじゃないかな？」

「秘策が？」

「そんなモン無いよ。でも聖剣にさえ気をつければ、種族差の暴力で押し切れる。……しよーじき、コカビエルより苦戦しただけどね」

「イツセー君じゃなきや信じられないわね、その大言壮語」

実際、あの神父はクソ強いんだろうと思う。種族差の暴力でどうこうなんて無理かもしれない。

……が、その程度で僕が膝を着くことも無いのだ。こんなこといくらでもあったわけ

だしな。無理ゲー感はない、せいぜいがクソゲーだ。やってられない、という共通点はあるけどね。

「……………どうすつかなコレ。イツセー君に素直に頼んだ方がいいのか、それとも」

「……………あまり言いたくはないが、次善の策として彼には生き残ってもらった方が良くないか？」

「そうなんだけれどねえ……………だからと言って共闘はまずいわよ。ただでさえ異端認定スレスレなのに」

「それはお前だけだろう。……………いや、私も巻き添えを喰らうか。お前に付き合おうと決めた時に覚悟していたが、いよいよもってここまでか」

「いやいや待ちねえシスターズ。僕が死ぬ前提で話進めんじやないよ」

「さつき自爆した男がなんか言ってるわね」

困った、それに対する返しは無い。

「というか、その言い分から想像するに……………もしかして、其方サンのコカビエル対策って結構分が悪い賭けなの？」

「……………いいとこ3割」

「すげえな、相手つて神話上のやべえのだろ？」

「そっくりそのまま返すわよ。……………まあ、それつてゼノヴィアが万全な状態なことが前

提なの」

というところ……なるほど、聖剣デュランダル関連か。そう意志を込めてゼノヴィア女史に目を向けると頷きが返ってくる。

「だが、運良く私が万全の状態でコカビエルに相対しても倒せる確率は3割だ。確実に殺さねばならない相手に対してこの勝率は……少々問題だ」

「最悪ね、異端認定されたつていいのよ。そんな時や新派閥でもおつ立てて生き残つてみせるわ。問題は、コカビエルを始末できないことよ。だから自信のありそうなイツセー君をぶつつけたい、というのが本音なの」

「……………分らないな。なんでそこまで殺意ギラギラなのか。墮天使だから殺すつてわけじゃないだろう？ それに異端者抜いて、そんな軽く流すものじゃないだろうが」

異端者の烙印を押された末路については……不本意ながら良く知っている。グレモリー眷属の妹分であるアーシアがまさにソレだったのだから。それを軽く流すのは……アーシアにとつても、この2人にとつても良くないことだと、僕は思った。

……だが、僕はこの2人の信仰心を少しばかり舐めていた。

「2人の犠牲で戦争が止められるなら安いもんよ。戦争したいバカ共が万人死のうが億人死のうがどうだっていいわ。……だけど実際に犠牲になるのはバカ共じゃなくて、救

われるべき子羊達よ」

「信じるものは救われる……否、救われなければならない。神の御加護があると、誰よりも私達がそれを証明しなければならぬ。その為の授かった力、その為の教会の戦士だ。喩え我々が罪を犯そうと、真摯に罪の告白をすればいつかは赦される。だが信徒達の命はそうはいかない、取り返しがつかないのだ。……ならば、我が身可愛さで、より大きな罪を犯すわけにはいくまい？」

「――」

この2人は。本当に心根から『聖職者』なんだな、と。脳天にトンカチを落とされた様な衝撃と共に理解させられた。軽い気持ちで来ては無いだろう、なんてこっちが軽い気持ちだったわ、本当に。

「……………はあ。一応さ、僕の策を聞いてから考えよう。それからでも話はできるでしょ？」

そして僕は、例の策について話すことになった、のだが。事態は思わぬ方向に飛ぶことになった。

いやさあ、誰が思うよ……………まさか同じことを考えてるなんて!!